ワーカーホリック

茶倶楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワーカーホリック

【Ｎコード】
Ｎ２８５３Ｌ

【作者名】
茶倶楽

【あらすじ】
八百年ぶりに召喚された黒髪の勇者の使命は一体何なのか。少し不幸体質である主人公の青年が、勇者の使命を自分なりに解釈し、仲間達と一緒に異世界で頑張る物語。（主人公最強系ですが殆ど力を行使しません）

登場人物一覧表（前書き）

ワーカーホリックに登場する主要キャラクター一覧です。
ネタばれや伏線に関することは省略してあります。
〔更新日：２０１０／０８／１８〕

登場人物一覧表

―――　異世界人　―――

〔小坂侑人〕：謎の声によりマグナマテルに召喚された主人公。日本では二十七歳独身の普通のサラリーマンだった。異世界に召喚された際に異常なほどの理解力と身体能力そして魔力を与えられた。しかし与えられた能力は主に家事と公共事業、そしてハッタリの為に使われている。

〔クロウ・ミナト〕：八百年以上前にマグナマテルに召喚された黒髪の勇者。クーラント魔国で虐げられていた人族の解放の為に戦い、その地にグランツ帝国の前身であるグランツ共和国の基礎を築いた。

―――　セルビナ王国民　―――

〔マリア・ホラント〕：ティルト村に住む十七歳の少女。人族とエルフ族のハーフであり、弱い火の魔法が使える。マグナマテルに召喚された侑人と最初に出会った人物。性格はおてんばで活発ではあるが、若干人嫌いの傾向がある。侑人には心を開き仲が良くなった。

〔ヨーゼフ・ホラント〕：マリアの祖父であり元エディッサ王国の神官。非常に人格者であるが、若い頃は好奇心旺盛であり揉め事に首を突っ込んだりしていた。孫娘のマリアを溺愛する孫馬鹿。

〔ガイウス・マリウス〕：セルビナ王国の元入国審査場付きの衛兵で、現在は近衛兵団所属の少尉。侑人達とたまたま出会ってしまった為、仕事環境が激変してしまった。剣の腕はかなりの腕前だが、侑人と関係が無い事態には興味を示さず、基本的に本人のやる気が余り無いので宝の持ち腐れ気味。

〔カルロス・デア・グローセ〕：セルビナ王国の国王。有能な部下の力を引き出す事が上手い。多少大雑把な性格をしているが、内政を重視し必要な決断は自分自身で行える判断力を持つ賢王。

〔アルクィン・ウルヘル〕：セルビナ王国の宰相。つかみどころの無い性格をしているが、カルロス王に対する忠誠は人一倍持っている。常に冷静沈着であり、他人より一歩も二歩も先の事を考え確実に実行していく。

〔ゲオグル・プロノイ・オストロ〕：セルビナ王国で代々武官を務める名門の家柄。爵位は伯爵。多少利己的な人間であるが実は小動物が大好きだという脳内設定。

〔レサク・ヤカブ〕：ティルト村の村長。小心者ではあるが村の事を第一に考えて行動する好人物。恐妻家という脳内設定。

――　エディッサ王国民　――

〔ジョシュラン・アンテオキア・ブローニュ〕：エディッサ王国の国王。良くも悪くも普通の人物。多少自己保身に走る傾向がある。本人が意図した訳ではないが、ハルモ教法王庁教圏国家群全体に危機を招く。

――　プロセン王国民　――

〔ハインリヒ・フォン・サヴォイア〕：プロセン王国の国王。グランツ帝国と国境を接していたばかりに宣戦布告されたある意味不幸な人。

――　クーラント魔国民　――

〔アンジェリーナ・ヴィヘルム・ケトラー〕：クーラント魔国の第一王女でヴァンパイア族。膨大な魔力を持ち魔法の能力に長ける。ハルモ教正教会に侵入した後、行方不明になっており、周囲からは死亡したと思われているが現在は侑人と奇妙な同居中。認めた相手に対しては非常に気さくに接する。

〔ケットハルト・ストレング・ケトラー〕：クーラント魔国の国王。類まれなる格闘センスと魔力を持つ。戦いでは自らが先頭に立ち獅子奮迅の活躍をする為、戦争状態であったグランツ帝国からは魔国の闘神と恐れられる。周りの意見を聞かない頑固な一面を持つ。アンジェリーナを溺愛する親馬鹿。

――― グランツ帝国民 ―――

〔エリザベス・グレース〕：グランツ帝国出身の少女。父親を戦争で母親を病気で失った天涯孤独の身の上だが、ふとしたきっかけで侑人と出会いそのまま侑人の義理の娘となる。辛い過去を背負うが故無口な少女だが、侑人達の愛情に包まれてすくすくと成長していく。好き嫌いがはっきりとした性格であり、興味がないと全く反応しない。

〔フリードリヒ・ラスペ〕：グランツ帝国の皇帝。一兵卒から皇帝まで登り詰めたグランツ帝国の英雄。非常に聡明であり軍を率いる才能に秀でるが、目的の為には手段を選ばない非情な一面を持つ。

〔ラドフ・ルーシ〕：グランツ共和国時代の最後の議長。フリードリヒが起こしたクーデターによって命を奪われた。有能な秘書の意見を取り入れれば、この事態は防げたかも知れない。

〔イーヴォ・シャルト〕：グランツ帝国の将軍。猪突猛進と言った言葉がピッタリな将軍。根が単純ではあるが、皇帝の為ならば命を掛けられる強い忠誠心を持つ。四十二歳独身で嫁さん募集中のナイ

スミドル。

登場国家一覧表（前書き）

ワーカーホリックに登場する国家一覧
各国のマグナマテルにおける位置と、国同士の関係を大雑把に記載してあります。
〔更新日：２０１０／０９／１９〕

登場国家一覧表

――――　ハルモ教法王庁教圏国家群　――――

マグナマテルの南西に位置する、ハルモ教を国教とする四王国の集合体。
南側にセルビナ王国、東側にエディッサ王国、北側にプロセン王国、西側にトスカーナ王国がある。
ハルモ教正教会があるエディッサ王国が宗主国的な扱いになっているが、その他の王国がエディッサ王国の属国という訳ではなく、各王国は独立した存在である。

――――　セルビナ王国　――――

ハルモ教法王庁教圏国家群を構成する四王国の一つ。
国境を接する国は三つあるが、全ての国境がハルモ教法王庁教圏国家と接していて、非常に恵まれた環境にある王国。マグナマテル全体の中でも比較的平和な国。
人族のカルロス・デア・グローセがセルビナ王国の国王である。
セルビナ王国の北東部にあるティルト村近くの森に侑人は召喚された。

――――　エディッサ王国　――――

ハルモ教法王庁教圏国家群を構成する四王国の一つ。四王国の中では宗主国的な扱い。

人族のジョシュラン・アンテオキア・ブローニュがエディッサ王国の国王である。

――――　プロセン王国　――――

ハルモ教法王庁教圏国家群を構成する四王国の一つ。
北側の国境をグランツ帝国と接している。現在グランツ帝国から宣戦布告され、戦争状態に突入。
人族のハインリヒ・フォン・サヴォイアがプロセン王国の国王である。

――――　トスカーナ王国　――――

ハルモ教法王庁教圏国家群を構成する四王国の一つ。
人族のウォルフガング・ルイ・プロイセンがトスカーナ王国の国王である。

――――　クーラント魔国　――――

マグナマテルの北東に位置する亜人族が治める国家。
国境を接する国は西側のグランツ帝国のみであるが、八百年以上紛争状態が続いていた。現在は休戦協定を結び一時休戦中。
亜人族のケットハルト・ヴィヘルム・ケトラーがクーラント魔国の国王である。

―――― グランツ帝国 ――――

マグナマテルの北西に位置する人族と亜人族が治める国家。
国境を接する国は東側のクーラント魔国と南側のプロセン王国。
クーラント魔国とは八百年以上紛争状態が続いていた。現在は休戦協定を結び一時休戦中。
クーラント魔国と休戦した直後にプロセン王国に宣戦布告し戦争状態に突入。
人族のフリードリヒ・ラスペがグランツ帝国の初代皇帝である。

第0話：プロローグ（前書き）

ご都合主義的な異世界召喚ものになる予定です。

第0話：プロローグ

――――大地の神、豊穣（ほうじょう）の神に祝福された世界。

神々に祝福された大地に根を下ろした様々な種族は、何時からかこの世界をマグナマテルと呼称し、豊かな大地に国を建て、繁栄し、争い、衰退し、滅亡し、国を建て……幾星霜（いくせいそう）に連なる悠久の歴史を紡いでいた。

人族の王を掲げ人族が中心となって統括する国、エディッサ王国。建国以来、千五百年の歴史を誇るエディッサ王国は、二千年程前に誕生したマグナマテルの中心的な宗教の一つである『ハルモ教』を国教と定め、同じ様にハルモ教を国教と定めている王国の集合体『ハルモ教法王庁教圏国家群』の中心的な役割を果たしている。

そのエディッサ王国の北に位置するハルモ教の聖地『ハルモ教正教会』に、一人の賊が侵入した瞬間から物語は始まる。

「はぁ……はぁ……」

ハルモ教正教会。

敬虔なハルモ教信者の聖地として千年を超える悠久の時を刻み、

その長い歴史の中で無数の増改築を繰り返している壮大な建築物は、年を追うごとに内部の構造が迷宮のように複雑化し、教会に勤める神官でさえ年に数名が迷い、時には遭難するとまことしやかに囁かれていた。

そんな無限回廊化した様相を呈しているハルモ教正教会内部にある、冷たい大理石で囲まれた長い一本の廊下を、周囲に気を配りながらも無我夢中で駆け抜ける一つの影がある。

耳を澄ますと遠くから聞こえてくる複数の金属音、甲冑の金具や携帯する武器が擦れる無機質な音が、その影に対する多数の追っ手の存在を如実に知らしめている。

「警戒はしていると思っておったが……予想以上じゃった……わらわのミスじゃな」

所々刃の欠けた血糊のついた剣を忌々しそうに見つめる紅い双眼。彼女の眼は今の状況に対してというより、この状態に陥らせてしまった己の軽率な行動に対して怒りに震えているようだった。

年の頃は十六・七歳といったところだろうか、漆黒の軽鎧に身を包んだその肢体は、同年代の若者と比べてかなり華奢（きゃしゃ）といっていいだろう。

事実、膂力（りょりょく）だけを比べれば同年代の若者より大きく劣るといっても過言ではなく、多少の剣技の心得はあるがそれだけでは到底身を守ることも出来ない。

「しかし忌々しい仕掛けじゃ」

彼女の最大の武器は剣技などでは無く、膨大な魔力量とそれを操る天性の才能である。

本来であれば周囲に発散される魔力の凄まじさが外見の華奢さを大きくを裏切り、外見とのアンバランスさと相まって異彩な存在感を放っていた。

しかし今の彼女から発散されている魔力は、一般の魔道士から感じられる魔力の十分の一にも満たない微々たる量であり、その事が彼女を窮地に陥らせている原因だった。

一月半ほど前に彼女は、ハルモ正教会に伝わるとある重要な伝承の調査の為、エディッサ王国に単身で忍び込む事を勝手に決め、両親を含めた周囲の者達に向かって突如宣言をした。

その際、彼女の両親を含めた周囲の者達は良い顔をしなかったが、軽率な行動を控え目立たないように行動する事を条件として、彼女の申し出を渋々許可したのだが既にその条件は守られていない。

彼女も忠告に従い潜入当初は目立った行動をしないように心掛けていた。

しかしエディッサ王国内の城下町で有用な情報を掴めなかった事に苛立ちを感じ、強引にハルモ教正教会内に忍び込んだのは完全に彼女の独断である。

「むぅ……わらわともあろう者がこそこそ逃げまわる羽目になるとは」

通常であれば逃げる事はもちろんの事、百の兵を撃退する事ですら彼女の膨大な魔力の前ではたやすい。しかしその事実が彼女の驕りや慢心に繋がっていたのは否定できない。

「この仕掛けを施した者は、絶対に性格が捻じ曲がっておる！」

ハルモ教正教会の中は強力な魔術封じの結界が仕掛けられていた。

強力な結界が仕掛けられているハルモ教正教会の中では、多少の身体強化を自身に掛けることが彼女の膨大な魔力をもってしても精一杯であった。

とはいえ結界内で多少とはいえ魔法を使う事が出来るのは、教会関係者から見れば異常な事態である。普通の者なら魔力を発散する事すら不可能であり、彼女の魔力量が尋常では無いから出来た行為である。

「とはいえ……どう考えてもわらわの不手際じゃな」

国家の重要施設に何らかの対策が仕掛けられているという事は、少し考えれば簡単に想像できる事であり、それに対して何の対策もせず忍び込んだ事は、彼女の過失であることは疑うべくも無い事実であった。

「なんとかここから脱出する手はずを考えなければ、父上や爺に会わせる顔が無いの」

天窓から見える重なりかけた二つの月明かりを見ながら、彼女は死地に生を得ようと思考を走らせ自分の状況を再確認する。

逃げるのに邪魔だった視界を遮る兜はすでに投げ捨て、露になった長い紅い髪は汗と返り血で額に張り付いている。体を覆う軽鎧は所々傷つき、体中のあちらこちらには細かい切り傷が出来て出血している。

そして最悪なことに左の上腕は深く切られ、魔力をほぼ封じられている現状では止血もままならない。応急処置で強く巻いた布の上からもとめどなく血が滴り落ち、もはや感覚はほとんど無い。このままではあと数刻ほどで失血による昏倒は免れないであろう状況である。

「状況は悪いを通り越して最悪じゃな」

クーラント魔国の第一王女、ヴァンパイア族のアンジェリーナ・ヴィヘルム・ケトラーは誰に聞かせる訳でもなく、一人暗闇の中で自虐的に呟くのであった。

数刻後、アンジェリーナは最悪な状況を打開すべく行動を開始する。何も行動を起こさなければ死は静かに、しかも確実に彼女を訪れる。

悪あがきでも良い、何か行動しようと判断した彼女は、細心の注意を払いつつ、追っ手が居ないであろうと判断した教会の奥へ向かい進み始める。

注意深く周囲に気を配りながら回廊をゆっくりと進む。あわよくば隠し通路などの脱出経路が発見できれば生還できるのだが……そんな事を彼女は考えながら進んでいた。

注意深く進むアンジェリーナの目に、不意に回廊の一部の不可解な光が飛び込んでくる。目を凝らしてよく見れば回廊の一部の床が不可解に光を帯びている。無我夢中で駆け抜けて居れば見落としていたであろうほどの淡い光であった。

「何か仕掛けがあるかもしれんの」

彼女は警戒しながらも、おそるおそるその床に手を触れる。しかし彼女の予想に反して触れただけでは何の変化も無い。

「何か魔術的な仕掛けがあるように感じたが……わらわの勘違いだったかの？」

光る床から意識を外し再度周囲に気を配るアンジェリーナ。
しかしそんな彼女の言葉や行動をあざ笑うかのように、左腕から滴る血が光る床に触れた瞬間、まばゆい光が周囲を包み込みアンジェリーナの姿は長い回廊から突如消えうせた。

『……か？』

誰かが呼び掛けている。

『……は……むか？』

意識に直接呼び掛ける不可解な声を無意識に感じ、アンジェリーナは意識を取り戻す。

「ここは……？」

辺りは完全な静寂に囲まれている。
アンジェリーナはそっと体を起こしゆっくりと周囲を見回す。大理石で作られた部屋は大きな祭壇を中心とした半円形の形をしており、祭壇の上の蝋燭には炎が灯り淡い光を放っている。祭壇の正面には大きな神の像が祭られ、その左右には天使の像が傅くように控えていて荘厳な雰囲気を醸しだしていた。
そして彼女の背後にはこの部屋への唯一の出入り口である、華美な装飾が施された大きな扉が見える。どうやらここは礼拝堂のようであった。

「異国の神の祭壇か」

アンジェリーナはそれらを横目で眺めつつ、忌々しそうに一人呟く。

ハルモ正教会に伝わるとある重要な伝承の調査の為には、必ず立ち入らなければならない部屋ではあったが、実際に目の当たりにすると様々な感情が巻き起こり、上手く気持ちが制御出来ない。

「こやつが余計な事をしたせいで我が国は……」

ハルモ教に伝わる有名な伝承。

八百年以上前に神からマグナマテルの大地に異世界より使わされた、黒髪の勇者『クロウ・ミナト』の物語。勇者の鬼神のような活躍により、世界に平和がもたらされたという英雄譚である。

そしてその物語は、クーラント魔国討伐戦を主な舞台として、クーラント魔国から虐げられていた人族を解放する聖戦という位置づけで語り継がれていた。

しかしクーラント魔国側からすれば、クロウ・ミナトが現れてからわずか数年で領土の半分を奪われたという屈辱の歴史が刻まれた物語であり、クーラント魔国の第一王女、アンジェリーナにとってもそれは同じ事である。

ハルモ教法王庁教圏国家群からすれば華々しい栄光の歴史として、クーラント魔国の全ての領民にとっては忌々しい過去の汚点として、この伝承は語り継がれている。

もっともクーラント魔国にとっては勇者などではなく、異界の悪鬼として語られていたのだが、問題なのはそこの部分ではない。

「再度光臨する……か」

ハルモ教に伝わる伝承には続きがある。『世が乱れ大地が嘆く時、二つの月が重なり異界の勇者が再度光臨する』という一文が書かれている事は、マグナマテルの万民が知る事であった。

マグナマテルは今、群雄割拠の時代に差し掛かっている。ハルモ教法王庁教圏国家群、グランツ帝国、ファーディーン帝国、ヴァロア共和国、そしてクーラント魔国。各々の勢力が大陸の覇権を賭け、しのぎを削っている。

そして夜空に輝く二つの月が重なるのは八百と数十年に一度の現象。天文学者によれば、あと数日のうちに完全に重なると予測されている。

現在のマグナマテルの状況は預言書の伝承とあまりに似すぎていた。

今回アンジェリーナがエディッサ王国に忍び込むきっかけとなったのも、この伝承の確認がクーラント魔国にとっても急務と考えられたからである。とはいえ第一王女が自ら潜入すると言い出した事に対しては、多数の反対があった。

しかし彼女の能力の高さが国中の誰もが認めるものであり、彼女の能力を持ってすれば任務の成功の確率が大いに上がるという厳然たる事実と、言い出したら聞かない彼女の頑固さを知っている彼女の父親が説得を諦めた事が重なり、あまり軽率な行動は控える事を条件にしぶしぶ認めたのだが、現実はなかなか厳しい。

「まったく……見れば見るほど忌々しいの」

アンジェリーナが再度呟いた時、不可解な声がまた聞こえる。

『汝は…を……むか？』

意識に直接呼び掛ける声が段々とはっきりしてくる。不可解な現象にアンジェリーナは思わず声を上げる。

「誰じゃ！！」

剣を構え警戒しながら周囲を見渡す。部屋全体を見渡したが気配は無く、辺りはひっそりと静まり返っている。

過度の緊張と疲れ、そして失血が起こす幻聴の類だと判断し、アンジェリーナが警戒を少し緩めたとき、今度ははっきりと彼女の頭の中に言葉が響いた。

『汝は何を望むか？』

理解をはるかに超えた状況に、アンジェリーナの警戒心は一気に高まる。剣を強く握り締め、不測の事態にも即座に対応できるよう構えを取りながら、彼女は慎重に謎の声に尋ねる。

「お前は誰じゃ？」

アンジェリーナの問いかけに明確な返事は無く、返事の代わりに同じ問いかけが彼女の頭の中に響く。

『汝は何を望むか？』

アンジェリーナがハルモ教の敬虔な信者であったのならば、教会の礼拝堂で意識に直接呼び掛ける謎の声が聞こえるという、一種の奇跡じみた出来事を神の奇跡として大いに歓迎して、ひょっとしたら涙を流して感動したかもしれない。

しかし彼女の立場は敵対する魔国の姫。仮に神の奇跡だとしても

所詮は異国の神。このどうしようもない不愉快な茶番に早々に蹴りをつける為、彼女はその問いにぞんざいに答える。

「どこの誰かは知らぬが、そんな事を聞いてどうするつもりじゃ？」

またしてもアンジェリーナの問いかけに明確な返事は無く、返事の代わりに同じ問いかけが彼女の頭の中に響く。

『汝は何を望むか？』

どうもこの謎の声の主はこちらの質問には答える気が無いらしい。そう判断したアンジェリーナは一方的に問いかける無礼な声に対して、声を荒げて宣言する。

「わらわの望みは、この死地よりどんな形でも良いから生還する事だけだ！　侵入者の望みを叶えられるものなら叶えてみろ！！」

アンジェリーナの荒々しい怒気が含まれた声が礼拝堂の中に響く。不思議なことに謎の声の問いかけは突如止まり、辺りは不気味なほどの沈黙に再度包まれる。

何か予想外の出来事が起こっても即座に対応できるように、彼女は最大限の警戒をしながら周囲を見渡していたが、何かが起こる気配を全く感じられない。

「ふっ……所詮は異国の神。望むだけ無駄なことじゃの」

アンジェリーナは軽蔑の眼差しをしばしの間だけ異国の神の像に向けた後、くるりと神の像に背を向け礼拝堂の扉に向かい歩を進め始める。

とんだ茶番であったとぶつぶつ文句を言いながら扉に向かうアン

ジェリーナの後ろで、神の像が段々と淡く光り始めた事に彼女は気がつかなかった。

ギギギ……

「何者だ！？」

先ほどの茶番劇で若干緊張感を欠いていたアンジェリーナは、無警戒に礼拝堂から出る扉を開け放ってしまう。

扉を開ける時に響く重厚な音を、間の悪い事に侵入者を探し警戒していた教会を守護する聖騎士隊の小隊に聞かれてしまったのだ。

「ちっ……しまった」

どんどん近づく複数の金属音。もはや一刻の猶予も無い。回廊の左側から音が近づいていると判断したアンジェリーナは、無我夢中で回廊の右側へ向かって逃走を始めた。

アンジェリーナの逃走劇は不可解な幸運が重なる。

まず幸いな事に回廊の右側は警戒する聖騎士隊の数が少なかった。まれに多数の聖騎士隊と鉢合わせしてしまっても何故か直ぐに他の逃走経路が見つかり、難を逃れる事が出来た。

逃げ道が無く戦闘を覚悟した時は相対する兵の数が少なかったり、また練度がかなり低く軽くあしらう事が出来たりと、不思議で不可解な幸運が度重なり彼女は無駄な体力の浪費を避けることが出来ていた。

「案外あの声の主は、お人好しの神だったのかもしれんの」

徐々に失われる血の影響で疲弊しながら、アンジェリーナはそん

な事を考えている。
　闇雲に逃げ回っているだけの自分の行動が全部良い方向に進んでいる事を、偶然という一言で片付けてしまうのは簡単な事ではあるが、先ほどのやり取りと今の状況を考えると、謎の声の主が望みを叶えてくれたとも考えられる。

「感謝はしてやるかの……あっ！　出口じゃ！」

　数刻の逃走劇の後、彼女はテラスを見つけ外に飛び出した。幸いな事にテラスの外は魔術封じの結界の効果が及ばないようである。
　多量の出血のため魔力は枯渇しそうになっていたが、彼女を追う聖騎士隊はすぐ後ろに迫っていて一刻の猶予も無い。彼女は最後の力を振り絞り蝙蝠に擬態する。

　進入者を取り逃がした聖騎士隊の苦悶の声を背に、蝙蝠の姿に変化したアンジェリーナは、南西の方角に飛び去っていく。
　朦朧とする意識の中、死地から脱出する事に精一杯だった彼女は、自らの体が淡い光を放っている事に気が付かなかった。

　明朝、エディッサ王国の国王、ジョシュラン・アンテオキア・ブローニュの元に、ハルモ教正教会に賊が侵入した事、そしてその賊が不思議な淡い光を放つ蝙蝠に姿を変え、セルビナ王国との国境方面へ逃走した件が報告された。
　エディッサ王国のジョシュラン王の勅命により、ハルモ教法王庁教圏国家群全域で、ハルモ教正教会潜入犯の捜索が大々的に行われるのは、これから数日後の事になる。

――――とある遠い世界の出来事。

今回の事件が、遠く離れた別の世界で暮らすある男の運命を大きく変える事になるのだが、その事に気が付いた者は誰一人として居ない。

二つの世界はその瞬間に向かってゆっくりと時を刻んでいる。どう足掻いても避けようの無い未来が静かに、そして確実に忍び寄って来ていた。

第0話：プロローグ（後書き）

魔国の姫君の運命はいかに。

第1話：微細な兆候

――――人生の転機は予想外のところから訪れる。

そんなありきたりな言葉を心の何処かに留め、期待に満ち溢れた日々を過ごせるのは前途洋々たる若者の特権であり、与えられた現状で満足出来るようになるのは少しくたびれた大人の特権である。

個人差は大きいが、二十代の中盤を過ぎた辺りから思考が急速に保守的な方向に変化し、変化よりも安定を、変革よりも平穏を、スリルに満ち溢れる非日常よりも慎ましく生活できる日常を好ましく思い始めるのが一般人の一般人足る所以（ゆえん）であり、彼もそんな一般人の一人であったはずなのだが……人生とはままならないものである。

カタカタカタ……。

濃紺のスーツを着た二十代中盤の男が、自分が作業する机の回り以外の電気が消えたオフィスで、一人黙々とノートパソコンのキーを叩いている。

三月になったばかりのこの季節は、太陽が顔を出している昼間であれば春の気配（けはい）が感じられ、割と過ごしやすくなってきてはいるが、夜間となるとまだまだ気温は低く肌寒い為、大通りに面した窓は締

め切られていた。
しかし締め切ったはずの窓の外からは、自動車のエンジン音や春の陽気に誘われた酔っ払い共の騒がしい声が時々男の耳に届き、その事が静まり返ったオフィスの中で一人作業しているという今の状況を如実に感じさせる。

「そろそろ切り上げないと、実家に着くのが夜中になるな……」

彼はそんな雰囲気のなか、溜息をつきつつノートパソコンの右下の時計に目を向ける。時刻はすでに二十二時に差しかかろうとしていた。

「はぁ……気が重いな……」

今日は金曜。古い表現で言えば花の金曜日……略して花金。彼自身も半年前まで遡れば週末のこの時間は、友人や仲間と飲みに行ったりプライベートでの有意義な時を過ごしていたりと悠々自適な生活をしていたのだが、ここ半年の間はそんな事をする時間が全く取れない状態が続いていた。
ちなみに彼の勤めている会社の業務時間は十八時迄であり、特に忙しい状況でなければ定時で上がっても文句を言われる事は無い。しかし『特に忙しい状況でなければ』の部分がかなりの曲者であり、かなり忙しい彼は楽しいはずの金曜日の夜に四時間近くも残業している。

しかし彼の心を重くしているのは残業のせいではない。

彼の働く会社は全国展開している住宅メーカーであり、彼は設計と施工現場管理に携わっている。半年前までは不景気の影響で仕事が半減し、早期退職の募集やリストラ勧告の嵐が社内を吹き荒れて

いたのだが、今の状況はがらりと変わっている。
少し景気が良くなって来た彼の会社は、人員整理のせいで逆に人が足りなくなりかなり忙しい。週の半分は午前様になるのがあたりまえの状態となっており、彼は残業する事に対して全く抵抗が無くなっている。先を見越せない上層部の先見の明の無さのつけを払わされてしまっている状態なのだが、人の良い彼はすっかり会社に飼いならされてしまっていた。

「行かないって選択肢はありえないんだよな……」

誰も居ないオフィスで、彼は数日前の出来事を思い返していた。

――――数日前。

『来週の土曜日お見合いだから、何があっても実家に帰ってきなさい』

「……」

数少ない休日の朝早くに突然電話でたたき起こされ、ただでさえ頭が廻っていない状態で予想外の言葉をぶつけられて彼は混乱していた。しかし電話口の相手はそんな彼の状態などお構い無しに話を続ける。

『相手のお嬢さんは私の知り合いの娘さん。私も会った事があるけど性格も良いし、見た目も凄く綺麗であんたには勿体無い位のお嬢さんよ。母さんもあの娘なら安心して侑人(ゆうと)を任せられるわ』

「……は？」

『あー、相手方も小坂さん家の長男さんなら安心だと乗り気だから、あんたは全然心配しなくていいわよ……って、あんた話し聞いてるの？』

「……へ？」

あまりの事態に状況をまったく把握できない侑人。

母親から立て続けに紡ぎだされる怒涛の言葉の嵐を前にして、パニックになりつつある思考を無理やり抑えて何とか言葉を紡ぎだす。

「見合いって誰の？」

『あんたの』

再度思考停止……いや停止はまずい。

どうしてこういう状態になっているのかは理解できないが、このままだとなし崩し的にお見合いをさせられてそのまま結婚させられてしまう。そんな事を侑人は本能的に察知して反撃を開始した。

「なんで二十七歳でお見合いなんてしないとならないんだよ！」

『あんただけ良い話が無いから心配なのよね』

「……」

母親の言葉が侑人の心に深く突き刺さり、反撃はあっさりと終了する。

侑人には二つ下の弟と五つ下の妹が居る。侑人はどちらかというと内向的な性格なのだが、下の二人はかなり外交的な性格をしていた。

しかも下の二人にはすでに将来を誓い合った相手が存在している。侑人も学生時代には彼女がいた事もあったが、社会人になってから

は一度も浮いた話が無く、母親の言葉は侑人の心に深く突き刺さった。

弟はすでに入籍をしている。というより入籍しなければならない事態を自ら引き起こしたのだ。結婚式はまだ執り行っておらず今年の夏に挙げる予定である。

正月にぽわぽわしたかわいい感じの女性を突然家に連れてきて、結婚すると急に宣言した時には家中がお祭り騒ぎになった。

秋にはパパになると続けて言いだした時、親父は唖然とした後激怒し母親は呆然とした後卒倒した。新年の挨拶で集まっていた親族を巻き込んで親族会議になりかけたのも良い思い出だ。

その後も様々な紆余曲折があったのだが、つい先日うちの両親と相手方の両親が親族挨拶の席で顔を合わせ、そのまま意気投合し今では良い飲み友達になっているとの事なので、これ以上の問題はもう起きないはずである。

妹はこの春に大学を卒業し都内の企業に就職する事が決まっている。そしてそれを機会にして高校から付き合っている彼氏と同棲を始めるらしい。

侑人の脳裏に『二人でお金を貯めて数年後には結婚するんだ』と、彼氏の横で嬉しそうに話す妹の顔が思い出される。娘に甘い親父がよく同棲を許可したなと弟と二人で感心していたが、それは彼氏の人徳の賜物であり、親父も認めざるを得なかったのであろうという結論に落ち着いている。

兄馬鹿の入った侑人の多少厳しめな目線からみても、妹の彼氏は非常に出来た男である。容姿端麗・成績優秀で大学も東京の有名大学に現役で合格し、おまけに学力がやや足りなかった彼女である我が妹を、同じ有名大学に現役合格させたほどの指導力を併せ持って

いる。

ちなみに妹が彼氏と同じ大学に受験すると言い出した時、家族全員で受験に失敗した妹をどうやって慰めればいいのかという議題で対策会議を開いた。結果的にこの会議は無駄になったのだが、対策会議を開いた事は妹に対しての永遠の秘密である。

おまけに非常に性格も良く浮気など絶対にしない。『良い男なんだから浮気の一つや二つあるだろう』と、軽い気持ちでからかった彼女の実の兄達に、どれだけ自分の彼女がすばらしいのかという話を延々聞かせ、最終的に全面的な謝罪を勝ち取った剛の者でもある。

あの日は朝まで語られ、黄色い太陽を眺めながら仕事に向かった。ある意味トラウマになっている出来事である。

『……侑人？　おーい侑人？』

とまあこんな感じで、二つ下の弟と五つ下の妹はすでに落ち着きそうな環境になっている。長男の自分だけがいまだにフラフラし、落ち着いていない事に対して侑人も少し気にはしていた。

大方心配性な母親がふらふらしている長男を心配して、お見合いの話を持ってきたって所だろうが、それにしても突然すぎる。

『もしもーし！　あんた話聞いてるの！？』

「はっ！　あ、ごめんごめん、少し考え事してた」

『それならいいけど……で、いまさら聞くことじゃないけど、あんた今付き合っている人とか居るの？』

「聞かないでくれ……」

そういった人は居ないがまだ結婚など考える状態ではないと、暴走する母親相手にこの後三十分ほど孤軍奮闘したが、息子の為と強

く思い込んでいる母親の翻意を促すことは出来なかった。

最後に藁をも掴む気持ちで親父に電話を変わってもらう。電話口でなにやら親父と母親が話しているのが聞こえる。

待つ事数分、ようやく電話口に出た親父からは

『諦めろ』

との力強い一言を頂き、続けて

『時間は土曜日の十一時だ』

と伝えられ、そのままこちらの返答を待たずに電話が切られる。

侑人の抵抗がすべて徒労に終わった瞬間であった……。

――――現時刻。

「はっ」

ノートパソコンの右下の時計に目を向けると二十分ほど時間が過ぎていた。物思いにふけりすぎて軽くトリップしていたらしい。

「そろそろ切り上げて出発するか……でも何か眠い感じもするしどうするかな……」

誰に聞かせる訳でもなくそうつぶやく侑人。実家までは車で片道一時間半ほどの距離であり、今この瞬間に出発すれば計算上では今

日中に着けるはず。
侑人はそのまま出発するかどうか少し悩んだのだが、最終的には仮眠してから出発することに決め、椅子を並べてその上に身を横たえる。

その瞬間に不可解な出来事は起こった。

『……を……むか？』

不思議な声が頭の中に響き渡り、何とも言えない感覚が侑人を突然襲う。

理解出来ない出来事が身に降りかかって来た侑人は、慌てて椅子から飛び起きて訝しげに辺りを見回す。しかし周囲の景色は普段と全く変わらないオフィスのままであり、違和感を覚えるような部分は一つも無い。

しかしその事が逆に先ほどの出来事に対する不気味さを如実に感じさせ、侑人の鼓動をほんの少しだけ早くする。

「気のせいか……寝よ寝よ」

侑人は嫌な雰囲気を断ち切るかのように少し大きめの声で独り言を呟き、再度椅子の上に身を横たえる。静かなオフィスに椅子の軋む音だけが響く。

気が高ぶって眠れない事を少しだけ危惧したが、蓄積（ちくせき）していた疲労が急速な眠気を誘い、侑人の意識は徐々に夢の世界へ向かって旅立っていく。

『……を……むか？』

意識が途絶える瞬間、再度不思議な声が脳裏に響き渡る。しかし侑人はその声に反応する事無く眠りに落ちていくのであった。

第1話：微細な兆候（後書き）

大部分は主人公の自己紹介の為だけのエピソードだったりします。
侑人の父・母・弟・妹・お見合い相手は今後の展開に絡みません。

第2話：非日常への誘い

「……みは……だけ……みろ……」

侑人は爆睡している。なにやら夢を見ているらしく、しかめっ面をしながら時々もごもごと寝言を口走っている。

度重なる残業やオフィスへの泊り込みのおかげで上達した、椅子の上で微動だにしない侑人の睡眠テクニックはかなりのものであり、なかなかの安定感を毎回誇っていたのだが、今日の夢はあまり心地よいものではないらしく、珍しい事に寝床からずり落ちかけていた。

「…こえ……しれ……ぐぁ！！？」

浮遊感を一瞬感じたと思った直後、後頭部と背中に激痛が走る。床に全身をしこたまぶつけた侑人は、あまりの痛さに一分ほど床を転げまわっている。

見る人が見れば百年の恋も冷めるような余りにも情けない姿なのだが、幸か不幸か今は一人きりである。それはそれで少し寂しい気がするのだが、今の侑人にとってそれ所では無い。

何とか立ち上がれるほどに痛みが回復した後、侑人はゆっくりと周りを見渡した。普段の寝起きと比べてなにやら違和感がある。何かがおかしい。

そんな感覚のままに侑人は思わず呟く。

「部屋じゃない……？　ここは何処だ？」

侑人はオフィスで寝たことをすっかり忘れている。侑人の寝起きはかなり悪かった。

「久々に夢を見ていた気がするんだけどどんな夢だったっけかな……」

紅い髪の毛が印象的な少女の姿が、侑人の脳裏に浮かびあがりそうになる。しかし顔を思い出そうとすると突然イメージは霧散し、何度試してもおぼろげな姿しか思い出せない。

思い出す事を諦めた侑人は、オフィスに備え付けられているキッチンの水道で顔を洗い、意識をしっかりと覚醒させ時計を確認する。時刻は二十三時半を少し廻っている。

「少し寝るつもりが一時間以上寝ちゃったのか」

今から実家に向かうと到着は午前一時を間違いなく過ぎる。翌日に控えたイベントのことを考えると逃げたい気持ちで一杯ではあったが、逃げれば逃げるだけ状況は悪化することが目に見えている。

「……行くか」

出発の準備を整えるべく、侑人は自分のデスクを片付け始める。手早くノートパソコンの電源を落としＰＣケースに入れ、会社の施工基準書と最近発表された環境配慮型の新建材の資料をまとめたファイルと筆記用具を鞄にしまう。

実は侑人はお見合いの待ち時間に軽く仕事をするつもりである。侑人は会社から見て都合の良い仕事人間であるが、本人も納得しているので特に問題は無い。

『汝は…を……むか?』

手早く準備を整えた侑人が、オフィスの戸締りを確認するべく窓のほうに歩こうとした時、激しい頭痛が突如侑人を襲う。

あまりの痛さにこめかみに右手を添えその場に座り込む侑人。朦朧とする意識をなんとか繋ぎとめようと思考を集中させた時、意識に直接呼び掛ける不可解な声をはっきりと感じる。

『汝は何を望むか?』

突然の頭の中に響く声に侑人はかなり驚いたが今はそれ所では無い。不可解な現象に対する驚きよりも、激しい頭痛による生命の危機のほうが何倍も緊急性が高い。

そのまま数分間うずくまった後、頭痛が収まりやっと動けるようになった侑人は、ゆっくりと辺りを確認する。

「特に変わったところは無いな……さっきのは何だったんだろう?」

目の前に広がる景色は普段と変わらないオフィスの光景であった。机が整然と並べられ、後ろの棚には書類が所狭しと詰め込まれている。

主電源を落としていないコピー機は待機中のランプが点灯し、電話はしっかりと留守電モードになっている。

そして電球の切れかけた非常案内灯は規則正しく点滅していたし、大通りに面した窓では侑人が戸締りの確認をしていた。

「なにもおかしい所はな……あ！！？」

体を一気に襲う強烈な違和感。侑人はその原因に気が付いてしまった。いつもの景色に紛れ込んだありえないモノを。

「俺が居る……」

日常が一気に非日常に切り替わってしまった瞬間であった。

唖然とする侑人の前で、帰宅準備を着々と進める侑人。侑人の事に全く気が付かず、いつもの行動をしている侑人。そんな侑人の姿を唖然とした表情で侑人は眺めている。

「俺は……侑人だよな」

ガラスに写った自分の姿を確認しながら侑人は呟く。

「実は双子だったとか？」

古い記憶から順番に呼び起こしながら確認するが、侑人は3人兄弟であり、生き別れた双子が居るなどという話は聞いた事が無い。

「おーい。お前は誰だー」

勇気を出して、でも小さな声で目の前の侑人に話しかけてみる……どうやら目の前の侑人にはこっちの声は聞こえていないようである。

もう少し勇気を出して、目の前にいる侑人の髪の毛を引っ張ってみる。不思議そうな顔をしながら周囲を見渡す侑人。どうやら触れ

られる感覚はあるようだが、こちらを認識出来ていないらしい。

「不思議な事もあるものだ……」

俏人は目の前の不可解な現象を認めつつも、原因を探る事を放棄して、準備を進めている俏人をぼんやりと眺めている。

目の前にいる俏人……便宜上俏人Ｂとでも呼ぼうか……の帰宅準備が終わったらしく、オフィスの出口に向かって、机の上に置きっぱなしになっていた先ほど俏人がまとめた荷物を持ちながら歩き始めた。

なんでお見合いなんて……などとぼやいている所から判断すると、俏人Ｂは俏人と全く同じ記憶を持っているようだった。

「ますます訳が解らん……」

同じ記憶を持っているという事は、双子や他人の空似ではないという証明になる。百歩譲って俏人の知らないところで実は双子が居て、誰かと共謀して俏人を騙して喜んでいると言う状況なのなら、納得は全然出来ないが理解は出来る。

ドッペルゲンガーという単語も頭に浮かんだが、『ドッペルゲンガーを見ると死期が近い』という民間伝承をあわせて思い出してしまった為、俏人は気が付かなかった事にする。

「あ！」

俏人はある事に気が付く。

「俏人Ｂがお見合いに成功してしまったら俺は一体どうなるんだ？」

それ以前に自分が二人居たら家族や周囲の人間が混乱しパニック

になるのだが、そこにはとりあえず目をつぶろうと侑人は考え、目先のお見合いの成否という直接的な問題点のみに着目する。

「このまま放置すると、見ず知らずの女性と夫婦になる可能性もあるのか……さすがにそれは不味いな」

いくらお見合いをしたくないとは言えこのまま流されたままで、自分の人生が自分の知らないうちに勝手に決まる事態を、このまま見過ごすわけには行かない。

人生の岐路に立たされている事に改めて気が付いた侑人が、慌てて侑人Bを追いかけるべく出口に向かおうとした時、事態は再び動き始める。

『汝は何を望むか？』

先ほど感じた意識に直接呼び掛ける不可解な声が頭の中に響き、急に後ろから強い力で引っ張られる感覚を覚える。侑人はその力に対して必死に抵抗するが、自分の意思に反して視界はどんどん暗くなり意識も段々遠くなっていく。

『汝は何を望むか？』

侑人は遠くなっていく意識の中で、『一級建築士の試験も夏にあるし、驚異的な理解力が欲しいなぁ』などとぼんやりと考えている。

それに反応するかのように、謎の声が何か返事をしたような気がしたが、その事を確認する前に意識が完全に暗転し、侑人はこの世界から突如姿を消すのであった。

＊＊＊＊＊

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

瞼の裏に光を感じて意識を取り戻した侑人は、目の前に広がる光景を見ながら有名な純文学小説の冒頭の文章を何故か思い出している。何時の間にか時間は夜から昼に変化していたが、問題はそんな小さな範囲では収まらなかった。

三百六十度見渡す限りの春の木々。侑人が立っている周囲だけは少しひらけていて、頭上を見上げれば青空が、新芽を付けた木々の枝の隙間から覗いている。オフィスに居たはずの自分が、ふと気が付けば大自然に抱かれて佇んでいるという状況を受け止めるのには、かなりの時間を要しそうである。

そもそもここが何処なのか全く分からないので、国境を越えたのかどうなのかは謎だし、トンネルどころか、どうやって此処に移動してきたのか理解出来てはいない。そもそも周囲に雪がないので雪国ですらない。

自分が思い出した文章と目の前に広がる光景を比較検討してみたが、状況が変わるはずもなく、侑人は今後の対策を考える為にとりあえず現状を確認する事にした。

最初に状況。

まずはっきりと分かる事は、オフィスで変な声を聞いた事、気を失ったらこの場所にいた事……以上。逆に考えればそれ以外の事はまったく分からない。

空気は澄み切っているので、どこかの森の中であろう事は予想できたが、場所を特定できるものが周囲に何もない為どうしようもない。

次に体の状態。

手足を動かしてみるが異常はなさそうだ。頭を振ったり、体のあちらこちらを触ったりして確認してみたが、どこにも異常は無い。むしろ普段より体が軽く、体調はいまだかつて無いほど良好である。

次に服装。

下着と肌着の上にチェックのワイシャツを着ていて、その上に濃紺のスーツをまとっている。そして左手には愛用の太陽電池の腕時計をはめており、いつもの仕事用の服装である事が確認出来た。

ちなみにロッカーに入れたままであった愛用のコートはどうやら着ていないらしく、周囲にも落ちていない。ボーナスで奮発して買ったお気に入りのコートがない事で侑人は少し凹んだ。

最後に持ち物。

スーツの内ポケットに財布があり、中身は……社会人としてどうなのかという金額しか入ってはいなかったが、まぁ二・三日の食事には困らない程度のお金が入っていた。

上着のポケットには携帯電話と百円ライターが入っており、とりあえず携帯電話を開いてみたがどうやら圏外のようである。携帯を開いたまま少し周囲をうろうろしてみたが電波は入らない。

分かったのは日にちと時刻だけであり気を失った日から数えて、その日の午前十一時を少し廻ったところだった。侑人はネットで見た事がある遭難マニュアルをふと思い出し、電池の節約のため携帯電話の電源を落とした。

タバコはちょうど切らしていて入ってはいなかったが、ごくたまに息抜きをする程度にしか吸っていなかったので困らないだろう。これを機会に禁煙しようと考えながら周囲を見渡すが、特に何も落ちておらず持ち物はこれだけである。

とりあえずよく判らない場所にいることを除けば昨晩のままであり、侑人はほんの少しだけ安心した。

侑人が現状の確認を終え、今後の身の振りをどうしようかと幾許か悩んでいた時、目の前の茂みがガサガサと揺れる。
狼はすでに絶滅しているはずだが、日本にはまだ熊が居る。野生の猪や猿であっても、襲われたらただではすまない事は、ネットやニュースで見ているので知識として持っていた為、侑人は警戒しながら茂みを見つめつつ少しその場から後退する。

ガサッ。

ひときわ大きな音を立て、その物体は侑人の前に姿を現した。体長五十センチ程のその物体は灰色の体毛で覆われていて、身体的特徴として前足が短く後ろ足が長い。瞳はつぶらであり、耳も長かった。
飛び出した物体は侑人もよく知るウサギのように見えた……頭の中央に角がなければの話だが。

「……角があるけどウサギだよな？」

侑人は半信半疑ながらも警戒を解く。『ウサギは警戒心が強く臆病であるので飼育には注意が必要だから兄貴達は近寄るな』と、数年前にウサギを飼っていた妹に力説された記憶があったのだ。
角があってもウサギはウサギ。侑人はそんな事を考えながら目の前のウサギに近づいたのだが、数秒後に後悔する事となる。

「キシャー！」

突如目の前のウサギ……いや、ウサギはこんなに怖くないから、この瞬間にウサギもどきと命名された生物は、侑人が数歩近づくと雰囲気をがらりと変える。

つぶらだった瞳が赤みを帯び、体毛が逆立ち始め、威嚇するような唸り声を上げる。どうやら怒っているらしい。

「そんなに怒らなくていいのに」

軽口を叩きつつも実は軽く怯えていた侑人は、ウサギもどきから少し距離を取る為に後ろを向いたのだが、その行動が侑人の明暗を分ける。

ボウッ。

後ろを向いた侑人の頭のすぐ右横を小さな火球が通り過ぎる。後ろを向いた際に頭の位置が多少ずれた為、頭への直撃を免れたのだが侑人はそこまで気が付いていない。

「なっ！」

あまりの状況に侑人の思考は停止したが、髪の毛の焦げたような異臭に鼻が刺激されて、幸いな事に一瞬で持ち直す。

恐る恐る右手で髪の毛を確認すると、頭を掠めた火球によって髪の毛の一部が焦げてチリチリになっていた。

まさかと思いつつウサギもどきに再度視線を送る。ウサギもどきの口から侑人に向かって火炎の小球が放たれたのを確認した瞬間、侑人は全速力でその場から逃げ出す。

この時侑人の中で、ウサギもどきは火炎ウサギもどきと名を変え、愛玩動物から危険生物へと格上げされた。

木々の間を駆け抜け侑人は疾走する。かれこれ三十分以上かなりのスピードで走っているのだが不思議と息が切れない。
元々体力はあるほうだったが、ここまでの身体能力を侑人は持ち合わせては居ない。普通に考えれば違和感を覚えるはずなのだが、今の侑人にそんな余裕などはない。

「こえー！　まじこえー！！」

侑人は無我夢中で逃げ続けている。あまりのびびりっぷりに、火炎ウサギもどきがすでに追いかけて来ていない事すら気が付いていなかった。
そして火炎ウサギもどきと出会ってから一時間後、侑人は川のほとりで一人たそがれて……もとい、いじけていた。

「ウサギが火を噴くとは……危険生物を駆除しない国は、何をやっているんだ……」

ぶつぶつ文句を呟く侑人。
体育座りの姿勢で川に小石を投げながら、高い税金を払っていたのにとか、政権が変わったから悪いとか、呟き続けて現実逃避をしていた。

実は侑人は内心自分の置かれている非日常な状況と、自分が今居るこの世界の異常な状態に気が付いている。
不思議な声を聞いたと思ったら見ず知らずの場所に自分が移動していた現状と、自分が知る世界のウサギが火を噴くわけが無い事を合わせて考えると、どうも今自分が居るこの場所は日本どころか地球でも無さそうだという事を把握しつつあった。

――――異世界召喚。

侑人の脳裏にそんな言葉が浮かぶ。

子供の頃に憧れていたゲームやお伽噺の主人公の様に、強制的に世界の平和の為に行動を起こす義務でも背負わされたのだろうか。

そもそもこういった非日常な世界に巻き込まれるのは、バイタリティ溢れる十代の若者だというのが定番のはずであり、少々くたびれ始めた自分を呼び出しても意味が無いのではないか。

もしくは今ここに居る事に何の意味も無く、この世界に紛れ込んでしまったのは単なる事故であり、戻る方法をただ探すだけの運命が待っているだけなのかもしれない。そうなった場合はどうやってこの世界の住人に、自分が異世界出身だという事を伝えれば良いのか見当も付かない。

そもそも戻る手段は有るのだろうか。もし戻れたとしても元の世界にいきなり現れた、もう一人の自分との兼ね合いはどうなるのだろう。

無事に元の世界に戻れたとしても、既に自分の居場所が無くなっている事も十分に考えられる。既にお見合いが行われている時間になっている事だし、ひょっとすると意気投合して将来の伴侶が決まっているかもしれない。

様々な疑問が浮かびあがるが、その疑問の回答となりそうな物は周囲に無い。深く考え込む侑人の頬を初春の少しだけ肌寒い風が静かに撫でていく。

色々と考えては見るものの、今後自分はどうなるのかという不安の方が大きく、思考が上手くまとまらない。侑人が現実を認めるまでにもう少しの時間が必要だった。

周囲の小石を全部川に投げる事さらに一時間。侑人はなんとか立

ち直り、今後の身の振り方を考え始めていた。

「サバイバル生活には自信が無いし、とりあえずは町や村を見つけるしかないか」

くよくよしていても仕方が無い、暗くなる前に行動しようと立ち上がりかけた時、侑人の背後の茂みが、再びガサガサと音を立て始める。

「勘弁してくれ……」

侑人は泣きそうに……実際に半泣きしていた。

第2話：非日常への誘い（後書き）

主人公が異世界に飛ばされちゃうなら、もう一人の本人が元の世界に残れば家族は心配しなくて良いじゃないか！の精神です。

第3話：未知との遭遇【前編】

目の前にある低い木々で形成されている深い茂みが、奥の方でガサガサと音を立てて揺れている。どうやら森の奥のほうからこちらに向かって何かが近づいているようだ。

侑人は視線を音がする方に向けたまま静かに立ち上がり、直ぐに逃げられるような体勢を整える。近づいてくるものがどういった存在なのか判らないが、先ほどの火炎ウサギもどきのような生物が生息している森であり、どんな危険な生き物がいるのか想像もつかない。

今まで生活していた平和な日本での感覚のまま、安直に物事を判断する事がどれだけ危険な事なのか、先ほどの件で十分に理解出来ている。例え見た目が自身の良く知る生物の形をしていたとしても、全くの別物の可能性がある為むやみに近づかない方が良い。

冷静な思考をしているように見せかけてはいるが、実は侑人は思いっきりびびっているだけだった。

森の中を進む謎の物体は、何かを探すようにうろうろしながらも、確実に侑人の居る方へ向かって近づいており、すでに距離は目算で十メートルほどの位置にまで迫っている。

時を追う事に侑人の鼓動はどんどん早くなり、背中はすでに冷や汗でぐっしょりと濡れ、かなり冷たくなっている。

完全に相手の姿が確認出来る訳では無いが、春先でまだ葉が生い茂っていない為、枝の隙間から近づく物体の大きさが何となく確認出来る。

おおよその目算で、侑人よりも二周りは小さなサイズであるが、もし正体が熊の様な危険な生物であったのなら、襲われれば命に関わる可能性が高い。先ほどは火を噴くウサギが登場したが、今回は意表をついて火を噴く熊が登場した……なんて出来事が起こったのならばもはや手も足も出ない。

「なんなんだよ一体」

かなり焦っていた侑人は、自分の行動がどんな状況を引き起こす可能性があるのかを、全く考えずに思わず文句を口にしてしまう。

そしてその不用意な行動がきっかけとなり、事態は次の展開に動き始める事となる。

侑人の言葉が耳に届いた謎の物体の動きが突如止まる。辺りに静寂が訪れ緊迫した空気が周囲をどんどん満たしていく。

茂みの中から何かがこちらを警戒しているような雰囲気を侑人は感じている。鋭い視線が自分を射抜いているような感覚と、相手の存在が発する気配が自分の肌を通じてはっきりと判る。

侑人が日本で普通に生活している時には、これほどはっきりと他者の存在を肌で感じる事など無かった。何となく視線を感じるような気がするといった程度の事はあったが、確信を持つまでに至った事など一度も無い。

実はこの世界に来てからの侑人の感覚は異様なほど研ぎ澄まされ、集中すれば周囲の状況がある程度は把握出来るようになっていた。しかし冷静な思考が出来なくなっている侑人は、その事に気が付いていなかった。

お互いに警戒し、お互いが動きを潜める事数刻。永遠に続くかのような均衡を破るきっかけを作ったのは侑人であり、先に行動を起こしたのは相手の方だった。

緊張感に耐え切れなくなった侑人が逃げ道を再度確認するために、不用意に視線を外し首を左右に動かしたのを相手は見逃さなかった。

ガサッ

突如大きな音が響く。

侑人が慌てて視線を戻したのだが、その時にはすでに相手は茂みから飛び出し、侑人に向かって身構えて敵意をむき出しにしていた。

うかつな行動を不用意に取った事を侑人は混乱しながらも反省し、とにかく状況を好転させるべく必死になって頭を働かせる。

目の前には女の子が居た。

金色のやわらかそうな長い髪を二つのおさげに結わえており、前髪の隙間から覗く金色の目がこちらを真っ直ぐに射抜いている。鼻筋はすっきりと通り、その下にある形の良い桃色の唇は、緊張の表れなのか固くへの字に結ばれていた。

体型は細身であるが、女性らしい柔らかい曲線で各部位が描かれており、スレンダーという言葉がしっくりと来るプロポーションをしている。

もし日本で見かけたのであれば、十人が十人とも振り返るような整った容姿をしており、芸能人だと紹介されれば素直に信じてしまうようなオーラを感じさせる。

年齢ははっきりと分からないが、幼さの残る顔から判断すると多分未成年であろう。丈夫そうな素材を丁寧に裁縫した動きやすそうな服を着ている事から、活発な性格な子だと思われる。

ちなみに耳が少し尖っているようにも見えるが、そんな事は今の侑人にとっては大した問題ではない。角が生えていれば少しは驚いたかもしれないが。

大問題なのは彼女が金色の目で侑人を思いっきり睨みつつ、弓矢を構えている事だった。

「怪しい者じゃないから警戒しないで欲しいかな……」

侑人は恐る恐る目の前の女の子に話しかける。その言葉を聞いた彼女は、目を大きく見開いて肩を一瞬震わせたかと思うと、さらに険しい眼で侑人を睨みつけてきた。

構えた弓矢を持つ両手には力がこもりわずかに震えている。あと少し刺激を与えれば直ぐにでも矢が放たれそうである。

「まっ…まってまって撃たないで！」

そんな彼女の姿を見て侑人はかなり慌てる。好戦的な外人なのか？　むしろ異世界人か？　ひょっとしたら日本語が通じないのかもしれないぞ。そんな事を考え大昔に学校で習った内容を一所懸命思い出す。

錆び付いた頭を無理やりフル稼働し、記憶の片隅に追いやってしまった遠い学び舎の記憶を呼び覚ましていく。どうでも良い記憶ばかりが数多く蘇ってくるが、何とか目的の内容を思い出し一気に口にする。

「ア、アイ　アム　ノット　デンジャー！」

侑人の英語の成績はかなり悪かった。

侑人は必死になって、自分が怪しい者じゃない事を相手に伝えようとしている。スーツ姿で山の中をうろうろしている時点で十分怪しいのだが、怪しいと判断されたらその時点で人生が終わる可能性がある。

ジェスチャーやボディランゲジを駆使して自分の思いを伝えようかと考えたが、大きな動作が相手を過度に刺激して、そのまま撃たれて昇天するのは余りにも洒落にならないので自重した。

「イッヒ　リーベン　ディッヒ」

「我（ウォーアイニー）？？」

「アニョハセヨ」

「アヤシイモノデハナイアルヨ」

思いついた言葉の全部を使って説得を試みる侑人。もはや説得の言葉ですら無く、傍目から見れば余計に怪しさ満点な姿ではある。

しかし言葉が通じたのか必死な姿が伝わったのかは定かでないが、彼女は弓矢の構えを解いてくれた。しかし表情はまだ硬くこちらを警戒している事には変わりが無い。

「言葉が通じたのかな……とにかく助かった……」

矢の鋭い先端から逃れられた侑人は、全身の力が抜けその場に座り込む。人間死ぬ気になれば何でも出来るという事を実感した一瞬である。

「信じてくれてありがとう」

日本語が通じているのかは分からないが、侑人は彼女を見上げて

微笑みながらそう告げる。とにかく感謝の気持ちを素直に伝えたくなったのだ。

そんな侑人の姿を見た彼女は何やら考えているような素振りをしていたが、やがて少し困ったような顔をしながら恐る恐る口を開く。

「ёдк☆Шйоз？」

彼女の口から発せられた言葉は、侑人の聞いたことが無い言語であった。

「ここはどこかな？」

「клзаи$йШегв？」

「日本って分かる？」

「зквд☆ё£★З？」

相手に危害を加える気がない事をお互いが理解した後、コミュニケーションを図ろうと会話を開始した侑人であったが、更なる問題が立ち塞がった。言葉が全く通じないのである。

何となく相手が相槌を打っているような気もするが、間違いなく気のせいであり、いまだに意志の疎通は図れていない。

仮に相手が英語を話していたとしても日本語しか話せない侑人では、まともに会話を成立させる事は出来ないが、多少なりとも聞いたことがある言語なら単語の意味から内容を少しは推察出来たであろう。

しかしまったく聞いたことが無い言語が相手となると、会話のきっかけすら掴めない状態であり、侑人には完全にお手上げであった。

侑人は困った顔で少し考え込む。
このまま意志の疎通を図る事を放棄して、彼女とここで別れてしまうという選択肢も存在するが、知り合いが全く居ないこの世界で初めて知り合う事が出来たこの僥倖を無駄にするメリットなど一つも無い。
何とか意志の疎通を図り、最悪でも街まで案内して貰わなければここで犬死する可能性もある。それだけは何とか避けたい。

彼女も困った顔をしてこちらを見ている。
当初は金色の瞳がこちらの姿を興味深く観察しているような雰囲気を感じたが、今は彼女自身もどうしたら良いのか考えてくれている様だ。
暫く二人でウンウンと唸っていたのだが、不意に彼女は何かを思いついた顔をしたかと思うと、彼女自身を指差してこう言った。

「マйШ」
「マニア？」

彼女は少し怒った様な表情で頬を膨らませている。実は言葉が判っているんじゃ無いかと侑人は一瞬疑いそうになったが、彼女がそんな事をするメリットが思いつかずその考えを頭の隅に追いやる。
すると直ぐに立ち直った彼女はもう一度彼女自身を指差して、今度はかなりゆっくりした口調で話しかけてくる。

「マ、リ、ア」
「マリア？」

嬉しそうな顔をして何回も頷く彼女。
マリアというのは彼女の名前だろうか。多分この流れからして間

違いは無いだろう。侑人は目を瞑りながら少し考えてそう判断する。
とりあえず相手の名前が判った事によって侑人に少しの余裕が生まれる。未知なる言語を相手にしているので現状では全く言葉が通じないが、こうやって単語を積み重ねていけばいつかは解り合える。そんな事実がかなり嬉しかった。

侑人は再度マリアに目を向ける。
自分の名前が理解してもらえて嬉しいのだろうか、彼女……マリアは全身で喜びを表現しているようだった。
胸の前で小さなガッツポーズをしながら何度も頷いている仕草はとても可愛らしく、満足げに浮かべている笑みは見る者全ての心を鷲掴みにする破壊力を秘めている。

侑人はそんなマリアの仕草と表情に見とれて、暫く呆けてしまったが、左腕を軽く突かれるような感触に気が付きふと我に返る。
ゆっくりと左腕の方に顔を向けると、マリアが上目使いで何か聞きたそうな顔をしながら、侑人の腕をしきりに突いていた。
あどけない子供のような仕草に少しどきどきしつつも、侑人は名前を聞いているのだなと判断し、自分自身を指差しながら名前を伝える。

「小坂侑人」
「コサカユト？」

小首を傾げながら復唱するマリア。
日本語のような言語体系が独特な言葉は、その他の言語体系で生活している者にとってかなり聞き取りにくいという雑学を思い出し、もう少しゆっくりと伝えようと再度自分の名前を口にしようとしたが、ふとある事に気が付く。
欧米では基本的に氏・名では無く、名・氏の順番だったはず。異

世界ではどうなのかは判らないが、マリアの外見から名・氏の方が良さそうかなと判断して、もう一度自分を指差しながらゆっくりと名を告げる。

「ユ、ウ、ト・コ、サ、カ」

「ユート・コサカ」

頷きながら復唱するマリア。

侑人に確認するかのような目で見つめてくるマリアに向かって、頷きながらにっこりと微笑み返す。自分の名前を伝えただけなのに何故だかかなり嬉しい。

そんな自分自身の気持ちに気が付いた侑人は、先ほど喜んでいたマリアの事を全く笑えないなと考えて思わず苦笑する。

「ユート・コサカ、ユート・コサカ……」

マリアは侑人の名前を暫く間、ぶつぶつと何度も復唱している。かなり真剣な表情で侑人の名前を繰り返し口にするマリアの姿は、見ていて少し微笑ましい。

やがてマリアは突然笑顔になり、左手を腰に当て右手の人差し指を侑人に向けたポーズをとり、大きな声で話し掛けて来る。

「ユート！」

何故かとても得意そうな姿で侑人の名を呼ぶマリア。侑人はマリアの姿を見て笑顔を見せる。この世界に召喚された侑人が初めて心から笑えた瞬間であった。

第3話：未知との遭遇【前編】（後書き）

金髪ツインテールは正義です。テンプレを制するものは世界を制するはず。

第４話：未知との遭遇【後編】

――――　マリアサイド　――――

マグナマテルの南西に位置する、ハルモ教法王庁教圏国家群。その一番南側にセルビナ王国はある。

セルビナ王国と国境を接する国は三つある。東側の国境を接するのは宗主国のエディッサ王国であり、西側を接するのはトスカーナ王国である。そして北側はプロセン王国と接していて、南側は広い海が広がっている。

全ての国境がハルモ教法王庁教圏国家群と接している地形は非常に恵まれており、さらに加えて幸いな事に統治する王が賢王である為、マグナマテル全体の中でも比較的平和な国であった。

そのセルビナ王国の北東部、エディッサ王国との国境と程近い所にティルト村がある。人口は五十世帯の二百人程度であり、これと言った特産品も無く、村人は農耕と狩猟で生計を立てている。

そんなのどかな村でマリア・ホラントは祖父と二人で生活していた。

彼女の母親は十年前に風邪をこじらせて死んでしまった。聡明で美しい女性だったと母を知る村人たちは言う。ちなみに母は美しい金髪をしたエルフ族であった。マリアは母が大好きだった。

彼女の父親は三年前に馬鹿をこじらせて消えてしまった。夢想家

で豪快な男性だと父を知る村人たちは言う。一発でかいの当てて迎えに来ると言い残して旅に出てしまった。マリアは父が大嫌いになった。

マリアは人族とエルフ族のハーフである。

ザッザッ……

村の北側にある森を、マリアは周りをきょろきょろ見渡しながら歩いている。最近年のせいなのか、体力の衰えが隠せない祖父の代わりに狩りをするのはマリアの仕事だった。

マリアの年は十七歳。普通の女の子は狩猟などという仕事をやりたがらないであろうが、おてんばな性格の彼女は逆に喜んでいたりもする。弓矢の腕もかなりのものだ。本人は絶対に認めないがマリアの性格は思いっきり父親に似ていた。

「今日は収穫無しかな」

普段なら森を歩けば直ぐに見つかる雉やウサギが見つからない。かといってあまり森の奥に行くわけには行かない。魔物と遭遇する可能性があるからだ。

この森にはウサギに角が生えたような姿をした魔物『アルラージ』が生息している。生息数は多くは無いので、よほど森の奥に行かなければ会う事は無い。運があまりに悪ければ会うかもしれないが、もし見つかるとちょっと厄介だ。

アルラージは火の魔法を使う。威力は高くは無いが連続して使っ

てくるので油断をすると命を落とす可能性もある。しかもウサギのような見た目をしているくせにかなり好戦的だ。

マリアも火の魔法が少しは使える。魔法が得意であるエルフ族であった母の血を引いているからだ。しかしマリアの魔法の威力は低く、カマドに火をつけたり灯りの代わりに使ったりと日用的な使い方しか出来なかった。

「今日は諦めよう」

マリアはそう呟くと、村に帰る近道である川の方へと向かって歩いて行く。

周囲を見渡しながらゆっくりと川に向かう。獲物が居れば狩りを再開するつもりであり、諦めたと言いつつも諦め切れていなかったりもする。

そんな事を考えながら川の近くまでたどり着いた時、急に川のほうから聞いた事が無い男の声が聞こえた。誰かが川の方に居るようであり、マリアは慌てて茂みに身を潜める。

茂みの中から川の方に目を向ける。目の前を覆う枝のせいで視界はかなり悪く、なかなか声の主の姿を捉えられない。

川岸に佇む人間らしい姿をやっとの思いで捉えた時、あまりの驚きにマリアの頭の中は真っ白になる。

「黒髪……」

マリアの潜む茂みからだと川岸の人物の頭しか見えない。しかしその唯一見える頭の部分、頭髪が大問題だった。

マグナマテルには黒髪の種族は居ない。正確に言えば今は居なくなった。マグナマテルで黒髪の持ち主と言えば、ハルモ教に伝わる伝承の中の英雄、黒髪の勇者クロウ・ミナトただ一人であった。

マリアはハルモ教法王庁教圏国家群の中の一つ、セルビナ王国の国民ではあるがハルモ教の事が好きではない。むしろ嫌悪感すら持っている。

彼女の祖父は元エディッサ王国の神官であり、神官だった祖父はとても人格者なのだが、それでもハルモ教自体を好きになれない。原因ははっきりしている。それは彼女の少し特殊な境遇と五年前に植えつけられたトラウマである。

ハルモ教では全ての人は神のもとに平等であると教えられる。実際には貧富の差は存在しているのだが、問題点はそこではない。全ての人、言い換えれば全ての人族が平等であると説いているのだ。全ての人という言葉の中に、エルフ族をはじめとする亜人族は含まれて居ないのだった。

亜人族であってもハルモ教を信仰すれば全ての罪が許される。ハルモ教にはそういった意味合いで解釈出来る内容も書いてあるが、マリアはその一文も納得が出来なかった。

全ての罪とは何なのか。亜人族である事が罪なのか。聡明で美しいエルフ族の女性だった母の何処が罪人なのか。生きる事が罪ならば人族もエルフ族も何も変わらない筈ではないか。

人族至上主義のハルモ教の経典には、その問いに対しての満足な答えは無かった。

ハルモ教を嫌うもう一つの原因。五年前に起こったある事件なのだが、これもハルモ教の人族至上主義の弊害で起こった出来事だった。

セルビナ王国はハルモ教法王庁教圏国家群の中でも、比較的宗教

観が緩い国家である。とはいえ国教はハルモ教であり、宗教の自由までは認めては居なかったが、賢王と名高い国王の方針で、亜人族でも優秀であれば重要なポストにつく事が出来る。

とはいえ王国内の門閥貴族には敬虔なハルモ教信者も多く、門閥貴族との関係上完全に平等とまでは行かないが、他の王国の国民…特にエディッサ王国の国民から見れば、驚くほど平等な扱いをしていた。

罪を犯せば人族、亜人族を問わず平等に罰し、また亜人族を理由無く傷つければ人族であろうとも厳罰に処される。亜人族にとっては住みやすい王国であるため、妻がエルフ族であるマリアの父親も結婚と共に移住してきたのだ。マリアの父親はエディッサ王国出身であった。

国王の権力が強く、国の方針がしっかりとしていれば地方もそれに習う。特にティルト村のような地方の小村では差別などほとんど無かった。マリアも優しい村人に囲まれて伸び伸びと育っていた。

そんなマリアがのびのびと暮らすのどかな村に、あまり柄の良くない傭兵団が来たのは、五年前のことであった。

その傭兵団はエディッサ王国出身者が数多く所属していた。傭兵団はプロセン王国と、北の国境を接するフランツ帝国の間で、最近小規模な戦闘が繰り返し行われているのを聞きつけ、プロセン王国に雇ってもらう為に戦場に向かっている途中らしかった。

傭兵団が来る事などほとんど無い地方の小村であり、村は一種異様な空気に包まれたが、村長は友好国の出身者が数多くを占める傭兵団を無下には出来ず、補給の為の駐留を許可した。

平和な村の子供たちにとって傭兵団は物珍しく、皆で集まって見学に出かけた。好奇心旺盛なマリアもその中の一人であった。

十二歳ながら美しく成長したエルフ族の血を引くマリアの姿は、村の子供たちの中で非常に目立っていた。そんなマリアの姿をみた傭兵団の中の心無い者達が、亜人の血を引くマリアをかどわかそうとしたのだった。

幸いにもその事件は未遂に終わりマリアに怪我は無かった。その頃はまだマリアの父親は村におり、マリアを襲った不届き者達を父親が全員返り討ちにして役人に突き出した。

しかし襲われた事に対する恐怖と、『亜人は罪人だ、それに手を出して何が悪い！』と役人に文句を言っている犯人の姿がマリアの心に大きな傷を残した。その日以来、彼女は村人以外に心を開く事はなくなった。

とにかくマリアはハルモ教が嫌いである。村人以外の者も嫌いである。男もあまり好きではない。黒髪の勇者はどうでも良いが、ハルモ教が係わっている事だけは気に入らなかった。

とにかく目の前の存在はマリアの嫌いなもの全てで構成されていると言っても過言でない。彼女は弓矢を握り締めながら、これで脅かして追い払ってやろうと考えていた。相手が手におえないほど強いかもしれないと言う可能性は、すっかり頭から抜け落ちていた。

弓矢を小さく構えて飛び出すきっかけを待ち始めて数分。相手もこちらに気が付いて警戒しているようでなかなか隙が無い。

このままでは動くに動けない。隙を作れ隙を作れ！　と念じていたら、念が通じたのか相手は不意に横を向いた。

『やっちゃった』

何も考えず条件反射で茂みから飛び出してしまったマリアは後悔していた。内心の動揺を悟られないように、相手を睨みつけて弓矢を構えるので精一杯であった。

ひょっとしたらとんでもない相手と相対しようとしているのではないか。もし男が伝説の勇者ならば一瞬で返り討ちにあってしまうかもしれない。やっぱり一回は話しあった方が良いのかもしれない。マリアは少し弱気になって色々考えていた。

そんなマリアの精神状態を悟ったのか、目の前の男は静かに言葉を紡ぐ。

「кл£заи$йШегв…」

マリアは男の言葉を聞いてさらに動揺する。男の口から発せられた言葉は、彼女が聞いたことの無い言語であった。

マグナマテルで使われる言語はマテル語のみであり、その他の言語は上位魔法の詠唱などの特殊な状態でしか使われる事は無い。

得体の知れない男に得体の知れない言語。未知の存在と相対している彼女は過大な緊張を強いられていた。少し気を抜いたら倒れてしまうかもしれない。

しかも彼女は人を撃った事など無い。たわいも無い喧嘩ならしたことはあるが、命のやり取りなど想像したことすら無い。人に弓矢を向けるだけで膝が震えそうだった。

いろいろな意味で限界を迎えそうな彼女であったが、事態は思わぬ方向に向かう。

「зкв☆дё£★З！！」

急に叫びだした男の声に思わずビクッとするマリア。男の様子を伺うと何やら慌てているらしい。先ほどまでの落ち着いた雰囲気が欠片も無い。

「д○ж3в★ё$л」

「£вaж」

「мaЮ%м」

「дё£★ж3в£взквд」

何を言っているのかは相変わらず解らないが、額に汗をかきながら必死になって話しかけてくる男を見て少し落ち着いてきた。

少し魔力を感じるが私と同じくらいしか魔力も無さそうだし、何より武器を持ってもいないし安全かしら。そんなふうに彼女は判断して弓矢を下ろした。

弓矢を下ろした姿を見た男は、安心したような表情をして何かを呟きながら地面に座り込む。その姿を見て悪い事をしたかなとちょっと反省しながらも、視線を外さないように男の顔をじっと見つめる。

男は座ったままの姿勢で私のほうを向き、少し笑顔を見せながら話し掛けて来る。

「жв○лЮ★aд」

相変わらず言葉の意味は解らないが、なんだか優しい音の響きだった。

『私から彼に対して一度も話しかけていない気がする。彼は一生懸命話しかけてきてくれるのに私の態度は失礼だったかな?』

マリアそんな事を考え一番聞きたかった事を彼に尋ねる。

「あなたは黒髪の勇者なの？」

私の声を聞いて彼はきょとんとした顔をしている。ひょっとしたら言葉が通じていない事に今気が付いたのかもしれない。

そんなちょっと間抜けな人間らしい姿に好感を持ったマリア。そんな事を考えているマリアに向かって彼は静かに話し掛け、マリアもコミュニケーションを取ろうと返事をする。

「клв$а★д？」

「その言葉はどこの言葉なの？」

「Ю○ё£3☆жгё？」

「どうやってここまで来たの？」

やっぱり通じない。言葉の通じない相手とどうやってコミュニケーションを図ればいいのか、マリアでは全く思いつかなかった。

彼の顔を見てみたけどなんだか難しそうな困った顔をしている。一生懸命コミュニケーションを取ろうとしてくれているのに申し訳ないとは思ったが、彼が考え込んでいる間にマリアは彼の容姿の確認を始めた。

髪は黒髪で艶があり前髪は目にかかるくらいに長い。襟足も肩には届かない程度ではあるが、髪は全体的に長めであった。何故か右側の髪が少し焦げてちりちりになっているようだったが理由は判らなかった。

顔は目の部分が前髪に隠れてしまっているので良く判らないが、全体的に細めの輪郭をしており彫りが浅い感じである。男性なのは間違い無さそうだが、少し中性的な柔らかい感じがする。

身長は少し高めであるが筋肉質ではなさそうだ。全体の雰囲気からすると戦士では無さそうである。かといって魔力もそんなに多くないから魔道士でも無さそうである。戦う力が無さそうな彼が勇者だといわれてもピンと来ない感じだ。

服装は見た事も無いほど細かく編みこまれた、光沢が少しある紺色の布で作った服を上下に着ている。縫い目も人間業と思えないほど細かく丁寧に仕上げてあり、この国の王族でも着てないような不思議な服だ。

そして左手首にはブレスレットを身に付けている。金属のような光沢を放っているので多分アクセサリーだとは思うが、一度も見た事が無い不思議な形をしている。

服装だけを見ればどこかの王族か貴族のようにも思える。でも彼の雰囲気はそう行ったものを感じさせない。失礼な表現だが高貴なオーラが感じられないのである。

考えれば考えるほど彼女にはお手上げだった。分かった事といえば自分の手には負えないって事ぐらいであった。そんなマリアの脳裏に、ふと一人の人物の顔が浮かぶ。

『おじいちゃんに相談してみよう！』

我ながら名案だと一人で頷くマリア。とりあえず方向性は決まった。残る問題はどうやっておじいちゃんに彼を紹介するかという一点に絞られる。

『せめて名前が分かれば……そうだ！』

今日の私はかなり冴えている。さすが私。偉いぞ私。

マリアは早速その思いついた名案を実行するべく行動を起こす。

とにかくまずは自分の名前を伝えるのが先決だ。そう考えついたマリアは彼の目を見ながら、自分自身を指差して自分の名前を告げる。

「マリア」

私の名前を聞いて彼も復唱する。

「マニア？」

言葉の響き的には非常に近く惜しい感じであったが、その言葉を聞いたマリアは何故か不機嫌な気持ちになった。

気を取り直してもう一度。さっきのは早すぎたからいけなかったのだと思い直し、今度はゆっくりと自分自身を指差して名前を告げる。

「マ、リ、ア」

「マリア？」

伝わった！

マリアは嬉しさのあまり胸の前で小さなガッツポーズをしながら何度も頷く。今まで言葉が通じなかった相手と意思の疎通を図る事に成功したのだ。

しかも彼が初めて覚えたマテル語がマリアの名前。そんな可愛らしい理由が嬉しさを倍増させ、マリアは小躍りしそうな位に浮かれていた。

しばらく浮かれた後、マリアは彼に眼を向ける……彼はマリアを見て呆然としていた。

『呆れられたかも……』

マリアは少し反省しながらも、気を取り直して名前を教えてという気持ちをこめて彼の方を指差した。しかし彼は唖然とした表情でこちらを見ているだけで反応が無い。

名前を直ぐに聞かなかった事に対して怒っているのかもしれない。少しどきどきしながら彼の左腕を突いた。もちろん名前を教えて欲しいと言う気持ちを込めて。

腕をつつくと彼は私のほうを見た。そしてしばらく考えるような顔をした後、彼自身を指差してこう言った。

「コサカユウト」

聞きなれない響きだった。しかも少し早口すぎて上手く聞き取れなかったが、何とか頑張って復唱する。

「コサカユト？」

彼の顔を見ると少し複雑そうな顔をしている。どうやら間違えたようである。

そんな彼の姿を見たマリアが少し不安な気持ちを感じていると、彼はもう一度彼自身を指差して、今度はゆっくりとしたリズムで話し掛けて来る。

「ユ、ウ、ト・コ、サ、カ」

今度は聞き取りやすい、かなりはっきりとした発音だった。

「ユート・コサカ」

また復唱して彼の顔を見る。今度は満足そうな顔だ。マリアは忘れないように何度も呟く。

「ユート・コサカ、ユート・コサカ……」

彼の名前はユート・コサカというのか。言葉が通じないと分かった時にはどうしようかと思ったけど、自力でコミュニケーションが図れたんだ。

しかも彼の名前を知ったのは私が最初。彼が最初に覚えた名前は私の名前。これってすごい事だよね！

マリアはついつい興奮のあまり我を忘れる。そして思わず左手を腰に当て、右手の人差し指をユートに向けたポーズを取り

「ユート！」

と、大声で呼んでしまう。

ユートはそんな私の姿を見て嬉しそうに笑ってくれたが、私は恥ずかしさのあまり耳まで真っ赤になってしまった。

第４話：未知との遭遇【後編】（後書き）

この世界の政情とマリアの事情を少しだけ明かすお話になります。

第5話：理解力という能力

カツーン……カツーン……。

ティルト村のとある民家の裏庭から、小気味のいい音が響いている。

カツーン……カツーン……。

民家の窓から一人の初老の男がゆっくりと顔を出す。

真っ白になった頭髪が積み重ねてきた重厚な歴史を、顔に刻まれた深い皺が意志の強さを感じさせ、非常に品の良い雰囲気を身に纏っている。

そしてその初老の男は規則正しい音を発生させている主に向かって、にこやかな顔を向けながら親しげに声を掛ける。

「ユート、そろそろ休憩したらどうじゃ？」

「わかりましたヨーゼフさん」

侑人は最近の日課となっている薪割りを一時中断し、周囲に乱雑に積み上げられた薪を綺麗にまとめ始める。そして綺麗にまとめた薪を薪小屋に運び整然と積み上げていく。

「そろそろ一杯になるな……明日はまた薪小屋の増築でもしようかな」

今日割った分の数量だけで考えても、一世帯が一週間掛かっても使い切れないほどの分量があり、普通に家庭で使用するだけならばここまでは要らない。

実はここ最近侑人の割った薪の品質の良さがティルト村の中でちょっとした評判となり、商売として成り立っているのである。

「とりあえず今日はここまでにしよう」

侑人が異世界に召喚されてから、はや三週間が経とうとしていた。

マリアと出会ったあの日、侑人は手招きをするマリアに連れられて、ティルト村にあるこの家にやって来た。

そして彼女はこの家の主である彼女の祖父、ヨーゼフ・ホラントをどうやって説得したのか想像もつかないが説得し、この家に居候出来るように取り計らってくれた。彼女は祖父と二人暮らしであった。

訳も分からず異世界に召喚され、火炎ウサギもどき、後から聞いたのだが正式名称はアルラージと言い魔物の一種らしい…に襲われ、精も根も尽き果てそうになり、頼る者が誰もおらず、挙句の果てには言葉も地理も全く分からない最悪な状態の侑人にとっては、マリアとの出会いは天の助け、彼女の存在はまさに天使のようだった。

そして着の身着のままだった侑人に暖かい食事だけでなく、着替えや暖かい寝床まで与えてくれた二人の暖かい人柄に心から感動していた。

しかし、二人の好意に甘えてばかりではいられない。侑人にとってこの世界は異世界であり元の世界にも侑人の生活はある。戻れるかどうかは全く分からないが戻る事を諦めた訳ではない。

とにかくこの世界に滞在する間は精一杯働いて、受けた恩以上の労働でお返しをしようと固く誓ったのである。とはいえ言葉が判らないという問題をまず解決するのが先ではあったが。

「とにかく意志の疎通を図れるように、何とかしないといかんの」
「どうするのおじいちゃん？」

「まあ……わしが教えてみよう」
「私も手伝うね！」

言葉が全く分からない侑人に対して、この世界の言葉のマテル語を主に元神官であるヨーゼフが中心となって教えてくれた。マリアも時間を見つけては、日用雑貨の名前や日用会話を教えるサポートをしてくれていた。

この世界の識字率は五十パーセントほどであり、田舎になればなるほどこの数字はどんどん下がっていく。片田舎の森の中に召喚された侑人が、文字が解るヨーゼフやマリアといち早く知り合えた事は、とても運の良い事だった。

元々語学の才能が全く無く学生時代も英語が苦手であった侑人であったが、異常なスピードでマテル語を習得していく。一週間で簡単な日常会話を理解し、二週間で読み書きを一通りマスターした。

あまりの習得の早さにヨーゼフやマリアはかなり驚いている。もはやここまで来ると人間業とは思えない学習能力であった。

「故郷では語学の天才だったのかしら？」
「語学に関しては故郷では劣等生でした」

侑人の様子を見ていたマリアが、半分感心し半分呆れたような顔をしながらそんな事を呟き、その呟きを聞いた侑人は通常ではありえない返答を真顔で返す。

「へぇ……天才しか存在しない国ってあったかしら？」
「わしも長く生きてきたがそんな話は聞いた事が無いのぅ」

嘘を付いている様には見えない侑人の姿を見た二人は、なんともいえない表情でよく判らない返答を返すのが精一杯であった。

――――数日後。

「もう私はついていけないよ……おじいちゃん任せたね」
「わしでもすでにかなり厳しいが、何とかしてみるかの」

「ここの部分が良く判らないのですが教えて頂けませんか？」
「どれどれ……ほうほう、これまた難解な質問じゃの。少し時間を貰っても良いじゃろうか？」
「二人共頑張ってねー」

侑人から手渡された少し厚めの古書を手にしたヨーゼフは、難しい顔をしながら質問を受けた箇所の文章を熟読している。神官時代に得た知識を何とか思い出そうと試みてはいるが、年のせいなのか直ぐには思い出せない。

マリアは二人の側から離れ、お茶の用意をするためにダイニングに向かっている。普通に読む事さえ出来ない本とにらめっこする位

なら、自分が得意とする分野で二人の役に立った方が何倍もマシだと判断したのだ。

侑人がマテル語を習い始めてから、もう少しで三週間。

今では侑人の質問の内容が難解になりすぎて、マリアはすでにお手上げの状態になり、ヨーゼフですらどう答えて良いのか苦労するような場面が、数多く見られるようになっている。

すでに質問の内容は日常会話を大きく逸脱し、語学専門の学者や神官が勉強するマテル語の古語表現や、吟遊詩人が嗜む詩吟表現の内容に踏み込んでいたりもする。侑人のマテル語の知識はすでに一般人を遥かに凌駕し、元神官のヨーゼフに迫りつつあった。

ちなみに元神官のヨーゼフとおてんばではあるが一応女の子であるマリアに、ごく短期間で集中して綺麗なマテル語を叩き込まれた侑人は、マテル語での通常会話が敬語で定着してしまっている。

「お茶の用意が出来たよ」

「少し休憩を挟むとするかの」

「そうですね。そろそろ休憩にしましょうか」

少し疲れた顔でカップに注がれた紅茶をゆっくりと飲むヨーゼフと、本を片手に涼しい顔をしながら紅茶をすすっている侑人の姿が対照的に見え、マリアは思わず苦笑する。

村人達の相談や質問を受け、的確に答えているヨーゼフの姿を見慣れていたマリアにとって、ここまで真剣に考え込み疲れ果てているヨーゼフの姿を見るのは新鮮だった。

「そういえばユートはどこから来たの？」

「なんじゃ、マリアは既に聞いておるのかと思っておったわい」

「なんと説明すれば良いか……」

マリアは何となく今思いついた様な顔をしながら、侑人はどこの国の出身なのか何気なく尋ねる。侑人もいつか二人に話そうとしていた内容であったので、異世界の日本という国から来た事を伝えようとしたが、どう伝えれば信じてもらえるか少し悩んだ。

もし自分が逆の立場であるならば相手からいきなり、異世界から来ました。と伝えられたとして信じる事が出来るのかと。

今の侑人なら自分が経験しているので信じる事は出来るが、日本に居る時の侑人なら危ない人が居るとしか思えないだろうと想像した。

「あー……何となく聞いただけだから気にしないで」

「どこから来たのか聞いても聞かなくても、特に変わる事など無いからのぅ」

「……ありがとうございます」

そんな侑人の葛藤する姿を見て二人は笑顔で話を切り上げる。

二人の紳士・淑女的な態度に侑人は改めて感動し、二人の為に精一杯働く事を固く誓ったのであるが、二人の思惑は侑人の想像とは少し違っていた。

実は二人から侑人に教えられているマグナマテルの情報には、意図的に避けられている物があった。ハルモ教についての内容である。ヨーゼフの過去を教える時にハルモ教会の神官だった事は伝えたが、その後はハルモ教会について特に踏み込んで説明をしていない。

ハルモ教について詳しく教えていけば、いずれハルモ教に伝わる伝承、異世界から来た黒髪の勇者クロウ・ミナトの話に触れる事になる。好奇心旺盛なマリアは侑人が会話が出来るようになったら、侑人は黒髪の勇者なのかと確認しようとしていた。しかしヨーゼフに時が来るまで聞くのは待てと言われ、その時はしぶしぶ従ったが、数週間経った今では聞かなくて良かったと思っている。

「もはやユート抜きではこの家は成り立たないからの」
「そうだよね。もうすっかり馴染んじゃったね」
「そういって頂けるとすごく嬉しいです」

マグナマテルの世界では黒髪の持ち主は侑人以外に存在しない。過去を振り返ってみても存在したのは勇者クロウ・ミナトただ一人である。黒髪である侑人が人目について彼が勇者などと言う噂が流れたら、国やハルモ教教会が侑人を利用しようとする事が想像できる。

黒髪の勇者であろうがなかろうが、一回勇者として利用されてしまった侑人は、二度と普通の生活に戻れなくなってしまう。

「とにかく不便を掛けるが、これからも頼んだぞユート」
「判りましたヨーゼフさん」

侑人には、その髪の色はこの国では珍しくて目立つので、外に出る時はフードをかぶって髪の毛を隠した方が良いとだけ伝えてある。

侑人自身もこの三週間は家からまともに出ていなかったので、現状では特に問題らしい問題は起きていなかった。

最初の頃は黒髪の侑人を少し警戒して伝えていなかったのだが最近の事情は違う。数週間一緒に暮らした侑人は二人にとって家族同然となっていたのだ。

どこの国の出身かと言う質問には、侑人がマグナマテルのどこかの国の出身であって欲しいと言う願いが込められていた。異世界から来た黒髪の勇者などではないと証明したかったのだ。

「ユート。お茶のお代わり要る？」
「もちろん頂きます。ありがとうマリア」

それが証明できるまでは侑人にはクロウ・ミナトの伝承を聞かせるわけにはいかない。まじめな侑人は自分が黒髪の勇者であるかもしれないなどと聞かされたら、皆のために自分自身を犠牲にしてしまうかもしれない。

万が一、侑人が本当に黒髪の勇者だったとしても、今回召喚された黒髪の勇者の使命が何なのかは分からないが、侑人を危険な目にあわせる位なら、黒髪の勇者など初めから居なかった事にしてしまった方が良い。二人はそう考えていたのだ。

家族を勢力争いに巻き込ませたくない。そんな優しい思惑が二人にはあった。

侑人の習得スピードの異常さは、言語能力だけではなかった。

この世界ではまだ電気の概念が無くもちろん家電製品も無い為、家事の大部分が肉体労働であり、多少魔法で軽減出来てはいるとはいえ、人力で行う作業がかなりの数を占めている。

初老であるヨーゼフと、女の子であるマリアの二人暮らしであるホラント家では、男手は貴重であり、居候させてもらっている侑人が自然な流れで力仕事を分担する事になっていった。

この世界に来て身体能力が上がったのか妙に体調が良く、疲れをあまり感じなくなっていた侑人にとって、力仕事をする事は恩返しが出来るチャンスだと喜んでいたりもする。

「今日は薪割りを覚えてもらおうかの」

侑人にまず与えられた仕事は薪割りである。ヨーゼフに鉈の使い方を教わりながら、二人で並んで薪を割り始める。最初の頃の侑人は薪の中心を上手く鉈で叩けず、斜めに割れた薪を量産していた。

ヨーゼフもそれを見て苦笑しながら、慣れるまでゆっくり気楽にやればいいと侑人に伝え、侑人も困った顔をしながら頷いて作業を再開したのだが……ヨーゼフの目の前でその奇怪な変化は起こった。

十分も経たないうちに侑人の動きが変わる。薪を割る動きがスムーズになり、綺麗に中心から割れた薪を作れるようになる。

三十分位経った頃にはすでにヨーゼフの動きをはるかに超え、ベテランのきこりの様な洗練された動きになっている。侑人が手に持った鉈は薪に食い込む事も無く、鉈で軽く叩いた薪が小気味の良い音を立てて、勝手に綺麗に二つに割れていくようにしか見えない。

侑人の仕事振りは、もはや数十年同じ仕事をし続けてきたベテラン職人の職人芸的なオーラを纏った動きであり、ヨーゼフは唖然としながらそれを眺めていた。

「わしは薪を置きに行って来るから、ここはユートに任せるとするかの」

「ええ、お任せ下さい」

薪を割る作業は侑人に任せた方が良さそうだと半ば呆れながら判断したヨーゼフは、綺麗に割れた薪をまとめ薪小屋に保管する作業に移る。

そして薪を持ったヨーゼフが薪小屋に着いた瞬間、今まで予想もしなかった不思議な出来事が突如起こる。

スカカカカカカカン……。

聞いたことが無い音が辺りに響く。

どうやら音の発生源は侑人の居る裏庭らしい。何が原因なのかは分からないが、侑人にもしものことがあったらまずいと、慌てて裏庭に引き返すヨーゼフ。

家の中で家事をしていたマリアも何が起こったのかと、慌てて家から飛び出して来る。そして焦ったヨーゼフとマリアが二人同時に裏庭に到着した時、二人の目の前で奇妙な音が再度響き渡る。

スカカカカカカカン……。

奇妙な音を発生させていた犯人は侑人だった。侑人はたくさんの薪を自分の周りに並べ、並べた薪に向かって連続で鉈を振り下ろしていた。

二人の目には侑人の手の動きがはっきりと見えない。残像を纏った侑人の手が、彼の周りを一周したと思った瞬間、彼の周りの薪が綺麗に割れている。そうとしか知覚できなかった。

「いやはやなんと言ったら良いか……」

「あはははは……」

あまりの予想外の出来事にヨーゼフは茫然自失に、マリアにいたっては混乱のあまり半笑いになっていた。

そんな二人の姿に気が付いた侑人は微笑みながら事も無げにこんな言葉を言い放つ。

「この割り方は効率が良いですね」

「既に効率がどうとかの話では無い気がするのじゃが……」

「あはははは……」

マイペースをどこまでも貫く侑人であった。

とにかくこの数週間、二人は常に驚かされっぱなしだった。原因はもちろん侑人である。

新しい仕事を頼むと最初のうちは苦労しているように見えるのだが、三十分も経つと職人顔負けの動きに変化している。それどころか人間業で無い次元の事をたまにやってのける。

雨漏りの修理を頼んでいたはずなのに、気が付いたら屋根の葺き替えが終わっていたり、壊れた椅子の修理を頼んでいたはずなのに、新品のテーブルと椅子が出来上がっていたり、畑の雑草取りを頼んでいたはずなのに、周囲を柵で囲われた立派な畑が出来上がっていたりと……全て良い方向に期待を裏切ってくれるので文句は全く無いのだが、そこまでやって貰うのは申し訳ないという位の事を、黙々と文句も言わずあっさりとこなしていた。

ここまでの働き者を二人は見た事が無く、二人の侑人に対する信頼度は日々うなぎ登りである。

侑人にとっては、居候させてもらっているヨーゼフとマリアの頼みに答えるのは当然の事であり、二人の期待に対してそれ以上に応えるのは当たり前の事であった。

「わしらの前では問題ないが、村人に見られるような事は避けた方が良いかもしれんの」

「確かに仰る通りですね。気を付けて行動する事にします」

ヨーゼフは侑人の働きに対して何の文句も無かったが、目立つ事は侑人の為にならないと判断し、他人の目がある所では普通に振舞った方が良いと一言だけ忠告する。本当は黒髪の勇者だとばれる様な行動を慎んだ方が良いと伝えたかったのだが、侑人自身にも語っていない内容である為、そのあたりは誤魔化して説明をした。

侑人も今の自身の状態は異常であると理解している。異世界に飛

ばされる時に聞いた謎の声に対して、侑人が『驚異的な理解力が欲しい』と返答した事が、この事態を招いているのではと予想していたのである。

出るくいは打たれる事を、元の世界の会社の派閥争いで理解している侑人は、ヨーゼフの忠告を聞いて素直に従う事に決め、以後は常にそれを守って生活していた。

「とにかくもう三週間か」

侑人は薪を縛りながらこれまでの三週間を思い返していた。我ながら対人運だけは良かったと一人で微笑む。

ヨーゼフとマリアに出会えなかったら今生きているのかどうかさえ分からない。改めて二人の存在に感謝をした。それと合わせて自身の境遇をいつ正直に伝えようか思案を巡らせるが、あることに気が付いて考える事を止めた。

「ヨーゼフさんとマリアを待たせるのも悪いし、急いで行かないと」

縛った薪を手早く薪小屋に積み上げ、二人の待つダイニングへ早足で向かう。開け放たれているダイニングの窓からは紅茶の良い匂いが漂っていた。

第5話：理解力という能力（後書き）

チート気味の能力を仕事に使う事でしか生かせない侑人です。

第6話：ホラント家での生活

「ユート、そろそろ休憩したらどうじゃ？」

窓から外へと顔を出し、ユートを呼ぶおじいちゃんの声が聞こえる。その声を聞いた私は紅茶の用意をする為にいそいそとキッチンへ向かう。

私は紅茶が好きだ。紅茶は高級品であるので気楽には飲めなかったが、最近はユートのおかげで家計が少し楽になり普通に買う事が出来る。ユートはやっぱり良い人だ。あの時連れてきてよかった。

鼻歌まじりでキッチンに到着する。お湯を入れているポットを見つけて中を覗くと、かなりぬるくなっていた。紅茶の為にもお湯を沸かさなければ。

腕まくりをして、キッチンにあるカマドの中に空気が通るように薪を組み、組んだ薪の中央に燃えやすい小枝を入れる。小枝を少し多めに入れるのがコツだ。カマドの上に水を入れたお鍋をセットして次の作業に移る。

薪の前に手をかざして少し集中する。魔力が集まってきている手のひらは少し暖かい。

「燃えろ」

私が言葉を発した直後、手のひらから小さい火球が現れ小枝に着

弾する。小枝に当たった火球は弾け、周囲の小枝に火をつける。今回は一回で火がついたようだ。

マリアはパチパチと音を立てて燃えている薪を静かに見つめながら、今までの事を何となく思い返す。まだ一ヶ月も経っていないのに色々な事があった気がする。マリアの顔には笑みが浮かんでいた。

ユートを家に連れ帰った日のことは今でもよく覚えている。

「おじーちゃんただいまー」

「おおマリアか……少し遅かったなしんぱ……」

私の後ろに立つ黒髪のユートの姿を目に捉えて、いつもは柔和な細い目が大きく見開き、釣り上げられた魚のように口をパクパクしたまま、椅子から立ち上がりかけた姿勢で固まる祖父。

いつも冷静な祖父がここまで驚く姿をマリアは今まで見た事が無い。まあ普段の私の姿を見ているのなら驚くのも無理は無いと思うけど。

「河原で見かけたから連れてきちゃった」

「ふぇ？」

予想も出来ない言葉を聞いたマリアの祖父ヨーゼフが立ち直るまでには、この後しばらくの時間を要した。

マグナマテルの一年は光・風・水・火・土そして闇の六つの月に区切られる。光・風・水・火・土の月は八週間あり、一週間は八日サイクルである。闇の月だけは少し特殊であり五週間と短い。

そして闇の月と光の月が切り替わる間の五日間、四年に一度だけ六日間になるが、この期間は一年を無事に過ごせた事に感謝をする大祭が、マグナマテル全域で執り行われる。

またこの期間は聖なる期間でもあり、たとえ戦争状態であったとしても、その期間だけは国家・宗教を問わず停戦する事が習わしである。

マリアがマグナマテルに召喚された侑人を家に連れてきたのは、風の月の第一週の二日。今から三週間前の事であった。

「つまりユートという名前以外、彼の事について何も分かってないのじゃな？」

孫娘のマリアから、黒髪の青年と出会ってからの経緯を聞いたヨーゼフは、そう言葉を発した後しばし考え込んだ。ちなみに黒髪の青年には別室で休んでもらっているので、今はマリアとヨーゼフの二人きりである。

この時ヨーゼフは親しい村人以外にまともに心を開かない孫娘が、見知らぬ男を家に連れてきた事に対してかなり驚いていた。

もちろん孫娘が連れてきた相手がハルモ教に伝わる伝承の中の英雄、黒髪の勇者クロウ・ミナトのような容姿……マグナマテルには存在するはずの無い黒髪を持っている事に対してもヨーゼフは驚いてはいたが、マリアの行動の方がヨーゼフには驚きであったのだ。

「おじーちゃん。ユートは黒髪の勇者なのかなぁ？」

原因を作った張本人の孫娘は気楽な様子である。

好奇心旺盛な馬鹿息子も厄介ごとをよく持ち込んできた。そういうヨーゼフも若い頃は興味の向くまま、危険をかえりみずに揉め事

に首を突っ込んだものだった。ホラント家の血はほとんど自業自得とはいえ、揉め事に巻き込まれるのが定めらしい。

ヨーゼフはそんな事を考え、少し苦笑しながら孫娘に問いかける。

「マリアはどうしたいのじゃ？」

「しばらくうちに置いてあげたいなぁと……だめ？」

小首をかしげながら上目使いで可愛らしくそう告げるマリア。そんな孫娘の姿を見て心臓が止まるほどヨーゼフは驚く。マリアが心の傷を負った忌々しい五年前の事件。その事件を知ったヨーゼフは心を痛め、孫娘の為にと一念発起してハルモ教の神官を辞め、マリアの心の傷を癒すべくエディッサ王国からセルビナ王国に移り住んできた。

最愛の孫娘の深い心の傷を、何とか癒そうと試行錯誤する事苦節五年。その最愛の孫娘が過去のトラウマから自らの力で立ち直ろうとしている。きっかけがどこの馬の骨とも分からない男なのが少し納得いかないが、祖父として協力せねば。ヨーゼフはそう心に誓い居候を許可したのだが、マリアはそんな祖父の決意には気が付かない。

侑人の居候はそんな理由で決まっていたのであった。

ユートとの生活は驚きの連続だった。ハルモ教が嫌いで村人以外の者も嫌いであるはずの自分が、なぜユートを家に連れてきたのか今でも分からないが、とにかく新鮮で楽しかったのは事実だった。

とにかくユートは興味深い。人間業とは思えない習得スピードで

言葉や仕事を覚えていく姿にも興味はあったが、それ以上にユートの行動は私が知る男性の行動とは大きく違っていて、それに大きく興味を引かれた。

私が知っている若い男性の姿というのは野蛮で気が利かなくて強引であった。事の大小の差はあるが大体この範疇（はんちゅう）に当てはまっていた。

その為私が今まで心を開いた男性の数は少ない。おじいちゃんや村の村長さん、お店のおじさんやこの村に滞在する守衛の騎士のおじさん。思い返せば年配の人ばかりであり、若い男性のギラギラした視線やがつがつした行動がどうしても好きになれなかった。

でも比較的若い男性であるはずのユートは非常に紳士的だった。その場の勢いでユートを家に連れてきたのは私だったが、元々男性恐怖症の気がある私は、最初の頃どうしてもユートの事を警戒してしまい、普通に接する事が出来なかった。

うちに来た当初、ユートは私に対して積極的にコミュケーションを図ろうと接してくれたが、怯える私の姿を見て少し距離を置いて接してくれるようになっていった。

距離を置くといっても無視をするとかそういう事では無い。私に会うと必ず挨拶をしてくれたし、私が何か困っていると黙って手伝ってくれた。そして手伝いが終わるとお礼や謝礼を強要することもせずに、黙ってすっと自然に離れていった。

勇気を出して話しかけると必ず手を止めて、嫌な顔一つせず笑顔で応対してくれた。その笑顔はとても自然で、無理をしている様子を微塵も感じさせなかった。

ユートが居候を始めてからの最初の一週間の私はとっても嫌な子だった。勝手に連れてきて勝手に怯えて、挙句の果てには手伝って

貰ってもお礼すら言わない。私だったらとっくに怒っている。
でもユートは怒るどころか常に私に対して気を使ってくれていた。ユートという人間の心の大きさと懐の深さに、私の頑なな心は少しずつ溶かされていくようだった。

そんな私に大きな転機が訪れたのは、ユートがうちに来て一週間が過ぎた頃だった。
その日私はキッチンで食事の支度をしていた。その日の天気は生憎の雨模様であり、外の仕事が出来ないユートは暇そうにしながらダイニングで時間をつぶしているようだった。
いつものようにカマドに薪を組み小枝を並べ、魔法で火をつけようとしている私の後ろに近づく影があった。それは暇をもてあそんでいたユートであったが、私は気にせずそのまま作業を続けた。

「燃えろ」

いつものように私が言葉を発した直後、手のひらから小さい火球が現れ、小枝に着弾しカマドに火がつく。私にとってはいつもの光景だったがその日は少し違っていた。
ユートが少し興奮したような声で、私に向かって話しかけてきたのだ。

「今のはひょっとして魔法ですかマリアさん！」

振り返ってユートの顔を見ると、楽しいものを見つけて興味一杯になっている子供のような、憧れの人を目にした乙女のような、そんな目をしていた。
普段の紳士的なユートと全く違う雰囲気に私は少し戸惑いながら頷いた。するとユートは私の手をいきなり握ってこう言ってきた。

「マリアさんがお暇な時でいいので、私に魔法を教えてください！」

ユートの勢いに押されて私は頷いてしまった。

その日から私はユートの魔法の先生になった。とはいっても先生で居られたのは二日ほどでしかなかった。ユートは二日で私が使える火の魔法だけでなく、風・土・水の基礎魔法を全部覚えてしまった。

私はユートの魔法の才能にちょっとだけ嫉妬してしまったが、ユートの嬉しそうな姿を見ていたら、そのうちそんな事は気にならなくなっていた。ちなみにユートが持っている魔力は私とほとんど変わらない為、高度な魔法は使えないようだった。

「私は土の魔法は結構有用だと思うのですが、マリアさんはどう思いますか？」

「マリアさん？　さんは要らないよ。私の事はマリアって呼んで欲しいかな」

「いっ……いや。さすがにそれは……」

「私が良いって言ってるんだから、大丈夫だよ」

魔法を教える事で一緒にいる時間が増えた私たちは、急速に打ち解けていった。冗談を言いあえる家族のような関係になるのに、それほどの時間は掛からなかった。いつも敬語を使うユートに、マリアと呼び捨てで呼ばせる事には少々骨が折れたが、『マリアと呼ばないと返事をしない』と私が拗ねたら、しぶしぶだが呼んでくれるようになった。

そんな私の変化を一番喜んでくれているのは、おじいちゃんだったかもしれない。ふざけあう私たちの姿をいつも嬉しそうな目で眺めていた。

打ち解けてから判った事だが、ユートはかなり変わっていた。普段は大人で非常に紳士的なのだが、ふとした拍子に子供っぽく無邪気になったりする。
発想も私にとっては斬新であり、時々呆れる事もあるが、驚かされること事のほうがその何倍も多かった。

「やっと晴れた。良い洗濯日和になるかな」

数日降り続いた雨が止み、久しぶりに晴れたある日の事だった。
私は溜まった洗濯物を干す為に庭に出ていたのだが、裏庭から何やら音が聞こえて来るので、私は手を止め様子を見に行った。
すると裏庭ではユートが木材を加工して板を作っていた。風の魔法を使って板を作っているその姿はとても楽しそうであり、私は微笑みながらその姿を見ていた。

「次はこうしてっと……」
「何をする気なのかな？」

しばらく見ていると今度は板を横に寝かし始めた。何をするのだろうと興味深く続きを見ている私の目の前で、ユートは別の魔法で板を切り始めた。
その魔法を見て私は驚いた。ユートは水の魔法で板を切っていたのである。私の認識では物を切る魔法は主に風の魔法であり、別の魔法を使ったとしても火の魔法で焼き切る位しか思いつかない。水で物が切れるという事を私は初めて知った。

後でユートに聞いたのだが、水の魔法で切った理由は曲線が作れるからしい。なぜ水で物が切れるのかという事も説明をしてくれたが、ユートの説明してくれた事の半分も私には理解出来なかった。

「マリアは頭が良いですから、そのうち理解出来ると思いますよ」
「それ褒めてるのかな……なんか微妙な気がするのは気のせい？」

「大絶賛している訳ではないですけど、褒めているつもりですよ」
「むう……絶対にユートは褒めて無いと思う」

そんな調子で時々私たちを驚かしながらも、ユートは良く働いてくれている。家もユートが修理してくれたおかげで見違えるように住みやすくなった。薪も私たちが使いきれないほどたくさん作ってくれた。魔法の練習で作ったと言っていた机や椅子もなかなかの出来栄えだった。

今ではユートが作ったものをおじいちゃんが市場で売る事だけで、我が家の家計が成り立つようになり、私が狩りに行く事もほとんど無くなっている。たまには狩りに行きたいのだが、おじいちゃんが反対するので私の仕事は家事だけになっていた。

ユートと話す時間がたくさん取れるからそれでも良いか。

「マリア。お茶の準備は出来たかの？」
「えっ……あっ！　はーい。もう直ぐ出来るよー」

色々思い出していたら結構時間が経っていた。お鍋を見るとすでにお湯が沸いていて、少しだけ量が少なくなっている。お代わりするのにはちょっと足りないけど、とりあえずこれだけあれば良いかな。

私は手早く三人分の紅茶をいれ、二人が待つリビングへと向かう。自分でもよく判らないけど、私の顔には何故か笑みが浮かんでいる

ようだった。

第６話：ホラント家での生活（後書き）

この世界の暦の説明と、マリアとヨーゼフ視点のお話です。

第7話：王達の思惑

侑人がホラント家でのんびりと紅茶を楽しんでいた頃、エディッサ王国よりハルモ教法王庁教圏国家群全域に向けてとある発表がされた。

実はその発表は、一部の人間が自らの保身の為に捏造した虚偽の内容であった。しかしこの発表が引き金となり、マグナマテル全域の情勢を激変させる事になる。

――――エディッサ王国。

時を遡る事一週間前。エディッサ王国の謁見の間では、ジョシュラン王が配下の家臣達に向かって叱責していた。

ハルモ教正教会に進入した賊を捕らえることはおろか、何の情報も手に入れる事が出来ていない家臣達の不甲斐なさに、かなりの怒りを感じていたのだ。

「二週間も経っているのに手がかりすら掴めぬとは何事だ！」

「「「申し訳ありません」」」

王の怒りを買った家臣達は、冷や汗を掻きながら平身低頭する。

家臣達はハルモ教正教会に進入した賊を、簡単に見つけられると

思っていた。逃げられたとはいえ深手は負わせている、そう遠くに逃げる事など出来はしまい。しかも賊は人族ではないという報告を受けている。

ハルモ教法王庁教圏国家群の国々では人族以外の種族はかなり少ない。手負いの亜人族ならかなり目立つはずだ。そう考えて楽観視していたのだった。

しかし実際には何の手掛かりも得られていない。侵入者の足取りはまるで煙のように消えてしまっている。

王に対して数日のうちに捕らえてみせると、自信満々に豪語してしまっていた家臣達は戦々恐々としていた。

ジョシュラン王も家臣達に叱責しながら内心焦っていた。ハルモ教法王からの問い合わせに対して、数日のうちに解決して見せるのでご安心下さいと、返答してしまっていたのだ。自信満々な態度である家臣達を信頼しての行動であったが、今となっては浅はかであったと後悔している。

ハルモ教法王庁教圏国家群の国王とハルモ教法王の関係は、微妙なバランスの上に成り立っている。表面上は友好な関係を築いているように見せてはいるが実情は違っていた。

国王は世襲制である。慣例として現国王は自身が死去する前に、国王の直系の血を引く者、もしくは王族の血を引く者の中から、後継者として一人を指名する。基本的には王族の男子が優先されるのだが例外もある。現国王の指名が何よりも優先されるのだ。そして現国王が死去した際に指名されていた者が新国王になる。

法王は新王が即位する際に、ハルモ教の神の祝福を与えるのが役目である。新王がハルモ教の敬虔な信者である事を、ハルモ教の信者である国民全員に宣言する事により、新王の即位が承認される形だ。

形式上の事と言ってしまえばそれまでだが、国民全員がハルモ教の信者である、ハルモ教法王庁教圏国家群では話が少々違ってくる。国王がハルモ教の敬虔な信者であると言う事が、国の統治に対して大きく影響するのだ。

法王は国王が信者としてふさわしくない行動を行った場合、ハルモ教から破門する事が出来る。国王が法王から破門されてしまうと、ハルモ教の信者である国民の信頼が一気に失墜する。そのような事態になると国王の政治的地位が根本から脅かされる事になるのだ。

法王は各地域の司祭の中から選ばれる。現法王が死去すると司祭全員がハルモ教正教会に集まり、新法王が全員の投票で選ばれる形だ。

各地域の司祭はその地方の貴族や有力者の意向に沿って任命される事が多い。後ろ盾がある者が司祭なったほうが何かと都合が良いからである。

そして地方の貴族や有力者の上に立つもの、それはその国の最高権力者であり国を統治する国王である。

各国の国王は表立って行動はしていないが、自分の意のままに動く司祭を任命し、法王に対しての優位性を確立しようとしていた。

国王と法王は味方でもあり敵でもある関係なのであった。

そういった関係上、宗主国のエディッサ王国の国王であっても、法王に対して弱みを見せる事は好ましい状態ではなかった。

その焦りからかジョシュラン王は家臣達に向かって非情に言い放つ。

「一週間以内に成果が現れなかった場合、捜索に関係した全員を処

罰する」
「「「はっ！」」」

家臣達は青い顔をしながら王の言葉を受け止めたのであった。

しかし結果的に一週間という短い期間では何の成果も無かった。
困り果てた家臣達は自らの保身の為に、虚偽の報告を国王にする事を決断する。
侵入者らしき者を見つけ岸壁まで追い詰めたが、その者は足を滑らせ崖から転落してしまい、身柄の拘束までは至らなかった……と。

ジョシュラン王は家臣達の都合の良すぎる報告を怪しんだが、ジョシュラン王自身も自らの保身の為にその報告をそのまま法王に伝える。
ハルモ教正教会に進入した賊は死亡した。その報告は直ちにハルモ教法王庁教圏国家群全域に向けて発表され、事件の真相は闇の中に葬られた。

――――クーラント魔国。

マグナマテルの北東に位置する亜人族が治める国、それがクーラント魔国である。
元々はマグナマテルの北側全部を支配する大国であったが、八百年以上前に黒髪の勇者クロウ・ミナトにより国土の半分を奪われてしまった。
とは言え八百年以上前は国としての体裁を殆ど取っていなかった。
各地の力の有る者が力の無い者を無理やり従わせ支配する。当時は

そんな弱肉強食の世界であった。

亜人族は数が少ないが魔力や腕力に長け、人族は数こそ多いが突出した能力を持った者は少ない。その為、当時のクーラント魔国では人族は常に詐取される側だった。

黒髪の勇者クロウ・ミナトは、虐げられるクーラント魔国に住む人族の解放の為に戦ったのであった。

黒髪の勇者クロウ・ミナトの快進撃により、クーラント魔国は一時滅亡の寸前まで追い詰められる。しかし追い込まれた亜人達は一人の有能な者を王として立て、なんとか国の体裁を整えクロウ・ミナトに対抗し滅亡を免れた。

皮肉にも現在のクーラント魔国の国家としての形態は、怨敵クロウ・ミナトの存在がきっかけとなり作られたものだった。

現在のクーラント魔国と国境を接する国は、西側のグランツ帝国のみである。地理的には南西側でエディッサ王国と接してはいるのだが、両国の間には八千メートル級の山脈が横たわっており、山脈を越えての交流や侵攻は無い。そして北側と東側は海に囲まれている。

唯一国境を接するグランツ帝国は、黒髪の勇者クロウ・ミナトが興した国を源流としている国ではあるが、現在はハルモ教法王庁教圏国家群と敵対している。二十年前に即位した皇帝がハルモ教を廃止した為である。

しかしクーラント魔国にとっては相手がどのような状況であっても関係は無い。奪われた大地を取り戻す事が何事にも優先される。

クーラント魔国とグランツ帝国は八百年の長きに渡り、大小の差はあれ常に争いを演じ続けてきたのであった。

ちなみにクーラント魔国の国王は世襲制では無い。現国王が死去した際には魔国の中で一番力のある者が新国王となる。

武力に秀でている者か魔力に秀でている者が、クーラント魔国を治め国民を守っていく。国家としての形態は整ってはいるが根本的な部分は昔と大して変わっていなかった。

クーラント魔国の国王、ケットハルト・ストレング・ケトラーは、愛娘が行方不明になってからの数週間ずっと機嫌が悪かった。食事も喉を通らず睡眠もまともに取っていない。

アンジェリーナのエディッサ王国潜入を最終的に許可したのは、ケットハルト王自身であったため部下を叱責する事も出来ず、イライラしている国王が発するどす黒いオーラを当てられた配下の者達は終始ぐったりとしていた。

ケットハルト王は、エディッサ王国をはじめとするハルモ教法王庁教圏国家群全体に、諜報部隊の大部分を派遣し情報収集に当たらせてはいたが、思うような情報を得られていない。

グランツ帝国と常に戦争状態であるクーラント魔国軍にとって、諜報部隊がまともに機能しなくなる事は戦術的に大きな痛手ではあったが、王の勅命であるので黙って従うしかなかった。

王の命令で第一王女、アンジェリーナ・ヴィヘルム・ケトラーの捜索に全力で取り組んでいたクーラント魔国に、エディッサ王国に派遣していた諜報部隊の一人から衝撃の情報がもたらされたのは、風の月の第三週の五日であった。

その日ケットハルト王は遅々として進まない愛娘の捜索状況にイライラしながら、謁見の間にある王座の前を行ったり来たりしていた。

どす黒いオーラをまとった巨漢の男が落ち着かない様子で歩きま

わる姿は、冬眠明けで腹を空かせた獲物を狙う熊のような雰囲気であり、謁見の間に控える家臣達は、王の機嫌を損ねないように終始小さくなっていた。

そんな時である、謁見の間の扉前がにわかに騒がしくなる。何があったのかケットハルト王が周囲の者に尋ねると、一人の兵士が王に会わせてくれと衛兵に詰め寄っていると伝えられる。

王に会う為には所定の手続きが必要であったが、至急伝えたい報告があるという兵士と、門を守る衛兵の間で小競り合いが起こっているようだった。

報告の内容に興味を持ったケットハルト王は即座に謁見を許可した。謁見の間に控える家臣達は王の許可を衛兵に伝え、その兵士を謁見の間に通す。

兵士は王座に座るケットハルト王にひざを付き一礼した後、自身の無礼を詫びる言葉と、謁見を許可してくれた王に対する感謝の言葉を述べたが、礼などは良いから至急伝えたいと言う内容を述べよという王の言葉でそれは中断される。兵士は再度一礼し内容を端的に伝える。

「エディッサ王国でハルモ教正教会の侵入者に対しての発表がありました」

「なに！？」

兵士の報告を聞いた王の雰囲気が変わり謁見の間に緊張感が走る。そんな雰囲気の中、兵士は続けて報告をする。

「ハルモ教正教会に侵入した者は……崖から転落し死亡したとの事です」

「馬鹿な！！」

ケットハルト王は一言だけ大きな声を出した後絶句した。愛娘が死んだなどという報告が来るなど微塵も考えていなかったのだ。膨大な魔力を有するアンジェリーナが、大した力を持たない人族共に遅れを取るはずが無い。未だエディッサ王国のどこかに潜伏して伝承の調査の機会を伺っているはずだ。そう信じて疑っていなかった。

そんな王の姿を見て周囲に控えていた家臣の一人が、兵士に向かって尋ねる。

「その報告に間違いは無いのだな」

「はっ。すでにハルモ教法王庁教圏国家群全域に向けて正式に発表された内容です」

兵士の報告の言葉を最後に周囲は沈黙に包まれる。重苦しい雰囲気が謁見の間を支配した。

第一王女の死亡。その話は瞬く間にクーラント魔国中を駆け巡った。王女の命を奪ったエディッサ王国を討つべし。そんな声も数限りなくあったが、ケットハルト王は違う決断をする。

王自身も自らの手でアンジェリーナの命を奪った者達を八つ裂きにし、エディッサ王国に対して復讐戦を起こしたい気持ちではあったが、まずは親として愛娘の死を偲び喪に服したい…そう考えたのであった。

兵士の報告があった日から二日後。ケットハルト王の命令の元、王の親書を持った外交団がグランツ帝国へ向け大急ぎで出発する。親書の内容は年内の休戦協定を呼びかける内容であった。

――――グランツ帝国。

風の月の第四週の六日。皇帝の御前で開かれる緊急会議にて、一つの親書が議論を巻き起こしている。クーラント魔国のケットハルト王より届いた親書の内容は、年内の休戦協定を呼びかけるものだった。

「こちらを油断させる罠に違いない」

「しかし一国の王の直筆による親書が罠などということは無いはずだ」

「八百余年も戦い続けておいて今さら休戦などというのはどうかと」

「しかしこの申し出を上手く利用すれば国の為になるかと」

グランツ帝国皇帝、フリードリヒ・ラスペは目の前で意見を交わす家臣たちを見ながら、今後の対応について考えていた。

マグナマテルの北西に位置する人族と亜人族が治める国、それがグランツ帝国である。

グランツ帝国と国境を接する国は二つある。東側の国境を接するのはクーラント魔国であり、南側をハルモ教法王庁教圏国家群の一つであるプロセン王国と接している。そして北側と西側は海に囲まれている。

グランツ帝国は、黒髪の勇者クロウ・ミナトが興したグランツ共和国を源流としているが、グランツ帝国自体は建国してからまだ二十年しか経っておらず、マグナマテルの中では一番若い国家である。

共和国時代はハルモ教を国教と定めており、王制をとっては居なかったが、ハルモ教法王庁教圏国家群に連なる国家であった。

クロウ・ミナトがクーラント魔国を退けこの地に新たな国を興した時、彼は自らが王位に付くという選択を選ばなかった。八百余年を経過した今ではクロウ・ミナトの真意は定かではないが、彼は自分に付き従ってくれた配下の者たちに国の運営を任せ、自身は安定しない国内の治安を守るべく日々戦い続けたらしい。

国の運営を任された配下の者たちであったが、クロウ・ミナトを差し置いて誰かが王になる事など考えられなかった。その結果地方の有力者の代表と共に、合議しながら国を運営していく共和制を選んだ。こういった経緯でグランツ共和国が誕生した。

当初グランツ共和国は順調に発展していった。各地で治安を守るべく奮戦するクロウ・ミナトの活躍も大きかったが、発展した理由はそれだけでは無い。

クロウ・ミナトに付き従ってこの国に来た、彼の配下の者達も志が非常に高く有能であり、地方の有力者達も国の発展の為に私情を挟まず貢献する。建国当時のグランツ共和国は理想的な国家であった。

しかし時代が進むにつれ組織はだんだんと腐敗して行く。国を運営する議員達は権力に溺れ、各々が私利私欲に走るようになっていった。

ここ近年のグランツ共和国は日夜苦難と戦い続けていた。亜人族の数が比較的多いこの地域では、人族至上主義的なハルモ教は馴染まず、各地で小さな内乱が頻発していた。しかもクーラント魔国とは常に戦争状態である為、なかなか国内の産業が育たなかった。

ハルモ教法王庁教圏国家群とクーラント魔国の争いの最前線に立たされ、常に貧乏クジを引いている国家であったのだ。

グランツ共和国の国民は、大昔に自分達を導いてくれたクロウ・

ミナトのような勇者の登場を日々渇望していた。しかしそのような人物はなかなか現れず、国民は長く苦しい困難な道を歩んでいた。

しかし今から二十数年前に状況は一変する。グランツ共和国軍に所属する片田舎の出身の青年が、めきめきと頭角を表してきたのだ。非常に聡明で軍を率いる才能に恵まれた彼は、クーラント魔国との戦いで数々の戦功を収め、二十台にしてグランツ共和国軍の将軍にまで登りつめた。

国民はそんな彼を若き英雄として祭り上げる。熱狂的な国民の後押しもあり、数年後にはグランツ共和国の議員に選出された。

議員になった彼は国の内情を知り、このままでは国の存亡に関わると危惧する。腐敗した政治、人族と亜人族の根深い対立、終わりの見えない戦い。状況は最悪であった。

そして彼は決断する。

彼はまず下準備として、グランツ共和国軍を再編成する案を議会に提出した。クーラント魔国との戦いを優位に進める為にも、現状の多岐に渡る指揮系統を簡略化して、戦闘情報を一元化すべきであるという提案である。グランツ共和国軍には最高司令官が必要であり、最高司令官に軍の指揮権を渡す事が勝利に繋がると主張したのだ。

当時のグランツ共和国軍は有力議員達の思惑もあり、各々の議員達の下に個別に軍が配置されていた。その為大規模な戦いでは議員たちの思惑が複雑に絡み合い、全軍の統制がとり難く大きな戦功を挙げにくい環境にあった。

軍の指揮権を取り上げられる形になる有力議員達の反対はもちろんあった。しかし情勢が彼の味方をした。国民のほぼ全員が彼の意見を後押ししたのだ。

ここ最近のグランツ共和国軍は、有能な彼の軍略に依存して戦い、

なんとか勝利を収めている状態だった。彼以上に戦功を挙げた者は誰一人としておらず、彼の意見は効率的かつ効果的だと思えた。

有力議員達は自分の権力の維持の為に反対意見を言っている。国民の目にはそう映り議員達に反発した。世論の声に押された議員達は、彼の意見に対してしぶしぶだが了承したのであった。

次に彼は軍の最高司令官に自分を据える事を議会に提案する。国の為に最前線に立ちたいと彼は熱く議会で語り、軍を率いる才能に恵まれた彼が、グランツ共和国軍の最高司令官へ就任する事に対しては特に大きな反対も無い。

結局議員たちは彼の本当の思惑に最後まで気が付けなかった。

彼はついに最高司令官として全軍を掌握する。機は熟したと判断した彼は軍を動かし、私利私欲に走っている評議員達を全員切り捨て、軍部による独裁政権を作り上げた。彼はクーデターを起こしたのだった。

国民には腐敗した政治を行った者達を粛清したと発表した。国民は若き英雄である彼を歓迎した。彼はその後国名をグランツ共和国からグランツ帝国に変え、自ら初代皇帝となった。その者の名はフリードリヒ・ラスペ。グランツ帝国の初代皇帝である。

皇帝となったフリードリヒが次に取り組んだ改革は、人族と亜人族の対立を招いている原因であるハルモ教の廃止であった。グランツ帝国をクーラント魔国に対しての防波堤にして繁栄をしていたハルモ教法王庁教圏国家群に対して、あまり良い感情を持っていなかった大多数の国民たちはその決定におとなしく従った。

一部の敬虔なハルモ教信者は反発したが、フリードリヒ皇帝は自分の意に沿わない彼らを容赦なく粛清した。

上層部の人事の改革も大々的に行う。過去の功績などは考慮に入

れず無能な者は降格し、逆に有能であると判断した者は人族・亜人族を問わず登用していった。

その結果グランツ帝国の国力は短期間の内に飛躍的に高まった。改革を主導した皇帝を支持する国民の声も日に日に高まり、名実共にフリードリヒ皇帝はグランツ帝国の絶対的支配者となった。

ハルモ教法王はグランツ帝国のフリードリヒ皇帝を、ハルモ教に対する反逆者と認定した。法王の依頼を受けたハルモ教法王庁教圏国家群の国王たちは、大規模な討伐軍を組織しグランツ帝国へと派遣した。

しかし平和というぬるま湯に浸りきっていた王国連合軍にとって、長年クーラント魔国と戦ってきた百戦錬磨のグランツ帝国軍はあまりにも強大な敵であった。

大軍で攻め込んだのだが、帝国内の小さな砦の一つも落とせない状態であり、しかもまともに戦えば必ず負けるさんざんたる有様であった。

あまりの損害の多さに王国連合軍はグランツ帝国との国境線を封鎖し、専守防衛に徹するしか手が無くなっていく。

それから二十年。現在も両陣営は国境線を挟み睨み合っていた。

しばしの長考の後、フリードリヒ皇帝はクーラント魔国との休戦協定に合意する決断をする。今回の申し出を受ける事に対して利はあっても害は無いと判断したのだ。

クーラント魔国と休戦している間に、弱兵の集まりであるハルモ教法王庁教圏国家群に攻め込み国力をより高めようと考え、実行に

移すべく準備を開始する。そもそもグランツ帝国軍にとって王国連合軍は大した敵ではなかったのだが、クーラント魔国軍と戦争状態であった為本格的な開戦行動に移れなかっただけであった。

風の月の第五週の五日。グランツ帝国とクーラント魔国の両国の間で休戦協定が締結された。協定締結後直ちに、国境線から五十キロメートル圏内に展開されていたお互いの正規軍は引き上げられる。国境線から両国の正規軍の姿が消えたのは実に八百余年ぶりの出来事である。

それと時を同じくして、グランツ帝国は隣国のプロセン王国に宣戦を布告。グランツ帝国の正規軍が怒涛の勢いでプロセン王国に攻め込んだのであった。

第7話：王達の思惑（後書き）

各国の成り立ちや、ハルモ教正教会襲撃事件の顛末を書きたかったので、多くの国名がでる話になりました。説明文が多く分かりにくい文章だとは思いますがご勘弁下さい。

第8話：侑人の思惑

風の月の第六週の一日。グランツ帝国はプロセン王国に対して正式に宣戦布告し、帝国正規軍の先発隊十五万人がプロセン王国との国境に向け進軍を開始する。

プロセン王国の国王、ハインリヒ・フォン・サヴォイアは、グランツ帝国からの宣戦布告を受けた時点で、ハルモ教法王庁教圏国家の三国に向かって援軍を要請した。

他の三国はプロセン王国の要請に即座に応じ、三国を合計して九万人もの援軍をプロセン王国に向けて進軍させる。プロセン王国には正規軍の十万人がいる為、王国連合軍は合計で十九万人に膨れ上がっていた。

プロセン王国はグランツ帝国から宣戦布告を受けた直後から、援軍の要請や兵糧の備蓄、城砦の強化を行ない、本格的な戦闘を開始する前に準備を整えつつあった。もし突然攻め込まれていたのならここまでの準備は出来なかったはずである。

普通であれば二十年間敵対関係にあるプロセン王国に対して、グランツ帝国は宣戦布告を行う必要性は無い。今回の行為はわざわざ相手に準備をする機会を与えるだけの無駄な行為に見えるが、グランツ帝国が危険を犯して宣戦布告を行ったのは二つの理由があったからである。

一つ目の理由はクーラント魔国に対する牽制である。

休戦協定の締結と同時にプロセン王国に対して正式に宣戦布告を行う事により、この二つの事象は一連の流れとして関連付けられる。休戦協定と宣戦布告を関連付ける事により、クーラント魔国が休戦協定を破棄しにくい雰囲気を作り上げる思惑があったのだ。

宣戦布告を行なっているかどうかで、クーラント魔国が休戦協定を破棄した時の印象は大きく変わる。宣戦布告を行なっている今回の場合は、他国への宣戦布告をみてから外交態度を百八十度変えた臆病な王が統治する卑怯な国家として、周辺国から見られる事になる。

しかし宣戦布告を行なっていなかった場合では、グランツ帝国がプロセン王国に対して戦闘を仕掛けたのは過去二十年間の敵対行動の一連の流れの中でたまたま状況が変化しただけであり、休戦協定の前後で何かが変わった訳ではない。協定の破棄はその事と関係が無くたまたま時期が重なっただけだと言い逃れが出来るのだ。

二つ目の理由はハルモ教法王に対して、グランツ帝国という国家としてプロセン王国に対して正式に敵対する事を宣言する為である。

ハルモ教正教会のグランツ帝国に対する公式見解は二十年前と何も変わっておらず、グランツ帝国はハルモ教の勇者クロウ・ミナトが興した、ハルモ教法王庁教圏国家群の中の一つの国家であるという態度をいまだ崩していないのである。

宣戦布告を行わないで戦闘を開始すると、今回の戦争もハルモ教に対する反逆者のフリードリヒ皇帝を討伐しハルモ教信者を救う為の解放戦争であり、グランツ帝国と敵対する訳ではないというハルモ教正教会の公式見解のまま戦闘が始まる事になる。

今までグランツ帝国はクーラント魔国と常に戦争状態であった為、ハルモ教法王庁教圏国家群と全面的に対決するだけの余裕は無かった。その為ハルモ教法王庁教圏国家群との戦いの理由も二十年前の

まま放置されていた。
今回の戦争をきっかけにして、グランツ帝国はすでにハルモ教法王庁教圏国家群に所属するただの一国ではなく、フリードリヒ皇帝が支配する独立した国家であるとハルモ教正教会に認めさせる。そんな皇帝の思惑があった。

この二つの理由を突き詰めて考えていくと、国家の実利の話というより国家の面子の話になる。しかし国際社会において国家の面子が何よりも重視されるものであるという事は、マグナマテルの世界でも変わらない事である。

各国の王達の思惑によりマグナマテル全域の情勢が一気に変化してきた頃、ティルト村に居る侑人は何をしていたのかというと……部屋に引き篭もっていた。

とは言っても侑人自身が好きで引き篭もって居る訳ではない。引き篭もらざるを得ない理由が侑人には二つほどある。
ちなみに一つ目の理由とリンクするのだが、今日はホラント家に客が訪ねてくる事になっているので、目立つわけには行かない侑人は部屋に閉じこもるしかなかった。
最近ホラント家を訪れる客人の数が以前よりもあからさまに激増している。その為、最近の侑人は庭で作業をする時もフードを被って作業をしている。急に訪れる客対策の為であった。

「うーん……こんな感じかな？」

風の月も第六週目に入り気温はかなり上昇している。それと合わ

せて雨季が近くなって来ているので湿度もかなり高く、フード姿で作業をする事はかなり苦痛ではあったが、それでもヨーゼフとマリアの忠告を律儀に守って生活をしていた。

それを見かねたマリアが伸び放題だった頭髪を散髪をしてくれたので、ぼさぼさ頭だった以前よりは大分快適にはなっている。しかしそれでも日に日に上がる気温と湿度には勝てそうにも無く、必然的に外で作業をする時間は以前より徐々に減っている。これが引き篭もる事になった二つ目の理由である。

そんな感じで最近部屋に篭る事が多くなった侑人ではあるが、部屋の中で何もせず呆けていた訳ではない。仕事が出来ない時間を利用して、マリアから教わった魔法の勉強をしていたのだ。

部屋の中で実際に魔法を使うと、物を壊したり火事を起こしたりする恐れがあるので、自身の体の中にある魔力を感じる為の瞑想と、魔法のイメージトレーニングをしていたのだが、ただ漠然と魔法を使って木を切ったりしていた頃と比べて、格段に使える魔法の幅が広がってきていた。

「もっと良い使い方が有りそうだけど、なかなか思いつくまでが大変だ……でももう少しで何か掴めそうな気がする」

魔法を使う為に必要なものは三つある。一つ目は魔力であり、魔力が無ければ根本的に魔法は使えない。二つ目はイメージ力であり、自身の魔力をイメージしたものに変換したり、対象の形状をイメージした形状に変化させる準備をする。三つ目は意志の力であり、意志の力で変換した魔力を外に放出したり、対象をイメージした形状に変化させる。大雑把に説明するとそんな感じである。

持って生まれた魔力量は少しの努力ではどうにもならないが、自身が持っている魔力を瞑想する事によって最大限引き出す事が出来るようになった事と、イメージトレーニングを繰り返す事で得られ

る明確なイメージが、侑人の魔法を格段に進歩させていた。

ちなみに魔法詠唱は自身の集中力を高めたり、意思決定のきっかけとして行う行為である為、魔法を使う際に必ずしも必要ではない。格好が良いオリジナルの魔法詠唱を考えようかと少しだけ悩んだ侑人ではあったが、自分の年齢を考えて自重していたりもする。

例外的に古代言語を触媒として周囲の魔力を集め、自身の魔力以上の魔力を使用する古代魔法のような高等魔法では、決まった古代言語の詠唱が必要である。しかし今の侑人の魔力量では使いたくても使えないし、それ以前に一般家庭であるホラント家にそんな魔道書があるはずも無かった。

「床が土だったら試せたけど、さすがに二階の床を土にする訳には行かないか」

侑人のお気に入りの魔法は土の魔法である。戦闘では火や風の魔法の方が、少ない魔力で高い殺傷能力を得られるので、非常に効果的だという事は侑人にも分かっている。体力回復に使える水の魔法も有効であるとは思う。

戦闘の観点のみで考えるのなら、土の魔法は魔力が低いものが戦闘で使っても、劇的な効果は期待できない。敵に対して石つぶてをぶつける位なら、火の魔法で燃やしたり風の魔法で切断した方が手っ取り早いのだ。

しかし侑人は戦闘を想定した魔法の練習をしている訳ではない。繰り返しイメージトレーニングしている内容は、全て仕事を想定していたのである。

火や水や風の魔法も仕事にかなり役に立つのではあるが、土の魔法は岩や土といった固形物を扱う魔法なので、応用がかなり効くのである。

「より強くイメージする為には他に何が必要かなぁ……」

たとえば周囲の土を集めて壁を作る魔法があったとする……というか侑人はその魔法をイメージして何とか作ったのではあるが、今の侑人では1メートル位の高さの土壁しか作れない。

しかしこれが三メートル位の頑丈な壁が作れるほどに上達すれば、物を保管する土蔵が短時間で作れるようになる。魔法で周囲を土壁で囲った後、中を補強するだけで済むので経済的でもある。

続いては石つぶてを呼び出して、相手を攻撃する魔法の応用になるが、この魔法で呼び出す石つぶての大きさを限りなく四角にイメージして、全部の大きさを揃えてあげればレンガの代わりになる。

レンガを焼いたり石を切り出したりする時間が短縮されるし、なにより元手がかからないというメリットは果てしなく大きい。侑人はそんな事を日々想像していた。

この世界に住む大体の者は、魔法の才能があればそれを使った戦闘方法を磨くことを考える。まず自分の身を守る手段を得ようとするのである。そして突出した才能がある一部の者は、国に仕える魔道士としてその力を国防に生かすのである。長い戦乱の世が続くマグナマテルではそれが普通である。

カマドに火をつけるのに魔法を使ったマリアのような魔法の使い方ももちろんする。しかしその使い方は炎をぶつける対象を人から薪に変えたりするだけの単純な変更でしかない。この世界での魔法という技能は、あくまで戦闘技能の一つなのである。

「誰かに習えれば助かるんだけど、思い当たる人が居ないのが痛いよなぁ」

侑人のように仕事に使う為だけに魔法を編み出したり、既存の魔法を大きくアレンジしようとしたりする魔道士はほとんど居ない。
そういった世の中の魔道士とはまるで違う方向で努力を重ねる侑人ではあるが、そういう発想が出来る事が異世界人である侑人の強みであった。

核分裂は大量破壊兵器として軍事目的で利用する事も出来るが、原子力発電として日常の生活で役立てることも出来る。ロケットエンジンはミサイルとして軍事利用する事も出来るが、宇宙ロケットに搭載して宇宙開発に役立てる事も出来る。
この世界では軍事利用されている魔法であるが、使い方しだいでは日常生活で平和利用できるはずだ。侑人はそう考えているのだが先は長いようである。

日々部屋に引き篭もりながら日々魔法の訓練をする侑人であったが、訓練をするうちに一つの違和感に気が付く。
瞑想をして自身の魔力を感じようと深く集中すると、自身の魔力の中心に何か殻のようなもので覆われた謎の物体の存在を感じるのだ。

「自分の中にあるはずの物なのに、全く様子が掴めないのは気味が悪いな……」

その殻に覆われた物体に、侑人の魔力は少しずつではあるが吸い取られているような感じもする。とにかく非常に気味が悪かった。
瞑想しながらその殻の中を探ろうとするが、自分の中にあるものなのに何度試しても上手く行かない。我流で魔法を学んでいる侑人

は誰かに相談する事も出来ず、ここ最近は日夜一人で格闘していた

「あの変な声の主が埋め込んだ物なのかな？」

そんな事を呟きながら、いつものように侑人は殻の様な物と格闘している。しかし相変わらず状況に変化は無く、謎が謎を呼ぶ展開が続いている。

「命に関わるものじゃないとは思うけど、これが何か判れば状況が大きく変わる気がするんだよな……」

何の保証も無いが何故かそんな事を確信してしまう。

「とにかく時間はあるし、もう少し探ってみよう」

そんな事を呟きながら深く瞑想する侑人。このとき感じた確信が事実であった事を確認するには、もう少しだけ先の出来事を待つ必要があった。

第8話：侑人の思惑（後書き）

侑人は家事手伝いから半引き篭もりにジョブチェンジしました。

第9話：クロウ・ミナト

風の月の第六週の七日。今日も相変わらずホラント家には客人が訪れており、今回の客人はティルト村に住む若い男達三人組みであった。

侑人はいつものように客人が帰るまで部屋に引き篭もって、最近の習慣になっている魔法の鍛錬を行っている。ここ数日間ホラント家の家事手伝いが殆ど出来ていない事をかなり気にしているのだが、どうにもならない状況だから仕方が無いと迷惑を掛けているはずの二人から逆に慰められる始末であり、悶々とした気持ちで日々を送っていた。

「それでお主達は一体何をしにきたのじゃ？」

連日訪れる村人達に半ば辟易してきているヨーゼフは、かなり呆れた顔をしながら男達の顔を見つめている。目の前に居る男達がホラント家に用があるとは到底思えない。

そんなヨーゼフの冷たい視線を浴びせられている男達は、かなりバツの悪そうな顔をしている。周囲をキョロキョロと見回したり、ヨーゼフに向かって愛想笑いを返してみたりと終始落ち着かない様子である。

「い……いやぁ、ヨーゼフ翁がお元気でいらっしゃるかなと少し心配になって……」

「特に用は無かったのですが、何となく気が向きましたので」

「マリアちゃんの顔を見に来ました！」

最後の男の言葉を聞いたヨーゼフのこめかみがピクリと動く。正直は美徳ではあるが、時と場合によっては印象を悪くする事も有り得る。マリアを過度に溺愛するヨーゼフに対して正直に目的を話した三人目の男は、勇気があるというよりただ単に空気が読めないだけであろう。

最初に言葉を発した二人もかなり驚いた顔をしながら三人目の男の顔を見つめ、なにやら必死にアイコンタクトを送っているが、三人目の男は二人と視線を合わす事も無く、ワクワクした顔でヨーゼフをただ見つめて続けている。どうやら全く伝わっていなそうである。

「はぁ……お前たちも暇人じゃのぅ」

三人の目的など当初からお見通しのヨーゼフは深い溜息を付く。本当ならば今すぐにでも家から叩き出したい気分ではあるが、マリアに対する三人の好意をヨーゼフが無下にするのもおかしな話だと思い直し、渋々だが彼らの相手をする。

ヨーゼフはかなりの重度な孫馬鹿ではあるが、元神官の肩書きが示す通り人格者でもある。本音と理性が心の中でせめぎ会うヨーゼフの葛藤は計り知れない。

「「あははは、お恥ずかしい」」

「それでマリアちゃんは何処に居るんです？」

「「……」」

「お前達も気になってるだろ？」

ヨーゼフの少し辛辣な言葉を聞いた男達は、バツの悪そうな顔を

しながら愛想笑いをし、空気の読めない男の問い掛けを聞いて黙り込む。駄目だこいつという意見で二人の心は今一つになる。
リビングで相対している四人の間に流れている空気は最悪であった……若干一名の男は気が付いてもいないが。

ヨーゼフが来客の相手をしながら葛藤し、侑人が部屋に引き篭もりながら悶々としていた頃、マリアは一人で村の市場に買い物に来ていた。
金髪のツインテールを風になびかせながら、鼻歌交じりで市場の通りを軽い足取りで歩いている。ここ最近のマリアのご機嫌はかなり良かった。

そんなマリアの姿は人々でごった返す市場でもかなり人目を引き、老若男女問わず村人達は次々とマリアに声を掛けている。そしてマリアは村人達の言葉に愛想良く応えていた。

「おっマリアちゃん。今日は良い魚がはいったよ！」
「本当？　少し見ていこうかな」

「少し形が悪いけどこれ持って行きな！」
「わぁーありがとう！」

「おじちゃんの店にも寄ってくれよ」
「うん。後で必ず寄るね」

「よう。今度暇な時遊びに行こうぜ」
「なかなか暇にならないの。ごめんなさい」

「おねーちゃん遊ぼう！」
「ごめんねー。お買い物の途中なのよ。お買い物が終わったら遊ぼうね」

「マリアや。少し茶でも飲んでいかんか？」
「買い物が終わったら少し寄らせてもらうねー」

最近のマリアの人気はかなり高い。元からティルト村一番の美人としてそこそこ人気は高かったが、ここ最近は性格が丸くなり親しみやすくなったと村人達の中でかなり評判になっている。
今までのマリアも根は素直な性格をしている為、年配の村人や同姓の人達からは可愛がられていた。しかし若い男を露骨に嫌がるため、マリアの異性の人気はいまひとつであったのだが、今では村中の若者の熱い眼差しを一身に浴びるようになり、村のアイドル的な存在になっていた、

そんなマリアに関するとある噂が村人の中に流れている。男嫌いのマリアに春が来たらしいという噂だ。最近特に機嫌の良いマリアの態度も噂に拍車をかけていた。
人口が少ない村では娯楽は少ない。ここ最近色々と注目されているマリアの噂は、村中の人々の関心を集めている。そして噂の相手はホラント家に居候しているらしい謎の同居人……侑人の事だった。

侑人はめったに人前へ姿を現さない。ここ最近は庭に出る時でもヨーゼフの忠告を律儀に守り、かなり目深にフードを被って顔を隠している。
ごく稀にだが外で作業をする侑人の姿を遠目から目にした村人も居た。しかしフードで顔を隠しているのが功を奏し、侑人の顔をはっきりと見たものは誰一人として居なかった。

村のアイドルの様な存在であるマリアと、素性の分からない謎の同居人との秘密の関係。村人達の関心を引かない訳が無い。しかし噂には得てして尾ヒレが付くものである。

「どうもマリアが他所の男を連れ込んだらしい」
「ヨーゼフじーさんもその男を気に入っているらしいぞ」

そんな感じで微妙に確信に迫っている噂もあったが、大体の内容は完全な誤解である。しかも噂のなかには普通に考えればありえない内容の噂もあった。

「マリアの親戚の男が家に転がり込んできたらしい」
「ヨーゼフをハルモ教会に連れ帰ろうとした弟子の男に、マリアが一目惚れしたって聞いているぞ」
「元々マリアの許婚で、十七歳になったら同居する事になっていたらしいよ」
「借金のかたに連れてこられたらしい」
「マリアとヨーゼフを脅して住みついたらしい」

噂の一部を挙げてみてもこれだけの数がある。もし万が一マリアの耳に入ったのなら顔を真っ赤にして怒りそうな内容ではあるが、幸いにもマリアの耳には今のところ届いていない。

ちなみに噂の中での侑人の人物像も多岐に渡っている。事実に即している内容も少なからずあるが、こちらの内容も目を覆うばかりの惨状である。

「いつもフードを被っているらしい」
「何かを隠しているようなそんな雰囲気がある」
「相手の男はどうも木こりらしい」

「俺は農家の小倅だと聞いたぞ」
「いや、腕の良い家具職人という話だったぞ」
「大工の棟梁だったはずだが……」

これらの噂は侑人の日々の行動や、作った商品の内容から推察したと思われる内容であり、少しは納得出来る部分もある。

「どうやら見習いの魔道士らしい」
「俺は怪力の戦士だと聞いたぞ」
「借金をして国を捨ててきたやつだと昨日聞いたのだが」
「没落した貴族の息子だという話らしい」
「外国の王族だと聞いたのだが違ったかな」
「実は相手も女らしい」

しかし大体の噂は上記のように完全に憶測から出ている内容であり、噂の中の人物像は噂をしている村人達本人にも、どれが事実を基にしている噂なのか把握できないほど多岐に渡っていた。
しかもヨーゼフとマリアは、同居人の事を村人達に話していない為、実際に同居人がいるのかどうなのかさえよく分からない状況であり、噂に歯止めが掛かる気配は全く感じられない。

そして一部の村人達は痺れを切らし、噂の正否を見極める為に行動を起こす。その行動とはホラント家への訪問であった。
最近ホラント家を訪れる客人の数が激増している理由は、一部の村人達が噂の真意を確かめようとしている為であった。

「ようやく帰りおったか」

若い男達三人組みが帰った後、ヨーゼフはリビングで一人呟く。
ヨーゼフも最近の村の噂を知っている。今までヨーゼフに直接質問してくる者は居なかったが、狭い村で生活していれば噂は嫌でも耳に入る。基本的に買い物以外では外に出ないマリアの耳には届いていないようだが、それも時間の問題であろう。
しかも噂を確かめようとする村人達の行動が、段々とエスカレートしている事も感じていた。このままでは何も知らない侑人に対して、何かをしでかす者が出るかもしれない。

「そろそろ侑人に真実を伝えないといかんじゃろうなぁ」

ヨーゼフはハルモ教に伝わる伝承、異世界から来た黒髪の勇者クロウ・ミナトの話を侑人に話す決断をし、侑人とマリアが揃う夕食の時間に行動を起こす事を決める。
そして夕食後。普段は少し騒がしいホラント家の夕食後の団欒の時間。しかし今日の三人の雰囲気は違っていた。

ヨーゼフが侑人とマリアに、大事な話があるのでリビングに残っていてくれと、夕食が終わりそうな頃に切り出したのである。
真剣な顔で言うヨーゼフの雰囲気は普段より幾分か重々しかった。その為マリアは終始落ち着かない様子で、なかなか話し出さないヨーゼフの姿と少し真剣な表情をしてヨーゼフが話し出すのを待っている侑人の姿を交互に見ている。

「ふぅ……」

ヨーゼフは深く溜息をついた後、静かな声でおもむろに話し始める。ヨーゼフから侑人に語られた内容はもちろん、ハルモ教に伝わる異世界から来た黒髪の勇者クロウ・ミナトの伝承であった。

「今まで隠しておって済まんかったの」

ヨーゼフの語った物語はそんな言葉で締められ、侑人に向かって深々と頭を下げる事でフィナーレを迎える。全ての非は此方にあると行動で示しているようだ。

しかし頭を下げるヨーゼフを見つめる侑人の目は、真剣さの中にも何故か穏やかさを湛えており、重大な事実を隠されていた事に対する憤りの感情を微塵も感じさせない。

「謝らないで下さいヨーゼフさん」

神妙な顔をしながら頭を上げたヨーゼフの目に、穏やかな顔で微笑みかける侑人の姿が映る。そんな侑人の姿を確認したヨーゼフは、少し気の抜けたような表情をして軽い溜息をつく。

二人のやり取りを見ていたマリアも、ほっとした表情をして肩の力を抜いた。

「私のことを気使って下さって、ありがとうございます」

侑人は重々しい雰囲気でハルモ教の伝承を語るヨーゼフの姿と、侑人の事を見つめるマリアの真剣な表情を見て、今まで二人がこの話を侑人に隠していた真意を察した。

侑人に余計な心配や気苦労を掛けたくないという、二人の優しい思いやりだったのだろう。本当に侑人の事を思っての判断だったのであろうと。

話す事を決めた理由は分からなかったが、隠していた理由ならば普段の二人と今の雰囲気との差を見ていればなんとなく分かった。

「私のほうこそ謝らなければなりません。お二人に今まで話してい

なかった事があります」

そう二人に告げ深々と頭を下げる侑人。数秒の間を置き再び頭を上げた侑人の顔は、いつに無く真剣な表情である。その表情を見た二人は息を飲み続いて語られるであろう言葉を静かに待つ。

侑人は今まで話し出せなかった自分の境遇を二人に語る。自分は日本という国から来たという事。自分にとってはこの世界は異世界であるという事。

どうやってこの世界に移動してきたのかはわからないが、元の世界で聞いた謎の声がこの世界に導いたらしいという推察も併せて語る。誠意には誠意で答えるのが筋であり、二人に対して隠し事はもはや必要ない。

侑人が自身の境遇を語り終えた時、いつもは賑やかな声が響いているはずのホラント家のリビングは沈黙に包まれていた。

「やっぱりユートは異世界の勇者だったのね……」

マリアの呟きを聞いた侑人は静かに首を横に振る。侑人自身、今の自分の状況を掴んでいる訳ではないが、マリアの言葉を否定するだけの自信を何故か持っている。

「私は勇者などではありません」

「でっでも！」

何かを反論しようとしたマリアの言葉を手で制しながら侑人は言葉を続ける。

「クロウ・ミナトという人物が、この世界にとって勇者であったのは事実でしょう、しかしそれは彼が異世界人だから勇者と呼ばれた訳ではないはずです。この世界に来た後の彼の行動が、後の世に勇者として語り継がれているに過ぎません」

なおも侑人は言葉を続ける。

「私はこの世界に紛れ込んでしまった、ただの異世界人でしかありません。私はただこの世界に住む私の大事な人達のお役に立てればそれで満足なのです」

マリアの目を見つめながら侑人はそう言い切る。二人のそんなやり取りを見ていたヨーゼフは何かを悟ったような様子で微笑みながら頷いていた。

そんな侑人とヨーゼフの姿を見てマリアも悟る。

侑人が異世界から来たと聞かされた自分は、何も考えず侑人を勇者だと決め付けてしまっていた。自身が嫌っていたはずのハルモ教の伝承を、ただそのまま受け入れていてしまっていた。侑人の事を色眼鏡で見てしまっていたのだと。

何処から来ようと侑人は侑人。異世界人であろうが何人であろうが、侑人が侑人であるという事は何の変わりも無い。そう……今までと何も変わらないのだ。

侑人は今後も今までと変わらずこの家に居たい。いつ元の世界に戻れるかは分からないが、それまではホラント家で家族同然に生活していきたい。そう言いたいのだと。

「ごめんなさい」

マリアは侑人に対して素直に謝る。しかし顔には極上の笑みを浮かべている。

マリアの笑顔を見て侑人も満足そうに笑顔を返す。ヨーゼフはそんな二人の姿を見ながら頷いている。全てを語らなくともお互いにお互いを察する事が出来る。

今の三人は本当の家族のような絆で結ばれていた。

お互いに秘密にしていた事を伝える事が出来た。

三人は満足そうな顔をしながらそのままリビングで談笑を続けている。主に侑人とマリアがたわいも無い雑談をし、ヨーゼフは楽しそうにその話を聞いていた。普段と変わらないホラント家の団欒のひとコマであった。

そんな和やかな雰囲気の中、不意にヨーゼフは何かを思いついたような顔をし、侑人にある事を尋ねる。

「クロウ・ミナトはユートと同じ世界の人間なのかの？」

そんなヨーゼフの言葉を聞いた侑人は少し考え込む。

自身より八百年以上前にこの世界に召喚されたというクロウ・ミナトという人物。もし同じ世界から召喚されていたとするならば、黒髪であった事から東洋人である可能性が高そうである。

元の世界の東洋人風の名前に直せばミナト・クロウになり、名前の響き的には日本人の名前に近そうな感じだ。日本で八百年前と言うと鎌倉時代にあたる……

「ひょっとして……」

そこまで思考をめぐらせた侑人の頭に中に一人の人物名が浮かぶ。

弱いものに、弱いからと言う理由で、えこひいきしてしまう日本人の特性を表した言葉『判官贔屓』の『判官』が表す人物名。

その人物の名前は、鎌倉時代の悲劇のヒーローである源義経であった。

源義経の義経と言う名は諱(いみな)である。諱(いみな)は忌み名とも書き、諱(いみな)で呼びかけることは極めて親しい者のみに許され、それ以外の人間が呼びかけることは、極めて無礼であると考えられていた。ちなみに余談ではあるが伊達政宗の正宗や織田信長の信長も諱(いみな)である。

そして義経が普段周囲に名乗っていたと想像される名前は、仮名である九郎。侑人は源義経の正式名の源九朗義経という名前を知っていたのであった。

クロウ・ミナトが源義経だと仮定するといろいろな点が納得できる。武将である義経ならば、兵を率いる才能や軍略を考える知識に長けていたはずである。

この世界の言葉をどうやって理解したのかは分からないが、案外今回の侑人のように何かの能力を与えられていたのかも知れない。

「それならば色々と辻褄が合う気がする」

そんな事を考えながら侑人は一人で納得し何度も頷く。その姿を見ていたヨーゼフとマリアは、余計な事を聞いて考え込ませてしまったのかもしれないと、少し心配した顔色で侑人の様子を伺っている。

自分を見つめる二人の姿に気がついた侑人は、慌てた様子で二人に謝りながら今考えていた仮説を二人に聞かせる。

「なるほどのぅ」

「何か凄い話だねぇ」

「まああくまで仮説なので、話半分で聞いて貰えると助かります」

この日のホラント家はいつもの様な和やかな雰囲気に包まれている。こんな生活がしばらく続いていくのだとこの時の三人は漠然と考えていた。

しかし運命の歯車はそんな三人の考えをあざ笑うかのように廻り始める。侑人がマグナマテルの歴史の表舞台に登場するきっかけとなった出来事が起こるのは、この日から数日後の事であった。

第9話：クロウ・ミナト（後書き）

源義経と比べられる事になる侑人は、ある意味かわいそうかもしれません。

第１０話：黒髪の勇者

風の月の第七週の六日。マグナマテルの全土は恵みの雨の季節に差し掛かっている。本来であれば雨期は水の月に入ってから訪れるのだが、今年は例年より一週間以上早く季節が移り変わったようだ。

そのせいなのか、ここ数日間の天気は異常である。本来の雨期の雨の降り方は、日本の梅雨と似ている。東日本の陰性梅雨のように、シトシトと弱い雨が降り続くのが普段の雨期の状態である。

しかし今年は雨期に入った四日前から大嵐になっている。強い風と雨がマグナマテル全土を吹き荒れ、各地で被害が出始めていた。

「はぁ……」

早めの夕食を終わらせたホラント家のリビングでは、マリアが一人で暇そうに留守番をしている。窓の外からは断続的に強い風が吹きつける音が聞こえていた。

侑人が修理するついでに自身の知識をフル活用して耐震補強を行っていたこの家は、大嵐の中でも多少揺れるくらいでびくともしない。そのせいもありマリアはこの嵐の中でもいたってのんきな様子だった。

ヨーゼフは村の男達と一緒に、村内の見回りに行っている。侑人

が代わりに行ければ良かったのだが、いまだ村人から姿を隠している侑人では村人と一緒に行動は出来ない。
そして本来であればマリアと一緒に家に居るはずの侑人も、風で何かがぶつかって破損した薪小屋の修理を行う為、この大嵐の中外に飛び出し律儀に補修作業をしている。

「そうだ！」

とうとう暇を持て余したマリアは侑人の様子を見てこようと思い立ち、脇に掛けてあったフード付きのコートを着込み外に出る準備を始める。
そしてマリアが玄関に向かおうと移動しかけた時、間が良いのか悪いのか侑人が作業を終えて家に戻ってきた。

「こんな嵐の中どこかにおでかけですか？」
「おでかけしようかと思ったけど、用事が済んじゃったからもういいかも」

マリアは苦笑しながら侑人に体を拭くタオルを渡す。
玄関先で侑人は濡れた体を拭きながら、マリアに向かって薪小屋の状態や、実際に見てきた外の様子を詳しく話している。今まで話し相手が居なくて退屈していたマリアは、相槌を打ちながら楽しそうに聞いていた。
玄関先でそのまま話をしていた侑人がマリアに、体を拭き終わり濡れてしまったタオルを渡そうとした時、突然家の玄関が大きな音を立てて開き誰かが家に駆け込んで来る。

その音を聞いた侑人は、急いで先ほど脱いでしまったコートを着込み咄嗟に顔を隠す。マリアも侑人の顔を隠そうと慌てた様子で侑人の前にわざとらしく立つ。

しかし突然の訪問者はそんな二人の様子を無視して、かなり焦った様子でまくし立てるように二人に話し掛けてくる。

「マリア！　ユート！　急いで家を出るのじゃ！！」

突然の訪問者は村人と一緒に見回りに行っているはずのヨーゼフだった。普段の冷静沈着で温和な姿からは全く想像出来ないほど取り乱している。

そんな珍しいヨーゼフの姿を見たマリアは少し不思議そうな顔をし、侑人は言い様の無い悪い予感を胸に湧き上がらせながらも、とりあえず表面上は普通に振舞う。

「どうしたのおじーちゃん？」

「一体何があったのですか？」

ある意味普段通りの二人の様子を見て少しだけヨーゼフも落ち着く。常に冷静沈着な侑人の姿を今日ほど心強く感じた事は無い。

「村の側を流れる川の堤防が、あと一時間もしないうちに決壊しそうじゃ」

「えええ？　何で何で？　それでどうしたら良いの？」

ヨーゼフの話を聞いたマリアが今度は慌てる。ある意味予想通りの反応であり、ヨーゼフは少し苦笑しながら最愛の孫娘を落ち着かせようとなだめ始める

「とにかく落ち着くのじゃ。最小限の荷物を持って高台に逃げるのじゃ」

「最小限ってどれくらいだったっけ！？」

「いいから慌てるでない。着替えと食べ物と少しの医薬品を持ち出せばよかろう」
「少しってどれくらいだっけ？」

混乱しているマリアに何を言っても無駄だと悟ったヨーゼフは、落ち着いていそうな侑人に全てを託そうと考え視線を侑人に移す。

「ユート、マリアの事を頼め……」

しかしヨーゼフが侑人に話し掛けた時、すでに侑人は玄関から表に出ようとしているところだった。何をするつもりなのかを瞬時に察したヨーゼフは、慌てて侑人を止めようとするが、それより一瞬だけ早く侑人の声が玄関先で響く。

「ヨーゼフさん、マリアを連れて高台に非難して下さい」

侑人はそう告げると二人が止める声を背後に聞きながら、嵐の中を風のように駈け出していった。

顔に当たる雨粒は風に煽られ、皮膚に容赦なく突き刺さる。時折突風が吹きつけ、風に飛ばされた色々な物が凶器となり襲い掛かってくる。そんな嵐の中、侑人は川の堤防に向かって風のように疾け抜けていく。

川の堤防にたどり着いた時、村人の男達は今にも崩れそうな土手を補強する為に土嚢を積んでいるところだった。

「私にも手伝わせて下さい」

村人達はフードをすっぽり被った怪しげな男に対して一瞬警戒したが、この現状では一人でも多くの手があったほうが助かると判断し、侑人に向かって助力を請う。

「ありがたい。早速この土嚢をあそこに積んでくれ！」

「わかりました」

侑人は即座に作業に取り掛かる。指示を受けた通りに土嚢を土手に運び、土手を補強する作業を黙々と手伝う。マリアとヨーゼフが暮らすこの村を守りたい。その思いが侑人を駆り立てている。

しかしこの時の侑人は、ヨーゼフとマリアの目立つなという忠告が頭からすっかり抜けていた。

普通の成人男性が持てる重さをはるかに超えた分量の土嚢を、力任せに一気に持ち上げてどんどん土手に積み上げていく。

そんな人知を超えた怪力を発揮する男を、村人達はしばし唖然として見つめていたが、今はそれどころでは無いと思い返し、この場を侑人に任せて追加の土嚢を取りに向かう。

村人が土嚢を取りに行っている間、少し時間が空いてしまった侑人は、自身が編み出した土壁を生み出す魔法を使い土手を補強しようと思い立ち、何度も何度も土手に向かって行使する。

しかし侑人の魔力ではいまだ一メートルほどの高さの土壁を出すのが精一杯で、猛威を振るう嵐の前では焼け石に水の状態であった。

「駄目だ……」

村人の一人が呟く。

目の前の土手は皆の努力をあざ笑うかのように、どんどん決壊へと向かって行く。誰の目から見ても決壊まであと数十分の猶予があればましな様に思えた。

村人の間に諦めの空気が漂っていく。一人、また一人と作業の手を止め、呆然と土手を見つめ始める中、一人の男だけは諦めず作業を続けていた。

その男とは侑人である。土手と土嚢が置いてある場所を何度も往復し、土手に土嚢を黙々と積み上げている。そしてその土嚢に向かってなんども魔法を行使し、土壁を生み出し補強を続けている。

その鬼気迫る姿を村人達はしばらく呆然と見ていたが、やがて一人の男が侑人に近づき、肩に手を置きこう言った。

「ありがとうおにいちゃん。でももう無理だ……逃げよう」

侑人はその村人の顔を見上げる。村人の顔は何もかもを諦めた顔をしていた。

しかし村人の男にそう声を掛けられても侑人は作業を止めない。とはいえ何とかしようと足掻いてはいるものの、侑人の能力や魔力では現状を解決できないという事は理解している。

だが他に解決策が全く思いつかない状態で手を止めるわけには行かない。川を決壊させてしまえばマリアとヨーゼフの生活に大きな影響を与えてしまう。それを許すわけには絶対に行かない。

このままでは遅かれ早かれ村に甚大な被害が出る。これと言った特産品も無く農耕と狩猟で生計を立てているこの村では、田畑が全滅する事は死活問題だ。

自身を救ってくれたマリアやヨーゼフも餓える事になるかもしれない。それだけは絶対に許容出来ない。

「このまま……」

侑人は何も出来ない自分自身に対して自己嫌悪していた。自分は肝心な時に役に立てない駄目な男だと。

状況に追い詰められ苛立ちを感じた侑人は思わず日本語で叫ぶ。

「このまま諦められるかよ！」

――――パキン。

侑人が叫んだ瞬間、周囲の空気が変わる。

侑人の魔力の中心にあった殻が自身の叫びと共に弾け飛び、圧倒的な魔力が体から溢れ出す。周囲の景色を歪ませるほど放出されるその無限と思えるような魔力量に、村人達は今度こそ言葉を完全に失った。

そんな周囲の雰囲気の中、侑人だけが冷静にある事を考えていた。これならティルト村をマリアやヨーゼフを救えると。侑人は現状を好転させる為に即座に行動を開始する。

侑人はバックステップをして土手から二十メートルほど距離を取る。そして村人達全員に声を掛け、唖然として立ち尽くしていた村人達を自分の後ろに下がらせる。

目を瞑り地面に手を着き集中し、とある物体をイメージする。段々自分の頭の中に明確なイメージが組みあがる。後は強い意志の力で自身の魔力を放出させるだけだ。

「危険ですから伏せて下さい！」

侑人のその言葉と同時に両手から魔力が放たれる。膨大な魔力を受けた地面はその形状を一気に変化させる。

侑人の目の前の地面は大きく抉れ、川との境には大きな斜めの壁のようなものが出来上がる。その土壁の高さは五メートルをゆうに超え、幅も二十メートルはある巨大な物だった。

今度はその壁に向かって右手を徐にかざし、大きめの平たい石を呼び出して土壁の全体を覆う。気がつけば目の前に立派な石堤が出来上がっていた。

侑人は最後の仕上げに、抉ってしまった地面を石つぶてで応急的に塞ぎ『これで穴に落ちて怪我をする人は居ないだろう』と侑人は考え一息付く。

「ここはこれで安心ですね」

侑人は笑顔で村人を振り返る。しかし村人達は目の前で起きた奇跡のような出来事に圧倒され茫然自失になっていた。

「奇跡だ……黒髪の勇者が奇跡を起こした」

村人の一人が呟く。その言葉をきっかけにして村人達の間にざわめきが広がっていく。その様子を見た侑人は、やっと今の自分の姿に気が付く。

無我夢中で魔法を行使していた侑人は、フードが脱げて黒髪や素顔が表に出ている事に気が付いていなかった。いつの間にかこの場に来ていたヨーゼフとマリアは、そんな侑人の姿を見て苦笑している。その表情は少しの諦めが混じったような感じである。

マリアやヨーゼフの姿に気がついた侑人は、二人の好意を思いっきり台無しにしてしまった事に気が付き少し焦りを感じたが、今はまだそれどころでは無いと思い返す。

侑人は浮き足立つ村人を落ち着かせる為に、少し大きめの声で全員に語りかける。

「今はそんな状況では無いはずです。他に危険な箇所はありますか？」

その問いかけを聞いた村人達は現状を思い出す。この場所より危険なところはもう無いが、それでもこのまま放置すればいずれ決壊する可能性がある危険箇所はまだ数箇所ある。

その場所に案内して欲しいという侑人の言葉に従って、村人達は次の危険箇所に向かって案内する。先ほどの雰囲気とは一転して、村人達の表情には希望が満ち溢れていた。

その後の侑人と村人達は一晩中土手の補強に奔走した。全ての作業を終わらせた侑人がホラント家に帰宅した頃には、辺りは明るくなり風雨は若干収まってきていた。

雨に打たれずぶ濡れになっていた衣服を着替え、ベッドに倒れるように横たわった侑人は『今後の対応は起きてから考えよう』と問題を先送りする事に決め、そのまま泥のように眠る。侑人の寝顔には一仕事終えた満足感が漂っている。

しかしこの時の侑人は、今後の自分を取り巻く環境が劇的に変化する事に対して、全くと言って良いほど気が付いていなかった。

第１０話：黒髪の勇者（後書き）

水戸黄門漫遊記のように旅をさせようか、どこかに仕官させようか今後の展開をどうしようか少し悩んでいます。

第１１話：魔国の姫君

侑人がティルト村を救ったその日の昼、ホラント家にはすでに何十組目か分からないほど、多数の客人が訪れている。訪れた客人達全員の目当ては侑人であった。

「今は疲れて寝ておるのから、そっとしてあげて欲しいのじゃよ」

ヨーゼフは今日何度目かの台詞を客人に対して言い、相手が納得して帰るのを見届けると静かに玄関を閉める。

「ふぅ……今までの生活には戻れないかもしれないのぅ」

ヨーゼフは夕方になっても部屋から出てこない侑人を心配しながら、侑人が寝ている部屋の方を見つめていた。

――――侑人は夢を見ていた。

長い紅い髪の毛と少しきつめの紅い双眼が印象的な少女の夢。その少女は少し暗い小さな部屋の中から、こちらに向かって呼びかけている。

しかしその声はこちらに届かない。必死になって何かを伝えよう

とする少女が気になった侑人は、少女の口元を見て何を言いたいのか判断しようとする。そして読み取れた言葉は……。

『いい加減に起きろ！』

ん？　誰かが起こす声が聞こえた気がする……。

『聞いているのか？　いい加減寝すぎじゃぞ！　そろそろ起きろ！！』

気のせいじゃない……確かに声が聞こえる。耳元で叫んでいるのか、頭に響くような大きな声を感じる。

そんな声に対して侑人は『そんな大声で呼ばずに体を揺すってくれれば直ぐ起きるのに』などと考えながらしぶしぶ目を開ける。

目を開けるとそこは、侑人が居候させてもらっているいつもの部屋だった。周りをきょろきょろ見渡したが、どうやら侑人しか居ないようだ。

気のせいだったかと思いながら、首を回し軽く伸びをして意識を覚醒させる。外を見るとすでに夕方になっているようだった。雨もすっかり上がったのか、五日ぶりの夕日が部屋の中を真っ赤に染めあげていた。

『おお？　ようやく起きたか？』

今日の明け方まで大雨の中を走り回っていたが、一日寝かしてもらえた為、疲れはすっかり抜けているようだ。

元の世界でも自分の体がこれだけ頑丈にできていたら、仕事も楽だったのにな……侑人はそんな事をぼんやりと考えている。

『聞こえておるかー？』

そういえばマリアやヨーゼフさんは大丈夫だろうか。最後まで一緒に付き合ってくれていた二人の事が気になる。

侑人が家に戻って休んでくれて良いと言うたびに「ユートが頑張っているのに休めないよ」と笑顔で答えるマリアの顔を思い出して、侑人は一人で微笑んだ。

『判っていて無視をしている訳じゃあるまいの？』

二人が起きているか家の気配を探る。階下から家事をする物音が聞こえるので、マリアは起きていそうだ。ヨーゼフさんに話しかけているようなマリアの声も聞こえる。

マリアが話しかけているならヨーゼフさんも起きているだろう。侑人は二人とも体調を崩していない様子を確認して安心する。

『訳の分からん言語で考えているようじゃの…ひょっとすると言葉が通じんのかの？』

今日はゆっくり過ごして明日からは普通の毎日を……無理だ、いい加減にもう無視は出来ない。さっきから声が聞こえるのは夢でも何でもない。

しかもこの感じは前に経験した事がある。異世界に召喚される前に聞いた謎の声と同じ感覚。どうやらこの声の主は直接頭に話しかけてきているようだ。

「なんでこうやって次から次へと問題が起こるかなぁ…」

侑人はそうボヤキながら、頭に響く声に耳を傾ける。

『うーむ……言葉が通じぬとは思わなかったぞ』

声の主は何やら考え込んでいるようだ。声の感じからすると若い女の子のような気がするが、それにしては口調が少しおかしい。

『しかし困った』

そしてどうやら困っている様子だ。悪意を感じられない雰囲気から、演技ではなく本当に困っているようだと侑人は察する。

「なにやらお困りのようですがどうしました？」

『うぎょ！？』

侑人が急に話しかけたので声の主は驚いたようだ。子供っぽい驚き方をする声の主に少し親近感を持った侑人は、思わずクスクスと笑ってしまう。

声の主はそんな侑人の姿に気分を害したのか、不機嫌そうな態度を隠そうともしない。

『言葉が判るならさっさと返事をせい、この馬鹿者が！』

威厳を保とうとしているのか言葉使いは少しきつめではあったが、先ほどの驚く素の声を聞いてしまった侑人には、子供が背伸びをしている様な言葉使いにしか聞こえない。

思わず笑いそうになるのを堪えて、相手に合わせて丁寧に応対する。

「頭に直接声が聞こえたもので、気のせいかと疑っておりまして返事が遅れました」

『ぐぬぬ……確かにそれはそうだが……』

「お待たせしてしまったようで申し訳ありませんでした」
『わ……分かれば良いのじゃ分かれば』
丁寧な対応に相手も納得したようである。相手が落ち着いたのを感じた侑人は、先ほどと同じ質問をもう一度問い掛ける。
「先ほどからお困りのようですがどうしました？」
『おお！　そうじゃったそうじゃった！！』
用件を思い出した声の主は少しだけ改まったような雰囲気になり、侑人はようやく事態の把握が出来る事に少しだけ安心するが、その安心感は一瞬のうちに消え去る事となる。
『どうやらおぬしの中に閉じ込められてしまったようなのじゃ』
「はい？」
侑人は相手の言っている意味が良く理解出来ない。鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして呆けている。
『だから、わらわがいる場所はお主の体の中で、今のところは自分の意思で表に出られない様子なのじゃ。きっかけさえ掴めれば何とかなりそうな気もするがの』
「テレパシーでどこか遠くから会話している訳ではないのですか？」
『てれぱしぃとかいうものが何なのかは分からんが、わらわはここに……おぬしの中に閉じ込められておるぞ』
「そ……それは確かに困りましたね」
どうやら異世界に召喚されてから起きた問題の中でも、最大級の

問題らしい事を把握した侑人は、声の主とこの後しばらく会話を続けるのであった。

話し込むこと一時間。

侑人と彼女はおかしな状態に巻き込まれた同士としてすっかり意気投合していた。状況を把握する為にお互いの秘密を暴露しあった事も影響しているかもしれない。

彼女の名前はアンジェリーナと言うらしく、本人曰くクーラント魔国の第一王女との事である。『わらわの事はアンナと呼んでよい』と侑人に向かって許可しているところをみると、意気投合した相手に対してはかなり気さくな人柄であるようだ。

しかしあまりに気さく過ぎて、侑人はアンナが本当に王族なのかどうか半信半疑ではある。一般人である侑人が王族と会話をする機会が今までにある訳も無く、王族にはもっと威厳があるはずだという先入観がどうしても抜けない。

『何か文句あるか？』

『いっいえ……トクニナイデス』

どうやらアンナは、侑人が昨日魔力を開放した直後に意識を取り戻したらしい。自分が何処に居るのか把握しようと試行錯誤しているうちに、侑人が寝てしまったと言っていた。話しかけるタイミングが遅かったようじゃなと、何やら楽しそうにケラケラ笑っている。

ちなみに今日が風の月の第七週の七日と教えた当初は、少し落ち込んではいたが『まあ過ぎた事はしょうがあるまい』とすぐに立ち直った。

アンナはかなり明るく前向きな性格のようである。

ちなみに本人が覚えている記憶では、風の月の第一週の二日の記憶が最後らしく、その日は奇しくも侑人が召喚された日と同じであった。

『奇遇じゃの』

『奇遇と言うよりは必然だったという気がしますが』

アンナと色々会話をしているうちに判った事だが、侑人が思考すれば言葉としてアンナには聞こえるらしく、独り言のようにブツブツと呟かなくても会話は成立した。逆に聞かれたく無い内容は、日本語で思考すればアンナには理解出来ないらしい。

一人でブツブツと呟く怪しい人にならずに済んだ事と、考えを全てアンナに聞かれずに済みそうだと判った事で、侑人は少し安心する。

お互いにこれまで起こった事に付いて色々と話し合った結果、この事態を招いた原因について侑人もアンナも一つだけ思い当たる。むしろそれ以外の原因は考えられない。

『あの謎の声が原因かの』

『あの謎の声が原因でしょうね』

アンナ曰く、あの謎の声はハルモ教の神の声の可能性があるとの事だったが、今となっては確認しようが無いので、もし侑人が教会内に入る機会があれば調べる事になっている。

とにかく原因については思い当たったが、解決策が全く思い浮かばない。焦っても仕方あるまいというアンナの意見に従って、すで

に世間話を始めている二人であった。

『まさか黒髪の勇者の中に閉じ込められていたとは思わなかったぞ。本来であれば黒髪の勇者は我が国の敵ではあるが、ユートなら多分問題無かろう』

『だから勇者じゃないとさっきから言っているじゃないですか。それにどこかの国に敵対するつもりもありませんよ』

『この村でユートがしでかした事を考えれば、じきに国中で勇者扱いされるとわらわは思うがの。そうなればいつまでも国がユートの事を無視したままでいるとは思えんがの』

『ぐぅ……確かにそうかもしれませんが……』

こんな調子で、すでに上下関係が出来上がりつつある。侑人の体の中にアンナが寄生している形になるので、宿主は侑人のはずなのだが立場はなぜか弱い。

アンナに会話の主導権を握られタジタジの侑人であったが、ふと気になる事を思い出しアンナに質問をする。

『アンナが目覚めた時、突然自分の魔力量が桁違いに跳ね上がったのですが、アンナには心当たりはありますか？』

質問を受けたアンナは少し考えた後、わらわの予想じゃがという前置きを付けて答える。

『以前のユートの魔力が極端に少なかったのは、ユートの魔力をわらわが吸い取っていたからじゃろう』

『どういうことです？』

『ユートに取り込まれた時のわらわは瀕死の重傷だったのじゃ。魔

力も尽きかけており回復の為にユートの魔力を吸い取っていたのじゃろう』

『という事は、今の魔力が私の正規の魔力量になるのでしょうか？』

『それは少しちがうかもしれんの』

アンナは少し間をおいてから言葉を再度続ける。

『今のユートが持っている魔力の殆どは、わらわの魔力が占めていると思う』

『何故分かるのですか？』

『わらわの以前の魔力量と殆ど同じだからじゃ。それに感じる魔力の雰囲気もわらわの魔力と同じ雰囲気を持っているようじゃ』

『魔力にも個性があるのですね』

『言い換えればそうじゃな。魔力は各々の特性によって異なる雰囲気を持つものなのじゃ』

『では私自身の魔力量は相変わらず少ないのですか』

侑人は少しだけがっかりする。魔力量が増えれば色々な可能性が広がっていくだろうと期待していたのだ。しかし次のアンナの言葉が侑人に期待を持たせる事となる。

『今は少ないのぅ。でもわらわが魔力を吸い取る事を止めたので、これからユート自身の魔力もどんどん溜まっていくじゃろう。わらわの見たところ、わらわと同じ位の魔力を持つ可能性がありそうじゃ』

さすがは黒髪の勇者と付け加えながら、ケラケラと楽しそうに笑

うアンナ。
　侑人は自分が勇者などではないと再度主張しようかと思い悩んだが、楽しそうに笑うアンナの様子を感じて、わざわざ水を差さなくても良いだろうと思い直す。

『アンナの魔力なのになぜ私が使う事が出来たのでしょう?』
『それはわらわとおぬしが融合しているからだとは思うが、わらわにもよくわからん』

『はやく元に戻れると良いですね』
『そうじゃのぅ……まあいつかなんとかなるじゃろ！　わらわの本当の姿を見たらユートはきっと惚れると思うぞ』

　相変わらず楽しそうなアンナ。そんなアンナに好印象を持ちつつ、ふと先ほどまで見ていた、長い紅い髪の毛と少しきつめの紅い双眼が印象的な少女の夢を思い出す。

『ちなみにアンナの容姿なのですが、紅い長い髪型で眼は紅い色をしている感じです?』
『なぜユートはそれを知っているのじゃ?』

　夢の中で姿を見ましたとアンナに伝えながら、少し考え込む侑人。魔法に必要なものは魔力とイメージ力と意志の力。もし魔法としてアンナをイメージしたらどうなるのかとふと思いつく。
　ベッドに座ったまま目を瞑り集中する。夢の中で見た少女を強くイメージし、両手から魔力を放出する。

　部屋中が眩いばかりに輝く。光が収まった後の部屋の中央には、紅い長い髪の毛をした赤い双眼の女の子が、きょとんとした表情で座り込んでいた。

「上手く行ったようですねアンナ」
「おおおお！　でかしたぞユート！」

目の前の少女は本当に嬉しそうな笑顔で侑人に抱きついて来る。
アンナはかなり興奮した様子を隠そうともしない。
侑人は年頃の少女が知り合ったばかりの男に抱きつくのはどうかと一瞬だけ考えたが、嬉しそうなアンナ流されてされるがままになっている。

「まさか召喚魔法もどきまで使えるとは思っていなかったぞ！」
「アンナの姿をイメージしたらたまたま上手く行っただけです」

侑人はアンナに笑い掛ける。
そしてこれで元通りですねとアンナに語り掛けたが、アンナは少し真面目な顔をしながら大きく首を左右に振る。

「今のわらわは召喚されただけの存在なのじゃ。だから多分ユートの側から極端に離れる事が出来ないと思う」

そう言い終わるとアンナは蝙蝠の姿に擬態し窓から一直線に飛び去っていく。その姿を呆気に取られた様子で見つめていた侑人の頭の中に、突然アンナの声が響く。

『この通りある程度離れてしまうとユートの中に強制的に戻されてしまうのじゃよ』
『なるほど……良く分かりました』

上手く行かなかった事に侑人は少し落ち込んだが、わらわを召喚できるだけでもすごい事じゃと、明るい様子で話しかけてくるアンナに励まされ、いつか他の方法を見つけようと決意する。

この日からハルモ教の黒髪の勇者である侑人と、クーラント魔国の姫アンジェリーナの奇妙な同居生活が始まったのである。

第１１話：魔国の姫君（後書き）

侑人の丁寧な言葉使いがマテル語で、通常の言葉使いは日本語と脳内変換して頂ければと思います。

第１２話：勇者と従者

クーラント魔国の姫君であるアンジェリーナとの、奇妙な同居生活が発覚した日の翌日。侑人はさわやかな目覚めで朝を迎えていた。

昨日一日をほぼ丸々睡眠と休憩に充てていた為、気力体力共に充実し体調は万全になっている。侑人自身の魔力の回復はまだまだ完全では無さそうだが、今までより確実に魔力量が多くなっているような雰囲気を感じている。

アンナの仮説は間違いでは無さそうだと考えながら、侑人は１階のダイニングへとゆっくりと向かう。

するとすでにマリアが起きていて、朝食の支度をしているところだった。

「おはようございますマリア」

「あっ！　おはようユート。体の方は大丈夫そうなの？」

少し心配そうにしているマリアに向かって、笑顔で問題ありませんと返答し、ダイニングの椅子に座る侑人。

マリアは侑人の前にカップを置き、ポットから入れたての紅茶を注いでいく。

「大丈夫そうだから安心したけど、あまり無理しちゃ駄目だよ」

笑顔でウィンクしながらそう告げると、朝食の支度がもうすぐ終

わるから少し待っていてと言い残しキッチンへと向かう。
マリアは非常に機嫌が良さそうであり、その足取りは軽かった。

マリアの入れてくれた紅茶をひとくち口に含む。紅茶の事を詳しくは知らないが、マリアの入れてくれた紅茶は非常においしく感じる。

そんな朝の優雅な雰囲気の中ゆったりとした時間を過ごしていた侑人であったが、突然頭の中に響いたアンナの質問がそんな雰囲気を一変させる。

『あの小娘はユートの女か？』
「ぶっ！！」

アンナの予想外の言葉が脳内に響き渡り、驚かされた侑人は紅茶が気管に入りむせてしまう。ゲホゲホと苦しそうにしている侑人の姿を見たマリアは、心配した顔をしながら慌ててキッチンから戻り侑人の背中を優しくさする。

そんなマリアに対して、慌てて紅茶を飲んだら気管に入ってしまっただけだと説明し、心配掛けてすみませんと謝る侑人。昨日の今日だからあまり無理はしないようにとマリアは侑人に対して言い残し、再びキッチンへと戻っていった。

『やはりユートの女だったではないか』
『昨日も説明した通り、マリアとヨーゼフさんは私の恩人なのです。恩人に向かってなんて事を言うのですか！』

脳内会話でアンナに抗議をする侑人。しかしアンナは納得がいかない様子であり、何故か少し不機嫌そうな感じだ。

『あの小娘の雰囲気はそれだけには感じられないが』

『マリアは誰にでも優しい人なのです。それに私とマリアでは年齢も容姿も釣り合いません。マリアには私なんかよりも相応しい相手が居るはずですよ』

『うーむ……黒髪の勇者のユートならば、王族相手でも立場的には何も問題が無いと思うがのぅ』

『だから勇者じゃないと昨日から何度も……まあその事は置いといて、とにかくマリアとはそういった関係ではありませんから！』

この話はもうおしまいという雰囲気を込めて侑人は言い切る。そんな侑人の態度にアンナは、まあユートがそういうならそれでいいじゃろうと、とりあえずは納得してくれた様子である。なぜか機嫌も少し良くなっていた。

アンナと脳内会議で激論を戦わせている間に、朝食の支度は終わったようだ。マリアは侑人と自分の分の朝食をダイニングに並べていく。

朝食を並べているマリアにお礼を言いつつ、ひとつ疑問に思った事を質問する。

「ヨーゼフさんの分はどうしたのですか？」

「おじいちゃんは今朝早くに村長さんの家に出掛けたよ。何か用事があるんだって」

朝早くからヨーゼフさんも大変だなと思いながら侑人は朝食に手をつける。そんな侑人の姿を少し複雑そうな顔をしながらマリアは見つめている。

実はマリアはヨーゼフが出掛けた理由を聞いていた。黒髪の勇者の噂……侑人の噂を広めないように、村長を通じて村人達に伝えてもらえないかという相談をする為に出掛けたのだ。

「すでにもう手遅れだとは思うがの」

そう言い残して今朝早くに出掛けていったヨーゼフの姿を、侑人を見ながらマリアは思い出していた。

侑人に余計な心配を掛けないようにこの件を伏せたマリアだったが、隠し事をしている後ろめたさがマリアの表情を暗くしているのであった。

侑人たちが朝食を食べ終わり食後の紅茶を楽しんでいる頃、用事を終えたヨーゼフが帰宅する。ヨーゼフはマリアの顔を見て首を横に振り、マリアはその仕草を見て首を竦めて苦笑いをしている。そんな二人の仕草を侑人は不思議そうに眺めていた。

ヨーゼフは侑人の対面の椅子に座り少し溜息をつき、マリアはそんなヨーゼフの前に紅茶を置く。置かれた紅茶からは湯気が立ち上っている。

「色々と手を打とうとしたのだが無理そうじゃ。ユートの事はすでに村中の噂になっており、すでに村外まで噂が広がっていると考えた方が良さそうじゃ」

侑人はその言葉を聞いてヨーゼフが今まで何をしていたのか察した。自身の行動がヨーゼフ達を巻き込んで迷惑を掛けている事に気がついた侑人は、少し沈んだ表情をしている。

「遅かれ早かれこうなる事は判っておったから、そんな顔をするでないユート。いつまでもこの家の中に閉じ篭って、人目を避け続け

る訳にはいかなかったじゃろうし、今回の件もユートが居なかったら村は大損害を出しておったはずじゃ」

「そうだよユート」

自分の行動にもっと誇りを持った方が良いと、笑いながら侑人に語りかけるヨーゼフ。マリアもしきりに頷いている。

「とにかく数日の内には、セルビナ王国中に噂は広まるとわしは考えておる。下手をすると数週間の内にはハルモ教法王庁教圏国家群どころかマグナマテル全域に噂が広まるとも考えられる」

ヨーゼフは自身の予想を侑人に伝える。アンナも『まず間違いなく広がるじゃろうな』と侑人の意識の中で相槌を打っている。

ハルモ教の元神官と一国の姫君。一般の人達よりも遥かに高い教養を持つ二人の意見は非常に説得力がある。侑人はその他の可能性を色々と考えてみたが、最終的には二人の意見が一番現実的だということに納得し、自身が置かれている現状を理解した。

「それでのぅ、ユートには少し覚悟をしていてもらいたいのじゃが」

「国やハルモ教教会が、私の事をこのままにしておくはずが無いということですね？」

ヨーゼフの言葉に侑人は即座に答える。その返答を聞いたヨーゼフは、何も言わず深く頷くのであった。

その後侑人がこれからどうやって生活していくかという事について、三人で色々な意見をかわし合った。

結論としては状況がこれ以上変わることは無いし、遅かれ早かれ何かの接触がそのうちあるだろうから、それまでは様子を見るという事になった。そして隠れて生活してもすでに無駄な足掻きになる

ので、姿を隠して生活するのは止めることにした。

会話している最中に何件かの来客があったが、後日改めて侑人自身が対応する事を約束し、他の村人達にもそれを伝えてもらった為、現在は来客も無く落ち着いた雰囲気になっている。

そんな雰囲気の中マリアが侑人に向かってある質問をする。質問の内容は侑人の魔力の量が急に増えたのはどうしてかという事であった。

マリアの質問を受けた侑人はどう答えるべきか少し悩む。そんな侑人に対してアンナが語りかける。

『わらわの事を話せば良いのではないか？』

そんなアンナの問いかけに対して、侑人は少し疑問に思った事を質問する。

『クーラント魔国とハルモ教の国々は敵対関係だったと思うのですが？』

『それはそうなのじゃが、そこの二人はユートの味方ではないのか？　現状を詳しく知ってもらう事は悪い事ではないと思うがの』

アンナの言葉を受けて侑人はさらに悩む。そして自分の中で結論を出した後、アンナに向かって一応確認を取る。

『二人にアンナの事を話してしまっても良いでしょうか？』

『ユートが信頼している者達ならば、わらわは別に構わぬ。解決策が何も無い現状では味方は一人でも多い方が良い。しかもそこの老人は元ハルモ教の神官だったというではないか。良い情報が聞けるやも知れぬ』

アンナの意図を察した侑人はマリアとヨーゼフに向かって、二人以外には秘密の内容であるから他言無用にしてもらいたいと前置きをつけて、現状のアンナとの奇妙な同居生活についての話をする。

侑人の会話を聞いた二人は当初、あまりにありえない話に半信半疑な様子であった。しかし侑人が目の前でアンナを召喚すると、目を白黒させながらコクコクと頷く。

「最近のユートって何でもありだよね……」

「わしも長い事生きてきて並大抵の事では驚かない自信があったのじゃが、これはさすがのわしでも想像すら出来なかったわい……」

目の前で呆気に取られている二人に向かって、アンナはいつもの明るい調子で自己紹介をする。

「わらわはクーラント魔国の第一王女、アンジェリーナ・ヴィヘルム・ケトラーじゃ。気を失っているうちに、ユートに手篭めにされてしまったのじゃ。ユートから離れる事が出来るように協力して欲しい」

「誤解を招くような表現は止めて下さい！」

慌てる侑人に対して、わざとじゃと言いながら楽しそうにケラケラ笑うアンナ。ヨーゼフとマリアはそんな二人のやり取りを、ただただ呆然と眺めていた。

「アンジェリーナ様は、クーラント魔国の姫君で間違いないのですかな？」

かしこまった態度のヨーゼフに相対しても、アンナは気さくな態度を崩さない。気後れという言葉はアンナの辞書には書かれていな

い様である。

「いかにもわらわはクーラント魔国の第一王女である。じゃがヨーゼフ殿はユートの恩人と聞き及んでおる。ユートの恩人であるならわらわの恩人でもあるし、わらわの事はアンナと呼び捨てで良い」

「はぁ……」

「それはそうと、正直わらわも今の状況には困っておる。元神官であられるヨーゼフ殿の知恵をお借りしたい。この通りじゃ」

「頭をお上げ下さいアンナ殿！」

殊勝なアンナの態度を見たヨーゼフは少し態度を軟化させる。クーラント魔国の姫君という事でかなり警戒していたが、悪い人物には思えない。

そして自身が知るハルモ教の事についてアンナに語り始める。その話の中には今回の二人が融合してしまった状況を解決できるようなものは何もなかったが、アンナはヨーゼフに対して丁寧にお礼を言う。

アンナの質問に対して一通り答えたヨーゼフは、今度は自身が一番聞きたかった事をアンナに尋ねる。

「ではアンナ殿に一つだけ質問があるのじゃが宜しいかな？」

「どういった内容かの？」

ヨーゼフは少し間を置く。アンナを見つめる目が少しだけ鋭くなっている。

「アンナ殿が黒髪の勇者の調査をする為にハルモ教正教会に潜入したという事は先ほどお聞きしましたが、もし黒髪の勇者を発見して

いたらどうするおつもりだったのか……それを正直に話して欲しいのですじゃ」

その言葉を聞いたアンナは今までの気さくな雰囲気から一転して真面目な表情になる。

そして少しだけ目を瞑り考え込んだ様子を見せたが、直ぐに目を開けてヨーゼフの目を真っ直ぐに見つめる。先ほどまでとは違い今のアンナの姿は、一国の姫君に相応しい雰囲気を纏っている。

「黒髪の勇者をもし発見できた場合、我が国の障害となるようならば、しかるべき処置を取り最悪の場合は排除する……そういった意見が魔国内で数多くあるのは事実じゃ」

アンナの言葉を受けて辺りは緊張感に包まれる。

「わらわがエディッサ王国に潜入すると決まった時、父上からは自己判断で黒髪の勇者を排除しても構わないとも言われておった」

その言葉を聞いたヨーゼフはかつて無いほどの真剣な表情になり、マリアに至ってはアンナの顔を思いっきり睨み付けている。

しかしそんな二人の態度の変化など何も気にせず、アンナは終始淡々とした様子を崩そうとはしない。

「しかしの、わらわの本当の目的はそんなものではない」

二人が唾を飲み込む音が響く。二人の緊張はピークに達していた。

そんな二人の雰囲気を他所に、アンナは少し間を空けて大きな声で周囲にこう宣言した。

「わらわは……黒髪の勇者がどんな者なのかこの目で確かめたかっ

ただけなのじゃ！」
「……」
「……」

ヨーゼフとマリアは絶句している。アンナの目的を前もって聞いていた侑人は、苦笑いをしながらそんな二人を見つめていた。

「えーと、アンナは黒髪の勇者に会った後の事は、何も考えていなかったのね」

ヨーゼフより先に立ち直ったマリアが、少し呆れながらアンナに話し掛ける。そんなマリアの言葉を聞いたアンナは不機嫌そうに答える。

「これだから考えの浅い小娘は困るのじゃ。相手がどんな者か判らないうちに、あれこれ考えても上手く行くはずがないのじゃ」

アンナの挑発するような物言いに、マリアも言い返す。

「小娘って！　アンナも私と年は変わらないじゃない！」
「思慮深いわらわを小娘のマリアと同じだと思わないで欲しいんじゃがのぅ」
「思慮深いって……アンナの行動は考え無しっていうのよ！」
「考え無しとは何じゃ考え無しとは！　戦場ではその場の一瞬の判断が、生死を分けるんじゃぞ！」
「何も考えずに突っ走れば戦場でも死に掛けるでしょうね！」
「わらわはいつも考えておる！」

侑人の目の前で美少女同士の喧嘩が始まった。どうやって止めたら良いのか思いつかない侑人はオロオロしながらヨーゼフに視線を向ける。

視線を向けられたヨーゼフは首を竦める。止める事を諦めた二人の男達の前で、美少女同士の争いはどんどんヒートアップしていった。

それから数十分後、二人の少女は机に突っ伏していた。お互いに一歩も引かない激しい攻防を繰り広げた二人は、気力を使い果たし大人しくなっている。

部屋が静かになったのを確認した後、侑人はヨーゼフと二人で今後のアンナの事について話し合っていた。

「私は魔国とハルモ教の関係もあるので、アンナには目立たず大人しくしてもらいたいと思っているのですが」

「わしもそれには同感なのじゃが、アンナ殿の性格を考えると、いつまでも閉じ篭っている訳にはいかないと思うがの」

ヨーゼフの言葉で先ほどの惨状を思い出した侑人は思わず苦笑する。マリア以上のお転婆であるアンナが大人しく引き篭もっている姿など想像も付かない。

「たしかにそうですね。ではどうしたら一番良いのでしょうか？」

侑人の質問にヨーゼフはしばし考える。そしてある事を思いついたヨーゼフは、侑人にその考えを伝える。

「いっその事、いまの状況を利用してしまったらどうかの？」

「今の状況を利用するとは？」

ヨーゼフが侑人に語った内容を要約すれば以下の意味合いになる。

侑人が黒髪の勇者であるという噂をもう止める事は出来ないので、逆に侑人が黒髪の勇者であるという噂を利用して、アンナの立場を黒髪の勇者が召喚する従者として確立してしまえば人目についても問題が無くなるのではないか。

しかも人知を超えた存在である黒髪の勇者ならば、召喚魔法が使えても人々は不思議には思わないはずであり、黒髪の勇者の噂の中にアンナの事も混ぜてしまえば目立たなくなる。

後はアンナがクーラント魔国の姫君だという事だけを上手く隠せば良いので、一番危険が少ないように思えるがどうであろうか……と。

ヨーゼフの考えを聞いた侑人は一理あると納得し、机に突っ伏したままのアンナに問いかける。

「私の従者と言う事になってしまいますが、アンナはそれで良いですか？」

「わらわは別にかまわぬ。自由に動けるならそれ位は気にしないぞ。それにわらわの顔を知るものは、我が国の者かグランツ帝国の一部の者に限られるから、この国では問題ないはずじゃ」

机に伏せたままのアンナは力なくそう答える。アンナは王女のプライドと自由に動ける事を天秤に掛け、後者を選択したのであった。

そしてこの日から数えて一週間後には、ハルモ教法王庁教圏国家群全域の隅々まで黒髪の勇者の噂は駆け巡っていた。ヨーゼフの思惑通り侑人の事と合わせてアンナの噂も広まっていく。

小坂侑人は黒髪の勇者ユート・コサカとして、クーラント魔国の

第一王女、アンジェリーナ・ヴィヘルム・ケトラーは、黒髪の勇者が召喚する従者のアンナとして、各々の立場をハルモ教法王庁教圏国家群全域で確立する事となる。

ついに侑人がマグナマテルの歴史の表舞台に登場したのであった。

第１２話：勇者と従者（後書き）

表舞台に引っ張り出すまでに時間を掛けすぎたと少し反省しています。

第１３話：大嵐の収穫

風の月の第八週の七日。セルビナ王国の首都セルビナにある王城の執務室では、国王のカルロス・デア・グローセが、セルビナ王国各地から上がってくる先日の大嵐の被害報告書に目を通していた。

「国内が大変な状況な時に戦争を行っているとは、見栄っ張りの自称皇帝と石頭法王にも困ったものよ。そうは思わんかアルクィン」

カルロス王は側に控えるセルビナ王国宰相、アルクィン・ウルヘルに声を掛ける。意見を求められたアルクィンは、少したしなめるような口調で返事をする。

「フリードリヒに対してならまだしも、法王猊下に対して石頭などと表現されるのは、ハルモ教信者の立場としてはどうかと思います。それとは話は全く変わりますが、カルロス王には人を評する才能がおありのようで臣下としては嬉しい限りです。ちなみに他意は有りません」

宰相アルクィンの人をくったような返答を聞いたカルロス王は、何か悪巧みを考え付いたような顔をしている。口元はニヤ付いていて何やら非常に楽しそうだ。

それとは対照的にアルクィンは済ました顔をしている。『何か問題でも？』といった様子で淡々と自身に与えられた職務をこなしていた。

「相変わらずアルクィンは腹黒よのぅ」
「カルロス王に比べれば私などまだまだです」
そんないつものやり取りが、セルビナ王国の執務室の中では行われていた。
「しかし季節外れの大嵐には困ったものだが、二つだけ収穫があったな」
カルロス王のそんな呟きに対して、宰相アルクィンは質問を投げかける。
「一つはグランツ帝国軍の一時撤退の事でしょうか」
「うむ。一つ目はそれだな」
目の前の報告書に目を通しながら返事をするカルロス王。その書類には四日前の戦闘の様子が記録されていた。
風の月の第六週の一日にグランツ帝国がプロセン王国に対して、正式に宣戦布告した事によって開戦された此度の戦争は、終始グランツ帝国側の優勢で事が進められていた。
数の上では王国連合軍が勝っていたが、長年クーラント魔国と戦ってきた百戦錬磨のグランツ帝国軍と比べて、王国連合軍の兵の錬度は低く防衛ラインはじりじりと後退していく。
そして大嵐が来る三日前の時点で、プロセン王国の王都にまで攻め込まれ、このままでは一週間と持たずに落城するところまで追い詰められていた。

「追加の援軍を用意させた事が無駄になったな」
「そのような無駄でしたらいくらでも許容します」

しかし今回の大嵐で戦況が一変する。
マグママテル全土に甚大な被害をもたらした今回の大嵐は、両軍がにらみ合うプロセン王国の王都でも猛威を振う。多数の河川は氾濫し、切り立った山間の崖は所々崩れ落ちた。
頑丈な城壁に囲まれた城の中に篭っていた王国軍にも多少の被害は出たが、野営していたところを直撃されたグランツ帝国軍の被害は甚大なものだった。兵糧は押し流され、多数の兵馬にも被害が出ていた。嵐が収まった時には実に半数以上の兵士が戦闘不能の状態に陥っていたのである。

王国連合軍は嵐が収まると同時に反撃を開始。消耗しきっていたグランツ帝国軍を一気に国境付近まで押し返す。
今回の戦いで帝国正規軍の先発隊十五万人のうち、六万人だけが祖国の土を踏めたのであった。

「此度の状況は運の要素だけで逆転した。しかし戦争には天運も必要だ」

カルロス王は書類を見つめたまま呟く。宰相アルクィンは王の言葉を聞いた後、自身の見解を王に告げる。

「グランツ帝国軍は此度の戦いで甚大な被害を出しました。皇帝が侵攻を諦めるとは思いませんが準備期間も必要です。次回の侵攻は少なくとも一月後にはなるかと思います」

宰相の見解を聞いた王は満足げに頷く。一を聞けば十も二十も察する事の出来るアルクィンの意見は常に的を得ており、味方で居て

くれる事がこれほど心強い人物はそうは居ない。

「それともう一つの収穫の方だが」

そう言ったカルロス王は、目の前に積まれた書類の山とは別のところに置いていた、一つの薄い報告書を手に取る。その書類にはティルト村に現れた黒髪の勇者の詳細が記載してあった。

「この報告書の内容が事実だったとして、アルクィンならどう動く？」

黒髪の勇者に関する報告書を宰相アルクィンに渡しつつ真剣な表情で見つめる。先ほどまでの軽い雰囲気は既に無く、王としての威厳に満ちた姿をしていた。

宰相アルクィンは書類に目を通しながら少し考えた後、書類から目を上げカルロス王の視線を真っ向から受け止める。

「私なら村を救ってくれた謝礼と言う名目で、黒髪の勇者を此処に招待します。策は弄せず誠心誠意をもって接します」

「なぜそう思うのだ？」

「この報告書を見ると、黒髪の勇者は大嵐から村を救った後も、無償で村の為に貢献しています。地位や名誉といったものに踊らされるような人物には思えません」

「此処に招いた後はどうするのだ？」

再度の王の問いかけに宰相はすました顔で答える。

「黒髪の勇者の人となりを直接見た訳ではありませんので、会ってから考えます」

宰相アルクィンの人をくったような返答にカルロス王は大笑いをする。そしてそなたにこの件は任せると言いかけた時、突然執務室の扉が開いた。

執務室の扉を開けたのは一人の武官である。門を守る衛兵を無視して扉を開けたその武官は、王に向かって矢継ぎ早に言葉を発する。

「黒髪の勇者が片田舎に現れたと言う事は本当でしょうか！？」

宰相アルクィンはそんな武官をたしなめる。

「王の御前で少々無礼ですぞ、ゲオグル殿」

宰相にたしなめられた男は露骨に嫌そうな顔を宰相に向け、そしてしぶしぶといった感じで王に向かって謝罪の言葉を述べる。

執務室に突然現れたこの男の本名はゲオグル・プロノイ・オストロといい、爵位は伯爵である。オストロ家は代々武官を務める名門の家柄であり、ゲオグル伯爵もそれなりの武勇を有してはいる。

しかしこのゲオグルという男は少々自分本意でものを考える傾向があった。自分の名誉の為ならば多少の軍記違反を平気で起こすので、他国との協調性が求められる今回のプロセン王国の援軍には宰相の判断で選抜しなかった。

カルロス王も宰相の判断に同意し派遣を見送ったのだが、手柄を立てるチャンスを邪魔された形になったゲオグル伯爵は宰相の事をかなり疎んじている。

とはいえ、元からとある理由で伯爵はアルクィンの事を快く思っていない為、状況が変化した訳ではなく、アルクィン自身も伯爵から好かれようと思ってもいないので特に問題は無い。

「まあよい宰相。それでその事を確認してどうしようというのだ？」

王の言葉を受けたゲオグル伯爵は、自信満々な態度で王に告げる。

「黒髪の勇者を我が国に迎える為に、このゲオグル自らが赴こうと思っています」

ゲオグル伯爵の言葉を聞いたカルロス王と宰相アルクィンは顔を少ししかめる。しかしそんな二人の姿に構わずゲオグル伯爵は言葉を続ける。

「お二人とも吉報をお待ちになっていて下さい。では準備があるので失礼します」

カルロス王はゲオグル伯爵を呼び止めようとしたが、ゲオグル伯爵は言いたい事だけを言い放ち足早に去っていく。仮に呼び止めたとしても耳に入りそうも無い。

宰相アルクィンは王の横で何やら考え込んでいる。カルロス王はゲオグル伯爵を呼び止めようとしなかった宰相の姿に少し疑問を持つ。

「あれが行って大丈夫なのか？」

「私の予想では門前払いの確立が三割、黒髪の勇者を怒らせる可能性が六割、しぶしぶでも我が国に従ってくれる可能性が一割といったところでしょうか」

楽観的に考えてですがと付け足す宰相。しかしその姿はいつもの落ち着いた宰相の姿であり、戸惑いや不安な様子を微塵も見せない。

そんな宰相の姿を見たカルロス王は楽しそうに笑う。いつも通りに宰相に任せておけば問題が無いと思わせるだけの安心感を漂わせ

ている。

「どうせ何か策を考えているのであろう。この件はそなたに全面的に任した。必要な物があれば自由に使ってよい」

カルロス王の言葉を受けた宰相アルクィンは王に深く一礼をし、静かに執務室を後にするのであった。

水の月の第二週の三日。本格的に雨季に入ったマグナマテルの大地には、日々シトシトと恵みの雨が降り続いている。しかし今日は珍しく雨季の合間の一休みといった感じで晴れ間が覗いている。

侑人が堤防の決壊から村を救ってから十日ほど経ち、今では村の様子も大分落ち着いてきていた。

当初は八百年ぶりに降臨したハルモ教の黒髪の勇者として、侑人が信仰の対象になりかけるほどの騒ぎになっていた。村人達からは尊敬と畏怖の対象に見られ、年配の方々には神の使いとして拝まれる事もあった。

しかし侑人が地道に村人達との交流を図っていった結果、黒髪の勇者としての扱いはどうしても変えられなかったが、一人の人間としての立場を村内で確立し、名誉村民として普通に生活する事ができる様になっていた。

そんな風に充実した毎日を送れるようになった侑人ではあったが、一つだけ悩んでいる事がある。悩みの内容は村内の問題事の解決のお願いが、日々侑人のところに舞い込んで来ることであった。

村人の力になる事には何の問題も無かったが、そちらに割く時間

が大幅に増えた為、ホラント家の家事に割く時間が減ってしまっているのだ。

そんな侑人の状態を知っているマリアとヨーゼフは、家の事は気にしなくても大丈夫と言ってくれる。そんな二人の優しい性格に甘えてしまっている形になる侑人は、二人に感謝しつつも日々恐縮しながら生活をしている。

そして侑人は今日もまた村長に頼まれて、先日決壊を食い止めた堤防とその脇に走る道路の改修工事を行なう為に河原に来ていた。

「堤防の美観の改善と、道路の砂利舗装を行なえばいいのでしょうか？」

「ユート殿を頼ってばかりで大変申し訳ないとは思っているのですが、なにぶん私達の知識と技量ではこれと同じ物はなかなか作れないのです」

侑人の隣に立っている村長のレサク・ヤカブは恐縮した態度でオドオドしている。黒髪の勇者にこんな事を頼むのは失礼に当たるのではと終始心配していた。

元の世界で建築関係の技術者として、最先端の知識を有していた侑人と、１３世紀のヨーロッパ程度の技術しか無いこの世界の住人では元々の知識の量が全く違う。侑人にとって土木工事は畑違いの分野とはいえ、この世界の土木関係に従事する者より遥かに進んだ知識を有している。

しかも大掛かりな工事を行なうのに必要な重機はこの世界には存在しない。木製のスコップや土を運ぶ為の一輪車は存在するが、人力で土を運び岩を加工して石堤を作るとなると数年がかりの大事業になる。

侑人はその問題を魔法で解決してしまっているので特に問題は無

いが、魔法を使えない村人たちにとっては大問題である。その事を十分に把握している侑人は、レサク村長の恐縮する言葉に対して笑顔で答える。

「私にとっても魔法の練習になるので気にしないで下さいね」

自分にとってはたいしたことではないとか、時間が余っているから大丈夫とか、そういった理由で引き受けてしまうと、村長が余計に恐縮してしまいそうだったので、自分の魔法の練習の為に行なうという理由付けにして侑人は快く引き受ける。

対人関係に細心の注意を払った円滑な人間関係の構築を図る言い回しは、サラリーマン時代に上司から叩き込まれた侑人にとっては普通の事である。

しかしレサク村長をはじめとする村人達は、膨大な魔力と力を有しているはずの黒髪の勇者が、一般人に敬意を払って接してくれている事に驚きを感じている。

無償で村民の為に力を振う侑人の姿を見て、さすが黒髪の勇者は一味違うと村民全員が感動していた。人々の更なる尊敬を自分の知らない所で集める侑人であった。

「危ないから少し下がっていて下さい」

侑人は堤防の整備から手を付ける事にして、魔法を使う為に自身の魔力を開放する。侑人の体から周囲の景色を歪ませるほどの圧倒的な魔力が溢れ出す。

一流の魔道士の何十人分に相当する魔力量に、村人たちからは感嘆の声が漏れる。

侑人は最近アンナから教えてもらった魔力を抑える方法を身に付

けていて、通常の生活時にはほとんど魔力を感じさせないところまで抑える事が出来る様になっていた。
アンナが覚醒してからの侑人の魔力量はどんどん増大し、今やアンナと同じくらいの魔力量になっている。その為、魔力を抑えないとかなり目立つどころか、他人に恐怖感を与えかねなかった。

「行きます！」

魔力を開放した侑人は、まず決壊を防ぐ為に作った高さ五メートルはある石堤から、船着場までの間を緩やかな勾配を付けた同じ形式の石堤で繋いでいく。全てを五メートルの高さで囲ってしまうと村の景観が著しく悪くなるので、危険エリア以外は基本的に一メートル半ほどの高さに抑えて作成した。
また、船着場を石堤で塞いでしまうと漁に出る際に困るので、船着場の周囲を囲う形で堤防を作成し、船着場の出入り口に門を付けた。大雨の時にはその門を閉めれば浸水しない作りである。

ついでに石堤の上部にも道を作り、石堤の所々には上部に上がるためのスロープや階段を設置していく。
この道は新たな観光スポット的な意味合いもあったが、工事途中の村人達が上部で作業する時の安全面も考慮に入れた侑人の提案であった。その提案を聞いたレサク村長は終始感心した表情で頷いていた。

「こんな所でしょうか？」

大まかな堤防の作成を終えた侑人は、細かい仕上げ工事を村人に任せて、道路の砂利舗装工事に取り掛かる。
とは言っても、こちらの工事は堤防を作成する時に抉ってしまった地面を、石つぶてで埋めるだけの作業なので特に手間は無い。

仕上がりから二十センチほど下がった高さまでを大きめの石で埋め、最後の上部二十センチの部分を細かい砂利で埋めるだけである。
踏み固めて地面を締める作業は村人達が分担するので、侑人に任せられた村内の改修工事は一日掛からず終了した。

『自分の魔力量だけでこれだけの回数の魔法を使えるとは、さすがユートじゃの』
『アンナも少しは手伝って下さいよ』

一通り工事を終えた侑人の脳内でのんきなアンナの声が響く。
侑人が土木工事をしている間もずっと体の中に居たはずなのだが、作業を終えるまで話し掛けて来る事も無く、今まで何をしていたのかは一切不明である。

『わらわは繊細なので、こういった肉体労働はユートに任せると決めたのじゃ』
『左様でございますか……はぁ……』

侑人の抗議に対してアンナはしれっと答える。アンナのそんな態度に少し呆れている侑人ではあるが、元が姫なので仕方無いかなとも感じている。
そんな侑人の姿を見つけたレサク村長が少し離れた木の下から声を掛けて来る。

「ユート殿。お茶を用意させましたのでこちらで休憩して下さい」
「おお！　茶の用意ができたのか。わらわも行くぞ」

村長のその言葉を聞いたアンナは勝手に実体化し、レサク村長が居る木の下に走って行ってしまう。最初の頃は侑人が召喚しなければ実体化出来なかったアンナではあるが、何度か召喚され実体化するうちにコツのようなものを掴んだらしく、最近は自分の意思で侑人の体の中から出たり入ったりしていた。

しかも最近のアンナは黒髪の勇者が召喚する従者として、村人達全員からすでに認知されているので突然姿を現しても何の問題も無い。その為アンナはかなり自由気ままに振舞っている。侑人は村人達と楽しそうにお茶を飲むアンナの姿を見て、少し苦笑いしながら村人達の元へ向かった。

「ん？　珍しいですねぇ」
「どうしたのですか？」
「何かあったのか？」

侑人とアンナが村人達とお茶を楽しんでいると、何かを見つけたレサク村長が訝しげな声を出す。そんな村長の姿を見た侑人達は二人同時に質問をする。

「それがですね……」

侑人の位置からでは木の影になっていてよく見えなかったが、先ほど出来上がったばかりの砂利道を一台の馬車が通り過ぎていったらしい。

馬車を見たがレサク村長が言うには、上流貴族が所有するような豪華な装飾のされた馬車だったとの事である。

その話を聞いた侑人とアンナは、国か教会からの接触があると判断し、お互いに頷きあって村人達とのお茶会を切り上げる。

念のためアンナは侑人の体の中に戻りその間に侑人は帰宅準備を整える。全ての準備を終えた二人は、訪問者が来るであろうホラント家への帰路を急ぐのであった。

第１３話：大嵐の収穫（後書き）

セルビナ王国の国王の名前がいまだに出ていなかった事に今気がつきました。

第１４話：勇者の逆鱗

侑人達がホラント家に向かっていた頃、レサク村長が見かけた豪華な馬車はホラント家に一足早く到着していた。

馬車の中からは派手な鎧を着込んだゲオグル伯爵が姿を現し、数名の従者を引き連れながらホラント家を一瞥し、いきなり失礼な感想を述べる。

「ずいぶんと質素な小屋だな……勇者殿に相応しい環境とは思えぬ」

独り言にしてはずいぶんと大きい声量に従者の顔は引きつったが、ゲオグル伯爵は何も気にせずホラント家に向かって歩いていく。

そしてホラント家の正面に立ったゲオグル伯爵は従者に目配せをする。目配せを合図に従者はホラント家の玄関をおもむろに叩き、その音に合わせてゲオグル伯爵が仰々しく名乗りを上げた。

「セルビナ王国将軍、ゲオグル・プロノイ・オストロ伯爵が、黒髪の勇者と面会する為に王都より出向いて参った。至急の黒髪の勇者との面会を所望する」

玄関からマリアがひょっこりと顔を出す。マリアは愛想笑いしながらゲオグル伯爵一行を部屋に招き入れる。

実は先ほどのゲオグル伯爵の言葉が聞こえていたマリアは、内心かなりむっとしていたが、セルビナ王国のお偉いさんを門前払いする訳にもいかず、ぐっと堪えていた。

リビングではヨーゼフがゲオグル伯爵一行を迎え入れる準備をしていた。伯爵一行に気がついたヨーゼフは丁寧に挨拶をする。

「この家の愚主のヨーゼフ・ホラントと申します。ゲオグル伯爵様」

しかし伯爵はその挨拶に対して返事を返さず、黒髪の勇者殿は何処に居るのだと高圧的にヨーゼフに尋ねる。

ヨーゼフが侑人は出かけておりじきに帰ってくるはずだと伝えると、ゲオグル伯爵はここで待たせてもらうと言い放ちリビングの椅子にどっかりと座った。

「ふむ……」

ゲオグル伯爵一行が訪れたホラント家のリビングは、かつてないほどの異様な雰囲気に包まれている。ゲオグル伯爵は部屋の中をじろじろと探るような目で見回し、マリアが用意した紅茶に口をつけようともしない。そんな伯爵の態度はホラント家の二人の気分をことごとく害していた。

そんな二人の気分などお構いなしに、ゲオグル伯爵は傍若無人な態度を取り続ける。やがて待ちきれなくなったのか、マリアに向かって事もあろうにこう言い放つ。

「そこの亜人の娘。呆けてないで勇者殿を早く迎えに行かぬか。まったく気の利かないやつめ！」

その言葉を聞いたマリアの怒りは頂点に達する。いくら国のお偉いさんとはいえ今の言葉は許せない。

しかしそんな雰囲気を察したヨーゼフはマリアを手で制す。自慢の孫娘を侮辱された事は許しがたいが、今ここに居ない侑人の立場

を悪くする訳にも行かない。

「マリア、済まないがユートを迎えに行ってはくれぬか？」

ヨーゼフの言葉を聞いたマリアは、真っ赤な顔をしたまま玄関を飛び出して行った。

『さっきの馬車はやっぱり国のお偉いさんでしょうか？』
『多分そうじゃの』

『国に仕えろとかそういった話になりそうですね』
『黒髪の勇者が配下になれば、その国の名声はマグナマテル全域で高まるからのぅ』

村人達と別れた侑人達は、会話をしながらホラント家への帰路を急いでいた。そんな二人の前の方から見知った顔が近づいて来る。

その人物は侑人の目の前で立ち止まる。暫くの間、真っ赤な顔をして大きな金色の瞳を潤ませながら侑人を見つめていたのだが、徐々に端正な顔は歪んでいき最終的には泣きだした。

「ど……どうしたのですかマリア！？」

目の前でいきなり泣かれた侑人はかなり焦る。しかし侑人が声を掛けてもマリアはなかなか泣き止まない。アンナは空気を読んで侑人の中で大人しくしている。

数分間泣き続けたマリアはやがて何とか落ち着き、真っ赤な目をしたまま侑人に告げる。

「心配掛けてごめんなさい……もう大丈夫」
「そうは見えませんが……」

何があったのか侑人が聞いてもマリアは答えない。作り笑顔でもう気にしないでと繰り返し答えるだけであった。
マリアのおかしな態度がかなり気になっている侑人であったが、これ以上直接聞きだす事はやめようと考えマリアに別の質問をする。

「私に来客がありませんか？」

侑人の問いかけを聞いたマリアは一瞬体を震わせる。しかしすぐに取り繕った顔をして、国からの使者がホラント家に来ていて、ヨーゼフに頼まれて侑人を迎えに来たと伝えた。
そんなマリアに対して侑人は『わかりました』と笑顔で答え、迎えに来てくれたマリアの後ろについていく形でホラント家に向かう。

この時、前を歩くマリアは気が付いていなかったが、マリアの後ろを歩く侑人は、今まで見せた事の無い怒りに満ちた恐ろしい顔をしていた。
侑人は国からの使者がマリア達に対して何か失礼な振る舞いをしたのを、マリアの態度から悟っていた。侑人は恩人達に無礼を働いた使者に対して、いまだかつてない怒りを感じている。

『ユート。少しは落ち着け』

怒りで我を忘れた行動をすると不味い事になる。そう心配したアンナは侑人に語りかける。すると落ち着いた感じの声で侑人からの返事が直ぐに戻ってきた。

『怒りに任せた行動をすると、ホラント家の二人に迷惑を掛けるという事は、ちゃんと理解していますよ』

意外と冷静な判断が出来ている事に少し安心したアンナは、少しほっとした様子で再度語り掛ける。

『案外落ち着いておるの。わらわはてっきり怒りで我を忘れているかと思ったぞ』

『我を忘れてはいませんが……マリアを泣かせた者を私は絶対に許しません』

その言葉は冷静ではあったが凄まじい怒りが込められており、アンナはしばらく言葉を失う。

普段温厚な者を怒らせるとかなり怖い事を悟ったアンナは、侑人だけは怒らせないようにしようと固く誓うのであった。

侑人とマリア、ついでにアンナがホラント家に到着した時、ホラント家のリビングは異様な雰囲気に包まれていた。

黒髪の勇者の到着を待ちきれないゲオグル伯爵が、侑人を迎えに行ったマリアの事を、ヨーゼフに対して大声で愚痴っていたのだ。

これだから亜人の娘は使えないとか、田舎育ちは躾がなってないなど、聞くに堪えない暴言をヨーゼフに対して一方的に話すゲオグル伯爵。

それを聞かされているヨーゼフは、最愛の孫娘を馬鹿にされて堪忍袋の緒が切れる寸前であった。

リビングに入る扉の前で少し様子を伺っていた侑人であったが、あまりの暴言の数々に思わず顔をしかめる。
マリアの顔はすでに泣きそうになっているが気丈に耐えている。その顔を見た侑人は怒りで我を忘れそうになっていたが、マリアが我慢しているのに自分が怒りに任せた行動をするのは不味いと思い直し、何とか踏みとどまっていた。

そんな侑人の我慢を他所に、一人の人物の堪忍袋の緒が突然切れる。
その人物は先ほどまで侑人を落ち着かせようとしていたアンナであり、堪忍袋の緒が切れたアンナは侑人に黙って勝手に実体化し、ゲオグル伯爵の居るリビングに突然姿を現す。
突然姿を現したアンナに対してゲオグル伯爵は驚きそして警戒する。そして多少狼狽しながらもアンナに向かって高圧的な態度を取る。

「無礼者！　貴様何者だ！」

アンナはそんな伯爵の姿を冷め切った目で見つめている。身に纏う雰囲気は冷徹そのものであり、普段の気さくな様子を微塵も感じさない。

「わらわは黒髪の勇者に付き従う従者。その五月蝿い口を閉じろ下郎」

いきなり現れたアンナに下郎呼ばわりされたゲオグル伯爵は、内心はアンナに対して憤りを感じ文句を言いたくて仕方なかったが、怒りで我を忘れ魔力を全開で放出するアンナの姿に対する恐怖の方が大きく何も言えないでいた。
ちなみに突然切れたアンナに対して何の対処も出来なかった侑人

とマリアは、リビングの外から成り行きを見守る事にした。リビングの外で様子を伺う侑人とマリアは、クーラント魔国の姫君が黒髪の勇者の従者と自ら名乗って良いのかよと、案外冷静に突っ込みを入れていたりもする。

「貴様らは黒髪の勇者に敵対するつもりか？　従者のわらわにも敵対するつもりなのか？　返答次第では全力を持って相手をするがどうするのじゃ？」

アンナは様々な思惑を無視して伯爵に対して冷酷な態度を取り続ける。

マリアとは些細な事で喧嘩ばかりしていたのだが、自分以外の者がマリアの文句を言うのは許せない。そんな良く判らない感情がアンナの胸の中に渦巻いている。

クーラント魔国の姫君として生きてきたアンナにとって、等身大の自分と対等に喧嘩出来る存在は今まで居なかった。周囲に居る誰もが自分の事を姫として敬い、決して逆らう事が無い世界で生きてきた。

そんなアンナにとって物怖じせず真っ直ぐにぶつかって来るマリアは、生まれて初めて出会えた貴重な存在である。マリアとしょっちゅうぶつかり合いながらも、そんな日常を好ましく思っていた。

自分を取り囲む世界全てに敬われ恐れられてきたアンナにとっての初めての友人。マリアは何時の間にかそんな存在になっていたのだ。

「わらわは気が短い……早く返答せい！」

アンナの問い掛けに対して敵対するつもりなど無い事を必死でアピールする伯爵。その姿を見て鼻で笑うような態度をアンナは取る。

狼狽する伯爵の姿を見たアンナは少し理性を取り戻す。いくら伯爵が気に入らないとはいえ、手を出すわけには行かない。しかしこのまま素直に返すのは癪に障る。

そんなアンナの脳裏にある考えが浮かび上がる。

アンナは少しだけにやけた顔をしながら、悪戯心を同時に満たせるその思いつきを即座に実行に移す。ゲオグル伯爵だけでなく侑人達の反応も早く見てみたい。

「貴様が先ほどから馬鹿にしていた娘が居たな。その娘が黒髪の勇者の思い人だという事を貴様達は知っているのか？」

その言葉を聞いてゲオグル伯爵は真っ青になる。伯爵に付き従っていた従者達はすでに倒れそうなほど狼狽している。

ちなみにリビングの外で成り行きを見守っていた侑人は、暴走したアンナの突然の宣言に真っ赤な顔をしている。マリアに至っては動揺のあまり失神しそうになっていた。

これ以上暴走するアンナに任せるのは不味いと判断した侑人は、動揺する気持ちを抑えリビングの扉を開ける。

黒髪の侑人の姿を見たゲオグル伯爵一行の顔色はすでに土気色寸前になっている。ヨーゼフだけが何故か真っ黒なオーラを放っていたが、危険を感じた侑人は気がつかないふりをした。ちなみにアンナは侑人の顔色を見てニヤニヤしている。

「全く……」

侑人は誰にも聞こえないような小さな声で呟く。

マリアは侑人の後ろで真っ赤な顔をしながらアンナの事を睨み付けている。しかし動揺するゲオグル伯爵一行は、その目線が自分達

に向けられていると誤解し凄まじく動揺していた。
様々な誤解の上に成り立っている状況ではあったが、お互いの誤解を解かないまま物事は進行していく。

「ご苦労であったアンナ。この後は私が応対するから下がってよい」
「了解いたしましたご主人様。何かあればまた呼んで下さい」

そう言葉を発したアンナは侑人の中に戻る。目の前で想像を超えた光景を見せつけられたゲオグル伯爵一行はすでに魂が抜けかけた表情をしている。
そんな一行の表情を見て侑人は少しかわいそうな気もしたが、侑人自身も結構追い詰められていた為、気を使う余裕はなかった。

勢い余ってリビングに姿を見せた侑人であったが、アンナの暴走により色々と考えていた策が全て使えない状態になっていた。
どういった対応を取ればいいのかしばし悩んだ侑人であったが、アンナの暴走で出来上がった流れにしぶしぶだが乗る事に決める。

「セルビナ王国の国王は、人族や亜人族の垣根を超えて物事を見る事が出来る賢王だと、私は今まで理解していました」

侑人はゲオグル伯爵一行に静かに語りかける。語りかけられた一行は一言も言葉も発さず侑人の言葉に耳を傾けていた。
侑人はそんな一行の態度を受け続けて言葉を紡ぐ。

「しかし、あなた方の姿を見るとその判断は違っていたようだ」

侑人の言葉を受けたゲオグル伯爵は蒼白になる。ここまでの失態を演じてしまった以上、黒髪の勇者に対して申し開きは出来ない。
これ以上の怒りを買う前に引き下がる事を伯爵は決める。それ位

の引き際は伯爵も知っていた。

「今日のところはお帰り下さい」

侑人の言葉を皮切りにして伯爵一行はホラント家から退出して行く。その足取りは重く死者の行進のようであった。

「他に何か言い訳がありますか？」

夕食を終えたホラント家のリビングで本日の反省会が行われていた。怒った顔をした侑人、ヨーゼフ、マリアが円陣を組んで立っている中央でアンナが正座をしている。

「わ……わらわには悪気はなかったのじゃ！」

アンナは泣きそうな顔をして皆の顔を見回している。

アンナがマリアに対する暴言で怒った事に対して皆は好意的に考えていた。しかしアンナの暴走のせいで、国中で侑人とマリアの仲が誤解されてしまう事に対して、三人は我慢出来なかったのだ。

とは言っても内心ではマリアは、ユート相手なら良いかもなどと考えている。侑人も事実無根ではあるが、容姿に恵まれ性格も良いマリアが相手だと勘違いされる事に対してはまんざらでもなかった。この二人は恥ずかしさのあまり、ついついアンナに当たってしまっているだけだったのだ。しかし孫馬鹿のヨーゼフは……本気で怒っていた。

「いっその事、今から本当の恋仲になってしまえば良いのじゃ……」

アンナの開き直った発言に対して、三人からの拳骨がアンナの頭に落とされる。

「暴力は反対なのじゃぁぁぁー」

アンナの悲鳴がティルト村の夜空に響きわたる。ホラント家は今日も平和であった。

第１４話：勇者の逆鱗（後書き）

侑人を暴走させるつもりだったのですが、気がついたらアンナが暴走してました。

第１５話：宰相の策略

ゲオグル伯爵が侑人達の怒りを買った……主に爆発したのはアンナの怒りではあったが、その日から数えて数日後、セルビナ王国の首都セルビナにある王城の謁見の間では、ゲオグル伯爵がカルロス王に黒髪の勇者の一件を報告していた。

ゲオグル伯爵は、黒髪の勇者に対して誠心誠意に対応したが、我が国に仕える事を了承して貰えなかったと、この度の失敗の原因を都合よく捻じ曲げて王に対して申し開きをしている。

王座の肘掛に肘をつきながら伯爵の報告を聞くカルロス王。その表情は伯爵の報告に対してあまり興味を持っていない雰囲気である。怒りや失望を感じているといった様子も無い。宰相アルクィンもいつもの様に涼しげな顔をして王の後ろに控えているだけであり、特に何か口を挟む雰囲気も無さそうであった。

そんな王達の姿に対して伯爵は内心ほっとしている。黒髪の勇者に対する失態の責任を取らされる事はなさそうだ。このまま上手く申し開きをしてこの話を終わらせてしまえば、自身の失態が王の耳に入る事も防げるかもしれない。そんな都合の良い事を考えていた。

「報告は以上か？　ゲオグル」

カルロス王の言葉を聞いたゲオグル伯爵は、してやったりといった顔をしながら、報告は以上ですと答え頭を下げる。

そんな伯爵に対して王は、もう下がってよいと伝え、王の言葉を

聞いた伯爵はもう一度短く頭を下げ、謁見の間から退出しようと扉に向う。

そしてゲオグル伯爵が内心の喜びを押さえて扉に手を掛けた時、カルロス王の問い掛けが背後から響いた。

「そういえばオストロ家は、代々武官を務める勇気ある一族だったよな」

思わず嬉々とした表情になり王の方へと振り返るゲオグル伯爵。オストロ家が代々武官を務める名門の家柄である事を延々と語り始める。

そんな伯爵の長い話が終わった後、カルロス王は意地の悪そうな顔をしながら伯爵に向かってある言葉を言い放つ。

「なるほど。そんな自信があったから黒髪の勇者を敵に回しても平気なのだな。さすがはゲオグルだ」

「なっ！」

ゲオグル伯爵は真っ青な顔をしてその場に立ち竦む。王には先日の失態の全てが筒抜けであった。そんな事実がゲオグル伯爵の思考を埋め尽くす。

しかしカルロス王は立ち竦む伯爵に向かって、下がってよいとだけ伝える。その言葉を聞いたゲオグル伯爵は、転げるように謁見の間から退出していった。

ゲオグル伯爵が謁見の間から出て行った後、宰相アルクィンは王

に向かって少したしなめる様な口調で話し掛ける。

「さすがに今のは人が悪すぎだと思いますよ」

「ゲオグル伯爵が失敗する事を見越して、従者の中に間者を紛れ込ませるアルクィンも、かなり人が悪いと思うぞ」

そんな王の痛烈な切り返しを受けたアルクィンであったが顔色を全く変えない。

「私は黒髪の勇者の人となりを知る為に、間者を紛れ込ませただけです。ゲオグル伯爵が失敗するなどと……九割ほどしか考えていませんでした」

ほとんど信用していないじゃないかと、王は楽しそうにアルクィン突っ込みを入れる。そんな王に対して、無能な伯爵を一割も信用していたじゃないですかと、ひどい言葉で言い返すアルクィン。

そんないつものやり取りをしばらくしていたのだが、不意にカルロス王はまじめな顔になりアルクィンに問い掛ける。

「それで考えている策とやらは上手く行きそうなのか？」

アルクィンは少しだけ考える素振りを見せつつ、いつもの落ち着いた雰囲気で返答する。

「伯爵が予想以上に無能だったので、少し厳しい状況になっていますが、それでも何とかできるとは思います」

そう言いながらアルクィンは、カルロス王に何かをメモした紙を渡す。その紙に目を通したカルロス王は少し苦笑いをする。

その紙には二名の名前が書かれており、片方の名前からもう片方

の名前に矢印が引いてあった。二人の名前からアルクィンが何を求めているのかを即座に察する。

「これを俺に準備させようという腹積もりか……まあ良い。タイミング的に少し早いが何とか説得しよう」

そんな王の言葉に頷いたアルクィンは、十日以内に準備を整えて下さいと王に伝えると、王に深く一礼した後、謁見の間を退出して行った。

無礼なゲオグル伯爵の訪問から二週間ほど経ったある日、ホラント家には奇妙な男が訪れていた。

その男が最初にホラント家を訪れたのは二日前の事だった。セルビナ王国の国王の使いだと名乗る男は従者を連れずに一人でホラント家を訪れ、ホラント家の全員の時間が空いている日程を侑人から聞きだし、その日はそのまま帰っていった。

侑人は当初、王国のお偉いさんがこの男を使いに出して、アポイントを取って行ったのだと判断をしていた。今度の来客はそれなりに常識をわきまえた丁寧な相手で助かるなどとも考えていた。

しかし約束していた日時にホラント家を訪問してきたのは、侑人が使者だと考えていた約束を取り付けていったその男一人だけであった。

目鼻立ちの整った浅黒い肌をした背の高いエルフ族の男は、ホラント家のリビングでマリアの入れた紅茶を楽しんでいる。

アルクィン・ウルヘルと名乗るその男は、村の用事が少し長引、

約束の時間までに家に帰って来られなかったヨーゼフに対して文句を言う事も無く、むしろ上機嫌な様子で侑人やマリアと談笑していた。

そんな和やかな雰囲気の中、アンナだけが侑人の中から出ようともせず、なにやら考え込んでいる。

『何をそんなに考え込んでいるのですか』

『アルクィン・ウルヘルという名前を、父上から聞いた覚えがあるのじゃが……どんな人物だったのか思い出せないのじゃ』

アンナの返答を聞いた侑人は少し考え込む。目の前に居るこの男の物腰は非常に穏やかであり、気さくな態度は非常に好感が持てる。言い方は悪いが一国の重要な役職についている人物とは思えないほどの態度である。

しかしアンナの言葉を信じれば、直接国境を接している訳ではないクーラント魔国にまで名前を轟かせる人物のはず。安易に信用してしまうのは危険かもしれない。そんな事を思い始めていた。

侑人が思考をめぐらせている時、玄関の扉が開き慌てた様子のヨーゼフがリビングに駆け込んでくる。

待たせてしまった来客に対しヨーゼフは頭を深く下げ詫びた。

「約束のお時間に間に合わず大変失礼な事を致しました。私はこの家の愚主のヨーゼフ・ホラントと申します」

そう言った後にヨーゼフは頭を上げる。顔を上げたヨーゼフがアルクィンの顔を捕らえた時、ヨーゼフの顔が驚きに染まった。

「さ……宰相様ではないですか……」

ヨーゼフの言葉を聞いたアンナは、父親のケットハルト王に聞いた話の内容を全て思い出した。そして興奮気味に侑人に向かって話し掛ける。

『思い出したぞ！　あの男はセルビナ王国宰相アルクィン・ウルヘルじゃ！　セルビナ国王の右腕であり、マグナマテル全域に名の知れ渡っている知恵者じゃ！！』

ようやく思い出したと満足気味のアンナ。しかしアンナの言葉を聞いた侑人は、厄介な相手が尋ねてきたと頭を抱えるのであった。

ヨーゼフが外から戻ってきて、ようやく話し合いが出来る環境になったのだが、先ほどのヨーゼフの言葉を最後に少し沈黙が流れていた。

そんな雰囲気の中、セルビナ王国宰相アルクィンは、侑人達全員に向かって頭を下げ、今まで身分を黙っていた事を詫びる。

「今まで黙っていて大変申し訳ありません、私はセルビナ王国宰相アルクィン・ウルヘルと申します。ですが、たまたま国王から運良く任命されただけの青二才ですので、私のことはアルクィンと呼んで頂ければと思います。それと先日こちらを訪れた伯爵の無礼を合わせて謝罪致します。真に申し訳ありませんでした」

アルクィンの真摯な態度を見た侑人は好感触を持つ。マリアやヨーゼフの表情から同じ感情を持っていることが伺える

しかしアルクィンの言葉に対してアンナは『謙遜しすぎは逆に嫌

味じゃ』などとぶつぶつ文句を言っている。侑人はとりあえずアンナの言葉はスルーする事に決めた。

「それでアルクィン様は、今「アルクィンで良いです」」

侑人の言葉にアルクィンは笑顔で言葉を重ねる。

そんなアルクィンの態度に侑人は苦笑いする。温和そうな雰囲気を感じさせるが、実は結構頑固者なのかもしれない。

「では…アルクィン殿……で良いでしょうか？」

侑人の問い掛けを聞いたアルクィンは、少し不満そうな顔をしながらも頷く。その仕草を確認した侑人は早速本題を切り出す。

「それでアルクィン殿は、今回は（・）どのような用件でお起しになられたのですか？」

侑人達全員は、どうせ今回も黒髪の勇者である侑人を、国に仕官させる為に来たと思っている。

侑人自身はホラント家から出る気は無く、マリアやヨーゼフも侑人の意思を尊重しようと考えていた。この質問も判りきった事を改めて問う事により、気乗りがしていない事を相手に分かってもらおうとワザとしたのである。

当の本人であるアルクィンは、そんな侑人達の雰囲気を感じても気にした様子を見せない。些細な事にいちいち反応するような器なら、宰相に任ぜられる事も無いから当たり前ではあるが。

「今日は皆様のお力をお借り出来ないか相談する為に来ました」

「皆の力を……？　ユートの力の間違いでは無いですかな？」

アルクィンの言葉にヨーゼフが反応する。しかしアルクィンは笑顔で首を横に振る。

「ユート殿のお力ももちろんお借りしたいのですが、今回訪れた最大の理由はヨーゼフ殿のお力をお借りしたかったからです」

アルクィンの予想外の言葉にヨーゼフは絶句する。しかしそんな態度を気にせずアルクィンは言葉を続ける。

「ヨーゼフ殿にお願いがあります。セルビナ王国の首都セルビナの司祭になって頂けませんか？　そのお力を我が国の平和と発展の為にお貸し頂けると助かります」

その発言を受けて、ホラント家のリビングにいる全員は固まった。

アルクィンのその後の言葉を要約すると以下のようになる。

セルビナ王国の国王であるカルロス王のハルモ教に対する考えは、大きな声では言えないがグランツ帝国皇帝の考えと比較的近く、現状をどうにかしたいと常日頃考えていたらしい。

皇帝のように過激な行動を取るつもりは全く無いが、人族至上主義すぎるハルモ教の教義は国を運営するには何かと不都合であり、今までも様々な政策を打ってはいたが、近々大きな改革を起こそうかと画策しているとの事である。

エルフ族であるアルクィンが宰相という立場に居るのも、ハルモ

教に対する王の考えを証明するものだとアルクィンは説明した。

そして今のセルビナの司祭はかなりの高齢である為、本人の希望もあり近々司祭の交代を考えており、後任の人事を進めている時にヨーゼフの名前が挙がったとの事である。

元エディッサ王国の神官であり人格者でもあるヨーゼフは、エルフ族のハーフであるマリアが孫娘である事も含めて、王の考えに合致する人物であり、ハルモ教改革の為にも是非ヨーゼフに王都の司祭を引き受けて頂きたい。アルクィンの相談の内容はこんな感じであった。

当初ヨーゼフに司祭になって欲しいという、アルクィンの言葉を聞いたマリアの顔はかなり引きつっていた。しかしアルクィンの話を聞くうちに顔色はどんどん良くなり、すでにマリアは大賛成する雰囲気になっている。

しかしアルクィンの言葉を聞いた当の本人であるヨーゼフは考え込む。ハルモ教改革という言葉の響きは良いが、果たしてそう簡単に物事が進むのか疑問に思っていた。

「ハルモ教の改革とおっしゃったが、本当に出来るとお考えですかな？」

「簡単な事ではないと理解しています。しかし何もしなければ何も変わりません」

真剣な顔をしているアルクィンの姿を見たヨーゼフは少し微笑む。難題を真正面から受け止めて本気で取り組もうと考えているアルクィンの姿を眩しそうに見つめている。

「少し意地悪な質問かもしれぬが、わしに対して司祭になって欲しいと言い出した本当の理由は、ユートをセルビナ王国に引き込みた

いからではないのですかな？」
「その気持ちが無いと言ったら嘘にはなります。しかし司祭任命をそんな理由で決めたりはしません」
少し試すようなヨーゼフの言葉に対して、即座に、そして力強く返答したアルクィンの目は、真実を語る目であった。
「わしの件は一時置いておくとして、ユートやマリアの事はどうするおつもりなのじゃ？」
ヨーゼフはアルクィンに対してそんな質問を投げかける。その質問に対してアルクィンは、ユート殿がもし了承してくれればと前置きを付けて話す。
「ユート殿にはセルビナ王国の相談役になって頂きたく思っております」
「相談役？」
侑人のそんな呟きを聞いたアルクィンは、侑人の目を静かに見据えながら徐に話し始める。
「ユート殿を武官としてお招きするより、良い効果があると考えました」
当初セルビナ王国は黒髪の勇者である侑人を、他国に対する牽制の為に武官として迎えるべく調査を進めていた。万が一セルビナ王国が最前線に立たされても、黒髪の勇者を擁していればそう簡単に

は攻め込まれないと考えていたのだ。
しかし調査を進めるにつれ、黒髪の勇者が持つ力は戦闘だけで生かされる物などでは無く、平和な世の中でこそ生かされる物が多いと判ったのだ。

「ユート殿のお力を争いだけに使うのは無駄である……私はそう結論付けました」

とはいえ国防の事に関しても相談させて頂く事は多くあるとアルクィンは語る。
しかし国民が豊かに生活していけるような知恵を借りる場面の方がより多いはずであり、そうなると武官として迎えるのはおかしな話になる。

アルクィンの話に聞き入っていたヨーゼフとマリアも頷く。
今まで一緒に生活していた侑人が戦闘に参加する姿は想像できないが、嬉しそうな顔で河川工事や道路工事を行っている姿は容易に想像が出来る。というか目の当たりにしている。

「私にはユート殿がどんなお力を持っているのか完全には分かりません。あらゆる可能性を持つユート殿を一つの役目につけてしまうのは非常に勿体無い。これが相談役になって貰いたい一つ目の理由です」

アルクィンの話を聞いている侑人は、いつの間にかその話に引き込まれている。真剣な顔をして話に聞き入っていた。
マリアやヨーゼフもその他の理由がかなり気になっている様子であった。

「二つ目の理由は下世話な話になってしまいますが、ユート殿が権

力争いに巻き込まれるのを避ける為です」

当初カルロス王とアルクィンは、侑人を宰相待遇で国に迎えようと画策していた。しかしいきなり侑人を国の重職に就任させると、それを不満に思う者が必ず現れ、良くない事態が巻き起こる可能性がある。

それを避ける為にも、対外的には権限が無い名誉職である相談役として、セルビナ王国へと侑人を迎えれば色々な問題を事前に防げるはず。

「相談役の待遇であるならはカルロス王や私だけでなく、ヨーゼフ殿の相談に乗る時間も取れます。通常の仕事がありませんから」

そんな事を笑顔で語るアルクィン。その言葉に嘘は感じられなかった。

そしてそのままアルクィンはマリアの待遇も語る。その言葉はマリアを驚かせるに十分であった。

「マリア殿にはユート殿の補佐をお願いしたいと考えております。形式的には相談役付きの従者といったところでしょうか」

マリアはユートとヨーゼフだけでなく、自分自身にまで仕官の話があるとは思っていない。まさに他人事の状態であり『ユートとおじいちゃんは大出世だな』位にしか考えていなかったのだ。

驚きのあまり言葉を失うマリア。しかしそんなマリアを他所に異議を唱えるものが現れる。それはいきなり実体化してきたアンナであった。

「ユートの従者はすでにわらわが引き受けておる！　勝手に決められては困る！」

突然現れたアンナの姿を見て、アルクィンは少し鋭い目をしたが、直ぐに普段の雰囲気を取り戻す。

「あなたは確か……アンナ殿でしたね。もちろんアンナ殿にもマリア殿と同じ相談役付きの従者をお願いできればと思っておりますよ」

そんなアルクィンの言葉に満足げに頷くアンナ。

しかし侑人達三人は、クーラント魔国の姫がセルビナ王国に仕官して良いのかよ！　と、内心で突っ込みを入れているのであった。

宰相アルクィンがホラント家を訪問した目的の一つは、黒髪の勇者である侑人をセルビナ王国に仕官させる事であったのは間違いない。当初は侑人を仕官させる事だけを考えて、行動を起こそうとしていたのも事実である。

しかし侑人の周囲を調べるうちに、ヨーゼフがかなり有能な神官であった事を突き止め、自身の行動目的を少し変更したのであった。

アルクィンがヨーゼフ達に語ったハルモ教改革は、カルロス王と共にかなり前から真剣に協議を続けているいわば国家機密とも言える話である。

黒髪の勇者の仕官と、ハルモ教改革に協力してくれそうな有能な司祭の確保。この二つの使命を同時に成功させる為に取ったアルクィンの策略は、下手な策は弄せず誠心誠意をもって接する事……カルロス王に対して最初に語っていた言葉のままであった。

侑人達四人に伝えるべき内容を全て伝えたアルクィンは、二週間

後に返事を伺いに参りますと言い残し、ホラント家を去っていく。
悪い話ではないと考えていた侑人達ではあったが、現状では明確な答えが出ては居なかった。

第１５話：宰相の策略（後書き）

アンナがすっかりボケ役になってしまいました。

第１６話：異世界人の使命★

アルクィンの訪問があった日の夜、夕食を終えた侑人は皆に散歩に行くと告げ、一人で河原に来ていた。

水の月も半ばに差し掛かり、雨季が終わるまでにはあと半月ほどを残していたが、今日の夜空には、水の月では珍しい満点の星空が広がっていた。

この世界にはまだ電気の概念が無く、田舎町ではランプ式や魔法式の街灯も無いため、侑人の周囲は真っ暗である。

その為、二十一世紀の日本から異世界に召還されてきた侑人では見た事がないような、見事な星空が頭上を覆いつくしていた。

ちなみにアンナは今ここには居ない。侑人に召還されたばかりの時は半径五百メートル程しか離れる事は出来なかったが、最近の半月ほどで侑人の魔力が桁違いに跳ね上った事が影響したのか、今では半径五キロメートル程ならば自由に行動出来るようになっている。

多分今頃はみんなでお茶でも楽しんでいるだろう。最近活発に行動しているアンナを思い浮かべながら、侑人はそんな事を考えていた。

まるで手が届きそうな星空に向かって侑人は、河原に寝転がりな

がら手を伸ばす。すると星空に向かって伸ばした侑人の手に目の焦点が移り、星空全体が滲んで見えた。

目の前に広がるこの光は今から数百年、下手をすると数億年前の星の姿なんだよな。万華鏡のように視界に広がる星空を見ながら、侑人はそんな事を考える。そしてその思考が連想させたある人物の事をしばらく考えたあと、その名前をふと呟いた。

「クロウ・ミナト……」

「クロウ・ミナトがどうかしたの？」

不意に思考の外から声を掛けられる。侑人が声を掛けてきた人物に顔を向けると、よく見知った顔が侑人に向かって微笑みかけていた。

「星を捕まえようとしていたのかしら？　ユートも結構ロマンチストね」

そう言いながらマリアは侑人の左横に腰を下ろす。

侑人はマリアから星空に視線を向けなおし、夜空を見上げた姿勢のまま、自身が考えていた事をマリアに話した。

「クロウ・ミナトがこの世界に召喚された理由は、一体何だったのだろうと考えていたのです」

「そう……ユートはどう考えているの？」

マリアは座ったままの姿勢で夜空を見上げている。

違う世界からマグナマテルに侑人が召喚された理由。改めて問われると確かに気になる話題であり興味を引かれる。

「クロウ・ミナトがこの世界に召喚された理由は、八百余年前のク

ーラント魔国で、亜人族に虐げられていた人族を救う為……ハルモ教ではそう伝えられているようですが」

そこで一回言葉を切りマリアの様子を見る。マリアは星空を見上げたままの姿勢で、侑人の続きの言葉を待っている。

そんなマリアの雰囲気を察した侑人は、再度夜空に視線を向けなおし言葉を繋げる。

「私にはその理由だけでは無かったと思えるのです。クロウ・ミナトがこの世界に呼ばれたのは、もっと大きな理由があったから……そんな風に感じるのです」

侑人の言葉を聞いたマリアは侑人の方を向く。しかし侑人はそんなマリアの素振りに気が付かないかのように、そのままの姿勢で自身の考えを語っていく。

「クロウ・ミナトは八百年前に人族を圧政から救った。この事は歴史が証明しているので間違いはないでしょう。しかし、この世界はそのあと八百年間の長い争いの歴史に突入しました。誰が私たちを召喚したのかは分かりませんが、わざわざ異世界から召喚して連れて来た手間を考えると、その後の歴史は最善の結果になったとは思えないのです」

マリアは侑人を見たまま何も語らない。侑人の続きの言葉を待っているようだ。

「クロウ・ミナトは、当時の国王や法王達に依頼されたのか、自身で考えて行動を起こしたのか、その辺の状況は分かりませんが、戦闘行為を手段として選んだ事は事実です。戦闘行為が必ずしも間違っていた訳ではないとは思いますが、それのみだったのは間違いだ

った気がするのです」

そこまで語った侑人は少し目を閉じ軽く息を吐く。

「ヨーゼフさんにお伺いしたハルモ教の伝承の内容から推察すると、クロウ・ミナトはグランツ帝国の前身のグランツ共和国を建国した後も、治安維持の為に戦い続けていたようです。その行為を否定はしませんが、それだけでは足りなかった……この世界に召喚された使命を果たしきれていなかったのではと、私は考えています」

自身の考えをマリアに語った侑人は、星空から視線をマリアの方に移す。すると侑人を見つめていたマリアと視線がぶつかる。

二人はしばらく何も語らず、お互い見つめあっていた。

「クロウ・ミナトが果たしきれていなかった使命を果たすために、ユートは召喚されたっていうのが、ユートの考えなのかな？」

マリアは侑人の目を見つめながら問い掛ける。侑人はそんなマリアに対して微笑しながら言葉を返す。

「マリアの言うとおりです。私がこの世界に来た理由は、そこにあるのではと考えています。『世が乱れ大地が嘆く時、二つの月が重なり異界の勇者が再度光臨す』という伝承も、使命を果たしきれていなかったから、誰かが後から付け足した……現在のこの状況が予想出来たので、わざわざ警告する為に伝承として残したと考えると、色々な辻褄が合うように思えるのです。伝承を逆の観点から見れば、世が乱れなければ異界の勇者は光臨しないことになりますからね」

誰が伝承を残したのかはさすがに分かりませんと、侑人は付け足して苦笑する。マリアは今まで聞いたことの無い新しい伝承の解釈を聞かされ、自身の今までの黒髪の勇者に対する価値観を見つめなおしていた。

侑人の考えは納得出来るような出来ないような……マリアの雰囲気はそんな風に割り切れない様子である。

「マリアもご存知の通り、私にはこの世界に召喚されるときに授けられた、元の世界では持っているはずも無かった、人の手には余るほどの大きすぎる力が与えられています。しかしクロウ・ミナトが私の予想通り、私の元の世界の人間の源義経だったとすると、私以上の大きな力を持っていてもおかしくない。戦闘能力で劣る私が、過去の黒髪の勇者と同じ行動をして上手くいくと思いますか？」

「上手く行かないと思う」

マリアの言葉を聞いた侑人は満足そうに頷く。

「そこが私の考えの原点なのです。私の世界でも英雄であったクロウ・ミナトが、八百年前にこの世界に召喚されても、結果的には平和な世界にならなかった。戦闘行為だけでは成しえない別の使命が、黒髪の勇者と呼ばれる異世界人にはあるのではないか。そう考えるとしっくりきませんか？」

マリアも侑人の言葉を聞いて頷く。侑人の言葉に納得しつつあるマリアではあったが、それと同時に別の考えが頭をよぎる。

ハルモ教が伝える人族の英雄としての黒髪の勇者の姿は、確かに少し不自然な気がする。しかし侑人の考えだと、その範疇に納まらないほどの大きな使命を黒髪の勇者であるユートは背負わされている事になる。

一人の異世界の人間に重責を背負わせて、のうのうと暮らすこの世界の住人は、一体何様のつもりなのか。そんな事を考えると無性に泣きたい気分になる。

マリアの表情が暗くなったのを察した侑人は、マリアに対して明るく語る。

「長々私の考えを語りましたが、黒髪の勇者はこの世界を平和にするのが使命なのではないかなと考えています。私は平和な世界が好きですので、こういった使命なら少しは納得できますね」

でも今回の私の行動がまた失敗すれば、次の異世界の人間を呼び寄せる可能性も出てきます……出来る事ならばそれだけは避けたいですね。そんな事を呟きながら侑人は再度夜空を見上げる。

侑人につられて夜空を見上げたマリアの目に、マリアの心の中の涙を代弁するかのような、綺麗な流れ星が一つ映って見えたのであった。

川原で星空を見上げる侑人とマリアの頬を、春から夏に切り替わる季節が運んでくる、やわらかい風が静かに撫でていく。

星空を見上げる二人の間には何の会話も無い。しかしどこかで何かが繋がっている。そんな感覚を二人は共有している。

元の世界を忘れた事は一度としてない。今まではなかなか表に出る機会が無かったが、きっかけさえ掴めれば帰る方法をいつか探そう。侑人はそんな事をいつも考えていた。

この世界は異世界であり侑人にとっては、ふらりと立ち寄ってし

まった旅先のようなもの……その感覚が常に付きまとい、一番親しいはずのマリアが相手でも自身の悩みや本音を語る事は無かった。
そんな侑人ではあったが、今日のこの場所の心地よい静寂が、侑人の中の何かを変えたのか、マリアに対して自身の葛藤を初めて語る。

「私はこの世界で何をすれば良いのでしょうか。今後どのような行動を取ったら、この世界の人たちを幸せにすることが出来るのでしょうか」

少し苦悩した表情をしたまま、侑人の独白は続く。

「私は何をこの世界から求められているのでしょうか。もし私が全てを投げ捨ててしまったら、この世界はどうなってしまうのでしょうか」

侑人が自身の心の奥底を、人としての弱い部分をさらけ出す姿を初めて見たマリアは、大きな驚きと、少しの嬉しさと、ほんの少しの寂しさを感じている。
マリアに対して心を完全に開いてくれた事に対する驚きと喜び、そしてそれに対して何の解決する力を持たない自分自身の弱さ。この二つに挟まれたマリアの心情は微妙に揺れ動いていた。

黒髪の勇者としてこの世界に呼ばれた侑人は、この世界にとっては唯一無二の存在。それに対してマリアは、この世界では星の数ほど居る存在の中の一人にしか過ぎない。
異世界に召喚された彼と最初に出会っただけの私に、一体何が出来るのだろう……マリアは夜空を見上げながらそんな事を考えていた。

マリアは侑人の横で夜空を見上げたまま寝転ぶ。その拍子にマリアの右手が侑人の左手に偶然重なり、マリアは侑人の手を反射的に軽く握り締めながら、侑人に向かって話しかける。

「ユート。子供の頃の話を聞いてくれる？」

侑人は左手に感じる柔らかい感触に少しドキドキしながら、マリアの言葉に対して、是非聞かせて下さいと答える。

侑人の言葉を受けたマリアは、左手を夜空に掲げて、まるで星を掴み取る様な仕草をしながら、子供の頃の昔話を侑人に向かって語り始めた。

「私が七歳頃の話になるのだけど、ティルト村をどこかの国の偉い人が馬車で通過した事があって、その当時好奇心旺盛だった私は、その馬車を見るために村の子供達と一緒に見学に行ったの」

今も好奇心旺盛ですけどね。そんな突っ込みを入れる侑人に対して、抗議の意味を込めて握った手に少し力を込めるマリア。

マリアの柔らかい感触を少し強く感じた侑人は、真っ赤な顔をしたまま黙って、マリアの話を聞く姿勢を取る。

「予定ではその馬車はティルト村を通過するだけだった……でも何かのトラブルが起きた馬車は、私達が見物しているすぐ目の前で突然止まり、中から髭を生やしたオジサンが出てきて、従者の人に何か文句を言っていたの。そして何かを言われた従者の男の人は、被っていたフードを取って馬車の様子を点検し始めたの」

マリアはそこで言葉を一回切る。侑人は話の続きを静かに待っている。

「その従者の人は綺麗な顔をしたエルフ族の男の人で、その人の顔を見た私は一目惚れしてしまった……馬車は直ぐに直ってそのまま走り去ってしまったけど、私はいつまでもその場に立ち竦んでいた。そんな今まで私自身が忘れていたような出来事を、さっき星空を見つめていたユートを見て思い出しちゃったの」

マリアは星空から侑人に視線を動かして笑いかける。マリアの視線を感じた侑人もマリアと顔を合わせる。

マリアは侑人の目を見つめながら言葉を繋げていく。

「綺麗な星空を見ていると、色々な事を考えてしまう気持ちは良く分かるの。私もその当時は星空を眺めながら、その人の事を考えたりもした。あそこに見える一際輝く星を、名前も知らない男の人に重ね合わせ、その側で小さく光る星を私に見立てて、小さい頃の私は毎晩想像を働かせたりしたもの」

マリアの思い出話を静かに聞いている侑人は、なぜこの話をこのタイミングでマリアがしたのか少し考えている。

マリアの目は何かを伝えようとしている。証拠は何も無いがそんな確信めいた思いが侑人の心に浮かび上がっていた。

「小さい頃の私は毎晩想像をしたけど、自分で何か行動を起こす事はなかった。その結果私の初恋は何の変化も無いまま、自分で何かを気が付く事も無く、いつの間にか終わってしまった。ユートの使命と私の初恋、比べる対象が間違っている事は分かっている。でも考える事も大事だけど、何か自分自身で行動を起こすほうがもっと大事。私はそんな風に思うの」

そんなマリアのたどたどしい、でも心が篭っている言葉を聞いた侑人は、頭を何か硬いもので思いっきり殴られたような感覚を覚え

る。

考え無しに動くのは愚の骨頂だが、考えるだけで何も行動しないのは何もしないのと同じ事。黒髪の勇者の使命の事を気に掛けるあまり肝心な事を忘れていた。

その事に気付いた侑人は、気付かせてくれたマリアに対して深く感謝する。悩んだ目をしていた侑人に生気が戻る。

侑人はこの瞬間にある決断をする。運命の歯車が廻り始めた。

色々と悩んでいた侑人の雰囲気が変わった。マリアは自分の右手に感じる侑人の左手の感覚で、侑人の心情の変化を察した。

侑人の左手はいつの間にか、マリアの右手を力強く握り締めていた。侑人の行動は無意識のものであったが、その事が逆に侑人の変化を如実に表している。

最初に無意識に手を握ったのはマリアの方だったが、少し冷静になってしまったマリアの顔は真っ赤になっている。

侑人の方は逆に最初の頃は意識してしまっていたが、今ではマリアの手を無意識に強く握り締めている事に気が付いてさえいない。

「強く握り締めてくれるのは嬉しい気もするけど、少し恥ずかしいかな」

「す……すいません！　つい興奮してしまって力を込めてしまいました！！」

真っ赤な顔で慌てて言葉を発する侑人であったが、その左手は少し力を緩めるだけであり、マリアの右手を離す事はしなかった。そ

んな侑人の態度に少しの照れと喜びを感じているマリアである。
朴念仁の侑人と男嫌いのマリア。この二人が奇跡的に見せる、良い男女の雰囲気ではあったが、あるきっかけでその雰囲気は無残にも壊れる。

「ほほう。やはり二人は恋仲だったのじゃな」

二人の頭上から突然聞こえる、何かニヤニヤとした雰囲気を感じさせる声。その声の主はアンナであった。

「いっ……いつからそこに居たのです！？」
「きゃっ！　いつから見ていたのよ！！」

同時に飛び起き少し距離を取る侑人とマリア。いまさら感が漂うがアンナの目の前で手を握り続ける事などさすがに出来ない。
そんな二人の姿を見つめるアンナの顔には笑みが浮かんでいる。

「うーむ……ユートが真面目な顔でクロウ・ミナトの事を、何やら話している位からだったような気がするの」
「思いっきり始めのほうじゃないですか！」
「最初から黙って見てたの！？」

アンナの言葉に対して、二人は同時に突っ込みを入れる。
真っ赤な顔で照れる二人を見ているアンナは非常に嬉しそうな顔をしている。二人を同時にからかえる機会をみすみす逃す理由は無い。今こそ拳骨に対する仕返しをする絶好のタイミングだ……などと考えていた。

「わらわは新郎側の来客でいいのかの？　それとも新婦側の方が、問題が起きにくくて良いのかの？」

「「ーーーーー！！」」

二人の声にならない声がティルト村の夜空に響くのであった。

＞ｉ１０４３７―１４０２＜

第１６話：異世界人の使命★（後書き）

マリアは優しく賢い子なのです。（２０１０／８／１０追記：挿絵は卯堂　成隆さんに書いて貰いました）

第17話：それぞれの決意

水の月の第五週の三日。昼食後のホラント家のリビングには、ホラント家に住む全員が顔を揃えている。

真面目な顔をしたヨーゼフ、ワクワクした表情のアンナ、そして少し微笑んでいるマリアが、目を瞑り少し考え込んでいる侑人の顔を見つめていた。

ヨーゼフとアンナは、侑人がアルクィンの誘いにどう返事をするのか、数日経った今でも聞いてはいない。侑人に直接聞けばどうするのか教えてくれそうな雰囲気ではあったが、侑人が自分自身から言い出すのを二人は待っていた。

数日前の夜、河原で侑人と語り合ったマリアも、侑人がどのように決断をするのか、本人から直接聞かされてはいない。しかしマリアは何か吹っ切れたような侑人の雰囲気から、どのような決断をするのかなんとなく察している。

今日三人は侑人から、どのように返事をするのか決めたので、皆集まって欲しいと言われ、リビングに集合していた。

皆の視線を集めた侑人は、ゆっくりとした口調で自身の考えを伝える。

「私はアルクィン殿の誘いに、乗ろうと考えています」

侑人の言葉を聞いたヨーゼフとマリアの表情は、話を聞く前と殆ど変わらない。ヨーゼフも侑人が誘いに乗るであろう事を、なんとなく普段の侑人の雰囲気から感じていた。

それに対して侑人の言葉を聞いたアンナは、少しだけ目を見開いた。はっきりと仕官すると言い切った侑人の態度に少し驚いた様子である。

「武官としての誘いでしたら断ろうと思っておりました。しかしアルクィン殿は、国民が豊かに生活していけるような知恵を貸して欲しいと仰っていた。私はその言葉を信じようと思います」

「武官では無いとはいえ国政に携わるという事は、綺麗事だけでは済まなくなるという事を、しっかりと理解した上での発言じゃろうな？」

アンナは真剣な目をしている。侑人が相談役として国に招かれたとしても、状況によっては戦争や他国に対しての計略の決断を迫られる事はありえる。

それに万民を納得させる政治は実質的には不可能であり、誰かを救う為には誰かを切り捨てなければならないような状況は数多く存在する。そんな事例を王女であるアンナは嫌というほど見てきた。

今のアンナは侑人達と一緒に生活している、同居人のアンナとしてではなく、公人の立場であるクーラント魔国の第一王女、アンジェリーナ・ヴィヘルム・ケトラーとして侑人に問い掛けている。

クーラント魔国の国政に携わり政治の裏の裏を見てきたアンナの言葉は、非常に重く侑人に圧し掛かる。しかし侑人はアンナの目を見ながらはっきりと言い切る。

「私の行動が誰かを不幸にするかもしれない事は理解しています。しかし私は何も行動をしないで、後悔する事だけはしたくないのです。私がこの世界で何か出来る事があり、何か良い影響を与えられるのであれば……後悔する事になろうとも、私は行動してから後悔すると決めました」

異世界に召喚されて来たばかりの頃の侑人は、この世界に深く関わらないように行動していた。黒髪の勇者の伝承を聞いた時も、根本的にその考えを変えはしなかった。

しかし災害から救われたティルト村の村人達の喜ぶ姿や、宰相アルクィンのこの国を真剣に思う姿、そして何よりこの世界で生きるマリアとヨーゼフ、そしてアンナとの深い関わりが、侑人本人も自覚しないうちに徐々に侑人の考えを変えていったのである。

マリアに対して川原で自身の葛藤を語ったのもそんな変化の一端である。その時の侑人の行動は無意識のものであったが、その後の侑人にある事を気が付かせるきっかけとなっていた。

この世界もいつの間にか自分にとって、異世界ではあるが大事な存在になっている。後日になりマリアとの川原での会話を思い出していた侑人は、その事を強く自覚したのである。

侑人の言葉を聞いた三人は同意するように各々頷く。アルクィンの言葉には嘘が感じられない。その事は全員が感じていた。

後はその話を聞いた本人がどのように判断し決意するか……ただそれだけの事である。三人は侑人がどのような結論を出しても、それに賛同しようと各々で決めていたのであった。

「わしも老い先短いこの命を、ハルモ教改革の為に使おうと思う。ハルモ教で誰かが不幸になるのは、わしの世代までで十分じゃ」

ヨーゼフの脳裏には孫娘のマリアを襲った、過去の不幸な出来事が思い返されている。

そんなヨーゼフの姿を見るマリアの目は温かい。マリアもヨーゼフが司祭になる決意をした真の理由に気が付いている。

「ユート……わしに力を貸してくれるか？」

ヨーゼフの言葉を受けた侑人は力強く頷く。そんな二人の姿を見たアンナとマリアも、二人に向かって力強く宣言する。

「わらわを忘れてもらっては困るぞ！　二人の面倒はわらわが責任を持ってみてやるから、大船に乗ったつもりで安心するが良い！」

「わたしも何が出来るか分からないけど、精一杯二人に協力するね！」

この日ホラント家の一同は、全員揃って新たな第一歩を踏み出した。強い決意を秘めた各々の顔は、希望に満ち溢れていた。

今後どのような苦難が待ち構えているか分からない。でも皆で協力すればきっと乗り越えられる。そんな暖かい雰囲気が皆を包み込んでいた。

侑人達が新たな一歩を踏み出す決意をしていた頃、セルビナ王国の王城の執務室では、宰相アルクィンがカルロス王に、此度の一件の経過報告をしていた。

ティルト村からわざわざ経過報告の為だけに、王都まで戻ってきたアルクィンに対して、カルロス王は少し茶化した様子で話し掛け

る。

「わざわざ此処まで戻ってきて来るとは、アルクィンは相変わらず真面目だな。例の件の報告なら使者を使わすなり、手紙をしたためるなりすれば楽が出来たのに……実は俺に会いたかったとかそういう理由なのか？」

そう話し掛けるカルロス王の口調は相変わらず砕けた様子であったが、アルクィンを見つめる眼は口調とは正反対に真剣である。

「私が側にいないとカルロス王は仕事をサボりがちですので、心配になって一回帰って来てしまいました」

王の問い掛けに対してそう返答するアルクィンの口調も、傍目から見ればいつもと変わりは無い。しかし王を見つめる眼は鋭い光を放っている。

そんなアルクィンの視線を察したカルロス王は意味深に少しだけ頷く。

「お前が心配しなくてもしっかりと仕事はこなしているぞ……と言いたいところだが、実はこの報告書の内容が少し理解できなくて困っていたところだ」

そう言いながら、片手に持った一つの報告書をアルクィンに向かって差し出す。アルクィンはその報告書を受け取る為に王の側に向かう。

カルロス王からその報告書を受け取ったアルクィンは、報告書に目を通したあと王に向かって自身の意見を述べる。

「確かに……この書類は何かがおかしい感じがしますね。内容を精

査するのに少し時間が掛かるかもしれません」

そんなアルクィンの意見に対して、構わぬからアルクィンが納得するまでゆっくり確認してくれと、カルロス王は返答をする。

そして部屋に控えていた従者に向かって、時間が掛かりそうだから何か飲み物を持って来るように指示を出した。

カルロス王の言葉を聞いた従者が執務室から退出して行く。今この部屋にはカルロス王と宰相アルクィンの二人だけが残っている。

二人きりの状況を意図的に作り出したカルロス王は、アルクィンに対して真剣な表情で問い掛ける。

「わざわざ王都まで戻ってくるとは……何か重要な事でも起こったのか？」

「予想外の事が判明しました。下手をすると王の立場が危うくなる可能性もあります。しかし上手く利用すれば、今の状況を大きく打開するきっかけとなるかもしれません」

「お前がそこまで重要視するその内容とは一体何だ？」

「予想外の人物と接点を持つ事に成功したかもしれません」

常に冷静なアルクィンの珍しい姿を見たカルロス王は、少し緊張した面持ちとなる。

アルクィンはカルロス王にさらに近づき、周囲を気にするようにかなり小さな声で王に報告する。

「黒髪の勇者に付き従う従者の件ですが、その従者の正体はクーラント魔国の第一王女の可能性があります」

「まさか……そんな事がありえるのか？」

アルクィンの報告を聞かされたカルロス王は顔をしかめる。黒髪の勇者とクーラント魔国の姫君という組み合わせは、普通に考えれば有り得ない。

何かの間違いではないのか。そんな考えが頭を過ぎるが、アルクィンがそう判断したなら信憑性が高い気もする。

「私も裏付けをまだ取れていませんので断定は出来ませんが、その従者はアンナという名前の亜人族……ヴァンパイア族の少女でした。ヴァンパイア族は数が少なく、私が知る限りではクーラント魔国に少数存在しているだけのはず。そしてアンナという名前は、クーラント魔国の第一王女であるアンジェリーナの愛称と同じ……ただの偶然と片付ける事は出来ないかと思います」

「なるほどな」

その言葉を聞いたカルロス王は、アルクィンが言いたいことを察する。

ハルモ教と敵対するクーラント魔国の姫を、国内に迎え入れるだけでも問題がある。ハルモ教法王の耳に入れば、かの者を捕らえろという命令が、カルロス王に対して下されるのは間違いない。

仮にアンナという娘がクーラント魔国の姫で無かったとしても、疑わしいと理由だけでハルモ教正教会が行動を起こすのは簡単に想像がつく。ハルモ教正教会にとっては事の真偽より、目先の脅威の排除が優先されるのである。

「ハルモ教正教会は、相変わらず厄介な集団だな」

「今回はそれだけで済む問題ではありません」

ハルモ教法王庁教圏国家群の国王とハルモ教法王の、微妙な関係を考えると確かに不味い。法王の命に背けば法王から破門されてし

まい、ハルモ教の信者である国民の信頼が一気に失墜する事になる。
しかし黒髪の勇者の従者であるアンナを捕らえようとすれば、黒髪の勇者と敵対する事になる。黒髪の勇者の名声はすでに国中に広まっており、もし万が一敵対してしまえば国民から失望される事になる。

今回の事態が表ざたになりハルモ教正教会の耳に入れば、カルロス王にとってはどのように転んでも不味い展開になるのが目に見えていた。

しかしアンナがもし本当にクーラント魔国の姫だとすると、セルビナ王国だけでなくハルモ教法王庁教圏国家群全体にとっても、利ある展開が望めるかもしれない。
クーラント魔国と同盟、もしくはそれに近い関係を築く事が出来れば、グランツ帝国に対して大きな牽制となる。
少なくともこの度の戦争を終結させる事は出来るはず。セルビナ王国にとってクーラント魔国の姫は、黒髪の勇者と有能な司祭に匹敵するほどの手元に置いておきたい重要な人材という事になる。

カルロス王はしばらく考え……そして決断する。

「責任は俺が取る。黒髪の勇者一行は予定通り丁重に扱え。それと平行してアルクィンは裏付けを大至急取れ。仮にアンナという娘が姫でもそうでなくても絶対に扱いを変えるな」

カルロス王の勅命を受けたアルクィンは深く一礼をする。
そんなアルクィンの姿を見たカルロス王は、軽く頷き満足した顔を向けていたのだが、急に雰囲気を変えいつもの軽い調子に戻る。

「それでアルクィンよ……いくらなんでも時間が掛かりすぎではな

いのか？　いい加減に書類の精査は終わっただろう」
「カルロス王……ここの数字が間違っているだけのように見えるのですが、ちゃんと書類を読んでいますか？」
慌てたカルロス王は書類を奪い返しざっと目を通す。そして苦笑いをしながらジト目で見つめているアルクィンに声を掛ける。
「いやぁ……俺もここがおかしいと思っていたんだ」
「かなりうそ臭いですよ」
カルロス王の言い訳を聞き、あきれ返るような顔をするアルクィンの後ろの扉が開く。
二人が視線を向けると、先ほど飲み物を持って来るように指示された従者が、二組のティーカップをお盆に乗せ部屋に戻って来ていた。
「おっ！　丁度飲み物も来た事だ。休憩するぞアルクィン」
「全く……」
王の言葉に苦笑いしながら同意するアルクィンであった。

水の月の第五週の五日。ホラント家の面々はセルビナ王国の首都に向かって旅立とうとしていた。ティルト村に滞在する守衛の騎士に伝言を頼み、宰相アルクィンと行き違いにならないように手配も済ませている。
ホラント家の一行を見送る為、村人達のほとんど全員が見送りに来てくれている。そんな雰囲気のなか、村長のレサク・ヤカブが全

員を代表して侑人達に声を掛ける。

「皆さんはどこに行っても村の一員です。いつでも戻ってきて下さいね」

村長の言葉に村人達全員は頷く。中には涙ぐんでいる者まで居る。そんな村人達に対してヨーゼフが代表して出発の挨拶を行う。

「わしらの故郷はここじゃ。どこに行ってもそれは変わらぬ。わし達が留守の間ティルト村の事は任せたぞ皆の衆」

「お任せ下さい」

「行ってらっしゃい」

ヨーゼフの言葉を合図にして馬車は王都に向かって出発する。侑人達はいつまでも村人達に向かって手を振り続ける。

段々小さくなって行く侑人達の姿を見ながら村人達は、黒髪の勇者が導く新たな時代の到来を予感しているのであった。

第17話：それぞれの決意（後書き）

次話からセルビナ王国の首都セルビナに物語の舞台は移動します。

第１８話：盟友

水の月の第六週の八日。ティルト村を出発した侑人達は、十日ほどでセルビナ王国の首都セルビナに到着した。

ハルモ教法王庁教圏国家群の中でも、比較的平和なセルビナ王国の首都セルビナは活気に溢れている。賢王と名高いカルロス・デア・グローセの治世は町の隅々まで行き渡り、街の人口は百万人を超える勢いであった。

「活気に溢れていますねぇ」

「……」

街は王城を中心として、幾重にも連なる堅牢な城壁に囲まれている城塞都市である。王城に一番近い城壁の外側は、貴族たちが住む区画であり、国に使える武官や文官であっても、容易に立ち入る事は許されていない。

その外側に位置する二番目と三番目の城壁で囲まれた区画が、国に使える一般の武官と文官が居住する区画になっていて、このエリアに立ち入るには明確な身分証明書が必要になる。内側に行けば行くほど高い身分のものが居住する区画になっており、城壁を一つの区切りとして、内側に行くほど厳格な管理が成される形で街は形成されていた。

三番目の城壁の外側からは、一般の国民に解放されたエリアになっている。平時は門に衛兵が立っているだけであり、入国する際に

所定の手続きを行えば、怪しい行動をしない限りは基本的には自由に行動が出来る。
しかし戦争や暴動が起こった後の緊急時には全ての門が閉ざされ、城壁を越えるには一定の審査と確認が必要になる仕組みである。

整然と管理された城塞都市を初めて見た侑人は、心底感心するような口調で呟く。

「元の世界でもいろいろな文献で城塞都市について読んだ事はありましたが、実際に目の当たりにすると想像を遥かに超えた圧倒的な存在感がありますね」

そんな侑人の呟きに、三人は少し疲れた様子で答える。

「喜んでもらえているようでなによりじゃ……」
「ユートはなんでそんなに元気なの……？」
「わらわは……そんな事よりも早く部屋で休みたいぞ」

三人が疲れて果てているのには訳がある。
ティルト村からセルビナまでは馬車で普通に移動すれば五日の距離なのだが、ホラント家の一行がここまで来るのに費やした日程は十日余り。なぜ倍の時間が掛かったのかというと、全ての元凶は侑人の行動にあった。
侑人は道中で大嵐の被害にあった町や村を見かけるたびに、馬車を止めて復旧の手助けをしていたのである。例の魔法で堤防を直したり道を整備したりしながら移動する侑人に、全てを任せてほおって置く訳にも行かなかった一行は、侑人に付き合ってここまで無償奉仕しながらやっとの思いでたどり着いたのだ。

「意地を張って失敗したかもしれんの……」

「その意見には共感するよ……」

侑人の中に逃げ込めたはずのアンナも、マリアの『あなた逃げるのね』的な目に挑発され、マリアと張り合う形で侑人と全ての行動を共にしたので、他の二人と同様に疲れ果てている。

元気なのはこの世界に来て身体能力が上がり、疲れをあまり感じなくなっていた侑人だけであった。

「年寄りにはかなり堪えたわい」

侑人達のその行動は、奇跡の善行を行う神の使いの一団として、セルビナ王国中の名声をさらに高める効果があったが、侑人自身も侑人に付き合わされる形で無理やり働かされた三人にとっても、そんな事はどうでも良かった。

今はただゆっくり休みたい。そんな考えで三人は一致団結していた。仕官を決めた後の行動的な侑人に対して皆は好意的ではあったが、驚異的な体力を持つ侑人に付いていくのは、予想以上に厳しい事を皆は悟った。

侑人たちはセルビナの城下町に入る際の所定の入国手続きを、一般人の人たちに混じって行おうとしている。侑人とヨーゼフが審査待ちの長い行列に並び、マリアとアンナは馬車の中で待機していた。

黒髪を隠す事を辞めた侑人の姿は周囲の人々の目を引く。しかしそんな目線に慣れ気に留めなくなっている侑人とヨーゼフは、活気ある街の姿に感心しながら世間話をしている。

「次の人どうぞ」

門を守る衛兵も入国審査を行う役人も、仕事ぶりは非常に丁寧で真面目である。そんな姿を見た二人は、セルビナという王国に対して好感を持つ。

そんな調子で特に不満もなく、和やかに順番を待っていた侑人達であったが、周囲の状況がそれを許さなかった。

「ひょっとして？」

「噂の？」

「世の中に黒髪が何人も居る訳が無いだろ」

侑人の周囲の人々のざわめきがどんどん大きくなる。騒ぎになると不味いと判断した侑人が馬車に戻ろうとした時、騒ぎを聞きつけた衛兵が侑人達の側までやってきた。

そして騒ぎの中心に居る黒髪の侑人の姿を見た衛兵は硬直する。衛兵の瞳孔は開き顔は青ざめていた。

実は衛兵達は七日前の時点から、黒髪の勇者の一行が到着したら直ぐに王城まで案内するように宰相アルクィン直々に仰せつかっていたのだ。くれぐれも失礼の無いよう国賓として最大限の敬意を払って応対する事。アルクィンはそう念押しもしていた。

なかなか到着しない黒髪の勇者一行をこの数日間待ち構えていた衛兵たちではあったが、まさか一般入国者が並ぶ列に黒髪の勇者が並んでいるとは夢にも思っていなかった。国賓扱いの人間は一般窓口ではなく専用の窓口に届け出るのが通例であるので、そちらの方に黒髪の勇者の対応をする者を待機させていたのだ。

目の前で硬直する衛兵に向かって侑人は声を掛ける。

「顔色が悪いようですがだいじょうぶですか？」

「だっだだだ、大丈夫です……っていうか何でこっちの列に並んでるんすか？」

あり得ない状況に相対し思わず素の口調で対応する衛兵。そんな姿に苦笑しながら侑人は返事をする。

「何でと言われましても……入国するのには審査が必要と聞きましたので、審査の為に並んでいるだけですよ」

「あーもう！　伝達の係の者は何をやっているのだ！　何も伝わってないじゃない……あっ！」

素の口調で黒髪の勇者に対して話しかけていた事に衛兵は気が付く。

国賓に対して無礼な応対をしてしまった彼の顔は、真っ青を通り越して土気色に近くなっている。

さらに顔色が悪くなった衛兵を、本気で心配し始める侑人。その姿を見ている周囲の騒ぎは、収まるどころかどんどん大きくなっていく。この混乱は異常を察知した近衛兵の一団が到着するまで続くのであった。

近衛兵の一団に守られた馬車が、ゆっくりとセルビナの街中を進んでいく。町の人々はその様子を遠巻きに見つめている。

侑人は馬車を操る御者の横に座って町の様子を興味津々な様子で眺めている。黒髪の侑人の姿は人々の目を一身に集めており、人々の好奇な目に晒されている御者は落ち着かない様子だ。

「ユート殿のお姿は人の目に付き易いので、馬車の中で休んで頂け

ると助かるのですが……ちなみにそれ以前の質問なのですが、なぜ私を御者に任命したのでしょうか？」

侑人自らが御者として馬車を操ろうとした際に、近衛兵の団長から『黒髪の勇者ご自身に御者をさせる事など出来ません』と言われてしまった為、それならばと侑人が御者に指名した人物は先ほど侑人に話しかけた衛兵の男である。

男は黒髪の勇者に対して無礼な対応をしてしまったはずの自分が、なぜ王城までの御者に任命されたのか全く分からなかった。そんな衛兵の言葉に対して侑人は笑顔で答える。

「すでに話をしている人の方が私も緊張しませんし、貴方は良い人そうなので色々話も弾むかなと思いまして指名させて頂きました」

「はぁ……」

まあそんな事は気にせず街を案内してくれると助かります。そんな侑人の言葉を受けて衛兵の男は、王城に着くまでの間侑人に街を案内しながら御者の仕事を続ける。

最初侑人の丁寧な態度に恐縮していた男も、侑人と会話を続けるうちに段々と打ち解け、王城の正面口にたどり着く頃には、十年来の友人のように仲良くなっていたのであった。

侑人達が貴族の居住エリアを抜け、城の正面口までたどり着いた時、馬車を出迎えたのは宰相のアルクィンである。

御者席の横に座り、御者と仲良く話をしている侑人の姿を最初に見たときは、少し驚いたような様子であったが、直ぐに普段の雰囲気を取り戻し侑人に対して深く一礼をした。

そんなアルクィンの姿を見た侑人も車上で深く一礼をする。宰相が自ら出迎えるという異例の待遇を目の当たりにした近衛兵達に緊

張した空気が走る。
御者の男もその空気を感じていたが今更取り繕ってもどうしようもない為、平気そうな顔をしていた。案外図太い性格をしている。

アルクィンの前で侑人達の馬車が止まる。馬車から降りてきた一行に対して、改めて深く一礼するアルクィン。

「遠路はるばるセルビナまでお越し下さりありがとうございます。それと先ほどの入国手続きでの不手際をお詫び致します。不愉快な思いをさせて申し訳ありませんでした」
「いえいえ、こちらこそご迷惑をお掛けしました。それにそこに居るガイウス殿に非常に良くして頂いたので、非常に有意義な時間を過ごす事が出来ました」
「へっ！？　あっ　はいっ！　ありがたいお言葉を頂き恐悦至極です」

急に話を振られた御者の男、ガイウス・マリウスはしどろもどろになりつつも、何とか返事をする。そんなガイウスに対してアルクィンは『お役目ご苦労様でした』とねぎらいの言葉を掛け軽く頭を下げる。
黒髪の勇者と宰相に相次いで礼を言われたガイウスは、感激の余り失神寸前になっている。心此処にあらずといった様子だ。

「王への謁見は明日を予定しております。部屋を用意させましたので今日の所はゆっくりとおくつろぎ下さい」

笑顔で告げるアルクィンに対して侑人達は各々礼の言葉を述べる。体力が有り余っている侑人以外の三人にとって、アルクィンの言葉は非常にありがたかった。
客間に案内をする為に先頭に立って歩くアルクィンに従って、侑

人達は王城の中へと歩を進めていった。

セルビナ王国の首都セルビナ。そこの中心に位置する王城もセルビナの街に勝るとも劣らない規模である。とはいえ華美な装飾は殆ど施されておらず、機能性を第一に考えて設計されている。

地下一階、地上九階の層から成る王城はセルビナの街を眼下におさめ、威風堂々とした出で立ちでそびえ立っていた。

地下一階と一階は主に王城を守る兵士と使用人の宿舎が集中している。一般兵士用の食堂は一階にある。

二階は兵士を指揮する士官達の宿舎があり、王が閲兵式を執り行う閲兵室もこの階にある。三階は城で働く文官達の宿舎があり、文官達が仕事を行う政務室もこの階に集中している。

四階は各大臣が詰める大臣室があり大臣達の私室もこの階にある。仕事熱心な大臣がこの階に数日篭る事もざらにあり、息抜きの為の簡単な娯楽用の施設もこの階には併設されている。

五階は来賓の為の客室のフロアになっていて、来賓用の各個室は防犯上の為、全て廊下で区切られた形になっていて随時衛兵が巡回している。またこの階からさらに上階へ行く為の階段は、中央部分に一つしか設けられておらず、常に衛兵が見張りに立ち目を光らせている。

六階は広いホールになっており、国賓を招いての晩餐会などが開かれるパーティ会場のような作りになっていて、他の階よりも天井が高く作られている。王族に使える従者の為の宿舎もこの階に併設されている。

七階には広い謁見の間と、王が詰める執務室と宰相が詰める政務室がある。八階は王族の住居になっていて、教養の為の書庫や寝室などが完備されている。最上階である九階は王の私室になっており、この階に立ち入る為には仮に王の許可があっても、宰相など他の閣僚の許可が無ければ立ち入る事が許されない区画になっていた。

国王と宰相の来賓扱いである侑人達は、五階に案内され各々に個室が割り当てられていた。旅の疲れが残るマリアとヨーゼフは、部屋で少し横になると言い各々の個室に入っていく。

侑人も今日位は部屋でゆっくりしようと考え、自身に割り当てられた部屋に入りベッドの上に身を投げていた。

そんな感じで部屋の中でくつろいでいた侑人の耳に、扉を叩く音が聞こえてくる。侑人がその音に返事をしようとした時にはすでに扉は開かれ勝手に来客が進入して来た。

侑人を訪ねて来たのは疲れたと言いつつも好奇心に勝てず、城内をうろうろしようと画策をしていた暇を持て余したアンナであった。

「ユート暇じゃ！　しかしどこかに散歩に行こうとすると、絶対に衛兵が付いてくる。息が詰まってどうしようもないのじゃ」

王女であるはずのアンナのその台詞に侑人は苦笑した。祖国にいた時のアンナの姿が想像でき、アンナのそばに仕える従者に対して軽い哀れみの感情が芽生える。

そんな侑人の雰囲気を察したアンナは、不満そうな顔をしながら侑人に訴えかける。

「王城であるのじゃから仕方ないという事は理解しておる。しかしわらわはこういった雰囲気が昔から苦手なのじゃ！！」

「まあまあ、落ち着いて下さい」

子供のように駄々を捏ねるアンナの姿を見て、どうしようか思案を巡らせていた侑人の耳に再度ドアをノックする音が聞こえる。
今度はノックの後に部屋に入ってよいか尋ねる声が聞こえて来る。声の主は宰相のアルクィンであった。

侑人の許可が出たアルクィンは静かに扉を開け、中に居る侑人達に深く一礼をする。そんな丁寧な態度に侑人達もつられて頭を下げる。
頭を上げたアルクィンは、侑人達に向かってまず謝罪をした。

「長旅でお疲れのところに、訪問してしまって大変申し訳ありません」

そんなアルクィンの言葉に対して、侑人ではなくアンナが返答をする。

「わらわもユートも暇を持て余していたところじゃから、そんなにかしこまらんでもよいぞ」

アンナの言葉を聞いた侑人はジト目でアンナの顔を見る。そんな侑人の視線を感じたアンナは『何か文句があるのか？』と言う目で侑人を睨んでいる。

「アンナ殿がここにいらっしゃったのはちょうど良かったです。実はお二人にお尋ねしたい事があったのです」

二人を見るアルクィンの目は真剣である。
そんな雰囲気を察した二人は続きの言葉を促す。二人の無言の催促を感じたアルクィンは、アンナの目を見ながら言葉を発する。

「単刀直入に伺います。アンナ殿はクーラント魔国の王女殿下であらせられますか？」

アルクィンの発したその言葉を受けて、部屋の空気が張り詰めたような雰囲気になった。

「もしそうだったとしたら、どうなさいますか？」

「我が国はその返答如何によって態度を変えるような真似は致しません。これは我が国の王、カルロス王の意向でもあります」

侑人が部屋に流れる沈黙を破る。

アルクィンの返答内容によっては一触即発の事態が訪れる可能性もあったが、そんな気配は無さそうである。

「ハルモ教法王庁教圏国家群に連なる国家として、クーラント魔国の姫君を迎える事の問題点は十分に理解しています。最悪の場合他の国を敵に回す可能性もある……そこまでの覚悟はしています。しかし我々はそれでも皆様のお力をお借りしたいのです」

「そこまでする理由は何じゃ？」

アンナは訝しげな表情をしている。

一国が背負うリスクを考えるとこの対応は明らかにおかしい。自分を迎え入れるメリットとデメリットのバランスが取れているようにはとても思えない。

国境を接し直接対峙している間柄であるのなら、場合によっては人質として使えるメリットが生まれるが、クーラント魔国とハルモ

教法王庁教圏国家群は国教を接してはいない。

「マグナマテル全体の平和を考えた場合のメリットが、大きいと判断したからです。ハルモ教の伝承の勇者であるユート殿、クーラント魔国の姫であるアンナ殿、司祭であるヨーゼフ殿とその血縁であるマリア殿、そしてハルモ教法王庁教圏国家群の国王であるカルロス王、この五人が上手く力を合わせられれば、今のこの世界の状況を変えられるかもしれない……そう判断しました」

そう語るアルクィンの言葉は力強く嘘は感じられない。本気でこの世界を憂い何かを変えたいと願う姿しか見て取れない。

「アルクィン殿の仰る通り、アンナの正体はクーラント魔国の第一王女、アンジェリーナ・ヴィヘルム・ケトラーです。我々も理由は分かりませんが、私とアンナは半分融合したような形になっています。」

「そういう事じゃ」

侑人は真実を語る。

常に誠意を持って接し、決して嘘を付く事が無いアルクィンなら信用出来る。侑人はそう判断し今まで隠してきた事実をそのまま伝える。

アンナもアルクィンに対して好感を持っている。ここまで馬鹿正直に国家機密を明かす国家の重職に就く者を今まで見た事が無かった。しかもその行為を短慮の上に成り立たせる訳ではなく、様々な配慮や熟慮の上に成り立たせている手際の良さに感心していたりもする。

「正直に話して下さって嬉しく思いますユート殿……いや、出来ればユートとお呼びしても宜しいでしょうか。もはや我々は既に運命

を共にする共同体です。私もユートの事を敬称抜きで呼びますので、私の事もアルクィンと呼び捨てにして頂けませんか？」

そんなアルクィンの申し出を受けて、侑人も微笑みながら返事をする。

「わかりましたアルクィン。私達の命を貴方に預けます」

「わらわの事もアンナで良いぞアルクィン」

アンナもちゃっかりこの流れに乗っているのであった。

この日、黒髪の勇者である小坂侑人と、セルビナ王国宰相のアルクィン・ウルヘルは固い絆で結ばれた。

二人の活躍はマグナマテルの歴史書の中でも燦然と輝く軌跡を残すのであるが、二人にはその事を知るすべは無かった。

第１８話：盟友（後書き）

アルクィンがこの物語の真の主人公のような気がします。

第１９話：賢王と勇者と宰相

水の月の第七週の一日。侑人達とアルクィンは、セルビナ王国の国王、カルロス・デア・グローセに謁見する為、王城の六階にあるホールに集合していた。

侑人達の姿はかなり人目を引き、通りがかる閣僚や従者達は国中で噂になっている一行の姿を横目でチラチラと見ている。

「私の姿ってそんなに変かな……？」

「わらわの魅力に城中の者どもが夢中のようじゃな」

正反対の言葉を発する二人の姿を見てアルクィンは少し微笑む。同じ物を着込んでいるはずなのに、全く正反対の反応をする二人を静かに見つめている。

マリアとアンナはアルクィンが用意をした特注の従者服を着ている。今後城内ではこの格好で政務を行う事になっていた。

「お二人ともすごくお似合いです。急いで用意をしたかいがありました」

「わらわは何を着ても似合うからのぅ」

「そう……かな？」

アンナはアルクィンに対して胸を張ってそう答え、マリアは少しオドオドしながら上目使いで侑人を見つめている。

「私もそう思いますよマリア」
「ほんと？」

マリアの顔が明るくなる。
先ほどまでのオドオドしていた雰囲気は無くなり、見るからに上機嫌な様子で鼻歌を歌いながら洋服の裾の辺りをいじり始める。
急に機嫌が良くなったマリアの姿を侑人は少し不思議そうに見つめ、そんな二人の姿をアンナは少し呆れたような顔をしながら見守っている。

「まあ、ユートはユートじゃから仕方ないの」
「何か言いました？」

多分気のせいじゃと言いながら、アンナは周囲を見渡す。部屋のあちらこちらでは従者達が忙しそうに動き回っていた。

通常の従者服は白を基調とした生地で作られている比較的簡素な服である。
従者の職務は肉体労働系の仕事も多く、王城に勤めているとはいえ華美な装飾は施されていない。あくまで実務優先であり機能性を求められた結果こういう形で落ち着いている。

「少し派手かなって心配してたんだ」
「わらわにとってはまだまだ地味な領域じゃぞ」

しかし二人に用意された特注の従者服は、従来の物と形状は同じであるが、黒を基調とした生地に金糸で刺繍が施された豪華なものである。
黒い生地と金糸の刺繍が施されたその服は周囲に圧倒的な存在感を放っていた。

アルクィンがこの服を用意したのには、二つの理由がある。

一つ目は、この二人が黒髪の勇者である侑人の専属従者である事を、周囲の者達にひと目で判別させる為であった。通常の従者と違ってこの二人に指示を出せるのは、基本的には侑人ただ一人である。

アンナはともかくとして、マリアは他の人に何かを頼まれたら断る事ができず、そのまま黙って仕事をしてしまいそうだとアルクィンは考えたのだ。周囲に黒髪の勇者の専属従者である事をアピールする事により、マリアの負担を減らす意図があった。

そして不用意な揉め事を避ける意味合いもある。マリアとアンナは同世代の女性と比べて、非常に整った容姿をしている。十人居れば十人が振り返るほどのその容姿は、城に仕える男達の興味を必ず引く。

通常の従者服を着て仕事をしていれば、その容姿に惹かれた誰かが要らぬ行動を起こすかもしれない。アンナなら一蹴しそうだが、マリアは下手をすると深く傷ついてしまう可能性がある。

もしそのような事が起こった場合は……アルクィンはその情景を想像して思わず身震いし、小さな声で独り言を呟く。

「ユートが切れるととんでもない事になりそうですね……」

「私がどうかしましたかアルクィン？」

アルクィンは侑人の質問に笑顔で何でもありませんと答えつつも、ゲオグル伯爵に少しだけ感謝していた。

ゲオグル伯爵は本当に無能ではあるが、そのお陰で侑人とマリアがどうやらただならぬ関係であるという非常に重要な情報を得る事が出来た。無能な人物でも使い方によっては案外役に立つものだ…

…等とアルクィンは考えている。

男女の事に対しては無頓着なアルクィンでは気が付かなかったであろう、その情報をもたらしてくれたゲオグル伯爵の失敗に感謝しつつ、アルクィンは再度思考の海に潜っていく。

アルクィンが特注の従者服を用意した二つ目の理由は、アンナの素性を出来るだけ隠す為である。

普段のアンナは非常に軽装である。その為ヴァンパイア族の証である、黒い羽が常に見えている状態であった。体をすっぽりと覆う従者服はアンナの羽を隠し、黒い色は白地だと透ける可能性がある黒い羽を透けさせず、目立たなくさせる効果があるのだ。

生態数の少ないヴァンパイア族であるアンナはひと目を引く。何も対策をせず放置しておけば、誰かが不審に思い素性を詮索する可能性が高い。クーラント魔国の姫君というアンナの素性がばれると、セルビナ王国全体を巻き込む重大な事態になる。

アンナには城内だけでなく、城外に出歩く時も従者服で出掛けて欲しいと伝えてあった。その言葉に対してアンナは、不用意な事態を招かないように協力すると、渋々ながら納得してくれている。

用意した従者服を気に入ってもらえなかったらどうしようという危惧は、今のアンナの喜びようを見れば杞憂である事が分かり、アルクィンは心底ホッとしていた。

「カルロス王の謁見の準備が整いました」

王の準備が整った事を知らせる従者の声がホールに響く。アルクィンは従者の言葉に軽く頷いた後、侑人達を振り返る。
異世界に召喚された時に着ていたスーツ姿の侑人、神官服を着ているヨーゼフ、そして漆黒の従者服を着ているマリアとアンナは、アルクィンに対して無言で頷く。

「では皆さん参りましょう。それとユートは例の準備を頼みます」
「分かりました」

侑人は普段は抑えている自身の魔力を全開放する。想像を絶するほどの膨大な魔力がホール全体を包み込む。
唖然とした表情をして動きを止める従者達。ホールに居る全ての者の目は侑人に向けられている。しかしそんな周囲の雰囲気を感じ取ったアルクィンの表情は満足げである。

「では気楽に行きましょうか」

アルクィンの言葉に対して皆は笑顔で頷き、謁見の間に続く階段を登っていく。一世一代の大舞台の幕が今開かれる。

「まもなく黒髪の勇者様一行がご入場されます」

従者の報告を受けた謁見の間では皆の緊張感が高まっていく。先ほどから感じる人知を超えた膨大な魔力が、この部屋にいずれ姿を現す者の圧倒的な存在感を否が応でも感じさせる。
王の側近や大臣達はあからさまに動揺している。いつも通りの落ち着いた姿を見せるのは、王座に悠然と座るカルロス王ただ一人であった。

「黒髪の勇者様一行のご入場です」

謁見の間の入り口を守る衛兵の言葉と共に、重厚な扉がギギギと音を立てて開く。謁見の間に居る全ての者の目線が門に注がれ、宰相アルクィンの後に続いて入場してきた侑人の姿を見た、謁見の間に居る全ての者の動きが完全に止まる。

王座に座るカルロス王を涼しげな眼で見つめる黒髪の男は、誰も見た事がないような人間業とは思えないほど細かく編みこまれた、光沢が少しある紺色の布で作った服を上下に着ていた。

縫い目も人間業と思えないほど細かく丁寧な仕上げであり、どこの国の王族でも着ていないような不思議な服であった。

筋肉質には見えない少し長身の優男ではあるが、体からあふれ出す魔力は圧倒的であり、その魔力は周囲の者に恐怖感を与えるほどである。

気を張っていないと自然と膝が震えてくるほどの威圧感を感じさせるその黒髪の男は、落ち着いた様子で王の前までゆっくりと歩を進めると、王に向かって深く一礼をして言葉を発した。

「ユート・コサカと申します。この度はセルビナ王国にお招き頂き、恐悦至極に存じます」

黒髪の男の声は決して大きい声ではなかった。しかし部屋中に響き渡るような澄んだ声をしている。

その声を聞いたカルロス王は、何の言葉も発さずに王座から立ち上がる。そんな王の行動に周囲はどよめいたが、カルロス王は何も気にせず侑人の前まで歩を進める。

そのままゆっくりと歩を進め、侑人の前まで来たカルロス王は侑人に対して跪く。

「我が国の求めに答えて下さり感謝の言葉もございません。我が国は黒髪の勇者殿の恩義に報いる為にも、宰相の座を貴方様に用意するつもりです」

カルロス王の態度とその言葉に対して周囲は大きくどよめいた。国の要職に就いている大臣や門閥貴族達の動揺は激しく、小声で囁きあっている。

しかし侑人はそんな王の態度や周囲の様子を気にする事もなく、先ほどと全く変わらない様子で静かに佇んでいた。

「お顔を上げて下さいカルロス王。私はこの国の要職を望んだりはしておりません。私はマグナマテルの為に、何かを成せればそれで満足なのです。カルロス王はマグナマテルの民の事を真に思う賢王とお聞きしております。私のほうこそお力をお借りできればと思っております」

「ハルモ教の黒髪の勇者殿に対して、そのような失礼な事をする訳にもいきません」

そう言いながらカルロス王の手を引き立ち上がらせる侑人。そんな侑人の言葉を受けたカルロス王は少し困ったような顔をしている。

「私はセルビナ王国の末席に加えて頂けるだけで満足です。それよりもここに控えるこの人物、私を保護し守って下さった真の人格者である、ヨーゼフ・ホラントを重用して頂ければありがたく思います」

「私もヨーゼフ殿のご高名は聞き及んでおります。エディッサ王国で神官をされている時も、権力争いを嫌う真に民を思う神官として名を馳せておられたとか。幸か不幸かセルビナの司祭は今不在です。ヨーゼフ殿さえ良ければ王都の司祭をお任せしたいと考えておりま

す」

侑人とカルロス王の言葉を聞いた皆の視線が、一斉にヨーゼフに集まる。当の本人のヨーゼフは、侑人とカルロス王を静かな目で見つめたまま、落ち着いた雰囲気でこの場を見守っている。

黒髪の勇者とセルビナ王国の国王の信頼を一身に受けるに相応しいその佇まいに、謁見の間に居る者たちは、ヨーゼフの司祭任命に対して口を挟む気は無くなっていた。

周囲の雰囲気の変化を感じたカルロス王は、少しだけニヤリと笑みを浮かべ表情を崩す。その表情を見たアルクィンはワザとらしく咳払いをする。

アルクィンの咳払いを聞いたカルロス王は、少し慌てたような雰囲気で侑人の顔を見つめる。真剣な表情をしているように周囲からは見えたが、侑人が見たカルロス王の目は少し笑っていた。

「ヨーゼフ殿を司祭として迎えるのは我が国としても願うべき内容。その事に対して異存などありません。しかしユート殿をこの国の末席に加えるなどという事は、ハルモ教信者の私には出来ません」

王のその言葉に対して、今まで黙っていたアルクィンが口を挟む。

「カルロス王。黒髪の勇者殿は権力を望んではおられぬ様子です。今ここで無理強いをしても、ユート殿は決してご満足されないと思われます」

「ではアルクィンはどうするのが一番良いと思うのだ？」

その質問を受けたアルクィンは、落ち着いた雰囲気で王に対して進言をする。

「ユート殿には我が国の相談役として仕えて頂いてはいかがでしょうか。カルロス王のご決断の手助けはもちろんお願いするとして、若輩者の身で宰相を預かっている私や、国の為に日夜ご尽力して頂いている各大臣達の相談にも乗って頂き、我が国を一歩引いた視線から導いて貰えれば、我が国にとって大きな力となりますし、ユート殿ご自身のお考えにも合致するかと存じます」

アルクィンの言葉を聞いた大臣や門閥貴族達は大きく頷く。ただの相談役であるならば、黒髪の勇者が権力の中枢に食い込む事は無くなる。

それどころか国の為に力を発揮して貰える環境も整えられ、自分達の仕事も楽になる。アルクィンの提案に対して反対する者は誰も居なかった。

そんな皆の雰囲気を感じたカルロス王は眉間に少ししわを寄せる……演技をする。

「アルクィンの意見を採用しようと思うが、それだと私の気持ちが治まらん。ユート殿には王城の七階で政務に励んで頂こうと思う。それで文句は無いな」

王の言葉に対して謁見の間に居る皆が深く頭を下げる。

侑人はそんな周囲の姿を見て苦笑いしている。よくもまあここまで……といった感情が胸に湧き上がるが、周囲にそれを悟らせるようなヘマはしない。

「私はカルロス王のお言葉に従います」

カルロス王は侑人に対して誰にも見られぬように気を使いながらも、ニヤリと笑いかけるのであった。

最大の問題点であった侑人の待遇が決まった後は、ヨーゼフの司祭戴冠の儀の日程を決める話し合いの流れになっていった。

黒髪の勇者である侑人と、セルビナ王国の国王カルロスの絶大なる信頼を受けるヨーゼフのセルビナ司祭任命の話し合いは、セルビナ王国の重鎮の反対も無くスムーズに決まっていく。

四日後の水の月の第七週の五日に戴冠の儀が行われる事が決定し、この日の謁見は無事に終了したのであった。

第１９話：賢王と勇者と宰相（後書き）

脚本：アルクィン　主演：カルロス王　助演：侑人　以上三人による茶番劇でした。

第２０話：始動

セルビナ王国の首都セルビナ。その中心にある王城の最上階、九階の王の私室からカルロス王の楽しそうな声が聞こえる。

「わっはっは。俺の演技もなかなかのものだろう」

「大げさ過ぎる演技に、途中で気を抜く中途半端な集中力……カルロス王の演技は落第点です。結果として上手く行きましたが、それは全てユートのおかげですね」

「アルクィンのわざとらしい台本に合わせて演技をしたまでだ。普通に演技していたら、あまりの演出の臭さに皆にばれていた所であったぞ」

「私の脚本は完璧です。カルロス王の演技力が、あれほどまでに酷い事を考慮しきれなかったのが、唯一の失敗でしたけど」

アルクィンはジト目で王の演技を酷評し、カルロス王は憮然とした態度で反論している。一国を取りまとめている人物達の会話にはとても思えない。

目の前で幼稚な言い争いをする王と宰相の姿を見て、侑人達は呆れた顔で呟く。

「よくあれで皆が納得したものだと、わらわは逆に感心したぞ」

「さすがにあれは無いよね……見ているこっちはドキドキしたよ」

「あれだけ大げさに持ち上げられると、背中が痒くなったわい」

「アルクィンの指示通りに演技はしましたが、正直心配ではありましたね」

四人のその呟きを聞いた二人は『やっぱりお前の脚本が悪い』『いや王の演技はありえないです』などと、この後数分間に渡って言い争いを演じるのであった。

普通では入る事が許されない王城の最上階にある王の私室。今この部屋には部屋の主であるカルロス王の他に、宰相のアルクィン、セルビナ王国相談役の侑人、その従者のマリアとアンナ、そして司祭候補のヨーゼフが集まっている。

カルロス王が黒髪の勇者殿達とゆっくり話し合いたいから、王の私室に彼らを招くと、先ほどの侑人達の謁見の最後のドサクサに紛れて王の側近や大臣達に宣言をし、動揺が収まっていない皆の了承を半ばだまし討ち気味に取った事で実現させたのである。

王の世話をする従者達には人払いを命じてこの階からは退去させている為、王城の最上階にはこの六人しか居ない。

意図的に密室を作り上げた六人は今後の打ち合わせをする為に集まったのであったが、進行役の王と宰相が暴走している為、なかなか本題に入れずにいた。

「まあまあ、結果的に上手く行った訳ですので、カルロス王の演技もアルクィンの脚本も素晴らしかったと……そういう事にしませんか？」

このままでは埒が明かないと判断した侑人はこの場を収めようとしたが、少し投げやりな侑人の提案を受けたアルクィンの何かに火がついた。

「ユート！　私の脚本は綿密な計算によって成り立っているのです！」

その言葉を皮切りにして、アルクィンの脚本に対する大演説が始まる。アルクィンの大演説を要約すると以下のようになる。

入場前に侑人に魔力を開放させる事には三つの理由があった。

まず人知を超えた膨大な魔力を感じさせる事によって、王の側近や大臣達の動揺を誘う。これによって演技を見破られにくいようにする効果が得られる。これが一つ目の理由である。

次に侑人に視線を集中させる事によって、アンナから注意を逸らし余計な詮索をする暇を与えない。これによってアンナがヴァンパイア族だという事を隠し、素性を探り辛くする効果が得られる。これが二つ目の理由である。

最後の理由は、王の記憶力が心配なので、うろ覚えの台詞の胡散臭さを隠す効果を狙ったとの事。実はこれが一番大きな理由だったとアルクィンは語り、それに反論する王とのいつものやり取りで数分間話が脱線するのだが、その事については割愛する。

次に王と侑人の会話の流れにも、いくつかの意味があった。

王が侑人に対して要職に就くようにまず要請しそれを侑人がやんわりと断る事により、重臣達に安心感を与える事が第一の目的であり、その後の侑人の相談役就任をスムーズに進める為に必要であったとアルクィンは語る。

一回無理難題をワザと持ちかけてその後に本命の事案をぶつければ、周りの重臣達もそれならば良かろうと納得するはずである。現代社会の交渉の場でも良く使われる手段であるので、この点に関しては侑人も理解していた。

そして侑人にただ断らせても良かったのだが、この流れを利用してヨーゼフを売り込めば、一石二鳥の効果があると判断し、ここで二人にヨーゼフを褒めさせたとの事。

司祭就任に対して大きな反対は無いはずではあるが、王と黒髪の勇者が絶賛する人物だという事を周囲に認知させてしまえば、今後のヨーゼフの仕事が楽になるはずである。

褒められすぎて居心地が悪すぎたのは少し納得できなかったが、この点に関してはヨーゼフも理解している。

そして最後に、カルロス王に対するハルモ教教会の心象を良くする為にも、色々と演出を施したのだとアルクィンは熱く語る。

近年のカルロス王の政策は、ハルモ教教会と考えと異なる部分があり、最近教会から少し良く思われていなかった。

その為、侑人との会話の節々に『ハルモ教の信者』や『ハルモ教の黒髪の勇者殿』という台詞を混ぜ、敬虔なハルモ教の信者である事を周囲にアピールしたのである。

侑人の仕官をスムーズに運び、ヨーゼフの認知度を高め、カルロス王に対するハルモ教会の心象を良くする。

「これらを全て成り立たせる為に考え出された素晴らしい脚本なのです！」

その言葉で大演説を締めたアルクィンの表情はとても満足そうだった。

「アルクィンはそこまで考えていたのだな……さすがは我が国の宰相だ！」
「そこまで考えられていたとは……正直脱帽しました」
これ以上長々と演説を続けられてはたまらないと判断したカルロス王と侑人は、少し引きつった顔をしながら口々にアルクィンを褒める。
マリアとヨーゼフは椅子に座ったまま既にぐったりとしている。アンナに至っては部屋の隅で小さくなり耳を押さえて震えていた。
アルクィンのプライドを損ねる事は絶対に避けよう……五人はそう固く誓ったのであった。
そんな皆の態度に少々納得いかない雰囲気のアルクィンではあったが、時間が大分過ぎている事に気が付き本題の話に入っていく。
「ヨーゼフ殿の司祭戴冠の儀までの時間もあまり無いことですし、そろそろ本題に入りましょう……アンナもそんなところで遊んでいないで、こっちに来て話に加わって下さい」
「なっなんじゃと！　わらわはそなたの話がつま…モゴモゴ……！！」
これ以上話を拗らせたくない侑人とマリアがアンナの口を慌てて塞ぐ。
「さあ！アンナも来た事ですし、早速話を続けましょう！」
「私達にも協力出来る事があるのよね！？」
「ヴーッ！！　ヴーッ！！」

アルクィンは少し怪訝そうな顔をしていたが直ぐに気を取り直す。残された時間は少なく遊んでいる暇など無い。

「まずはヨーゼフ殿ですが、四日後に行われる司祭戴冠の儀までは、セルビナ教会で儀式の準備を行っていて下さい。私とカルロス王も儀式の進行等の打ち合わせがありますので、セルビナ教会の方に顔を出します」

アルクィンの言葉を受けたヨーゼフは頷く。

「次にユート達ですが、セルビナの街に慣れる為という名目で、この三日間は城下を散策して下さい」

「司祭戴冠の儀の準備を手伝わなくて良いのですか？」

侑人は怪訝そうな顔をしている。大恩のあるヨーゼフの為にも是非とも先頭に立って手伝いをしたいと考えていた。

そんな侑人の姿を見たアルクィンは笑顔で頷いている。侑人達には侑人達しか出来ない大事な役目が待っている。

「儀式の準備は私達だけで大丈夫です。ユート達にはユート達にしか出来ない方法で手伝って貰いたいのです」

「ひょっとして、司祭戴冠の儀の宣伝をさせようと思っていませんか？」

アルクィンの意味深な言い方にピンと来た侑人は苦笑する。それに対してアルクィンは軽く頷きながら嬉しそうな顔をしている。

「さすがユートは話が早い。まあとにかくユート達には、出来るだけ目立つ格好で街を散策して貰います」

アルクィンから侑人達に与えられた役目は出来るだけ城下で目立つ事である。

侑人はそのままの姿でも十分に目立つのだが、念のために異世界産のスーツを着込み、マリアとアンナは特注の漆黒の従者服を着て、全員が揃って城下を歩けば確実に人目を引く。

それだけでも十分すぎるほど目立ちそうではあるが、アルクィンの考えはそれだけでは留まらない。最大限の効果を得られるように色々と画策している。

「街を散策している時に、もし次期司祭の人柄を聞かれた場合には『私も尊敬しているすばらしい方です』とか『私の恩人でもある人ですので信頼しています』などと、普通に（・）答えて頂ければと思います」

アルクィンの言葉を聞いたマリアは苦笑する。

「本当に演出が好きなのね……」

「入念に準備をしていると言って下さい」

マリアの呟きに対して、アルクィンは澄ました顔で答えている。そして何故か少し考え込んでいるような素振りを見せる。そんなアルクィンの姿を侑人とマリアは不思議そうな顔で見つめていたのだが、ある一言で事態は動く。

「アンナの顔色がかなり悪いのですが大丈夫でしょうか？」

「うわっ！　アッアンナ！！　大丈夫ですか！？」

「きゃあ！　アンナの口を塞いでいる事を忘れてた！！」

侑人とマリアが慌てて手を離した時には、アンナの顔は青紫色になっていた。

「危うく別の世界に旅立つところだったぞ……」
「申し訳ありません……」
「ごめんねアンナ……」

侑人達を涙目で睨みつつアンナがぼやく。そんなアンナをアルクィンが宥めている。

「まあまあアンナ。お二人も悪気は無かったのですし、許してあげて下さい」

この事態を招いた犯人の無責任な言葉を聞いた三人は、ジト目でアルクィンを見つめるが、当の本人は涼しげな顔をして全く気にする様子も無い。

カルロス王はそんな皆の雰囲気を感じて苦笑していたが、不意に真面目な顔になり全員の顔を見回しながら宣言をする。

「皆の力で司祭戴冠の儀を成功に導いてくれ。記念すべき第一歩で躓くわけにはいかん」
「了解致しましたカルロス王」
「微力ではありますが、ご協力させて頂きます」
「わらわに任せろ！」
「私も精一杯頑張ります」
「この老いぼれがお役に立てるか判りませぬが、期待に答えられる様に頑張りますじゃ」

皆の力強い返答を聞き、カルロス王は大きく頷くのであった。

「号外ーー！　号外ーー！」

セルビナ王国の首都セルビナ。その街中にある大きな噴水前の広場で、一人の男が右手に持った看板を高々と掲げ、声を張り上げている。

「マグナマテルの世界に八百年ぶりに姿を現した黒髪の勇者が、昨日セルビナ王国の相談役に就任したという大ニュースだ！」

その声を聞いた広場中の人々がその男に群がる。その為辺りは一瞬で大混乱に陥った。男は少し焦りながら声を張り上げる。

「号外一部につき銅貨一枚だ！　まずはこの箱にお金を入れてからにしてくれ！」

そんな必死な声は人々には届かず、男はどんどん人波に押し流されて行く。セルビナの城下町では侑人達の噂話が徐々に広がっていた。

噴水前広場が大混乱に陥っている頃、当の本人の侑人達は王城の六階にある広いホールで人待ちをしている。

城下を散策する際には、案内と護衛を兼ねて衛士を一人付けるので、ホールの所で待ち合わせをお願いしますとアルクィンに言われていたのだ。

しかし約束の時間になってもその衛士はなかなか姿を見せない。気が長い方である侑人とマリアは特に気にしてはいなかったが、気が短いアンナの機嫌はどんどん悪くなっている。

「わらわとユートの魔力があれば護衛など要らぬだろう！　衛士な

ど居ても役に立たないどころか足手まといじゃ！　わらわはもう待てん！！」

やがて待ちきれなくなったアンナはそう言い放ち、勝手にづかづかと歩き始めようとする。そんなアンナを慌てて止めるマリア。

「後できっとユートが何か奢ってくれると思うから、もう少し我慢してねアンナ」

それなら仕方ないと少し怒りが収まるアンナ。勝手に奢る約束をさせられた侑人はその様子を呆気に取られた顔で見つめている。

マリアは侑人に対してごめんねというようなジェスチャーをしている。そんなマリアの姿をみた侑人は少し溜息を付く。

「案内役が居た方が散策も楽しめると思いますし、もう少しだけ待ってみましょう」

「案内をして貰いながら、屋台で何かを買って食べるのは面白そうじゃの」

もちろんユートの驕りじゃ！　と笑顔で言い切るアンナの姿を見た侑人は、色々な事を諦めて財布の中身を確認し始める。

マグナマテルで一般に流通している貨幣は四種類ある。青銅貨十枚で銅貨一枚の価値があり、銅貨十枚で銀貨一枚の価値がある。一般市民が目にする機会がある最高貨幣の金貨は銀貨十枚の価値があり、金貨を日本円で換算すると大体一万円くらいの価値になる。

金貨の上に白金貨がありその価値は金貨百枚分に相当するが、主に国家予算の管理や各国間の貿易に使われるだけであり一般には流通していない。

この世界に来てずっと無職であった侑人の財布の中には、銀貨が二枚しか入っていなかった。日本円に換算すると二千円程度である。

侑人が財布の中身を確認してさらに深い溜息を付いていると、六階のホールに上がる階段の方からガチャガチャという音が聞こえてくる。音の主はかなり急いでいる様子であり音のテンポはかなり速かった。

三人は階段の方を見つめる。

やがて一人の鎧を着込んだ衛士の姿が見え、その衛士は侑人達の姿を視界に捉えると、大急ぎで三人の前にたどり着き、ゼェハァ言いながらも侑人達に言葉を掛けてくる。

「お……遅くなり、た……いへん申し訳あり……ませんでした……」

そう言い終わるのと同時に座り込む衛士。侑人は慌てて周囲に居た従者に何か飲み物を持って来るように頼んだ。

そして数分後、従者が持って来た飲み物をいまだに座りこんで荒い呼吸をしている衛士に渡す。衛士は渡された飲み物を飲むために兜を外し、座り込んだまま一気飲みをし一息付いている。

「随分と慌てていらっしゃった様子でしたし、遅れたのには何か訳があったのでは無いですか？」

「そっそれがですね、本日もいつもの通り入国審査場の警備に向かったのですが、いきなり自分の所属する部署が変わったとそこで聞かされまして……しかも黒髪の勇者殿の警護の件もその場で……」

慌てて戻って来たものの、間に合わず申し訳ありませんでしたと再度謝る衛士。兜を脱いだ事で衛士の素顔がしっかり見え、その顔は非常に申し訳無さそうな顔をしている。

しかしそんな済まなそうな衛士の顔を見た侑人の表情は明るくなる。予想外の人物の顔がそこにはあった。

「ガイウス殿じゃないですか！　今日の護衛はガイウス殿が勤めてくださるのですね？」

遅れてきた衛士は、侑人たちがセルビナに付いた時に入国の対応をし、そのついでに馬車の御者を務めてくれたガイウスだった。

声を掛けられたガイウスは笑顔で一回頷いたが、急に真面目な表情をして侑人達の前に跪き、改まった声でこう告げる。

「セルビナ王国軍所属、ガイウス・マリウスは本日付で近衛兵団へ転属され、ユート・コサカ殿付きの護衛の任務を承りました。今後とも宜しくお願い致します」

ついでに少尉に階級が上がったりもしたんですけどね。顔を上げたガイウスは普段通りの笑顔で付け加える。

侑人と仲が良くなったガイウスを衛士に付けたほうが、侑人たちも色々と動きやすいだろうと判断したアルクィンが、気を利かせた事によってガイウスの護衛就任が決まったのである。

しかし余りに急な決定だった為、当事者のガイウスに情報が流れるのが遅れた事が今回の遅刻の原因であり、ガイウスに罪は無い。

「「お気を付けて！！」」

王城の入り口を守護する衛兵達に見送られながら、街へと向かう

侑人達一向。異世界産のスーツを纏う黒髪の侑人と、特注の漆黒の従者服を着るマリアとアンナの美少女二人、そして近衛兵団の鎧を着るガイウスの姿はかなり人目を引く。

目立てというアルクィンの指示ではあったが、これは余りにも目立ちすぎではないか……そんな事を侑人は考えながら歩いている。

「それでユート殿……じゃなかった、ユートの旦那はどこへ行きたいんすか？」

どこに連れて行けなどという指示は特に受けてないと語るガイウス。ちなみにガイウスの口調は侑人が普段通りで良いと許可した為、少しだけたどたどしいが段々とざっくばらんな口調になっている。

「そうですね……どこか景色がきれ「食べ物の屋台がある場所にわらわは行きたいぞ！」」

侑人の返事はアンナの大きな声で遮られる。アンナの言葉を聞いたガイウスは、侑人の目を『良いんですか？』というような目で見る。

アンナの言葉とガイウスの視線を受けた侑人は苦笑しながら頷く。

「じゃあ……噴水前の広場にでも行きますか。あそこには色々な屋台が出ているはずっす」

「おおー！　早くそこに連れて行くのじゃ」

急かすアンナに背中を押されながら、ガイウスは侑人達を噴水前広場まで案内するのであった。

第２０話：始動（後書き）

情報を制するものは全てを制するのです。

第２１話：稀代の名演説

噴水前広場は溢れかえる人々で賑わい、さまざまな人種が行き交うその空間は、異世界に来たことを侑人に強く実感させる。
感心したように周囲を見渡す侑人。田舎育ちのマリアもきょろきょろと周りの景色を楽しそうに見ている。

しかしアンナはそんな侑人達とは違った物を見つけ興奮する。

「おおっ！　あそこに何やら美味しそうな物が売っておるぞ！　では我が財布、あれを買ってくるのじゃ！！」
「はいはい……わかりました」

私が買ってきましょうかと言うガイウスを笑顔で制して、侑人は屋台の列の最後尾にさも当然だという雰囲気で並ぶ。
アンナとマリアは侑人その姿を笑顔で見ていたが、ガイウスは一人で驚いている。

「なんでユートの旦那は列に並んでいるんすか？」
「皆が並んでいるんだから、その後ろにちゃんと並ぶのが当たり前じゃないのかな？　ユートもそう思ってるから並んでいるんだと思うけど……何かおかしいかな？」

マリアは何でガイウスがそんな事を聞くのか良く判らないといった表情をしている。

今まで見てきたお偉いさん方からは、絶対聞けない言葉を聞いてガイウスはまた驚く。まあ、お偉いさん方が屋台で買い物をする姿を見たことすらないのだが……そんな気さくな態度の侑人達一向に対して好印象を持つガイウス。

「ユートの旦那は並ぶつもりでも、周りの人達がそれを良しとしますかねぇ？」

「あっ……」

ガイウスはふと思ったことを口にする。

マリアもガイウスの言葉を聞き、黒髪の勇者という立場が持つ影響力の大きさに気が付く。そしてマリアの危惧は皆の目の前で現実のものとなった。

「なにやら様子がおかしいぞ」

そんなアンナの声を合図にしたかのように、屋台の列が侑人の目の前で割れていく。黒髪の侑人の姿に気が付いた屋台の列に並ぶ人達が、自主的に順番を譲っているのである。

順番を譲る人々に対して侑人は元に戻るように話しかけるが、黒髪の勇者に対して恐縮してしまっている人々にその声は届かない。

「俺の責任だ……」

周囲のその状況を見た侑人は少し悲しそうな顔をしている。その顔を見たガイウスは自分自身が無理やりにでも買いに行くべきだったと後悔をする。

気さくな侑人に甘えてしまって挙句の果てには勇者殿に不快な思いをさせた。しかも街の人々が感じる黒髪の勇者に対する印象はこのままでは決して良くはないはず。その思いはガイウスの心をどん

どん重くしていく。

「しょうがないわね……」

そんな思考の深みにはまって何も出来なくなっているガイウスを尻目に、一人の少女が凛とした表情をしながら行動を開始した。

「はいはいー。屋台の人が困ってるからちゃんと並んでねー」

声の主はマリアであった。

マリアは笑顔を浮かべたまま、手馴れた様子でテキパキと行動し、列から外れた人達をどんどん元へと戻していく。

人々は突然現れた漆黒の従者服を着た少女の登場に驚いていたが、マリアに促されるまま大人しく列に戻っていった。

「アンナもガイウスもこっちに来て手伝ってー！」

「わ……わかったのじゃ」

「うっす！」

マリアに呼ばれた二人も慌てて行列の整理を始める。そんな三人の姿を呆気に取られた表情で見つめる侑人。

「こらユート！　ぼけっとしてないで手伝いなさい！」

「あっ……すみませんマリア。すぐ手伝います」

そんな侑人に対しても容赦なくマリアの言葉が飛ぶ。

マリアの声で我に返った侑人も行列の整理を手伝い始める。黒髪

の勇者が行列整理の手伝いをしている、かなりシュールな状況を見た人々は呆気に取られていたが、それ以上の驚きを与えられた人々は、侑人の指示にも従っておとなしく列に並び直していく。

人々の視線は黒髪の勇者に向かってテキパキと指示を出す、黒髪の勇者の従者らしき人物……マリアに集まっていた。

そんな周囲の視線を気にせず、ものはついでとばかりに屋台の店主に値段を尋ねるマリア。

「おじちゃん！　この焼き鳥はいくらなの？」

「お……おうっ。三本で銅貨二枚だ」

「銅貨二枚ね。わかったわ」

値段を確認したマリアは、本当に売り子を始める。

「美味しい焼き鳥が三本でたったの銅貨二枚ですよー」

マリアのその声に釣られて、焼き鳥の屋台には長蛇の列が出来上がって行った。

「おいしー。やっぱり働いた後の食事は最高だね！」

マリアの満足そうな声が屋台の裏から響く。一仕事を終えたマリア達は屋台の裏側にある石畳に座り込み休憩していた。

「た……確かに美味しいですね」

「わらわは疲れすぎて、食欲があまり沸かないぞ……」

「あれだけ働けば何を食べても美味しく感じる気がするっすけど……」

マリアはアンナの声に即座に反応する。

じゃあ私が貰って良い？　とアンナに尋ね、頷いたのを確認した後アンナ分の焼き鳥まで頬張っている。その顔はとても幸せそうであった。

「本当にそんな物だけで良いんですかい？　あれだけ働いてもらっているのにとても申し訳ない気がするんだが……」

「いーのいーの。こっちの目的も達成できたし」

目的とはなんなんです？　と問い掛ける店主に対してこっちの事だから気にしないでと、笑顔で返答するマリア。店主もまあ聞いても仕方ないかというような雰囲気でその場から立ち去っていく。

侑人達三人も苦笑しながらさっきの事を思い返している。

マリアの言うとおり、侑人たちの目的であるヨーゼフの知名度アップ作戦は、予想外の大成功を収めていた。

マリアの予想外の売り子参入により、屋台には長蛇の列が出来上がってしまった為、侑人達はなし崩し的に屋台を手伝う羽目になった。

ガイウスは焼きの手伝いにまわり、侑人は商品の受け渡しとお金の受け取りを行った。アンナはマリアと一緒に売り子と行列の整理を行っていた。

当初は見慣れない高貴な格好をした異様な集団が手伝っていた為、街の人々も若干遠慮気味であったが、時間が経つにつれ人々も段々慣れていった。

慣れていけば会話も弾むようになり、侑人達と街の人々のコミュニケーションはどんどん図れるようになっていったのだ。

自然と会話が出来るようになっていけば後は簡単だった。

新しい司祭の事に関しては街の人達の関心も高く、何もしなくても街の人達から、ヨーゼフに対しての質問が来た。

後はアルクィンの指示通りの返答をしていけば、勝手に街中に噂が広まっていったのである。

この日、黒髪の勇者と新任司祭の人柄の噂はセルビナの街中に広まった。

侑人は気さくに屋台の手伝いをする庶民の味方のちょっと変わった勇者として、ヨーゼフはその勇者が信頼する人格者の司祭として街の人々に対して強い印象を与えた。

アルクィンの予想以上に二人の名声は高まったのであった。

水の月の第七週の五日。セルビナ教会では、セルビナ新司祭ヨーゼフ・ホラントの司祭戴冠の儀が、厳かな雰囲気で執り行われている。

祭壇の右側に設けられた特別席には、セルビナ王国の国王カルロス・デア・グローセを始めとし、セルビナ王国宰相のアルクィン・ウルヘル、セルビナ王国相談役の小坂侑人が座っている。祭壇の左側の席にはハルモ教教会の関係者が席を連ねていた。

そしてその他大勢の大臣達と、プロセン王国に援軍として派遣されていない貴族達は、参列席の最前列に座り、式の進行を見つめて

いる。

セルビナ王国の重臣達の後ろには、それを警護する近衛兵団が控えており、セルビナ王国軍所属、ガイウス・マリウスもここの位置から侑人の周囲に気を配っている。

そして近衛兵団の後ろには、一般の武官や文官達の席が用意されていて、マリアとアンナはその最前列に宛がわれている。侑人達の位置から比べれば若干遠いが、それでもヨーゼフの姿が良く見える席が確保されていた。

国に仕官していない一般の国民達は、セルビナ教会前の広場に集まっている。司祭戴冠の儀が執り行われる少し前に、暇を持て余したアンナが広場の様子を見に行ったところ、二十万人を超える人々が既に広場に集まっていた。

それを確認したアンナが引きつった顔で戻って来るのを見たマリアは、少し心配そうな表情をしていた。しかしそんなマリアの表情を見た侑人がマリアに対して微笑みかけ、マリアは少し落ち着きを取り戻した。

侑人とマリアのそんなやり取りを見ていた他の武官や文官達は、やはりこの二人は出来ていると確信したのである。

教会関係者から月桂冠がヨーゼフの頭に載せられる。月桂冠を載せられたヨーゼフは、そのままの姿でしばし神に対して祈りをささげた後、顔を上げる。

「これにて司祭戴冠の儀は終了です。セルビナ司祭ヨーゼフ・ホラ

ントに神のご加護があらん事を」

その言葉を持って司祭戴冠の儀は終了する。何の問題も起こらず無事に完了した事を確認した侑人は、ホッとした表情をして肩の力を抜く。

「まだ気を抜くのは早いですよ」

「国民の前での演説がありましたね」

アルクィンの言葉で大事な事を思い出す侑人。国民の前の演説が成功するか失敗するかによって、今後の展開が大きく左右される。先日の知名度アップ作戦は成功したように思えたが、予想外の事態が起きないとも限らない。

侑人はそんな事を考えて少し心配そうな表情をしていたが、アルクィンはヨーゼフを笑顔で見つめ余裕そうな雰囲気である。

「ヨーゼフ殿ならきっと大丈夫ですよ」

侑人は顔を正面に向ける。

侑人の目には落ち着いたヨーゼフの姿が映る。その姿はまるで神が乗り移ったかのような神々しさであった。

セルビナ教会内の中央に敷かれた紅い絨毯の上を、ハルモ教教会関係者に先導されたヨーゼフが静かに進んでいく。司祭戴冠の儀の参列者達は、ヨーゼフの後に従って歩いていく。その光景はまるで聖書の一説にある聖者の行進のようであり、教会内は荘厳な雰囲気で包まれている。

ヨーゼフが教会の扉の前までたどりついた時、重厚な扉が左右に開かれる。眩い太陽の光が教会内に飛び込み、一瞬だけ視界を奪われ前が見えなくなる。そして少しの時間が経ち、視力が回復したヨーゼフの前には想像以上の光景が広がっていた。

セルビナ教会前で新司祭の登場を待ち構えていた国民達は、ヨーゼフの姿を見ると一様に立ち上がり歓声を上げる。

二十万人を超える大観衆のその声は、マグナマテルの空気と大地を振るわせるかのようであった。

ヨーゼフは周囲をゆっくりと見回し国民の声に聞き入っていたが、しばらくすると数歩前に出て右手を上げる。

その姿を見た国民達は歓声を止め新司祭の就任演説に対して耳を傾ける。先ほどの雰囲気から一転して辺りは静寂に包まれる。

そんな周囲の状況の中、ヨーゼフは荘厳な雰囲気を纏い静かに全員に向かって語りかける。その声は不思議な響きに包まれていた。

後の世のマグナマテルの歴史書に深く刻まれ、歴史上類を見ないほどの名演説だと絶賛される事となる、セルビナ新司祭の就任演説が今始まる。

「今日の私の司祭就任がセルビナ王国だけでなく、マグナマテル全域の真の自由に繋がって行く事を私は神に祈ります。新しい始まりだけでなく、悲しい過去の終わりを象徴し、変化と共に再建を示す出来事になる様に、私はこれからも神に祈り続け、司祭としての使命を全うする覚悟です」

「八百年前に黒髪の勇者クロウ・ミナトを迎えたマグナマテルの世界は、勇者の力を借りて一瞬の平和を取り戻しました。しかし、使命を全うした勇者がこの世から姿を消すと、愚かにも再び戦乱の世

に突入し、現在までその悲しい状況は続いていました」

「ですが、幸運にも我々は八百年ぶりに再び黒髪の勇者を迎えることが出来ました。マグナマテルの世界は今、二度目の大きな転換期に差し掛かっています。我々は今すぐにでも過去から学ばなければなりません。我々一人一人がマグナマテルを変える主人公として、自身の持つ力を最大限に発揮しなければ、過去の悲劇が再び繰り返されるかもしれません。黒髪の勇者に救いを求めるのではなく、黒髪の勇者の助力を得た我々自身が、何かを考えて行動しなくてはなりません」

「しかし微力である我々は単独では歩く事はできません。そして歩く時は前進し続ける事を心に誓わなければなりません。マグナマテルを変える使命を持った我々は、決して引き返すことは出来ないのですから」

ヨーゼフは一回そこで演説を止めた。セルビナ教会前に集結した国民全員の目が、ヨーゼフに注がれている。

カルロス王をはじめとしたセルビナ王国重臣一同と、一般の武官や文官達全員も、ヨーゼフの演説に心を奪われている。

皆の心を奪い取ったまま、ヨーゼフの演説は佳境に入る。

「私には夢があります。いつの日にかマグナマテル全域が一致団結して立ち上がり、我々は全ての種族が平等に作られているという事を、自明の真理と信じて実現させる事を」

「私には夢があります。今抑圧されている人々の子孫と、かつて抑圧していた側の子孫が、同胞として同じテーブルにつく事ができるという事を」

「私には夢があります。いつの日にかすべての谷は隆起し丘や山は低地となり、荒地は平らになり歪んだ地もまっすぐになる日が来ると。そして神の栄光が現れ、すべての人々が共にその栄光を見るであろう事を」

「私はこの信仰を持ってセルビナ司祭の任につく。この信仰を持ってさえすれば、絶望の山から希望の石を切り出す事が出来ると信じて。この信仰を持ってさえすれば、我々はマグナマテルの大地に渦巻く不協和音を、種族を超えた素晴らしいシンフォニーにする事が出来ると信じて」

「自由の鐘を打ち鳴らしましょう。このセルビナ王国の地から」

「自由の鐘を打ち鳴らしましょう。ハルモ教法王庁教圏国家群から」

「自由の鐘を打ち鳴らしましょう。このマグナマテルの大地の全てから」

「そうやって全ての鐘を打ち鳴らせば、人族も亜人族も、ハルモ教法王庁教圏国家群もそれに敵対する国家も、全ての人が手を取り合って、神に感謝を捧げる歌を歌える日が、より早くやってくるでしょう」

「今日のこの日を全能の神に感謝しましょう。マグナマテルを変えることになる、そのきっかけとなる記念すべき日を与えてくれた事に対して」

ヨーゼフの演説はその言葉で締めくくられる。セルビナ教会前広場は異様なほどの静寂に包まれていた。

パチパチパチ……。

ヨーゼフの演説を聞いた侑人が、感動した顔をしながら拍手をしている。その姿を見たカルロス王やアルクィン、マリアとアンナとガイウスもそれに続く。

ヨーゼフの演説に心を奪われたまま呆然としていた重臣たちも、王達の行為に操られるように続いていく。

パチパチパチ……。

パチパチパチパチパチパチ……。

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……。

その行為はこの場に集まったセルビナ王国の国民全員に伝播していく。そしてその拍手の波はセルビナの街中を震わせていった。ヨーゼフの名演説はここに居る全ての人々の心を鷲掴みにして離さなかった。

ハルモ教教会関係者もその演説に心打たれている。人族至上主義に真っ向から反対する内容の演説ではあったが、それでもヨーゼフの真摯な心は教会関係者の心にも深く響いたのだ。

この日を境にしてセルビナ司祭ヨーゼフ・ホラントの名は、セルビナ王国内では留まらずハルモ教法王庁教圏国家群全域に鳴り響いた。

ハルモ教改革に取り組むカルロス王達の予想を遥かに超えた、数

百年に一人の偉大な宗教家がここに誕生したのであった。

第２１話：稀代の名演説（後書き）

Ｊ．Ｆ．ケネディ大統領とＩ　Ｈａｖｅ　Ａ　Ｄｒｅａｍで有名なマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の名演説を参考にさせて頂きました。この二人の演説は大好きです。

第２２話：アンナの実力★

セルビナ司祭ヨーゼフの司祭戴冠の儀から四日後、ヨーゼフの名声は衰えるどころか日に日に高まっていた。

「押さないで下さいー」
「そこちゃんと並んでー！」

セルビナ教会にはヨーゼフ司祭の洗礼を求める市民や、子供の名付けを求める親が殺到し、教会前の広場に長蛇の列を作っている。

それに加えて先日の演説に感動して、ヨーゼフの弟子になりたいと直訴してくる者もかなりの数にのぼっており、セルビナ教会は連日連夜、訪れる人達の対応に追われている。

「おじーちゃ……あ、司祭様。書状がまた届きました」
「ありがとうマリア。ちなみに口調は変えなくても良いんじゃぞ」

それだけではなく、セルビナ王国の各地にある教会の司祭から届く、新司祭との面会を求める書状や、ヨーゼフに是非説法をお願いしたいという講演依頼書、挙句の果てには人々の悩みを聞く事に疲れ果てた、他所の司祭自身が送ってきた相談事の手紙まで舞い込んでいる。

その為、教会の事務室は日々届く書状や教会の管理書類で溢れかえっており、元々の教会の人員だけでは管理しきれなくなっていた。

それらの対応を手伝う為に、マリアも連日教会に顔を出していた。

「それにしても凄い人の数だね」
「わしも驚いておる。ユートがここに居たらもっと凄い事になりそうじゃがの」

もちろん侑人もヨーゼフの手伝いをする気であった。しかし侑人が来ると余計に人が集まり、収拾が付かなくなる可能性があるとヨーゼフから諭され、渋々手伝いを断念した。
侑人はアルクィンに頼んで仕事を探して貰う段取りを取った後、仕事が決まるまでの暇な時間を利用して剣技と魔法の鍛錬を行っている。

ガイウスには剣技の鍛錬を手伝って貰っている。侑人の学習能力の高さは相変わらずであり、既にガイウスの腕前を遥かに超越したところまで登り詰めている。
ガイウスも侑人に勝つ為に日々鍛錬を積み重ねているのだが、目標は高くなかなか道は険しいようである。

「今日は魔法の鍛錬場に向かいます」
「ユートの旦那が行くところに付いて行きますよ」

魔法の鍛錬といっても、侑人の目指す魔法の方向性は他の魔道士とは違う。しかも侑人が操る魔法は土の魔法が殆どであり、魔力を全開放して魔法行使すると鍛錬場の中がめちゃめちゃになる。
その為侑人はこの数日間自身の魔力開放を最小限に抑え、鍛錬場に大きな影響を与えないように気を使いつつ、魔法の細かいコントロールの鍛錬に明け暮れていた。

しかしその事が予想外の弊害を生む事になる。

初級の土の魔法を連発する黒髪の侑人の姿は、一緒に鍛錬場で魔法の鍛錬をしている他の魔道士の目を引いた。傍目には魔力が少ない見習い魔道士が、一生懸命に魔法の練習をしているようにしか見えなかった。

魔道士達は口に出す事はなかったがそんな侑人の姿に少し幻滅をしていた。噂では人とは思えないほどの魔力を持ち、地形を一瞬で大きく変化させる神業的な魔法を使うと聞いていたのに、噂とは当てにならないものよ……そんな呟きが鍛錬場のあちらこちらで囁かれていたのであった。

侑人は最近通いなれた魔法の鍛錬場へ向かう廊下を歩いている。その足取りはいつもより軽く上機嫌な様子である。

実は今日アルクィンから、河川の堤防工事の説明をして欲しいとの依頼が舞い込んだのだ。アルクィンの依頼は、工事を行う技術者と魔道士を鍛錬場に集めたので講義して欲しいとの内容であった。

「ご機嫌ですね旦那」

「やっとお役に立てそうなのでちょっと浮かれています」

そんな依頼を受けた侑人達であったが、今日はいつもの雰囲気と少し違っている。ティルト村からセルビナに向かう道中に、侑人の指示に従って河川工事の手伝いをしていたはずの、魔力に秀でたアンナの姿が今日は見えないのだ。鍛錬場へ向かう廊下を歩いていたのは、侑人と侑人に付き従う衛士のガイウスのみである。

実はこれには理由がある。本来であれば侑人に匹敵する膨大な魔力を持つアンナにも、講義の手伝いをして貰いたかったのだが、目立ちすぎるのは良くないと判断した侑人が、今日は手伝わなくても

良いとアンナに伝えたのであった。

ちなみに侑人は、アンナがてっきりガイウスをさらって、街の散策へと繰り出すと思っていた。しかしアンナの行動は侑人の想像と違っていた。

「ユートの講義を聴くのも面白そうじゃ」

そう言ったアンナは、久しぶりに侑人の中に戻っていったのだ。そんなアンナの態度に侑人は苦笑していたが、目の前で人が消えるのを初めて目撃したガイウスは、腰を抜かすほど驚いていた。

「旦那の普段の姿を見ているとつい忘れてしまいそうになるけど、旦那達はやっぱり普通の人達とは違いますね。それだけの才能があると、どんな人生が待ち受けているやら……俺には想像もつかないっすよ」

そう話しかけるガイウスの顔は少し曇っていた。

侑人とガイウスがそんな会話をしながら鍛錬場に到着をする。既に多くの魔道士と土木技術者達が、侑人の到着を待ち構えていた。皆を待たせた事に気が付いた侑人は、待っていた者達に頭を下げる。

「お待たせしてしまったようで申し訳ない。では早速土木工事に関する講義を始めようと思います」

侑人の講義はその言葉を皮切りにして開始された。
侑人は自身が知る、元の世界の過去の治水工事がもたらした歴史上の功罪、そして自身が持つ現代社会で得た知識を織り交ぜ、皆の興味を引くように気を使いながら講義を続ける。
集まった技術者達はその話を真剣に聞いている。しかし魔道士達の反応はいまいちであった。

魔道士達は自身が鍛え上げた魔力を、公共事業に使う事に対して余り納得していない。魔法とは戦闘技術であり、それを使いこなせるのは一部のエリートのみである。その意識は魔道士達の深層心理に深く根付いていた。
宰相の意向とか、黒髪の勇者の指導など関係が無い。我々魔道士にはそれよりも他に大事な使命がある。魔道士達の目はそんな事を語っているようであった。

「ちょっと不味いかもしれませんね」

魔道士達のそんな雰囲気を侑人も感じ取っている。アルクィンから事前に聞いていたのだが、魔道士とはプライドが人一倍高い者達であり、本人が納得しないとたとえ国の命令であっても素直に命令に従わない。
それをどうにかするのがユートの役目ですので頑張って下さい。
そんなアルクィンの言葉が侑人の脳裏を掠めた。

この頑固者の集団をどうやって公共工事に協力させれば良いか。
そんな事を考え始めている侑人の頭の中に、見知った人物の言葉が響く。

『こやつらは余り協力する気が無いようじゃの』

そんなアンナの呟きに対して、侑人は困ったような声で返事をする。

『確かに乗り気では無いようですね。どうしましょうか？』

『わらわに考えがある。少し時間をくれ』

そんなアンナの声を聞いた侑人は少し考えた後、状況を打開する為にアンナの考えに乗る事に決めた。

『ユート、こやつらから少し離れた場所に、魔法の標的となる人形を配置してくれ』

アンナのその言葉を聞いた侑人は、鍛錬場に控えていた従者達に人形を配置するように依頼をする。そして数分後、魔道士達が控えている場所の反対側に標的となる人形が配置された。

『わらわが今から言う言葉を、ユートからこやつらに伝えてくれ。どう伝えるかはユートに任せた』

『わかりました……お手柔らかに頼みますよアンナ』

侑人のその言葉を聞いたアンナは、満足そうな雰囲気を侑人に感じさせる。そして侑人にしか聞こえないが、威厳のある口調で語り始めた。

『おぬしらはたかが工事と考えているようじゃが、これが魔法の修行になるという事が分からぬうちは半人前じゃ』

「あなた方は治水工事を軽く見ておられているようですが、その工

事に参加する事によって、あなた方の魔法の修行になるという事に気が付いていますか？」

侑人のその言葉に魔道士達は反応する。魔法の修行という言葉には弱いようだ。

『馬鹿の一つ覚えで、魔法をただ唱えれば上達するなどと考えているうちは、いつまで経ってもわらわの域まではたどり付けぬ』

「鍛錬場に篭って魔法の鍛錬を積めば魔法が極められると思っているうちは、一流の魔道士になれるはずがありません」

『魔道とは実戦で鍛えられる。しかし戦闘で鍛えるのでは命が幾つあっても足りぬ。そこでじゃ、戦闘以外の何かが必要になるのじゃ』

「魔道とは実戦の中で鍛え上げられるものです。しかし実戦が大事とはいえ、戦闘に常に参加して鍛えるわけにもいきません。そこで戦闘以外で効率的に鍛える場が必要になってきます」

『それが工事じゃ。ただの魔法の練習とは違うぞ。失敗すればそこに住む民に影響が出るのじゃ。たかが工事と思うな、そこに生活する民の人生が懸かっていると思え』

「それが公共工事です。たかが工事だと思ってはいけません。我々が失敗すればそこに住む全ての民に不幸が降りかかるのです」

侑人の言葉を魔道士達は今までと違った真剣な雰囲気で聞いている。その雰囲気を悟ったアンナは満足そうに仕上げに掛かる。

『魔法を使う為に必要なものは、魔力とイメージ力と意志の力じゃ。しかしこれ以外にも大事な要素がある……この言葉を伝えたら、あそこにある人形に向かって手をかざすのじゃ』

「魔法を使う為に必要なものは、魔力とイメージ力と意志の力。し

かしそれ以外にも大事なものがあります」

侑人は魔道士達に向かってそう言うと、アンナの言葉に従って魔法の標的となる人形に向かって手をかざす。

侑人のそんな姿を確認したアンナは、その動作と合わせて自身の魔力を解放する。アンナの体から人知を超えた魔力が放出される。

魔道士達から見れば、今まで少し馬鹿にしていた侑人から、ありえないほどの魔力が放出されているように見えた。

周囲を圧倒するような魔力量を感じ取った鍛錬場にいる全ての者達は言葉を失う。

『全てを覆いつくす漆黒の闇よ。かの者を滅ぼさん』

アンナの詠唱を合図にして、複数の闇魔法がアンナから放たれる。放たれた闇魔法は複数個設置された人形の頭に正確に着弾し、その全てを弾き飛ばす。

魔道士からは侑人が無詠唱で闇魔法を放ち、全ての人形に正確に着弾させたようにしか見えない。想像もできないような魔法の才能を目の当たりにした魔道士達は、その実力に恐れ慄くのであった。

『正確無比な魔力のコントロール。この才能は戦場では大きな武器になる』

「正確無比な魔力のコントロール。これを極めれば戦場でも大きな武器になるでしょう。決して無駄になるとは思いません」

『これくらいが出来るようになってから自己主張すると良い。出来ぬうちに文句を言われても、ただの無能な者の遠吠えにしか聞こえぬ』

「このくらいは皆さんにも出来るようになって頂きたいのです。出

来ないのであればこれから鍛錬しましょう」

そう言ってにっこりと微笑む侑人の姿を見た魔道士達は、一様に皆素直に頷いていた。

アンナにプライドを打ち砕かれた魔道士達は己の未熟さを恥じて、その後の侑人の指示におとなしく従い、魔道士と土木技術者が協力して行ったセルビナ王国の治水工事は大成功を収め、国民の生活はますます豊かになっていった。

この工事を指導した侑人の名声はセルビナ王国中でますます高まり、そして勘違いしたままの魔道士達にとって侑人は、憧れと畏怖の存在としてその存在感を増していくのであった。

＞ｉ１１０８２―１５８６＜

第２２話：アンナの実力★（後書き）

アンナがただのギャグ要員では無い事をこの辺で一回挟もうかなと。

（２０１０／８／３０追記：挿絵はマジ猫さんに書いて貰いました）

第２３話：それぞれの過去？

小さい頃から体を動かすのは得意だった。残念ながら魔力の才能は無かったが、自分で言うのもおかしな気がするが、頭もそこそこ良くリーダーシップもあった。その為村の子供達の中ではいつでも中心的な存在だった。

思春期を迎えた頃には体も大きくなり、力も並の大人以上に強くなった。ハルモ教の伝承の勇者にあこがれて、自己流で磨いた剣術もそこそこの腕前になった。そんな俺は相変わらず村の若者の中心的な存在だった。

「近々剣術大会が開かれるのだが、出てみないか？」

「そうですね……腕試しに丁度良さそうですかね」

ある時、村に滞在する衛兵の隊長に勧められ、地方の剣術大会に出場した。小さな大会である事と組み合わせの妙もあったとは思うが、その剣術大会で見事優勝する事ができた。

更に運が良いことにその活躍がセルビナのお偉いさんの目にとまり、セルビナ王国軍への仕官を進められた。

思えばこの時が人生の絶頂期だった。

今まで挫折を知らなかった俺は、セルビナのお偉いさんの言葉に浮かれて意気揚々とセルビナに向かう準備を始めた。そんな姿を見た両親は、もう少ししっかりと考えてから自分の将来を決めた方が

良いと進言してくれた。
しかし挫折を知らない天狗状態だった俺は、その真摯な意見に耳を貸さなかった。その時の両親の顔を思い出すと今でも心が痛む。本当にわが子を心配してくれている顔だった。

親の心子知らずとはよく言ったものだ。子供の行く末を本気で心配してくれている親に向かって、自分の人生は俺が決めるから口出ししないでくれと言い切り、半ば家を飛び出すようにして、セルビナ行きの馬車に俺は乗り込んだ。
このときの俺は自信に満ち溢れていた。セルビナ行きの馬車の中で、いつか将軍になってこの国を変え、マグナマテルの英雄になってやる……そんな事を考えていた。

数日間馬車に揺られてセルビナに付き、無事に王国軍の新兵として仕官できた俺の前に立ちはだかったのは、現実という高い壁だった

子供の頃から数々の英才教育を受けて育ってきた貴族の子息。剣の腕前は俺と同じ位ではあるが魔力の才能も併せ持ち、魔道士の訓練も合わせて受けてきた裕福層の若者。生まれも育ちも似たような境遇ながら、俺なんかより遥かに高い戦闘能力を持つ亜人族の青年。
村の中という狭い世界の中で驕り高ぶっていた俺は、自分よりも遥かに優れた彼らにちっぽけな自尊心を叩き折られた。そして自分より優れたものが居ると認めてしまった時に、強烈な挫折感を味わった。

今まで挫折を知らずに育ってしまった者が、強烈な挫折感を味わってしまった場合の反応は大体同じである。

逆境をバネにして自身の才能を伸ばす事が出来る者もいるとは思う。しかしそれはほんの一握りだ。初めて味わう挫折を直ぐに自身の糧に出来るのは、一種の才能だと思う。

大抵の者はやる気を無くす。やる気を無くせば向上心が無くなり、やる気が有る者との差はどんどん開いていく。元々あった差はいつの間にか取り返しの付かないような深く大きな溝となって、俺と彼等達の間に横たわった。

自分がどれだけ足掻いても世界は何も変わらない……自分の小さなプライドを守っていたのはそんな安っぽい考えだった。

「一緒に頑張ろう」

「剣の腕前は確かなのだから、後はもう少しやる気を出せば化けるはず」

そういう言葉を掛けてくれる同期の者もいた。俺のプライドを打ち砕いてくれた、魔力の才能を持っていた若者とエルフ族の青年である。

彼らは同期の中では出世頭であった。いまだに新兵と混じって訓練をしている俺とは違い、すでに一個小隊を任される小隊長に任命されていた。

「俺はのんびりとやるよ。そっちの方が性に合っているみたいだ」

自分の中に渦巻く嫉妬の感情を見せないように、笑顔で彼等に答えたその日の夜、俺は自分自身のあまりの情けなさにベッドの上で泣いた。

それから数年経った。俺は流されるように今まで生きてきた。手を抜く事は辞めたが必要以上に頑張る事も無くなっていた。
任された仕事はそつなくこなした。派手な成果は無かったがその堅実な仕事ぶりが買われて、入国管理所の衛兵として王国の入り口の警備を任されるようになった。

若き日の夢であったマグナマテルの英雄としての姿とは程遠いが、こんな平和な生活も良いかなと最近考え始めていた。
自分の中のちっぽけなプライドと、自分を取り巻く現実との折り合いを上手く付けられるようになり、これが大人になる事だと自分自身を納得させようとしていた。

しかしある男との出会いが俺の人生を変えた。

その男は小さい頃から憧れていた黒髪の勇者として、俺の目の前に姿を現した。黒髪の勇者がマグナマテルに光臨したという話は聞いていたが、俺には関わりの無い雲の上の存在だとこの時までは思っていた。
そして色々な偶然が重なり、黒髪の勇者の御者を拝命する事になってしまった俺は、車上で彼といろいろな事を話した。

世間話をする彼の姿は、俺となんら変わりの無い普通の男の姿だった。初めて見る街を興味深そうに眺め色々と質問してくるその姿は、むしろ幼さを感じさせるほどだった。
当初緊張していた俺も、その親しみやすい人柄に接してどんどん打ち解けていった。話し込んでいるうちに、相手が黒髪の勇者である事を忘れそうになっていたほどだった。

そんな雰囲気の中、ふと思いついた質問を黒髪の勇者にぶつけた。

「一体何をする為にこの国に来られたのですか？」

特に深く考えもせず、何気なく聞いた質問ではあった。その質問に対して真剣な表情で少し考えた後、黒髪の勇者は返事をしてくれた。

「私に出来る何かをする為にです。この世界の為に何かが出来るなら、私はそれに対して全力で取り組みたい。何もしないで後悔する事だけは絶対に避けたいのです」

そう語る男の眼は強い決意の光を放っていた。

その言葉を聞いた俺は絶句した。自分と年が殆ど変わらないこの男は、全ての事に対して諦める事を良しとしない。

黒髪の勇者として世界中から期待される事で感じる重圧は、俺なんかでは想像も出来ないほどの重さがあるはず。それらを全て背負う事をこの男は決意しているのだ。

些細な挫折で逃避してしまった自分自身の小ささを、改めて思い知らされた気がした。

「えっ？　俺が衛士にですか？」

「ユートと仲の良いガイウスにお願いしたいのですよ」

その日を境にして俺の環境は一変した。宰相直々から黒髪の勇者

専属の衛士に任命され、所属も入国管理所から軍の花形である近衛兵団に変更になった。王城の重要施設に入る立場を得る為に、下士官から一気に少尉へと階級も上がった。

突然の大抜擢に周囲からのやっかみの声もあった。黒髪の勇者に上手く取り入っただけの、実力も無い口だけの男だという陰口を言われている事も知っている。

全く気にならない訳ではないが、日々の慌しさが気にする暇を与えてはくれなかった。

街の散策の警護をするつもりだったのに、焼き鳥屋台で焼きをやらされたり、従者のアンナに新魔法の実験台にされてしまったり、ユートの旦那と一緒につい美人のお姉さんに見とれてしまってマリアから雷を落とされたりと、毎日同じ事を繰り返していた入国管理所の仕事とは全く違って、ここでの仕事は毎日の変化が大きく騒がしかった。

ユートの旦那をはじめ、ここに集まる皆の人柄は非常に気さくであり、立場の差を感じさせる事無く俺に接してくれる。その事もあり今の立場には満足している。

しかし時々痛烈に自分の力不足を感じさせられる事もある。

国王や宰相から相談を持ちかけられ、それに対して的確な返答をしているユートの旦那の姿。周囲を震わすほどの魔力を開放した時のアンナの姿。司祭として国民の信頼を集めるヨーゼフ殿の姿。そして全員を影からしっかりと支え、旦那達全員から絶大な信頼を置かれているマリアの姿。

それらの姿を見せ付けられた時、今まで流されて生きてきた自分との差を痛烈に感じる。しかし旦那達は自分に対して何かを言う事は無い。最初は俺なんかに期待していないからだと考えもしたが、

最近それは俺に対する信頼の裏返しなのだという事に気が付いた。

自分がするべき事は自分で考えて行動し、その行動に対して自分が責任を持つ。周りの人間は、本人が本当に困っていれば手助けはするが、あくまで手伝いとしての姿勢を崩す事は無い。

旦那達は今までそうやって真っ直ぐに生きてきたのだ。ひねくれてしまった俺にも、それを当然のように求めているのだ。

それに気が付かされた俺の行動は変わった。旦那の警護の仕事に入る前の朝の時間と、警護が終わった後の寝る前の時間を自己鍛錬の時間に当てる事にした。

鈍りきった体は思い通りに動かず、最初の一週間は体中の筋肉が悲鳴を上げたが、最近は段々とコツを掴み始めてきた。

旦那達の使命の重さは俺には分からない。一般人である俺が分かろうとしても、上辺だけしか理解できないであろう事も分かっている。

しかし俺に求められているのはそんな事ではない。有事の際には旦那達を守る盾となり外敵を退ける矛となる。ただそれだけだ。

今はまだ力不足で足を引っ張るだけの存在だという事も分かっている。

剣術を指南してあげたはずの旦那に三日で追い越されてしまったが、いつか肩を並べるまでの実力を得てみせる。もう諦める事はしない。

俺には突出した才能は無いかもしれない。だが出来る限り足掻いてみせる。それがこんな俺を仲間として認めてくれた旦那達に対しての唯一できる恩返しだ。

さて今日はもう遅い。明日は旦那が宰相の元に行く事になっている日だ。最近グランツ帝国の動向が怪しいという噂が出ているので、多分その事だろう。

明日からより一層慌しい日が続きそうだ……そんな事を考えながらガイウス・マリウスは眠りに付くのであった。

第２３話：それぞれの過去？（後書き）

挫折を味わう事は人を強くさせます。

第２４話：それぞれの過去？

幼き頃の父との思い出はほとんど無い。目を閉じて思い返せば、書斎の机で何かの書類を読む、父の後ろ姿ばかりが目の裏に映る。

しかしそんな父を疎ましく思ったことは一度として無い。国の安定の為、国民の生活の為、そして私達家族の未来の為……自分の全てを犠牲にして仕事に取り組む父の後ろ姿を、いつも誇りに思っていた。

父はグランツ共和国議長、ラドフ・ルーシの秘書を務めていた。

「私の仕事はグランツ共和国の未来を作り上げる手伝いをする事。厳しい仕事だがやりがいはあるんだ」

いつもは深夜に帰ってくる父が珍しく夕食前に帰宅し、家族と食事を共にしたある日の晩、上機嫌だった父は私にこう話してくれた。

そんな言葉を聞いた私は、大きくなったら父と同じ仕事に就こうと、子供心に誓ったものだった。

「これからの世の中は武力だけでは駄目だ。未来を見通せる確かな目と、国民の幸福に繋がる政策を考え出せる頭脳、そしてそれを実行させる決断力を持たなくてはいかん」

この言葉は父の口癖である。クーラント魔国と八百年にわたる長き戦争状態のグランツ共和国では、武力が何よりも求められた。

しかしそんな国内情勢にあっても父の考えは変わらず、固い意志で日夜政務に取り組んでいる。戦争に勝つ事だけを考えるのではなく、戦争そのものを終わらせる為の献策を日々していた。

そんな父の口癖は、今では私の口癖になっている。

いつもは家族に弱みを見せない父ではあったが、一回だけ母に対して弱音を吐いている父を見たことがある。ひょっとしたら母に対してだけは、こっそりと自身の弱い部分を見せていたのかもしれない。しかし今となってはそれはもう分からない。

ある晩、夜中に目が覚めてしまった私は、リビングの明かりがついている事に気が付き、足を忍ばせてそこに向かった。

リビングには二人の人影があった。ドアの隙間からそっと中を覗いて見ると、父が母に向かって弱音を吐いていた。

「このままではこの国は駄目かもしれん。ラドフ議長をはじめとする評議員達は、自分達の利権の事ばかりに考えがいっている」

そんな父の言葉を聞いた母は質問をする。

「新しく議員になったフリードリヒ様は、国民の事を真に考えてるお人だと聞いてますけど、それは違うのかしら?」

母の言葉を聞いた父は、首を振りながらその言葉に返事をする。

「たしかにフリードリヒ殿は国民の事を考えている。しかしそれ以上にかなりの野心家でもある。今期の議会に軍の再編成を提案しているが、私には裏があるとしか思えない」

そんな父の言葉を母は静かに聞いている。そんな母の姿を見ながら父は語り続ける。

「一見すると非常に効率的であるように見える。しかし裏を返せば軍部の力が大幅に増し、軍の最高司令官になる人物に権力が集中してしまう。フリードリヒ殿は世論を上手く誘導して、殆どの国民を味方につけている。その手並みは余りにも鮮やかで、事前に準備をしていたとか思えない」

「ラドフ議長様は何と仰ってるのですか？」

「ラドフ議長は世論を敵に回すことを畏れて、私の言葉に耳を貸して下さらない。他の評議員達も皆同じだ。このままでは何か良くない事が起こる気がする。私はそんな不安を感じているのだ」

そんな父の弱音を聞いた母は、父の肩に手を置き、微笑みながら話しかけた。

「未来を見通せる確かな目と、国民の幸福に繋がる政策を考え出せる頭脳、そしてそれを実行させる決断力を持った貴方なら大丈夫です。アルクィンの未来の為にも、ここが踏ん張りどころですよ」

「そうだな……アルクィンにはこんな弱い姿は見せられんな」

そういって母に笑いかける父の目はとても優しそうだった。

私はそっとリビングから離れた。リビングからはまだ2人の話し声が聞こえていたが、私の耳にはもう入らなかった。

私の目標である立派で強い父。私をいつも優しく見守ってくれる母。この2人の息子で本当に良かったと改めて神に感謝をしていた。

私は幸せだった。

そんな幸せな私達の生活が一変したのは、この日から数えて丁度二月後の事であった。

その日、母はいつもの様に夕飯の支度をし、私はそれを手伝っていた。そんないつもの生活を根こそぎ奪い去る不幸の音色が玄関から響いた。

玄関を開けて応対したのは私だった。扉の外には腕に怪我をした男が立っていて、母に火急の用件があると必死な顔で伝えてきた。

玄関先の物々しい様子に気が付いた母は、家事の手を止め玄関先までやってくる。そんな母の姿を見た男は母に向かって自分は父の部下だと言い、その直後に衝撃の言葉を伝えた。

「軍部のクーデターが起き、ウルヘル様は議長様と一緒に討たれました。ここは危険です、どこか遠くに早くお逃げ下さい」

その男は母にそう伝えると、きびすを返し闇の中に消えて行った。私と母は暫く呆然とした表情のまま立ち竦んでいた。

この日から数日間の事は良く覚えていない。着の身着のままで母と二人で家を飛び出した私は、何も考えず南の方角に落ち延びて行った。

昼は森の中に潜んで姿を隠し、夜の暗闇に紛れてひたすら南を目指す逃避行を繰り返す。追っ手には見つからなかったが途中で魔物

に襲われる事もあり、母と私は日に日に衰弱していった。

家を出てから多分一週間くらい経った頃、私達の目の前に小さな村が見えた。

満足な食事も取れず限界に達していた私達は、どうせ死ぬなら食事を取ってから死のうと二人で話し合って決め、村の守衛に声を掛ける事にした。

ボロボロの姿をした私達に驚いた守衛であったが、すぐに私たちの為に食事と寝床を用意してくれた。

私達は用意された食事を獣のように貪り、久々の布団で泥のように眠った。

翌朝、すでに覚悟を決めていた私達は守衛に全てを話した。すると守衛はそんな私達に予想外の返事をした。ここはプロセン王国の北の外れにある村だと。

私達はいつの間にか国境を超えていたのであった。命が助かった安心感から、私達はその場で抱き合って泣いた。

しかしつかの間の平和はすぐに崩れ去った。

グランツ共和国を支配したフリードリヒは、国名をグランツ帝国と変えハルモ教を廃止した。その為ハルモ教法王庁教圏国家群と全面的に対立し、お互いは戦争を開始した。

戦争を嫌った母と私は、戦争に巻き込まれるのを避けるために、再び南へ向かって逃避行を開始した。父の命を奪ったフリードリヒの名前を、聞きたくなかったのも理由の一つであった。

追っ手の心配が無くなり昼間に移動出来るようになったとはいえ、

母と私の旅は過酷を極めた。満足な食事にありつけない日が何日も続き、体は衰弱していく。
足には豆ができ、それが裂け血まみれになっていた。しかし母と私は諦めなかった。

私達を支えていたのはフリードリヒに対する憎しみであった。

私達は生き延びて父の遺志を継ぐ。それが父の墓前に捧げる最大の供養であり、フリードリヒに対する最大の復讐になる。
フリードリヒの好きにはさせない。いつかその椅子から引き摺り下ろしてやる。当時はそんな気持ちでいっぱいだった。

プロセン王国の北の外れにある村より旅立ってから一月後。私達はプロセン王国の南にある別の王国、セルビナ王国の首都にたどり着いた。
セルビナに着いた私達は、生きるために必死になって働いた。母は貴族の家の家政婦として朝から晩まで勤め、私は商店の店子として早朝から店先に立つ毎日を送った。

私は忙しい合間を縫って本を読みあさった。すでに父の遺言になってしまった、未来を見渡せる目と、政策を考えられる頭脳、そして決断力を養う為に必死になって勉強をした。
たまに本に熱中しすぎて店長に怒られる事もあったが、日々真面目に働き、それ以外の時間は全て勉強に当てる生活を続けた。

それから七年後。二十歳になった私はセルビナ王国の文官になる

試験を受ける為に、王城に向かった。母に楽をさせたい一心で必死に勉強をした。

結果は合格だった。

しかも運が良かったのか過去最高の成績で合格したらしく、私に興味を持った国王から勤務初日に声を掛けられた。即位したばかりの若き国王はとても利発であり、国民の間でも期待が高かった。

この出会いが私の人生を大きく変えた。

国王は何かある度に私に意見を求めた。私はそれに対して精一杯答えるべく、日々の業務に加えて政治の勉強に励んだ。

最初のうちは国王のお気に入りの新参者として、やっかみも多かったが、やがて周囲も私の事を認めてくれた。気が付けば私は国王の懐刀と呼ばれるようになっていた。

この国王は私の心の闇も払ってくれた。フリードリヒに対する恨みで凝り固まっていた私に、国王としての色々な視野で物事を語ってくれた。

手段は最悪だが、その後のグランツ帝国の繁栄を省みると全てが間違っている訳ではない。認めるところは認める度量を持つのが人の上に立つ者の資質である。

おまえの親父を殺した事に関しては俺も絶対に許さない。しかしお前の人生はお前のものだ、自分の為に生きる事をそろそろ覚えたほうがいい……そんな言葉で私を諭してくれた。その時のまるで兄のような暖かい目を私は忘れない。

そして時間は掛かったが、私はフリードリヒの呪縛から解かれた。

そして今度はこの国王に心を捕らえられた。私の命はこの方に捧げる。この思いは今でも変わらない。

そして今、私は友と呼べる存在に出会えた。

まだ出会ってから日は浅いが私の言葉を真摯に受け止めて、私に対して裏表無く真剣に向かってきてくれる。

その男は自らに課せられた使命を嘆く事も無く、その重圧を全て受け止め、世界を変える為に共に戦ってくれる事を決意してくれた。

私は国王と同じくらいの信頼をこの男に寄せている。この男も同じ思いでいてくれると嬉しいのだが、どうだろうか。

私が父の背中に追いつけるまで、どの位掛かるか判らない。一生追いつけないかも知れない。しかし私には尊敬できる君主と、志を共に出来る同士がいる。その部分は父より恵まれている。

私は私に出来る事を精一杯やるだけだ……そんな事を考えながらアルクィンは、明日の侑人達との話し合いに備えて床につくのであった。

第２４話：それぞれの過去？（後書き）

ガイウスの過去を書いていて、アルクィンの過去を書いていない事に気がつきました。

第２５話：国王の信頼

火の月の第二週の二日。雨期が終わったマグナマテルの世界は、本格的な夏の季節を迎えていた。日差しはどんどん強くなり、気温はぐんぐんと上昇している。

現代社会で、文明の利器であるエアコンに慣れてしまっていた侑人にとって、エアコンはおろか扇風機すら無いこの世界の夏は厳しかった。

「なかなか上手くは行きませんねぇ……」

侑人はここ数日の間、水の魔法の応用でエアコンの代わりの何かが作れないか試行錯誤していた。氷を使った冷風装置のような物が作れればと考えたのだ。

前後に複数のスリットを開けた金属製の容器を作り、その中に氷を入れた簡易的な冷風機は作成できた。風を送る動力機構が無いので風上に置くしかないが、それでも何も無いよりは幾分か室温はマシになった。

しかし持ち運び出来るような、小型の冷風装置の作成はいまだ成功していない。小型化すると中に入る氷の量が少なくなり、周囲の温度によってすぐに水になってしまうのである。

元の世界にある保冷材の中に入っている、吸水性ポリマーを開発するか、何か別の方法で氷が融けにくくなるような処理をしないと、とても使用できる代物ではなかった。

侑人達は幾分か快適な室温になっていた相談役室を出て、アルクィンの待つ政務室へと向かっている。風通しの悪い廊下は、むあっとした熱気が篭っていた。

しかし田舎育ちのマリアとガイウスは平気そうな顔をして侑人の前を歩いており、侑人はそんな余裕そうな二人を恨めしそうな顔で見ながら、アンナと共にのろのろと歩を進めている。

「ここ数日でかなり暑くなりましたね」

「わらわの目の前で暑いと言うな、このばか者め……」

アンナから普段の覇気が全く感じられない。

マグナマテルの中で北側に位置するクーラント魔国出身のアンナにとって、南側に位置するセルビナ王国の暑さはかなり厳しく、体にこたえているようである。

アンナは勝手に特注の従者服の袖を切り落とし、夏用の衣装にカスタマイズしてしまっていたが、その格好でも普段の軽装とは程遠かった。

「ええーい！　我慢できん！！」

「ちょっとアンナ！　こんなところで服を脱ごうとしないでよ！！」

あまりの暑さに錯乱しかけたアンナが、王城の廊下で従者服を脱ごうとする。マリアはそんなアンナを慌てて止めるのであった。

「わざわざお呼びだてして済みません」

「こんな暑い日に呼び出すな、この馬鹿者め……」

「えーと、アンナは気にしないで本題に入って下さい。最近の暑さにかなり参っているみたいなのですよ」

政務室で侑人達を出迎えたアルクィンに対して、半ば条件反射的に悪態をつくアンナ。そんなアンナをフォローしつつ話を進めようとする侑人。

相変わらずな二人の態度に苦笑しながら、アルクィンは今日呼び出した用件を侑人達に切り出す。

「実は少し困った事になりました」

そう言いながらもアルクィンは余り困ったような顔をしていない。

「困っているなら困っている顔をせい、この馬鹿者が」

「今日はかなりご機嫌斜めですねアンナ」

機嫌がかなり悪いアンナの目を見つめながらアルクィンは窓の方をおもむろに指差す。

アルクィンが指差した方向を見たアンナの目には、侑人が先日試作した冷風機の姿が映っている。アンナの表情が見る見る明るくなっていく。

「おぉ……」

アンナはふらふらと冷風機の側まで歩いていき、それにしがみつき動かなくなる。

アルクィンは幸せそうに冷風機にしがみつくアンナの姿を暫く眺めていたが、徐に侑人達の方に視線を移す。暫くの間はアンナが邪魔をする事も無いだろう。

「ユート達もすでに噂で聞いていると思いますが、グランツ帝国に不穏な動きがあります」

侑人達は全員頷いている。

ここ最近城内を歩いているとグランツ帝国に関する噂がよく耳に入って来ていた。それどころか相談役の侑人に対して、噂の真偽を問い掛けてくる者もかなりの数に上っていたのだ。

グランツ帝国との間に再び戦争が起きればセルビナ王国にも少なからず影響を及ぼす。再度援軍を送る事も考えられ、状況によっては戦地で命を落とす者も出てくるだろう。戦争になって喜ぶ者など殆ど居ない。居るとすれば一部の戦闘狂か、野心に燃えたどこぞの伯爵くらいだ。

「その動きを察知したプロセン王国の国王、ハインリヒ・フォン・サヴォイア様から親書が届きました」

「プロセン国王の親書の内容に、何か問題でもあったのでしょうか？」

少し困った事になった。

侑人はアルクィンの最初の言葉から予想を立てたのだが、どうやらその予想は大当たりだったようだ。アルクィンは満足そうに頷いている。

「単刀直入に言います。プロセン国王は我が国に対して、追加の援軍を出す事を要請しています。そして援軍の将として、ユートが防衛戦に参戦する事を要求してきました」

「他国が援軍の将の人選に口出ししてくるのは、内政干渉ではないのか？」

冷風機を抱きしめたままのアンナの声が部屋に響く。

同盟国に対して援軍を求める行為は取り立てて特別な事ではないが、基本的に送られてくる援軍の人選は宗主国・属国の関係でもない限り、送る側の裁量に任せるのが通例である。
言外に希望を匂わす様な親書を送る事はあっても、他国の人事権に踏み込んだ内容を親書に書く事は内政干渉に当たり褒められた行為ではない。

「通常であればアンナの言う通りです」
「という事は、通常ではないという事かの？」

グランツ帝国との戦争行為は、ハルモ教会側から見ればハルモ教に対する反逆者のフリードリヒ皇帝を討伐し、ハルモ教信者を救う為の解放戦争という位置づけになる。
ハルモ教法王庁教圏国家群全体の為に、黒髪の勇者の力を借りたいという今回の親書は、グレーゾーンに踏み込んではいるが内政干渉とまでは言い切れないという、微妙なラインで成り立っていた。

「我が国も色々と大変なのです」
「ハルモ教法王庁教圏国家群というのは、厄介な集合体だの……」

アンナはやれやれといった顔をしながらぼやく。
クーラント魔国の姫君として国家戦略の場に度々足を踏み入れてはいたが、こういった国家間の駆け引きはどうしても好きになれず性に合わない。
それに対してアルクィンは性格上の違いも大きいが、セルビナ王国の宰相として度々こういった場面で活躍して来たので特に苦手意識は無い。今回もある程度の策を考えた上で侑人達を呼び出していた。

「この要求をそのまま受け入れる事を考えてはいません。なぜなら

ば我が「グランツ帝国が公式に宣戦布告しているのはプロセン王国のみ。ハルモ教法王庁教圏国家群全体に対しては、宣戦布告をしていないというのが我が国の見解だ」」

アルクィンの言葉を遮るように侑人たちに話し掛けてきた人物は、国王のカルロスであった。

「私の台詞を取らないで頂きたいのですが……」

カルロス王はアルクィンの恨めしそうな顔を楽しそうに見ている。その姿は悪戯が成功した子供の様であり、一国の王としての威厳はどこにも見当たらないが、非常に親しみやすい雰囲気を纏っている。

「まあまあ、たまには俺も話し合いに混ぜろ。こんな暑い日に執務室に篭っていると頭がおかしくなりそうだ」

カルロス王の言葉を聞いたアンナは冷風機を抱きしめた姿のまま、カルロス王が言っている事はもっともな事だというような顔をして頷いている。

そんなカルロス王とアンナの姿を見たアルクィンは苦笑している。この場に居る王族はこの二人だけのはずなのだが、その二人が一番王族に見えないという状況が可笑しかった。

「確かにカルロス王から直接伝えていただいた方が色々と話が早いので、このまま状況の説明をお願いしても宜しいですか？」

「もちろんそのつもりだから安心しろ」

カルロス王はアルクィンと短いやり取りをした後、侑人達のほうに向き直る。

「我が国の見解は先ほど話した通りだ。むしろこんな馬鹿げた戦争などさっさと終結させ、この前の災害復旧に全力を挙げて取り組むべきだと考えている。見栄っ張り自称皇帝と石頭法王にもお互いに歩み寄って貰いたいと思っているが、俺の立場だとなかなか上手く動けなくてな」

かなり砕けた口調のカルロス王の言葉を聞いた侑人とマリアとガイウスは、とても驚いた表情をしている。アンナはかなり楽しそうだ。

カルロス王は何故かそんな侑人達の姿を見て満足したような顔をしている。

「我が国はユートが指導してくれた工事が、ようやく軌道に乗り始めたところだ。こんな馬鹿げた戦争でその歩みを止める訳には行かない。しかしプロセン王国がグランツ帝国に滅ぼされてしまう事は、我が国の為にも避けねばならない。国民を戦火に晒すわけにはいかないからな」

「カルロス王……それはさすがに色々と、ぶっちゃけ過ぎだと思いますよ」

この部屋には侑人達以外に誰も居ないが、誰が何処で聞いているか判らない。

そんな事を危惧したアルクィンはカルロス王に対して諫言したが、カルロス王はにやりと笑ったままであり態度を改めようとはしない。

「そこでだユート。ユートには一個師団を率いてプロセン王国に向

かって貰いたい」
「それだとプロセン王国の要求に対して、素直に従った事になるのでは？」

カルロス王の言葉を聞いた侑人は疑問に思う。
ハルモ教法王庁教圏国家群全体やハルモ教正教会との関係を考えれば、今回の要求を受け入れる事はマイナスには働かないが、今後の事を考えると少し不味い気がする。
要求が素直に通ると判断されれば、今後その内容がエスカレートしていく可能性が高い。それを事前に防ぐ為にも何か策を打つべきではないのか。

深く考え込んだ侑人の姿をマリアは不安そうな顔をして見つめている。
こういった事態が起こる可能性があるという事を覚悟はしていたが、実際に目の前でやり取りされると不安で胸が押し潰されそうになる。
戦闘能力を持たないマリアは心配する事しか出来ず、侑人の側に居て手助けする事は叶わない。自分の無力さが嫌になってくる。

そんなマリアの胸中を窺い知る事も無く状況は動いて行く。

「ただの援軍として行って貰おうと思ってはいない」
「要請には応じるが条件を付けるという事ですか」

侑人が率いるセルビナ王国軍が自由に動ける事を条件に今回の要請に応じ、その条件が守られ王国連合軍の指揮下には入らないように釘を刺す意味でも、ハインリヒ王に親書を書くとカルロス王は語る。
侑人に求める役割は、今回の戦争を有利にする為に戦う事ではな

く、戦争そのものを終結させる為の行動を起こす事であり、必要があるなら単独行動も許可するとまで言い切った。

「難しい事だとは思うがユートならそれが出来ると信じている」

「なかなか厳しい注文ですね……」

国王直々の頼みを聞いた侑人は暫く考える。

侑人はセルビナ王国に一応籍を置き相談役という立場ではあるが、今回の依頼を断る権利も有している。重職に就かせないが命令は聞けなどという条件でこの国に招かれている訳ではなく、超法規的な扱いでかなりの自由を与えられているのだ。

グランツ帝国相手に敵兵を虐殺してこい等という依頼ならば即座に断ったのだが、カルロス王の依頼はそういった物ではなく、端的に表現すれば平和な世界を作る為に協力してくれと言われている様な物であった。

侑人は決断する。

「私の力がどこまで及ぶか分かりませんが、戦争終結の為にも協力致します」

「ありがとうユート。プロセン王国滞在中に何か突発の事態が起こった場合の全権は、全てユートに預ける。責任は俺が取るから好きなだけ暴れてこい」

カルロス王の顔は侑人に対して全幅の信頼を置いていると語っているようだった。

その後の話し合いで、各大隊を指揮する将の人選が進められた。

プロセン王国に赴く侑人の護衛の人選も決められ、戦闘能力を有しているアンナとガイウスが付き従い、二人で交代しながら二十四

時間体勢で侑人の警護に当たる事が決まる。
マリアはセルビナ王国に残り、ヨーゼフの手伝いをしながら侑人達の帰りを待つ事になる。この事はマリア本人が言い出した。

侑人達の出陣は一週間後に決まり慌しく準備を始める。世界の命運が侑人の双肩に重く圧し掛かって来ていた。

第２５話：国王の信頼（後書き）

舞台はセルビナ王国の外へと広がって行きます。

第２６話：二人の剣豪

セルビナ王国の練兵場で、二人の男が対峙している。彼らが発する緊張感は辺りを包み込み、張り詰めた空気は見る者を圧倒している。

練兵場で鍛錬をしていたはずの他の王国兵士達は、手を止めて二人の勝負の行く末を固唾を呑んで見守っていた。

片方の男は木剣を右手に持ち、剣先を左下に向けて構えている。体を屈めて半身になり、前傾姿勢を取っているその構えは非常に攻撃的だ。

もう片方の男は木刀を両手に持ち、正眼の構えを取っている。右足を少し前に出し両方の踵を少しだけ上げ、ゆったりとした姿勢で剣先の向こうに相手を見据えている。その剣先は常に僅かに動いていて、相手の動向を常にうかがっているようである。

二人は数刻ほどこの姿勢のまま、お互いににらみ合ったままの状態を続けていた。

永遠に続くかと思われたこの均衡を破ったのは、木剣を持っている男の方だった。

二人が放つ緊張感に耐え切れなくなった一人の王国兵士が、ついつい取り落としてしまった木剣の床に落ちる音を合図とするかのように、目にも止まらぬスピードで木刀の男に斬りかかっていく。

木刀の男の左脇腹に狙いを定めた鋭い剣筋が、残像を纏って彼に

襲い掛かる。鍛錬用の木剣ではあるが、当たれば軽い怪我では済まないほどの威力を持った一撃が唸りを上げる。

そのあまりの鋭い攻撃に、周囲で見守る者達は勝負が付いたと思ったのだが、木刀の男は冷静にバックステップをして、紙一重でその攻撃をかわす。

そして木刀の男は攻撃をかわすだけでなく、かわす動作との一連の流れで一気に攻撃に転じる。無防備になった右肩目掛けて袈裟切りで切りかかったのだ。

木剣の男に勝るとも劣らない鋭い剣筋ではあったが、木剣の男は斬りかかった勢いをそのまま生かして、木刀の男の左側をすり抜けてその攻撃をかわす。

一連のお互いの攻防が終わった時には、先ほどとは立ち位置を逆にしただけの二人が、再び練兵場に姿を現すのであった。

木剣の男……ガイウスは内心かなり焦っている。

一応念の為に護身術を教えた方が良いというアルクィンの言に従って、侑人の護衛の任に付くのと同時に剣術を指南し始めたのだが、侑人の上達の速さは人知を超えており、今では逆に指南される立場になってしまっている。

「ユートに長い鍛錬が必要かな……？　多分三日もあれば大丈夫な気がする」

「そうじゃな……ユートなら三日もあれば、セルビナ王国一の剣の使い手になるじゃろうな」

当初ガイウスはそんな事を話していたマリアやアンナの言葉を鼻で笑って聞いていたが、その言葉が事実であった事をまざまざと見せ付けられ、二人の言葉通りガイウスが侑人に剣術を教えて三日目には完全に立場を逆転された。

侑人とガイウスは出陣を明日に控えており、練兵場で訓練が出来るのは今日が最後である。侑人の護衛を任されている衛士がいつまでも守るべき対象より弱い訳には行かない。そんな思いがガイウスの頭の中を駆け巡っている。

黒髪の勇者が持つ常人とは違う才能。

そんな言葉が脳裏に浮かんだが、ガイウスはその考えを振り払い今日まで地道に鍛錬を積んできている。手を抜いた鍛錬をしたつもりはない。

侑人の護衛に付いている時間と睡眠時間以外の殆どを鍛錬場で過ごし、鬼気迫る姿で剣を振り続けているガイウスの姿は、セルビナ王国軍の中で噂になるほどである。

才能が無いのなら、有る人間よりも何倍も努力すれば良い。何もしないで諦める事はもう辞めたのだ。そんな思いを胸にしながらガイウスは木剣を再度強く握り締めた。

ガイウスと相対する侑人もかなり焦っていた。

先ほどのガイウスの一撃をかわせたのは、はっきり言って運が良かっただけだった。勘が当たってなんとなく避ける事が出来たという表現がしっくり来る。

一瞬でも気を抜けばあっという間に勝負は終わってしまう。それほどガイウスの放つプレッシャーは凄まじく、全神経を集中させなければ反応する事すら出来ないほどであった。

侑人は自分の剣術の技量がかなり上がっている事を実感している。並の人間を相手にするのならば普通にいなせる自信は既にある。

しかし今のガイウスは並ではない。異常な理解力を持ち身体能力が常人よりもはるかに向上している侑人を、もう少しで追い詰めるところまで剣術の技量が上がってきているのだ。

ガイウス自身は気が付いていなかったが、侑人と相対し完膚なきまでに負け、そこから這い上がろうと日々努力する事により、元々持っていた剣術の才能が急速に開花したのである。

このまま普通に相対していれば必ず負ける。ガイウスの技量を冷静に見極めそう判断した侑人は、一か八かの賭けに出ることにした。

侑人は突然正眼の構えをやめ、大上段の構えに変化させた。胴ががら空きになるその構えはガイウスの混乱を誘った。

胴を狙えば勝負を着けられるかもしれない。しかし侑人の袈裟切りの剣速を考えると、こっちが斬る前に斬られてしまうかもしれない。

そんな迷いがガイウスの思考を覆う。

迷いがある人間の反応は遅れる。侑人はその隙を見逃さなかった。侑人はおもむろに大上段の構えから正眼の構えに戻す振りをして、一足飛びにガイウスに斬りかかる。

木刀を右横に構えて一気に間合いを詰める侑人。虚を付かれたガイウスの反応は一瞬だけ遅れる。結果としてその一瞬の遅れが勝負の明暗を分けた。

侑人がガイウスの右横を疾風のように駆け抜けた時、ガイウスの手から離れた木剣が宙を舞った。木剣はやがて練兵場の床に落ち、カラカラと乾いた音を立て転がっていった。

「……参りました旦那」

ガイウスは天を仰ぐ仕草をして侑人にそう告げる。完膚なきまでに負けた……そんな感情がガイウスの中に湧き上がるが、不思議と嫌悪感などは覚えず、むしろ清々しい気持ちが心の中を満たしている。

「この結果はたまたまです。今日のガイウスに勝てるとは夢にも思っていませんでした」

その言葉を聞いたガイウスは少し嬉しそうににやりと笑う。そんなガイウスの表情を見た侑人もガイウスに笑いかけ握手を求める。

侑人とガイウスは練兵場の中央で硬い握手をし、お互いの健闘を称え合った。

パチパチ……。

二人の鍛錬を見守っていた王国兵士達から拍手が起こる。

パチパチパチパチ……。

その拍手の波はやがて練兵場全体を巻き込んでいく。

「すげえぜガイウス！」

「今まで口だけとか言って済まなかった……許してくれ」

「ガイウスさん！　今度僕にも剣を指南してください！！」
「さすが宰相直々の命で、黒髪の勇者の衛士を任されるだけはあるな」

衛兵達がガイウスを取り囲んで口々に話し掛ける。そんな皆の姿を見たガイウスはかなり動揺した顔をしている。
そんなガイウスの姿を見た侑人は笑いながら皆にこう告げる。

「ガイウスは私が一番信頼している衛士でもあり私の友でもあります。ガイウスに剣の指南を受けたい場合は私に相談して下さいね。ガイウスの代わりは誰にも勤まりませんから、ガイウスが忙しすぎると私が困るのです」

そんな侑人の言葉を聞いた王国兵士達は、黒髪の勇者の信頼を一身に受けるガイウスを改めて尊敬し、剣技だけでなく黒髪の勇者にそう言わしめるガイウス本人対して、深く感嘆するのであった。

この日を境にして、セルビナ王国軍の中でのガイウスの評価は大きく変わる。黒髪の勇者の側に控えるガイウスの姿は当然のものとして皆に受け入れられ、ガイウスに対して陰口を言う者は誰も居なくなった。
ガイウスは若い王国兵士達の憧れの存在となり、立身出世を狙う者達の目標として、熱い眼差しを受ける事になる。

しかし当の本人のガイウスはそんな周囲の評価を全く気にせず、黒髪の勇者の侑人を己の剣で守る為に地道に剣技を磨き上げ続け、いつしかセルビナ王国一の剣士の称号を得る事となる。
また、後の世の歴史書に度々登場する黒髪の勇者に付き従う剣豪の衛士、ガイウス・マリウスという名前は、今日のこの日を境にして歴史の表舞台に姿を現したのだが、ガイウスがこの事を知る術は

無く、たとえ知る機会があったとしても特に気にする事は無かっただろう。

ガイウスにとっては侑人を守る事が己の職務の全てであり、当然の事をしたまでといつもの飄々（ひょうひょう）とした物腰で語る姿が容易に想像できる。ガイウス・マリウスはそんな人物である。

「行ってらっしゃいユート。無理をして怪我とかしないでよね」
「マリアに心配を掛けない程度に頑張ってきますね」

アルクィンが用意した漆黒の軽鎧を着た騎上の侑人に向かって、マリアが気丈に振舞っているが心配そうな顔は隠せていない。侑人も表面上は冷静を装っているが内心は不安を感じている。側にいて話し掛けてくれるマリアの存在が心強い。

「プロセン王国へ行く事を考えるだけで心配になるよ」
「さすがにそこまでは叶えられません……すみません」

閲兵式を終えたセルビナ王国軍の面々は、出陣までの僅かな時間を利用して、しばらく会えなくなる家族との挨拶を各々行っていた。

「アンナの姉御。俺らは何時まで隠れていればいいんです？」
「良い雰囲気になるまでじゃ……黙って見ておれ」

全く緊張感を感じさせない二人組みも居たが、大多数は緊張した顔をしている。本格的な戦闘行為に巻き込まれれば命を落とす可能性もあるのだ。

むしろ生き残るのが奇跡といった状況も考えられる。それほどグランツ帝国軍というのは強大な相手であり、見送る家族の中には涙ぐんでいる者まで居る。

「セルビナ王国将軍、ゲオグル・プロノイ・オストロ伯爵、此度の戦で汚名を挽回して見せようぞ！」

「汚名は返上です伯爵様」

妙な野望を持つ者も居たがそれもほんの一握りである。

ちなみにゲオグル伯爵をセルビナ王国に残しておくと、侑人達の側から離れたマリアに対して変なちょっかいを出さないとも限らない為、今回の軍勢の編成にあたり侑人から言い出して加えたのである。

アルクィンから伯爵の人物像を聞かされている侑人の判断は多分正解であろう。伯爵の性格はかなり陰険であり、弱い者には強く強い者には巻かれる、判りやすい性格をしている。

とはいえマリアを傷付ければ下手をすると命を無くす可能性がある。

黒髪の勇者である侑人の思い人という噂もあり、アンナというマグナマテル全体の中でもトップクラスの魔力の使い手と親しくし、最近では剣技に秀でるガイウスとも親交が深い。

その上、セルビナ王国民の尊敬を集める司祭として最近名を上げた、セルビナ司祭ヨーゼフ・ホラントの孫娘という立場もあり、マリアを取り巻く環境は凄まじくたとえ王族といえどもそう簡単に手出しは出来ない。

「五月蝿い！　そんな事は知っておったわ！」

「も……申し訳ありません」

しかしゲオグル伯爵は短慮である。
前回の援軍に選ばれず、黒髪の勇者招聘の任務にも失敗し、今回の援軍にも再度選ばれないという事になれば、癇癪を起こす可能性が非常に高い。
色々な環境が整い、これから世の中を少しずつ変えていこうと考えているカルロス王とアルクィンは、侑人の申し出をありがたく受けたのである。まさに厄介払いであった。

「あの人を連れて行って大丈夫なの？」
「あはは……まあ、何とかしてみます」

侑人はゲオグル伯爵を編成に加えた意図をマリアに話していない。マリアも侑人の意図には気が付いておらず、不思議そうな顔をしている。
もし侑人がゲオグル伯爵を加えた意図をマリアに話すと、間違いなく気にして落ち込んでしまう。マリアの事を常に気遣っている侑人である。

「じれったいの……抱き合う位すれば良いのにのぅ」
「趣味悪いですよ姉御」

そしていまだに柱の影に隠れ続けている二人の姿は、周囲の兵士達の視線を一身に集めていた。

「そろそろ出発かな？　本当に無理しちゃ駄目だよ」
「マリアの言葉を胸に留めておきますね」

マリアを見つめる侑人の目は優しい。そんな侑人をマリアも笑顔で見つめている。
周囲に控える兵士達は二人の邪魔をしないように遠巻きに見つめ

ているが、アンナとガイウスは別の意図を持っていまだに隠れていた。

そんな雰囲気の中マリアとたわいも無い話をしていたが、出陣の時間になった事を察した侑人は、しばらく会えなくなるマリアに対して小声で話し掛け、そのまま全軍に向かって号令をかける。

「それでは行ってきます……全軍出撃！」

「行ってらっしゃい」

「姉御……置いていかれますよ」

「やばい！　ユート待ってくれ！」

侑人の号令を合図にして、セルビナ王国軍一個師団二万人が、プロセン王国へ向けて颯爽と出陣して行く。

カルロス王を始めとした、セルビナ王国民全ての期待を背負った侑人の、戦いの幕が開けるのであった。

第２６話：二人の剣豪（後書き）

次回こそセルビナ王国の外に出ます。展開が遅くてごめんなさい。
ちなみに侑人の構えは北辰一刀流です。

第２７話：師匠の言葉

プロセン王国の首都に程近い街道を、セルビナ王国軍一個師団二万人が隊列を組んで進軍していく。騎兵を主とした編成で組まれたセルビナ王国軍の進軍速度はかなり速く、通常なら二週間以上掛かる道程を、十日程で走破してきた。

進軍速度を大きく上げる事になった要因の一つに、魔道士部隊の不在が挙げられる。他の部隊とは大きく違い、魔道士部隊に必要なのは体力よりも魔力である為、非力な魔道士部隊の進軍速度は他のどの部隊よりも遅かった。

その為全体の進軍速度は魔道士部隊に合わせる事になる。本来であれば機動力があるはずの騎兵部隊も、魔道士部隊に合わせる形で進軍する為、移動に時間が掛かっていた。

しかし集団戦闘においては魔道士部隊の有用性はかなり高い。本来であれば従軍させるのが一般的ではある。だが今現在のセルビナ王国の魔道士部隊は、国内の災害復旧の為に奔走している。侑人はそちらの作業を優先させる為に、魔道士部隊を従軍させない決断をしていた。

当初カルロス王とアルクィンは、魔道士部隊を従軍させないと決めた侑人に対して、あまり良い顔をしなかった。万が一侑人に何かあったらセルビナ王国だけでなく、マグナマテル全体の大きな損失になるので、考え直した方が良いと説得をした。

しかし、いざとなったら侑人とアンナの二人だけで、魔道士部隊

一個大隊と同等の攻撃力が出せるというアンナの力強い言葉もあり、最終的には侑人の判断に従った。

セルビナ王国軍の異常な進軍スピードは、魔道士部隊を外した侑人の判断の副産物であり、本来は意図していたものではなかった。

しかしこの事が様々な者達の思惑を大きく狂わせ、この度の戦闘の流れを大きく変えることになる。

黒髪の勇者に率いられているという安心感からかセルビナ王国兵の士気は高く、侑人の意思は兵を指揮する上官達だけでは無く末端の兵士にまで浸透している。

此度の出陣は戦争に勝つのが目的では無い、戦争そのものを終わらせるのが目的であるという侑人の言葉は、セルビナ王国軍共通の意思として、兵士の心の中に深く刻まれていた。

士気が高い軍勢の雰囲気は外部から見てもはっきりと分かる。統制されたセルビナ王国軍の精悍な姿は、戦火に巻き込まれているプロセン王国民達の大きな希望となり、プロセン王国中にその勇姿が伝えられている。

今回援軍で来たセルビナ王国軍は今までの王国連合軍とは何かが違う。此度の戦闘では何かが起こるはず。そんな憶測が各地で飛び交っていた。

そんな噂の中心であるセルビナ王国軍の先頭に、騎馬に跨った三人の姿がある。片方の騎馬には漆黒の軽鎧を纏った侑人と、その後ろにしがみ付いている夏用の従者服を着たアンナが乗っている。もう片方の騎馬には、セルビナ王国近衛兵団の白銀の鎧を着込んだガイウスが乗っていた。

そんな二人の姿は……アンナも別の意味で目立ってはいるが、かなり人目を引く。人々はこの戦闘を勝利に導く救世主達に熱い眼差

しを送っていた。

「おーおー。かなり目立っておるのう」
「まさか姉御が馬に乗れないとは思ってなかったすよ」
「あまりしがみ付かれると恥ずかしいのですが……」

実は侑人達が軍勢の先頭に居た理由は、アンナが景色を良く見たいと駄々を捏ねたからである。通常は先兵隊が道中の安全を確認した後に、本隊が進軍するのが慣わしではあったが、いざとなったらわらわがどうにかしてやると騒ぐアンナに根負けして、各大隊を指揮する上官達は渋々ながら侑人達が先頭で進む事を了承した。

そしてこの三人が主に話していた内容は、このようなたわいも無い雑談であったが、そんな事情を知らないプロセン王国民達は、盛大なる勘違いをしていた。

黒髪の勇者は自らが先頭に立ち、プロセン王国の為に一分一秒を惜しんで進軍してくれている。しかも会議を騎乗のままで行うほど、それは徹底されている。

そんな彼らが援軍に来てくれるのならば、此度の戦いはきっと大丈夫だ。黒髪の勇者によって我が国は救われる……そんな言葉があちらこちらからで囁かれていた。

黒髪の勇者の名声は侑人達が全く知らないところで、プロセン王国中でどんどん高まっていった。

「あと数刻で黒髪の勇者殿が率いるセルビナ王国の援軍が到着されます」

国王を守護する衛士が黒髪の勇者に関する情報を伝える。それを聞いたプロセン王国国王、ハインリヒ・フォン・サヴォイアは小躍りするほど喜ぶ。

セルビナ王国から早馬で知らされた伝令では、後六日ほど到着までに掛かると聞かされていたが、良い方向に予想を大きく裏切られた。

「それは真か！　さすがは黒髪の勇者殿が率いる軍勢だ」

若干興奮したまま側に控える従者達に、歓迎の宴の準備を急がせるハインリヒ王。王に急かされる形で従者達は慌しく動き回っている。

別の意味でプロセン王国の重臣達や、ハルモ教法王庁教圏国家群から援軍で来ている将軍達の周囲も慌しくなってきている。

まだ見ぬ黒髪の勇者の姿をあれこれ噂する者、八百年ぶりにマグナマテルに光臨した黒髪の勇者の資質を見極めようとする者、これを機会に勇者に取り入り出世の足がかりにするべく画策する者。

各々の思惑が複雑に絡み合い、侑人達のプロセン王都到着に合わせて、王城全体の雰囲気はにわかに慌しくなっていった。

「ここがプロセン王国の王都か。なかなか壮大だの」

「あまり周囲を見渡すのは失礼に当たるので、多少控えて貰えるとありがたいのですが……」

侑人の後ろにしがみ付いているアンナが周りをきょろきょろ見渡し、侑人はそんなアンナの姿を見て少し呆れた表情をしている。

しかし侑人の言葉に対して、いやじゃ！　とキッパリ答えるアンナ。侑人は自由奔放なアンナに振り回される形で王城に付くまでの

間、会話につき合わされるのであった。

プロセン王国の王城の正門前では、侑人達の到着が待ちきれなくなったハインリヒ王自らが、セルビナ王国軍を出迎える為に待ち構えている。

五分おきに黒髪の勇者の現在位置を確認するその姿に、周囲に控える重臣達は多少困惑していたが、重臣達自身も王がそこまで心待ちにする勇者に対しての興味が大いに沸き、セルビナ王国軍を率いる侑人の登場を心待ちにしていた。

終始落ち着かない様子で侑人達を待ち構えていたハインリヒ王と重臣達であったが、眼前にある王城を取り囲む城壁の門から、颯爽と姿を現したセルビナ王国軍を見た瞬間に動きが止まった。

セルビナ王国軍の先頭に立つ、漆黒の鎧を纏う黒髪の勇者の姿に目を奪われたのだ。白銀の騎士と黒衣の従者を従えたその姿は、まさにマグナマテルの伝承の一節に相応しい装いであった。

しかも黒髪の勇者が浮かべている表情は、厳しい戦闘が予想される今回の戦いにおいてもかなり余裕があるように見える。悲壮感など微塵も感じさせず、むしろ微笑んでいるようであった。

実はこの時の侑人は、すっかりアンナの雰囲気に巻き込まれ、楽しく談笑していただけであったが、遠目から見ているハインリヒ王達にそこまでの様子は判らなかった。

「全軍止まれ！」

侑人の号令を合図にして、セルビナ王国軍一個師団二万人の進軍が止まる。見るからに士気も高く、一糸乱れず統率されたセルビナ王国軍の姿は、見るもの全てを圧倒していた。

侑人は馬から降り、わざわざ城門まで出迎えてくれたハインリヒ

王に対して深く一礼をし、セルビナ王国軍到着の報告をする。

「カルロス王の命により、セルビナ王国軍一個師団、到着致しました」

「我が国の求めに応じて援軍に来て頂き、心より感謝をしております。プロセン王国を代表して感謝の意を表します」

そう言って侑人に向かって頭を下げるハインリヒ王。王のその姿を見たプロセン王国の家臣一同は、多少どよめきながらも王に習い慌てて頭を下げる。

通常国王が頭を下げる事などめったに無い。ハインリヒ王は周囲の雰囲気に飲まれ、侑人に釣られる形でついつい頭を下げてしまっただけである。

しかし頭を下げる国王の姿を見たプロセン王国の重臣達は、そんな国王の意図など判らない。まさかついつい釣られて頭を下げたなどと夢にも思わなかった。

黒髪の勇者に対する扱いは、他の国の国王と同じように最大限に敬って接しなければ、国の威信に関わる。そんな空気が重臣達の間に広がって行った。

様々な行き違いと勘違いにより、侑人のプロセン王国内での立場は、他国の国王並に上がったのである。

「歓迎の宴の準備が整っております。是非会場に足を運んで頂ければと思います」

「王の心使いに感謝致しますが、出来ればこのまま今後の作戦を会議する場を設けて頂ければ助かります」

今は戦時中で一刻の猶予も無い状態であり、カルロス王から預か

った親書も持参しているので、このまま会議に入りたいとハインリヒ王に告げる。

歓迎の宴はそれが終わった後にゆっくりとお受けするとも付け足す。ちなみにアンナは歓迎の宴と聞いて飛び出して行きそうになったが、侑人が無理矢理止めた。

ハインリヒ王とプロセン王国の重臣達は、黒髪の勇者を迎えただけで既に戦勝気分に浸っていた自分達の軽率な行動を恥じる。黒髪の勇者が言う事はもっともであり、国民の命運を握っている我々が浮かれるなどと言う事は言語道断だ。

丁寧な言葉使いではあったが、黒髪の勇者にそう言い切られた様に感じたハインリヒ王達は、侑人の言葉に従って急いで会議の準備を始める。

侑人の意図は国王達が考えている事とは全く違っていた。むしろ宴会を先延ばしにして会議をしたいと言い出した事に対して、立腹されはしないかと内心ドキドキしていた。しかしハインリヒ王達が会議の準備を始めたのを見てホッと一息ついている。

ご馳走を目の前でお預けされたアンナは、少し拗ねたような表情をして侑人の顔を睨んでいる。そんなアンナの顔を見た侑人は、周囲に聞こえないような小さな声でアンナに向かって話し掛ける。

「カルロス王の頼みを忘れたのですか？」

カルロス王の願いは戦争に勝つ事ではなく、戦争自体を終結させる事である。その為にも今回の援軍は独立部隊として作戦行動をする事を、ハインリヒ王達に納得して貰わなければならない。

この件をうやむやにしたまま宴会に突入してしまうと、酒の席でどんな事を頼まれるか想像も付かない。無礼講と言いつつも無礼講などでは全く無い飲み会を数多く経験してきた侑人は、宴会の危険

性を嫌というほど身をもって体験していた。

侑人の言葉を聞いたアンナも渋々頷く。侑人達一行はハインリヒ王が急遽設定した会議場へ向かってゆっくりと歩き始めるのであった。

プロセン王国の王城内の急遽用意された会議室に、此度の戦争に参加している王国連合軍の、主立った面子が顔を揃えている。

黒髪の勇者の呼びかけにより急遽開催された会議に参加する事になった面々は、皆一様に緊張した面持ちで席についていた。

プロセン王国からは国王のハインリヒ王をはじめ、宰相や将軍達が出席している。セルビナ王国からは侑人と従者のアンナ、そして数名の貴族の面々が出席していた。

その他のハルモ教法王庁教圏国家群に属する二国からも要職に付く数名が出席し、総勢二十名強が集まった会場は、お互いがお互いを探りあうような雰囲気が流れ、一種異様な空気に包まれていた。

当初黒髪の勇者の従者でしかないアンナの会議参加は、他の会議参加者達と比べて身分の差がありすぎる為、やんわりと窘められた。

この会議の出席者は各国の重臣や貴族のみであり、たかが従者が参加するには敷居が高すぎると判断された為であった。しかし侑人達の言葉でその雰囲気は霧散する。

「アンナは私の魔道の師匠でもあります」

「わらわは従者でもあるが、こやつの師匠じゃぞ」

侑人とアンナのこの発言により周囲の雑音は無くなった。プロセン王国内でのアンナの立場も侑人の立場と同じく、他国の国王並に上がったのである。

元々クーラント魔国の王女であるアンナの、無駄に威厳のある言動も手伝って、周囲に過剰な緊張感を強いているのではあるが、当の本人であるアンナは涼しい顔をしていた。

「これがカルロス王から託された親書です」

「早速拝見しましょう」

ハインリヒ王が宰相に目配せをする。そんな王の姿を見た宰相は席から静かに立ち上がり、侑人の側まで歩を進める。

侑人が親書を渡すと、宰相は一度崇め奉るかのような仕草をした後にそれを受け取り、そのまま静かに歩を進めてハインリヒ王に親書を渡す。

カルロス王の親書を手渡されたハインリヒ王は、親書に向かって軽く頭を下げた後、ゆっくりした動作で封を開ける。

会議場に居る全ての者の視線は、カルロス王の親書を読むハインリヒ王に注がれていた。

「ふむ……」

カルロス王の親書を手に取ったハインリヒ王は、時折頷きながらじっくりとそれを読んでいる。実は侑人は親書の内容を全く知らなかった。俺に任せとけと自信満々に語るカルロス王を信じて、どういった文面を書くのか聞くのをやめたのである。

しかしよくよく考えれば、しっかりと確認するべきだったと侑人は後悔しはじめたが、今となっては後の祭りであった。

そんな侑人の心情を知らないハインリヒ王はカルロス王の親書を読み終えた後、真っ直ぐな目で侑人を見つめていた。

「カルロス王のご意見は非常に参考になりました」

「我が王の思いを受け止めて頂けた様で安心しました」

親書の内容が判らない侑人は、適当にハインリヒ王の言葉に合わせる。

侑人が率いてきた軍勢を援軍としてではなく、遊撃部隊として自由に行動させて欲しいという内容であると予想しての返答である。

「我が国は構いませぬが、ユート殿はそれで宜しいのですか？」

「カルロス王の意向に従う所存です」

ハインリヒ王のそんな言葉を聞いた侑人は、この度の戦闘での自由を勝ち取ったと内心喜ぶ。さすが賢王と名高いカルロス王はやる時はやる男だと感心していた。

「ユート殿に我が国の命運を掛けても宜しいですか？」

「え？　は、はい。我が国王の命ならば全力で取り組む所存です」

しかし何故か雲行きがおかしい。

たかが遊撃軍に対して他国の国王がここまで期待するものなのか……？　そんな侑人の疑問を一瞬で晴らす言葉が、ハインリヒ王の口から諸侯に向けて堂々と語られる。

王座から立ち上がったハインリヒ王は、カルロス王からの親書を高々と右手に掲げて、会議に参加している諸侯に向かって力強く宣言をする。

「此度の戦でのプロセン王国軍全軍は、黒髪の勇者殿の妙案に従い

行動を共にする。諸侯も黒髪の勇者殿に従って、一致団結して行動する事を我は望む！」

「「「「はは っ！」」」」

「へっ？」

「これは面白くなってきたの」

会議場に居る全員の期待は侑人に向けられる。

何を書いたのか全く判らないが、ろくでもない事を親書に書いたであろうカルロス王に対して、内心怒りを感じている侑人ではあったが、引くに引けない雰囲気を感じて諸侯に向かって愛想笑いをするしか出来なかった。

会議が終わった一時間後。侑人は若干落ち込んだ様子で歓迎の宴の隅で小さくなり、ガイウスを相手にしてチビチビとお酒を飲んでいた。側に控えているはずのアンナは、立食パーティ形式の会場をところ狭しと駆け回り、色々な料理に舌鼓を打っていた。

どんよりと沈んだオーラを発する侑人を目の前にして、ガイウスはあの手この手で慰めようと奮闘している。

「旦那……過ぎてしまった事を後悔しても、今更どうにもなりませんですって」

「ガイウスの言いたい事は良く判るのですが……」

「それにほら、周りの人達もあんなに笑顔で楽しそうですし、それはそれで良かったじゃないですか」

「期待だけして待っていればいい人達は、気楽でしょうしね」

ガイウスは侑人の言葉を聞いてこりゃ駄目だという仕草をする。
先ほどからの侑人に話し掛ける諸侯の言葉を聞いていたガイウスは、こんな雰囲気になるのも仕方ないかと半ば諦め気味であった。

「勇者殿の采配を期待しております」
「敵を騙すのはまず味方からと申しますが、我々に全貌が明かされるのは何時になるのでしょう？」
「賢王カルロス様ご推薦のユート殿には、我が王国の国民一同が期待しております」
「サイン下さい！」

侑人の側に控えるガイウスの目の前で歓迎の宴の席に居る全員が、侑人に対して期待しているという意味合いの言葉を次々と掛けていた。
今更カルロス王の親書の内容はでたらめですなどと言えない侑人は、その言葉に対して引きつった笑いで答え続けていたのだ。

「旦那一人が頑張ったって状況は大きく変わらないでしょうし、もう少し肩の力を抜いたらどうです？」
「私の行動如何によって状況が変わるのであれば、手を抜く事はしたくありません」

侑人は真剣な表情で答える。
そんな侑人の言葉を聞いたガイウスは、頑固者の主人に対して少し呆れつつも、自身が背負う境遇から決して逃げださない態度に大いに感心するのであった。

「ユーーーート！」

かなり酔いが回ったアンナが侑人の後ろから抱きついてくる。

真っ赤な顔をしてしなだれかかって来るアンナの姿は、見る人が見れば色気を感じたかもしれないが、ロリコン属性が無い侑人にとっては、親戚の小さな女の子がじゃれて来るような感覚である。

「未成年がお酒を飲んで良いのですか？」

「みせいねん？　わらわはもう十七歳じゃぞ？　ユートは何が言いたいのじゃ？」

二十歳未満の子供は全員未成年です。そう説明しようとした侑人であったが、この世界が異世界である事を思い出しその言葉を飲み込んだ。

詳しく聞いた事はないが、この世界では十七歳で子供が居る事は珍しい事ではない。王族ともなれば十歳に満たない子供の頃から、許婚が居る事が常識であった。

見た目は幼いが王族であるアンナにも許婚が居るのかもしれない。そんな事を考えた侑人は、要らぬ争いを招くような言葉を慎んだのである。

しかしこういった話をする時の女性は意外と鋭い。アンナは侑人の後ろからしがみ付いた姿勢のまま、段々機嫌が悪そうな雰囲気を纏っていく。

「ユート……。お主はわらわがもてないとでも思っておるのか？」

「ソンナコトヲオモッテモイマセンヨ」

核心を突かれた侑人は、思わず片言で返事をしてしまう。

そんな侑人の言葉を聞いたアンナはますます不機嫌な態度になり、侑人に対してかなりの勢いで絡んでくる。こうなった時の女性はかなり怖い。

「そろそろユートに対して、わらわの魅力を叩き込むべき時が来たようじゃの」
「お手柔らかに頼みます……」

「朴念仁のユートにも判りやすく説明してやるから、安心して聞くが良いぞ」
「お心使い感謝します……」

思いっきり顔が引きつっている侑人を無視してアンナの独演会が始まった。

アンナが語り続ける数十分は苦痛の連続であった。集中して聞いていないような素振りが少しでも感じられると、酔っ払ったアンナの攻撃魔法が侑人に向かって容赦なく放たれた。
十二分に語りつくしたアンナが満足した頃には、それに付き合わされた侑人はボロボロになっていた。
ちなみに侑人の側に居たはずのガイウスは、アンナの独演会が始まった二秒後にはどこかに逃げている。

「これだけ語れば朴念仁のユートも理解したじゃろう」
「イタイホドリカイシマシタ」

既に意識が朦朧としている侑人は、条件反射でアンナの言葉に対して返事をしている。そんな姿をアンナは呆れた目で見つめている。

「朴念仁のユートの為に、最後に良い話をしてやろう」

侑人は『どんな話でも良いので手早く終わりにして下さい』などと考えていたが、口に出すと後が怖いので大人しく首を縦に振る。

「異性を落とす為には準備を怠ってはいかん。ありふれた手段であろうが奇抜な手段であろうが、事前の入念な準備が必要じゃ」

そんなアンナの言葉を聞いた侑人はピクリと反応をする。アンナの言葉は色々と悩んでいた侑人の心の奥底に響く。

入念な準備をした後に相手を迎え撃つ。元の世界の有名な戦術書にも書かれている戦いの真理である。残された時間は少なく悩んでいる暇など無い。

「相手がどんな物を好むのか。何が好きなのかを十分に考えて、常に先回りする事が大事なのじゃ。何もせずただ待っているだけでは状況は変わらん」

「確かに……先を見据えて行動する事が大事ですよね」

「黙っていても勝手に状況が良くなる事もあるが、そんなものはよっぽど運が良い時か、相手が手緩いだけのどちらかじゃ」

「相手が強敵であるなら、こちらもそれなりの用意が必要ということですよね」

「そうじゃ。恋とは常に真剣勝負なのじゃ！」

「そうですよね！　戦いは受身じゃ駄目ですよね！」

アンナの言葉を聞いた侑人は、興奮した姿でアンナの手を握り上下に動かす。アンナの言葉を聞いてこの先の戦いの光明を得た侑人は、嬉しそうな顔をしてアンナに語りかける。

「さすがアンナは私の師匠だ！」

「わらわの事は恋愛マスターと呼ぶが良いぞ！」

二人の会話は微妙にかみ合っていなかったが、お互いに非常に満

足そうな表情をしていた。

第２７話：師匠の言葉（後書き）

恋も戦争も真剣勝負なのです。

第２８話：プロセン王国防衛戦【前編】

火の月の第五週の一日。侑人とアンナは、衛士のガイウスと二百人程の工作兵を引き連れて、グランツ帝国の国境に程近い山間の街道にたどり着いていた。

グランツ帝国から五日ほどでたどり着ける最前線とも言える場所に、軍勢を引き連れずに向かう黒髪の勇者の行動に対して、皆一様に首を捻っていたが、何か深い思慮があるのだろうと考え、余計な口出しをする者はいなかった。

「この辺が良さそうですね」
「何でわらわがこんな事を……」

両側の山が迫り、幅が四百メートル程度に狭まっている谷底のような街道で、プロセン王国の方角を向いて侑人とアンナが立っている。

ガイウスと工作兵たちは、そんな二人の姿を少し離れた所から見つめていた。

「では行きますよ！」

侑人の掛け声に合わせて、二人の体から膨大な魔力が溢れ出す。二人はほぼ同時に目の前の地面に手を当てて魔力を放出する。

二人の魔力を受けた目の前の地面がまばゆく光った直後、二人の周囲を砂埃が舞う。やがて砂埃が収まり視界が回復すると、ガイウ

スと工作兵たちの目の前には高さ十メートルを超える土壁が出来上がっていた。

「補強は後回しにして両端の山まで一気に繋げてしまいましょう。とにかく今日一日が勝負です」

「判ったのじゃ」

侑人とアンナは二手に分かれて同じ動作を繰り返す。一時間後には街道を除いた全ての部分が土壁で塞がれていた。

「アンナはプロセン王国側で、街道の左右に見張り台を作成しておいて下さい。それとガイウスに持ってきた門を街道の所へ取り付けるように伝えて下さい。私は防壁の補強の作業に移ります」

「わらわをここまでこき使ったのは、ユート以外には誰もおらんぞ……」

侑人の指示を受けたアンナは、ブツブツと文句を言いながらも、土壁を飛び越えてプロセン王国側に移動する。

防壁のグランツ帝国側の地面は、土壁を作る際に地面の土を利用してしまった為、幅十五メートル深さ五メートル程の大きな溝が出来ている。普通の人間では越える事は出来ないが、アンナは蝙蝠に擬態して溝ごと飛び越えていった。

「アンナ！　街道の部分に簡易的な橋を架ける作業も急がせて下さい。そうしないと私が戻れません！」

「それはどうしようかのーー」

侑人は悪戯っぽく話し掛ける声を聞いて多少うろたえる。そんな姿を防壁の隙間から見たアンナは、満足そうな顔をして侑人に向かって叫ぶ。

「気が向いたら作るように言っておくから安心して作業に励めー！」
「めちゃめちゃ心配なのですが……」
アンナは侑人の心配を他所に、ガイウス達の所へ走り去っていった。

「相変わらずめちゃくちゃすげえな……」
目の前に次々と現れる巨大な土壁を見ながら、ガイウスは感心したような声で呟く。ガイウスの呟きを聞いた周囲の工作兵達も、驚いた顔をしながら一様に頷いている。
通常の人間では百人単位が関わって一月ほど掛かる大工事を、たった一時間程で大体の形にしてしまうその技量はまさに神業であった。
そんなガイウス達の方に、満面の笑みを浮かべたアンナが駆け寄ってくる。
「ユートが作業に移れって言っておるぞ」
「いまさら聞く事じゃ無いですけど、本当にこれを使っちゃっていいんですかね？」
「わらわに聞かれても困る。ハインリヒ王が良いといったのじゃから、別にかまわんじゃろう。問題があったらユートのせいじゃ」
「そう言われてもねぇ……」

ガイウスは侑人が王城の城壁に付いている門を貰い受けたいと言った時の、ハインリヒ王の顔を思い浮かべていた。
黒髪の勇者殿の妙案に従い行動を共にすると言ってしまった手前、断るに断れなくなったハインリヒ王は、半ばやけになった様な表情でそんな侑人の申し出を受けたのであった。

侑人は国境付近に防壁を作る際に取り付ける門を、一から作るより現在ある物を利用した方が手っ取り早いと判断して、特に深く考えずに一番使えそうな城門を使いたいとハインリヒ王に申し出た。
しかしハインリヒ王達にとって王城は、自国の民や他国に対する権威の象徴であり、城の入り口にある城門はただの入り口ではなく、権威を示す第一歩を担うべき大切な物である。

今のプロセン王国の王城は、立派な家なのに玄関が無いという非常に間抜けな状態に晒されている。ハインリヒ王は自国の面子を保つ為に、配下の者に大至急で城門を作るように指示を出していた。

「グズグズしているとグランツ帝国に気付かれて、ユートの策略が台無しになるぞ」
「そりゃまずいっすね。じゃあ、いっちょ気合入れて頑張りますか」

「ついでに橋も掛けてやらんと、ユートがこっちに戻れなくなるっぽいぞ。まあその作業はゆっくりでも良いとは思うがの」
「相変わらず旦那に対する扱いがひどいっすね……」

ガイウスはアンナと普段通りのやり取りをした後、真面目な顔になって工作兵達に激を飛ばす。

「グランツ帝国に気付かれる前に作業を終わらすぞ！」

「「「おーー！」」」

ガイウスの掛け声を合図に、工作兵たちは一斉に作業に取り掛かった。

侑人達が防壁を作る作業を始めてから三日後、着々とプロセン王国に侵攻する準備を進めているフリードリヒ皇帝の下に、一人の将軍が慌てた様子で報告をする。

「大変な事態です陛下！」

「何があったのだイーヴォ」

フリードリヒ皇帝は部屋に駆け込んできたグランツ帝国将軍、イーヴォ・シャルトに向かって、手に持った書類に目を通したまま話し掛ける。

これからプロセン王国と戦争を始めようとしているのだから、不測の事態の一つや二つは織り込み済みだと言わんばかりの雰囲気である。

「プロセン王国との国境と程近い場所に、防壁が築かれました」

「何を言っているのだ？」

フリードリヒ皇帝はおもむろに書類から目を上げ、イーヴォ将軍を少し睨みながら言葉を続ける。

「プロセン王国が防壁を築いているの見て、お前達は今まで何をやっていたのだ？」

「そっそれが……気が付いた時には防壁が出来上がっておりまして、どう考えても一日か二日で作り上げたとしか……」

「そんな馬鹿げた話があるはずが……待てよ、黒髪の勇者の仕業か？」

「我々の見解も陛下と全く同じです。今回の事態は人間業とは思えません」

イーヴォ将軍の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝は、苦虫を噛み潰したような顔をする。黒髪の勇者がセルビナ王国に光臨したという噂は、すでに皇帝の耳にも入っていた。

黒髪の勇者が今回の戦争に援軍として参戦する可能性も視野に入れて、色々と作戦を練ってはいたが、最前線に立たれると非常に厄介である。

元々黒髪の勇者、クロウ・ミナトが興した国であるグランツ帝国の国民にとって、黒髪の勇者は神にも等しい存在である。

王国連合軍側に黒髪の勇者が参戦するかもしれないという噂は、グランツ帝国の兵士達の間にあっという間に流れ、黒髪の勇者に敵対したくない兵士達の士気は、著しく落ちているのであった。

「前回は大嵐に阻まれ、今回は黒髪の勇者が立ち塞がる……予想以上に状況は厳しいな」

グランツ帝国軍の戦争準備がここまで遅くなったのは、前回の大嵐の被害が予想以上に酷かった事が理由の一つではあるが、黒髪の勇者光臨の噂が、兵士達の準備の手を鈍らせていたのも大きな理由の一つであった。

それに加えて侑人は援軍に魔道士部隊を編成に入れなかった為、

フリードリヒ皇帝の予想をはるかに超えた速さでプロセン王国にたどり着いた。これらの事象が影響した事によりグランツ帝国軍の対応は遅れ、結果的に侑人は防壁を作る時間を得たのである。

色々な要素が重なり、万全の準備を整えた王国連合軍を相手にするのは、百戦錬磨のグランツ帝国軍にとっても非常に厄介である事が簡単に想像出来る。

フリードリヒ皇帝は難しい顔をしながら暫く考え込むのであった。

フリードリヒ皇帝が思案に暮れている頃、国境付近で防壁を作っている侑人達の作業は、最後の仕上げに入っていた。

防壁の街道を跨ぐ部分に開けられた通路には、プロセン王国の城門がしっかりと取り付けられている。そこからグランツ帝国側には馬車が通れる程度の木製の橋が掛けられ、通常時の通行に支障が無いように配慮されている。

土で作られた防壁の表面は石で覆われ、補強も全て完了している。プロセン王国側から防壁の上に登れるように階段やスロープも作られており、戦闘時にはここを拠点として作戦行動が取れるように設計されていた。

「そろそろプロセン王国の王城に使者が着く頃ですね。ガイウス、例の書状はちゃんと使者に持たせてくれましたか？」

「旦那の書状は絶対に国王に渡せと厳命しておきました。しかし一体何の役に立つのか俺にはさっぱり分からないのですが、あれに何か意味があるのです？」

「今はまだ内緒です」

「はぁ……」

侑人は微笑みながらガイウスを見つめている。
そんな侑人の姿を見たガイウスは、苦笑しながらも旦那を信用していますと返答をする。侑人が何を考えているのかさっぱり判らないが、任せておけば問題は無いだろう。

「では最後の仕上げを……アンナ！　準備は良いですか？」

侑人は街道を挟んで反対側に居るアンナに向かって大きな声で話し掛ける。アンナは指先を頭の上で合わせ、準備完了というジェスチャーを返した。

「では行きます！」

侑人の掛け声に合わせて二人は魔力を解放する。
二人は両手を溝にかざして水の魔法を唱えはじめ、二人の両手からは大量の水が放たれる。水はグランツ帝国側に掘られた溝を満たし、数刻後には防壁の前に立派な水壕が出来上がっていた。

「こりゃまたすげえ物が出来上がりましたね」
「皆で力を合わせたから何とかなりました。とりあえず王国連合軍本隊が来るまではゆっくりしましょうか」

多少疲れが見える侑人はガイウスにそう声を掛けると、防壁の下で待つ工作兵の方に歩いていく。

「皆の力を合わせたから出来た……旦那らしい言葉だな……」

ガイウスは侑人の後ろ姿を見ながらそんな事を呟く。
この事業の九割は侑人とアンナの功績であるが、そんな態度を一瞬たりとも見せない侑人の姿を、誇らしげな目で見つめている。

工作兵のもとにたどり着いた侑人は、一人一人をねぎらっている様であり、声を掛けられている工作兵は、全員恐縮したような顔をしている。

しかし全員は一様に誇らしげであり、侑人はそんな姿を嬉しそうな目で見ている。そしてそんな侑人に対して、いつの間にか駆け寄ったアンナのじゃれ付く姿が見えた。

「さて、俺も旦那の側に戻らないと」

ガイウスも自分の居場所である侑人の側に、勢いよく駆け寄って行くのであった。

第２８話：プロセン王国防衛戦【前編】（後書き）

珍しく侑人が本当に活躍しました。

第２９話：プロセン王国防衛戦【中編】

「こう暑い日が続くと政務などやってられんな」
「寒い日にも同じ様な愚痴を言っていましたよね」

「とは言っても、過ごしやすい日に政務をこなすのも馬鹿らしい気もするな」
「口を動かすなとは言いませんが、せめて手も動かして下さい」

プロセン王国とグランツ帝国の国境付近に、侑人達が防壁を築き終わった頃、セルビナ王国の首都セルビナにある王城の執務室では、国王のカルロス・デア・グローセと宰相のアルクィンが、いつものやり取りを繰り広げていた。

「ユート達をこき使っておいて、ご自身がサボるのは感心しませんよ」
「黒髪の勇者と凡人の俺を一緒にされては困るな」

「その台詞……とてもかっこ悪いですよ」
「ほっとけ」

いつものやり取りをする二人であったが、会話の節々には必ず侑人達の内容が混ざる。二人は戦いの最前線に赴いていった侑人達を心配していた。
出来る事なら自分達も一緒に戦地に赴きたい。これが二人の本心

であるが、人にはそれぞれの役目がある。今の自分達に出来る事は侑人達の武運を祈る事だけだという事を、この二人は理解していた。

「そう言えば、ユートに持たせた親書の内容を聞かせて貰っていないのですが、一体何を書いたのですか？」

「普通の事を書いただけだぞ」

カルロス王は手元の書類を読むのをやめ、目を瞑り天井を見上げる姿勢を取る。少しだけ何かを思い出すような素振りをした後、普段通りの姿でアルクィンに語り掛ける。

「黒髪の勇者はこの世に一人だけの特別な存在であり、下手に組織に組み込んでしまうより、ある程度自由に動かした方がより大きな戦功を上げるはず。むしろ黒髪の勇者の指示に従ってしまう方が手っ取り早いかもしれない……このような内容を回りくどく書いただけだ」

「その内容ですとユートが最高司令官に任命されてしまう可能性が、かなり高いのではないですか？」

「事なかれ主義者のハインリヒ王の性格から考えると、その可能性はかなり高いな」

「やはり、判っていてそう書いたのですか……」

悪びれた顔をせずそう語るカルロス王に対して、アルクィンは呆れた顔をしている。

侑人の事を信頼しているからこそ書く事が出来た内容ではあるが、その分侑人に掛かる負担は格段に跳ね上がる。とはいえ侑人以外で今回の事態を収める事が出来る人物が想像出来ないので、カルロス王の気持ちも判るのだが。

「親書の最後に、ユートが失敗したら俺が全責任を取ると書いておいたから、多分大丈夫だと思うのだがな」
「最後に止めを刺してどうするのですか……ユートの責任は重大ですね」
そんな会話をしていた二人は同時に窓の外を見る。遠い空の下で奮戦する侑人達に思いを馳せるカルロス王とアルクィンであった。

「ガイウス隊の準備は完了したっすよ旦那」
「判りました。後は手はず通りの行動をお願いしますね」
数日前に建設が終わった防壁の上で、侑人は少し緊張したような顔をしたガイウスから報告を受け指示を出している。
しかし二人は視線を合わそうとはしない。侑人とガイウスは同じ方向を見ている。二人の視線はグランツ帝国軍を捕らえていた。
防壁から五百メートルほど離れた場所に、グランツ帝国正規軍十八万人が陣を張っている。対する王国連合軍は防壁の内側に二十万人が陣を張っており、数の上ではグランツ帝国軍をわずかに上回っている。
王国連合軍の先陣はガイウスが率いるガイウス隊千人であり、その後ろにハインリヒ王から借り受けたプロセン王国魔道士隊三千人が控えている。その他の軍勢は少し距離を置いた後方に陣取り、戦況に応じて行動を開始する段取りが取られていた。
「ちなみにグランツ帝国軍の総大将は、旦那の予想通りフリードリヒ皇帝らしいです」

「予想が当たって良かったです」

侑人は今回の戦争でフリードリヒ皇帝自らが出陣してくる事を予想していた。

堅牢な防壁を築きあげて侵攻を困難にし、それと合わせて黒髪の勇者である侑人が前線に出れば、グランツ帝国で一番軍を率いる才能に溢れる皇帝自らが出陣してくる可能性が高いと読んだのだ。

フリードリヒ皇帝自らが出陣してこなければ侑人が考えている策は全て無駄になる。予想が当たった侑人は内心ホッとしていた。

「しかし……本当にこんな格好の俺が先陣で良いのです？」

「そうですね……ガイウスの出番が無いのがベストなのですが、多分出番があるでしょうね……」

皮の鎧で全身を覆い荒縄と木剣を装備したガイウスが、自分の格好を訝しげに見回しながら侑人に質問するが、侑人の返答はガイウスの求めている答えではなかった。

ガイウス達の身を守る為に必要な装備であると、侑人からは事前に説明されているが、何故実戦向きでない装備が身を守る事に繋がるのか理解できていなかった。

再度問い直そうかガイウスは考えたが、もう一度聞くのも野暮な事だと思い直し、侑人の考えに自分の命を預ける事を決意した。

「ではお互いに頑張りましょう」

「旦那のご武運を祈っておりますぜ」

侑人とガイウスは、ガイウスと同じような格好をしたガイウス隊千人が待つ門前に向かう為に、ゆっくりと歩を進めるのであった。

「あれほどの規模の防壁が数日で出来上がったとは信じられんな」
「全く忌々しい事態でございますな陛下」

眼前に広がる巨大な防壁を見ながら、フリードリヒ皇帝とイーヴォ将軍は、今後どのように攻め込めばよいのかあれこれ思案していた。

正攻法で行けばこちらの被害は甚大であり、たとえ防壁を無理やりに力づくで落としたとしても、その後のプロセン王国侵攻は事実上不可能になる。

しかしこのまま手をこまねいていても戦況はどんどん悪くなる事が予想される。黒髪の勇者を擁する王国連合軍の士気はまず下がる事は無いが、黒髪の勇者に敵対するグランツ帝国軍の士気は、時間が経てば経つほどどんどん下がっていくのだ。

それどころか苦戦している事が兵に伝わると、戦線を離脱する者が現れるかもしれない。もしそんな事態になると一気に壊滅する恐れがある。

短期決戦で勝敗を決する事が、今回の戦争における絶対条件であった。

そんな事を考えている二人の目の前で突如防壁の門が開かれる。王国連合軍の先発隊が攻め込んでくるかもしれない。そんな緊張感がグランツ帝国軍全体を包んだ。

しかしそんな予想を大きく裏切り、門から出てきたのは一人の男だけだった。しかしその男の姿を見たグランツ帝国軍の兵士達には動揺が走った。

「まさかあれが……」
「噂の黒髪の勇者だろうな。よりによって一番初めに姿を現すとは……戦争の駆け引きに長けた男だな」

感心するフリードリヒ皇帝と動揺するグランツ帝国軍の兵士達に向かって、黒髪の勇者がゆっくりと歩いてくる。
黒髪の勇者は防壁とグランツ帝国軍が陣を張る中間地点まで歩を進めると、辺りに響き渡る声で語りかけてきた。

「私はマグナマテルに住む全ての人に対して敵対するつもりはありません！　無駄な戦争を終わらせ、平和な世を築く手伝いをする為にこの場に参上しました！　志を同じくするグランツ帝国の皆さん、私の言葉を信じて下さい！　私はいつでも話し合いに応じます！」

黒髪の勇者はそんな言葉を発すると踵を返し防壁の方に戻っていく。その間グランツ帝国の兵士達は一歩も動けなかった。

「やられた！」

フリードリヒ皇帝は忌々しそうに叫ぶ。黒髪の勇者のグランツ帝国に敵対するつもりは無いという言葉は、グランツ帝国軍兵士の心を大きく揺さぶった。
このまま戦闘を開始する指示を出しても、もはやまともな戦闘行動は取れない。無理やり軍を動かしても、グランツ帝国兵士の士気が落ちるのは目に見えていた。

機先を制され身動きが取り辛くなった皇帝は、この戦況をどうやって立て直すか考え込む。そんな皇帝の姿を見た一人の男が力強い言葉で語り掛ける。

「私が戦況をひっくり返して来ます」

イーヴォ将軍はそんな言葉をフリードリヒ皇帝に掛けると、一千名の精鋭を引き連れて、悠々と歩く黒髪の勇者の後ろ姿に向かって襲い掛かっていった。

『上手く行くでしょうか？』

『世の中はそんなに甘くは無いと思うぞ』

単身……アンナが中に居たので実際には二人だが、グランツ帝国軍の十八万人と対峙した侑人は、気を紛らわす為にアンナと会話をしている。

目の前に広がる十八万人から成る大軍勢を見て、震える足を気合で動かして何とか語りかけるとこまでは成功させた。後は相手の出方に合わせて行動をするしかない。

『アンナは後ろを警戒していて下さい』

『ユートが死ぬとわらわも多分死ぬから、その辺はちゃんと見ておる……っと、早速乱暴なお客様が、多数こちらに向かって来るようじゃな』

『打ち合わせ通り、飛び道具の処理を任せましたよ』

『判っておる。わらわが攻撃すると死人が出るかもしれんからの』

防壁まで百メートルほどの所まで戻ってきた侑人に、イーヴォ将軍が率いる軍勢から放たれた多数の矢が襲い掛かる。

「もらった！」

後ろを向いたままの、無防備な黒髪の勇者の無残な死を予感したイーヴォ将軍は、思わずそんな声を漏らす。

黒髪の勇者さえ居なくなれば帝国軍の勝利は確実なものとなる。イーヴォ将軍はグランツ帝国軍の勝利を確信していた。

しかしそんな将軍の目の前で、予想を超えた事態が起こる。

『全てを覆いつくす漆黒の闇よ。我の周りを覆いつくさん』

侑人に多数の矢が刺さると思われた刹那、アンナの詠唱が完了する。侑人の体を漆黒の球体が覆い、すべての矢は球体に触れた途端消滅した。

矢の嵐が過ぎ去った後、漆黒の球体は音も無く姿を消す。黒髪の勇者が無残な死体を晒すはずであった場所には、無傷なままの黒髪の勇者がこちらを見つめながら静かに佇んでいた。

「怯むな！　全軍突撃！」

イーヴォ将軍は予想外に事態に混乱する兵達の動揺を即座に抑え、再度攻撃を開始する。飛び道具が効かないなら直接葬るしかない。そんな思いが将軍を駆り立てている。

数々の戦場で生き抜いてきたイーヴォ将軍の戦場で培われた勘が、勝負を掛けるタイミングが此処である事を告げている。これで仕留めないとグランツ帝国軍の勝利が危うくなる。そんな嫌な予感が全身を支配していた。

決死の覚悟で突撃してくるイーヴォ将軍が率いる一千名の精鋭に

向かって、侑人は目を瞑りながら静かに右手を向ける。自身の防御はアンナに任せて、あるイメージを脳裏に浮かべる事に集中する。

侑人の脳裏には、プラズマテレビや電子レンジといった家電製品、火力発電所は原子力発電所といった発電所、そして雷やテレビで見た事があるスタンガンのイメージが明確に浮かび上がる。

「痺れろ！」

そんな掛け声と同時に閃光が侑人の右手から放たれる。戦況を見守るグランツ帝国軍兵士の目の前で、今までに見た事がない魔法が炸裂する。

マグナマテルの世界に、雷の魔法の概念が新たに誕生した瞬間であった。

イーヴォ将軍が率いる一千名の精鋭の突撃により発生した砂埃が収まった後、戦場で立っているのは侑人一人である。イーヴォ将軍達は感電し動けなくなっていた。

感電を避ける為に皮の鎧を着込み、木製の武器と荒縄を装備して門の後ろで控えていたガイウス隊に被害は無い。

無傷のガイウス隊は当初の打ち合わせ通りに、動けなくなっているイーヴォ将軍の部隊を縛り上げ捕虜にしている。

その成り行きを静かに見守る侑人の姿は、黒髪の勇者の伝承に相応しい佇まいであり、グランツ帝国軍の兵士全てに恐怖感を植え付けていた。

全ての者に慈悲を与えるが、敵対する者には神の雷で制裁を加える黒髪の勇者の存在は、グランツ帝国軍兵士の戦意を根こそぎ奪った。

戦争を早期に終結させる為に侑人が取った、戦闘の序盤でグランツ帝国兵の戦意を根こそぎ奪うという一つ目の策は、一兵の犠牲を出す事も無く成功したのである。

第２９話：プロセン王国防衛戦【中編】（後書き）

侑人を活躍させすぎたかもしれませんが、命を懸けないと次話の説得力が無くなるのでこういう展開にしました。

第３０話：プロセン王国防衛戦【後編】

『ここまではユートの予想通りの展開かの？』

アンナが防壁の内側に戻ってきた侑人に向かってそんな事を質問してくる。

しかし侑人はグランツ帝国兵を拘束しているガイウス隊の作業をじっと見つめたまま、問いかけに対して何の反応も示さなかった。

『わらわを無視するとはユートも偉くなっ……なるほどの』

アンナはいつもの悪態を侑人に対して言い掛けたが、ある事に気が付いて言うのを止めた。そしておもむろに侑人の中から実体化すると、作業を続けるガイウスに向かって歩いて行く。

アンナの姿に気が付いたガイウスは作業の手を止め、アンナと二言三言言葉を交わす。ガイウスとそんなやり取りをしたアンナは、侑人の所に戻ってくると侑人に向かって話し掛ける。

「帝国兵の半数は今もまだ気絶しておるが命に別状は無いようじゃ。怪我も軽い火傷程度で済んでいるとの事じゃから、治療すれば痕も残らんじゃろう」

「良かった……」

アンナの言葉を聞いた侑人は、心底安心した表情をしてその場に座り込む。相手を傷付けない様に雷の魔法を選択したのだが、威力

の調整を一歩間違えば命を奪う危険性もあった。
逆に加減しすぎれば効果が薄くなり、侑人の命の危険性が高まる。
そんなギリギリのやり取りの中で魔法の威力の調整が上手くできたのか、侑人にはいまいち自信が無かったのだ。

集中力を高める為に普段では行わない魔法詠唱も行った。『痺れろ！』が魔法詠唱なのかどうかはさて置いて、考え付くものは全て行動に移した。
戦争経験はおろか、命のやり取りなどと無縁の世界で育ってきた侑人にとって、他人を傷付ける行為は過大なストレスとなって圧し掛かっている。

万が一他人の命を奪ってしまっていたら、自分は二度と立ち直れない可能性がある事を、侑人は強く感じている。
自分の策を成功させる為に致し方無かった行動ではあったが、今後は戦闘行為に参加しないようにしようと固く誓う侑人であった。

「だから国政に係わるのは綺麗事だけでは済まないと言ったのじゃ。いまさらジタバタしても始まらんからどっしりと構えておれば良い！」
「いてっ！」

アンナは侑人の肩を力いっぱい叩く。侑人は痛む肩をさすりつつも、アンナらしい言葉で慰めてくれる事に対して嬉しく思っていた。

「さすがは勇者殿！　素晴らしい采配と実力です！」

初戦の報告の為に本陣に戻った侑人を、ハインリヒ王のそんな声が出迎える。周りに控えていたプロセン王国の将軍達は、王の隣の席を空けて侑人をそこに案内する。

周囲の大歓迎に多少居心地の悪さを感じている侑人であったが、愛想笑いを周囲に振りまきながら用意された席に座った。

「おや？　従者殿はご一緒じゃないのですか？」

「アンナはガイウス隊の確認に向かいました」

ハインリヒ王達はさすが黒髪の勇者に付き従う者は何もかもが一般人とは違うと、アンナの行動に対して深く感心している。

ハインリヒ王達の感心している姿を見た侑人は多少苦笑いしつつも、アンナは仕事が出来る従者ですからと皆の雰囲気に合わせて褒めておく。

実際には、堅苦しい場はもう懲り懲りじゃ！　と言い残してガイウスで（・）遊ぶ為に逃げてしまったのだが、この場で正直に言う必要も無いだろう……そう判断できる侑人は空気が読める大人であった。

「グランツ帝国軍の士気はがた落ちです。今すぐにでも総攻撃を掛けるべきです」

将軍の一人がハインリヒ王に向かってそう進言する。周囲の者達も一様に頷いている。

「たしかにそれもそうだな……皆の者準備に取り掛かれ！」

「「「はっ！」」」

「待って下さい！」

ハインリヒ王の力強い言葉に対して一斉に返事をする将軍達。しかし一人だけ王の言葉に異を唱える者が居た。その人物はこの好機を作り出した黒髪の勇者である侑人だった。

「何故勇者殿はこの好機に攻め込む事に対して反対するのですか？」

一人の将軍が侑人に向かって恐る恐る質問をする。言葉は丁寧であったが納得が行かないという雰囲気を周囲に纏っている。

侑人はその質問に対して直ぐに返答をしない。目を瞑り少し考え込むような仕草をしている。ハインリヒ王達はそんな侑人の仕草を固唾を呑んで見守っていた。

「今総攻撃を掛ければ今回の戦争は勝利で終わる可能性が高い……この事は事実です」

「ですからこの好機をみすみす逃すわけには！」

「ですがこの先はどうなりますか？　グランツ帝国を滅ぼすまで戦争を続けますか？　それだけの戦力が王国連合軍にはありますか？」

「そっ……それは……」

現状の王国連合軍の戦力では、グランツ帝国軍を追い返す事は出来ても、グランツ帝国を攻め落とす事は出来ない。

ハルモ教法王庁教圏国家群が総力を挙げれば可能かもしれないが、メリットよりもデメリットの方が大きく実行に移そうとした国王は誰も居ない。

法王猊下は喜ぶかもしれないが、それだけの為にグランツ帝国と雌雄を決しようなどと考える者が国王として相応しいはずも無い。

ハルモ教法王庁教圏国家群の国王たちは、ハルモ教正教会との関係を維持する為だけに、二十年前にグランツ帝国との争いを開始し

ただけであった。

「プロセン王国はグランツ帝国に宣戦布告され攻め込まれている立場ではあります。しかしこの戦争の大元の原因はいったいどちらなのでしょうか？」

「それを言われると返す言葉がありません……」

侑人の言葉を聞いたハインリヒ王達は一様にうなだれる。

大義名分がどちらにあるのかを改めて自覚させられ、先ほどの雰囲気は霧散している。しかし侑人はこの状況を満足そうな顔をして見つめている。

この状況を待っていた。

侑人はそんな思いを胸に秘めながらハインリヒ王に向かってある提案をする。全ての行動はこの一瞬の為だけにあったと言っても過言では無い。

「今回の戦争を機会にして、過去を清算しませんか？」

「清算といいますと？」

「グランツ帝国と和平を結ぶのです」

「そんな事をしたら法王猊下から破門されてしまいます！」

ハルモ教法王はグランツ帝国のフリードリヒ皇帝を、ハルモ教に対する反逆者と認定している。反逆者と手を取り合った等という事が法王猊下に知られたら、ハインリヒ王は間違いなくハルモ教から破門される。

そんな事態になれば、ハルモ教の信者である国民の信頼が一気に失墜し、ハインリヒ王の政治的地位が根本から脅かされる事になるのだ。

ハインリヒ王はハルモ教から破門された後の事を想像して青い顔になる。侑人はそんなハインリヒ王に対して少しだけ意地が悪い顔をする。

「その事も踏まえてハインリヒ王にお話があります。人払いを頼めますか？」

「わ……判りました」

人払いを済ませた本陣の中で、侑人とハインリヒ王は真剣な表情をしながら話し合うのであった。

「たった一人にここまで良い様にあしらわれてしまうとは……」

目の前にそびえ立つ防壁を見ながら、フリードリヒ皇帝は力無く呟く。もはや今回の戦争の勝敗は決していると言っても過言ではない。今攻め込まれたらグランツ帝国軍は間違いなく瓦解する。

各軍を率いる将軍達には早急に兵を建て直せと指示を出してはあるが、皇帝の耳に入ってくる報告の数々は、これからの厳しい戦いを予感させていた。

「一度本国に戻って改めて対策を練るべきだな」

撤退を視野に入れ始めたフリードリヒ皇帝の脳裏に、捕虜として捕らえられたイーヴォ将軍の姿が一瞬だけ過ぎるが、フリードリヒ皇帝はその考えを振り払った。

一人を救う為にグランツ帝国軍全体を危険に晒すわけには行かな

い。長年付き従ってくれた忠臣ではあるが、グランツ帝国軍全体を生かすためには切り捨てるしかない。

フリードリヒ皇帝がグランツ帝国皇帝として、非常な判断をしようとしていた時、突如防壁の門が音を立てて開いた。

「とうとう敵の総攻撃が始まるか……」

自分ならばこの好機を逃がしはしない。敵軍を徹底的に叩き、あわよくば総大将を拘束、最悪でも殺害するように指示する。まさに絶体絶命の危機である。

しかしそんなフリードリヒ皇帝の予感を大きく裏切る光景が目の前に広がる。門から出てきたのは武器を携帯していない数名の騎士だけである。

「まさか降伏勧告の使者ではあるまいな？」

黒髪の勇者に良い様にあしらわれたとは言え、グランツ帝国正規軍十八万人はほぼ無傷である。無礼な振る舞いをして来るのなら、それを逆手にとって兵士の士気を上げるまで。

フリードリヒ皇帝はそんな事を考えながら、グランツ帝国軍に近づいてくる騎士の一団を見つめている。

やがて百メートルほどの距離まで近づいてきた騎士は、おもむろに馬から下りるとグランツ帝国軍に向かって深く一礼し言葉を発した。

「グランツ帝国皇帝、フリードリヒ・ラスペ殿にお願いがあって参上仕りました」

騎士の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝の背中に電撃が走る。ハルモ教にとってフリードリヒ皇帝は反逆者であり、皇帝という立場を認めていないはずなのだ。

しかしこの騎士ははっきりとグランツ帝国皇帝、フリードリヒ・ラスペ殿と言い切った。黒髪の勇者が光臨した事により、ハルモ教法王庁教圏国家群の中で何か変化があったのかもしれない。

フリードリヒ皇帝は大きな時代の流れを肌で感じ始めていた。

グランツ帝国軍に王国連合軍側から使者が送られた二時間後、侑人達が築いた防壁とグランツ帝国軍十八万人が陣取っている場所の中間地点に天幕が張られ、天幕の中には数名の者達の影がチラチラと見えている。

天幕の中にはプロセン王国の国王ハインリヒ・フォン・サヴォイアと黒髪の勇者である侑人、グランツ帝国皇帝フリードリヒ・ラスペの三人の姿しか無い。

アンナは例のごとく侑人の中に居るので実際には四人なのだが、その事はハインリヒ王にも知らされておらず、侑人以外には内緒にされている。面白そうだから付いて行くと言い出したアンナの事を、周囲にどう説明して良いのか侑人には判らなかった。

天幕を中心とした半径百メートル圏内には、誰も近づいてはならないと双方で取り決めが成され、双方の陣営はその取り決めを忠実に守っていた。

今日この日は、二十年に渡り戦争状態であったプロセン王国とグランツ帝国の支配者が、黒髪の勇者立会いの下、初めて直接顔を合

わせた歴史的な日となった。
　実際にはそれに加えてクーラント魔国の姫君も非公式ながら参加しており、セルビナ王国国王から全権を委任されている侑人を加えると、四国の支配者階級が一同に顔を揃えた事になる。

「我が軍の将軍を捕虜にし、それを返す事も無く話し合いの席に着けと言うとは……黒髪の勇者殿もなかなか人が悪いですな」
「本来であれば話し合いの場に赴くのと同時に開放する予定でしたが、治療が長引き間に合いませんでした。こちらの不手際をお詫び致します」

　フリードリヒ皇帝の先制口撃をさらりとかわす侑人。皇帝はそんな侑人の応対を受けても顔色一つ変えない。

「戦闘開始前にグランツ帝国に対して敵対するつもりがないと仰っていたようだが、王国連合軍に加担し、あのような堅牢な防壁を築き上げる事は、敵対行動には入らないとお考えになっているのでしょうか？」
「私は確かに防壁を築きましたが、此度の戦争では一回も使っておりません。それに王国連合軍に加担したのもプロセン王国が攻め込まれており、王国の民に犠牲が出るのを防ぎたかったからだけです」

「という事は、グランツ帝国が虐げられる立場になるなら、我が国の為に戦って下さると？」
「この話し合いの場を設けたのが何よりの証明かと思います」

「それは良い事を聞いた。今日からは枕を高くして寝ることが出来ます」
「マグナマテル全域が平和になり、民の生活が真の安定を得られるまで、安眠は訪れないと思いますよ」

フリードリヒ皇帝と侑人はここまで言葉を交わすと、お互いの目を静かに見つめ合う。お互いを探り合うような言葉の応酬から一転して、天幕の中は沈黙に包まれていた。

二人の言葉の応酬に圧倒されたハインリヒ王は、固唾を飲んで二人の姿を見つめている。こんな雰囲気で上手く話し合いになるのか心配するハインリヒ王の目の前で、突如事態は動き始める。

今まで仏頂面だったフリードリヒ皇帝は突如笑顔になる。

「腹の探りあいは止めましょう……しかしその若さで素晴らしい胆力ですな。感服致しました」

「いえいえ内心はかなり緊張していて、背中は冷や汗で冷たくなっていますよ」

侑人もフリードリヒ皇帝に向かって笑顔で返事をするのであった。

「単刀直入に言います。プロセン王国と相互不可侵条約を結んで頂けませんか？　ただしこちらもハルモ教会との絡みがありますので、あくまで内々にという形ですが」

「条件は？」

「王国連合側は今回の戦闘で得た捕虜を無条件で解放します。それと合わせてプロセン王国に滞在するハルモ教法王庁教圏国家群の援軍を本国に帰還させます」

「我が国に対する条件は？」

「プロセン王国内に侵攻しているグランツ帝国軍の即時撤退と、今後プロセン王国に対する戦闘行為とそれに伴う戦闘準備を行わない事だけです」
「もしそれを破った場合は？」
「再び戦場で私と出会うだけです」
「ふむ……」

フリードリヒ皇帝は暫く考え込む。侑人が出した条件はグランツ帝国にとって不利益になる事は何も無い。今回の戦争を続けても敗戦する事が目に見えており、無傷で撤退できるこの状況は渡りに船である。

しかも相互不可侵条約を破った際のデメリットも少ない。再びハルモ教法王庁教圏国家群と黒髪の勇者を敵に回すだけであり、そうなった場合の状況は今と全く変わらないのである。

あまりにも話が出来すぎている。フリードリヒ皇帝は侑人の言葉を少しだけ訝しがる。そんな皇帝に向かって、侑人はある言葉を伝える。

「ちなみに私と志を同じにする者は、ハルモ教法王庁教圏国家群以外にも居ます。フリードリヒ様が良くご存知の国かもしれませんね」
「まさか……クーラント魔国？」

その言葉に侑人は返事をしない。真剣な目で静かにフリードリヒ皇帝を見つめているだけだった。

相互不可侵条約を締結すれば条約締結国と他国が戦争になった際に、交戦相手国を支援する事も間接的な侵略行為として禁じられる。グランツ帝国とプロセン王国が相互不可侵条約を締結すればこの

図式が当てはまり、仮にグランツ帝国とクーラント魔国が戦争を再開しても、プロセン王国がグランツ帝国を攻める事とクーラント魔国を支援する事は禁じられる。

八百年に渡る争いを演じてきた、ハルモ教法王庁教圏国家群とクーラント魔国が手を組む事など想像も付かないが、黒髪の勇者が間に挟まるのなら話は変わってくる。

今回の戦況を一人でひっくり返した技量を持つ黒髪の勇者が橋渡しとなれば、全く可能性が無い訳ではない。クーラント魔国内に協力者が居るならその可能性も大幅に上がってくるはずである。

黒髪の勇者はグランツ帝国を滅ぼそうと考えていないそうだが、ハルモ教法王庁教圏国家群とクーラント魔国を利用して、この地域の軍事バランスを保ち平和な状況を作り上げる事位なら平気で仕掛けてきそうだ。

二つの勢力に挟まれてしまえば、いくら百戦錬磨のグランツ帝国軍とはいえ為す術が無い。和平交渉の席に着かないのであれば実力を行使する。フリードリヒ皇帝には侑人の目がそう語っているように見えた。

フリードリヒ皇帝は暫く侑人の目を見つめていたが、やがてポツリと侑人に向かって呟いた。

「黒髪の勇者殿は本気で手段を選ばず、マグナマテル全体の平和をその手で作り上げる気なのですね」

「それが私の存在意義ですので」

フリードリヒ皇帝の呟きに対する侑人の返事は力強かった。

「グランツ帝国は黒髪の勇者殿の提案を受け入れ、プロセン王国と

の相互不可侵条約締結に同意する。書類は我が署名を入れて後日ハインリヒ王の下に届けさせる。これで宜しいかな?」

「プロセン王国側としては何の問題もありません」

フリードリヒ皇帝とハインリヒ王はそう言葉を交わすと、お互いに歩み寄りがっちりと握手をする。侑人はそんな姿を嬉しそうに見つめていた。

やがてフリードリヒ皇帝は踵を返し天幕から外に出ようとしたが、外に出る直前に突然振り返り侑人の目を真っ直ぐに見つめる。その眼光は鋭い。

「グランツ帝国には敵が多く存在します。プロセン王国に対しては黒髪の勇者殿と交わした約束を守り、我が国から敵対行動を起こすような真似はしません。しかし我が国に降りかかる火の粉は全力をもってこれからも払いのけます。それで宜しいかな?」

「グランツ帝国に降りかかる火の粉を無くす事も我が使命です。何時までにとは言えませんが、いつか必ず無くして見せます」

侑人もフリードリヒ皇帝の目を見つめ返す。

侑人の真剣な姿を確認したフリードリヒ皇帝は満足そうに微笑むと、そのまま踵を返してグランツ帝国軍の元へと帰って行った。

火の月の第六週の四日。プロセン王国とグランツ帝国の間で停戦協定が締結され、プロセン王国には数ヶ月ぶりに平和な時間が戻ってきた。

表向きには一時的な停戦協定の締結であったが、実際には相互不可侵条約の締結が成され、二十年に及ぶ戦争が事実上終結した。

侑人はフリードリヒ皇帝を話し合いの席に着かせ、プロセン王国とグランツ帝国の間で相互不可侵条約を締結させる事により、此度の戦争を終結させるという最終目的を達成した。

グランツ帝国軍の戦意を根こそぎ奪い、戦争継続を事実上不可能な状態に持っていったのも、全てはこの為の行動であった。

それと合わせてフリードリヒ皇帝の事を、グランツ帝国皇帝、フリードリヒ・ラスペ殿と呼ぶように指示したのも侑人の策の内である。

カルロス王からフリードリヒ皇帝の戦争目的を聞いていた侑人は、こちら側が譲歩する姿勢を見せる事によって皇帝のプライドをくすぐり、交渉の席に着きやすいように誘導したのだ。

正直侑人もここまで上手く行くとは思っていなかった。しかし数々の幸運が侑人の味方となり、状況を有利に進めて行った。

ハインリヒ王が今回の戦争の全権を侑人に委任した事と、フリードリヒ皇帝が侑人の言動を深読みしすぎた事も追い風となり、一兵の損失も無く策は成功した。

ハルモ教法王庁教圏国家群から派遣された援軍とグランツ帝国軍は、それぞれ家族の待つ祖国に向かって進軍して行く。

本来であれば侑人達も数週間ぶりにセルビナ王国へ戻る事になるのだが、ある事がきっかけとなり、侑人達の帰還は大幅に遅れる事となる。

第３０話：プロセン王国防衛戦【後編】（後書き）

プロセン王国防衛戦は終結しました。次回から暫くはマッタリと進行します。

第３１話：心の絆

プロセン王国とグランツ帝国の間で停戦協定が締結された数日後。セルビナ王国の王都にある閑静な屋敷の一室では、マリアが暇そうに外の景色を眺めている。

屋敷の中にはマリアの他に数名の使用人が居る。使用人達は各々に与えられた仕事をテキパキとこなしていた。

「ふぅ……」

当初ティルト村から引越しして来たマリア達は、首都セルビナに決まった住居を持っていなかった。今までは王城の五階にある客室を自室としてあてがわれ、そこで生活をしていたのだ。

そんなマリア達の為にアルクィンが新しい住居を用意していたのだが、間の悪いことに侑人達がプロセン王国に向けて出陣した翌日にようやく屋敷の用意が整ったのである。

マリアとヨーゼフは、侑人達が帰国してから引っ越しをしようと考えていた。

新居への引っ越しは家族全員で。そんなささやかなマリアの願いをヨーゼフも了承し、引越し時期をアルクィンに伝えたのだが、結果的にはその願いは叶わなかった。

ヨーゼフからその申し出を受けたアルクィンの、引っ越しが遅れると少し具合が悪いと言う言葉に従って、我を引っ込めて生活の拠点を王城から移した。内心侑人達に悪いと考えてはいたがこればか

りは仕方が無い。

「うわぁ……」

「これはまた壮観な光景じゃのぅ……」

そしてマリア達の目の前に予想外の光景が広がる。

一家族どころか一族全員が住めると思える大きさを誇る屋敷が目の前にそびえ立っている。趣のある装飾が施された門扉から両開きの大きな玄関扉まではかなり距離があり、マリアが全力で走っても二十秒以上は掛かるように思える。

そして玄関前の石畳の上には赤い絨毯が敷かれ、その両側には執事らしき格好をした男性と多数のメイド姿の女性、その他庭士や御者と思わしき風貌をした者達が整然と並んでいた。

「「「お帰りなさいませ」」」

「なんと……」

「ずいぶんと大げさな出迎えじゃのぅ……」

「お気に召して貰えましたか？」

二人はアルクィンが困ると言った真意を理解する。

整然と並んだ使用人達が出迎える姿を見た時に全てを悟る。アルクィンは屋敷だけでなく使用人達の手配も既に済ませていたのだ。

「これからも……ずっとこのお屋敷で仕事をして貰わないと駄目？」

「そうですね。何か不手際がありましたら私に言って下さい。大至急替わりの人材を手配致しますから」

今まで自分で家事をこなしてきたマリアは分不相応な待遇を受けて恐縮し、恐る恐るアルクィンにそんな事を訪ねるが、アルクィンの返答はマリアの真意とは違っていた。その顔は不自由な思いは決

してさせませんと言外に語っている様だった。
もし仮にマリアが自分で家事をやると言い出せば、きっとアルクィンはマリアの気持ちを汲んでくれる。しかしそうなれば目の前に居るこの人達の仕事が奪われる事になる。そう理解したマリアは自分の気持ちを引っ込める事にした。

「ユート達早く帰ってこないかなぁ……」

マリアは窓際で外の景色をぼんやりと眺めながらそんな言葉を呟く。マリアはこの屋敷に引っ越してからの侑人達の居ない生活を思い返している。
異世界に召喚された侑人と出会ってからの数ヶ月は、慌しくもあったがとても楽しかった。今の生活は色々な日常の雑務から開放されてはいるが、マリアにとっては何か物足りない生活だった。

今まで自分でこなしてきた家事は、使用人達の仕事としてマリアの手を離れている。使用人達の仕事ぶりには非の打ち所が無く、自分の出番は全く無い。
この屋敷に引っ越してきた最初の頃は、自分で何か出来る事がないか屋敷内をうろうろしながら探していたが全く見つける事が出来なかった。それどころか仕事の邪魔をしてしまう事を理解したのですぐに諦めた。

使用人達はマリアの姿を見かけると、どんなに忙しそうでも必ず手を止めて、深々とお辞儀をしながら挨拶をしてくれる。マリアを自分達が仕える主人として認め、丁寧に対応して来るのであった。
ちなみに使用人達はマリアの事をお嬢様と呼ぶ。ヨーゼフの事は司祭様と呼ぶのでそのままなのだが、今までお嬢様などと呼ばれた事の無いマリアは、最初自分が呼ばれていると気付かなかった位である。マリアはお嬢様と呼ばれる事に抵抗を感じ、呼び捨てで良い

と何度も言っているのだが、使用人達は首を縦に振らなかった。

「ユート達早く帰ってこないかなぁ……」

窓の外を見つめながら今日何度目かの同じ呟きをするマリアの目に、旅装束を纏った一人の騎兵が大急ぎで王城に向かって行く姿が映る。

騎兵の姿を見たマリアは、自分の全身を何とも言い様のない予感が駆け巡るのを感じ、大慌てで部屋を飛び出していった。

火の月の第八週の二日。プロセン王国とグランツ帝国の間で停戦協定が締結されてから約二週間の日時が経っていたが、侑人達はいまだプロセン王国に滞在していた。

セルビナ王国から援軍として来ていた軍勢は既に帰国している。本来であれば侑人達も一緒に帰国する手はずだったが、予想外の事態が侑人の身に降りかかった。

両国の間で停戦協定が結ばれた直後、侑人は意識を失って倒れたのだ。

ハインリヒ王の命令で侑人の身柄は即座にプロセン王都に戻され、王家の掛かり付けの医者が侑人の容態を確認した。

医者は極度の精神的な疲れと魔力の使い過ぎによる昏倒という診断を下す。暫くは安静にした方が良いという医者の言葉に従って、侑人のセルビナ王国帰還の延期は侑人の意識が戻らないうちに決定された。

プロセン王都に着いた翌日には侑人の意識は戻り、侑人自身はそのまま帰国の段取りを取ろうとしたのだが、ハインリヒ王の強い勧めもありその好意に甘える事にした。
侑人はそのままプロセン王国で療養生活を送っていたのである。

侑人はプロセン王都にある王城の客室のベッドで寝息を立てている。
今日の気候は真夏の火の月にしては過ごしやすく、客室の窓からは爽やかな風が吹き込み侑人の頬を優しく撫でている。
夏の太陽の日差しは薄い雲によって和らげられ、吹き付ける風と相まってやがて訪れる秋の気配をそこはかとなく感じさせていた。

アンナはガイウスを引き連れてプロセン王国の城下町を散策している。療養生活を送る侑人を刺激しないように、ここ数日は面会時間に顔を合わせる以外は侑人と離れて行動していた。
クーラント魔国の姫であるアンナは家事が全く出来ず、侑人の看病をしようにも逆にとどめを刺してしまう可能性が高い為、自主的に侑人と距離を置いていたのである。

――――侑人は夢を見ていた。

侑人が見ている夢の中にはマリアの姿がある。夢の中で侑人とマリアは、ティルト村の家のリビングで笑いながら会話をしている。
一月とちょっと前にはその光景は当たり前のものであったが、お互いがセルビナ王国に仕官してからはそんな時間もかなり少なくなっていた。

侑人は自分が夢を見ているという事に気がついている。こういうのを明晰夢（めいせきむ）と言うのだよな……などと冷静に考えている。

夢の中の侑人とマリアはとても幸せそうである。自分達の姿を客観的に見ながら、侑人は異世界に召喚された後の事を色々思い返していた。

この世界に召喚されてからいろいろな事があった。楽しい事や辛い事、嬉しい事や悲しい事、今までの思い出が走馬灯のように流れる。

そして侑人は一つの感情に気が付く。

自分が精神的に弱っている時に常に支えてくれたマリアの存在は、自分が思っている以上に自分自身の中で大きくなっていたのである。

異世界にいきなり召喚されて右往左往していた自分が衣食住を得られたのは、マリアと出会えた事がきっかけだった。ティルト村を救う為に自分の正体をばらしてしまうリスクを背負って行動したのも、マリアの存在が大きかったからだ。

この世界に来て初めて本気で怒ったのは、マリアの涙を見たのがきっかけだった。満天の星空の下で、元の世界とこの世界の狭間で揺れる葛藤を始めて吐露したのも、マリアが話し相手だったからだ。

アンナやガイウス、アルクィンやヨーゼフ。侑人を取り囲む一芸に秀でた存在の中に埋もれて今まで目立たなかったが、常に一歩引いて陰から侑人を支えてくれていたマリアの存在のありがたさを、マリアと離れてみてあらためて実感した瞬間である。

朴念仁の侑人には自分が抱いているこの感情が何なのか判らない。ただマリアが他の誰よりも大切な存在であるという事を強く認識したのであった。

「う……うーん……」

まどろんでいた侑人の意識が徐々に覚醒していく。モノトーンの

夢の世界から鮮やかな色を纏った現実の世界へと意識は徐々に浮かび上がっていく。

そんな中、侑人は額に何か冷たい感触が触れているのに気が付いた。どこか懐かしいその感触はとても心地よく、侑人の心を穏やかにしてくれる。

「何だろこれ……気持ち良い」

「そう……良かった」

侑人の耳に聞きなれた声が聞こえる。

その心地よい声は何処までも優しく侑人を包み込んでくれるような雰囲気を纏っている。少し離れてみて改めて判った大切な人の気配だ。

「夢を見ていました……」

「どんな夢を見ていたのかしら？」

「自分にとって大切な事を思い出させてくれた夢です」

「そうなんだ……」

侑人はそんな事を話し掛けながらうっすらと目を開ける。侑人の目にはまさに夢にまで見た、マリアの優しい笑顔が飛び込んでくるのであった。

侑人が倒れたという一報は、数日の内に早馬によってカルロス王に伝えられた。

その報告を受けたカルロス王は、マリアとヨーゼフにその知らせ

を伝えるべく伝令兵を呼び出したが、呼び出した伝令兵より早くマリアが姿を現したので、その時はたいそう驚いていた。

カルロス王は侑人が倒れた事を知らされたマリアが狼狽する事を多少恐れたが、それは杞憂に終わった。

侑人が倒れたという事を聞いたマリアの表情は、既に何かを悟っていたようであり、カルロス王に向かって真剣な表情でプロセン王国行きを直訴してきただけだった。

「まさか目が覚めたらマリアが側にいるとは……かなりびっくりしました」

「びっくりしたのはこっちの方だよ。無理をしないようにとあれほど言ったのに、倒れるまで無理しちゃってさ」

この国に居ないはずのマリアが予想外に登場したので、寝起きの侑人はかなり驚いていたが、今ではもうすっかりいつもの調子に戻っている。

それに対してマリアは少し怒ったような口調で話しているが、終始ご機嫌な様子でありその目は笑っていた。

「とにかく約束を破ったのだから、何か罰を受けてもらおうかな」

「いや……。えーと……」

「何か言い訳でも？」

「ナンデモアリマセン」

侑人は久々のマリアと二人きりの穏やかな時間を楽しんでいる。

マリアも久々に侑人と会話が出来て楽しそうにしていた。

「王様にプロセン王国行きをお願いしたら、王様専用の馬車を貸し

てくれてね、ここまで来るのに一週間しか掛からなかったんだよ」
「カルロス王もずいぶんと思い切りましたね」

マリアのお願いを聞いたカルロス王の行動は早かった。
その場で王族専用の馬車をマリアに貸し与える決断を下し、マリアの護衛として近衛兵団一個小隊を帯同させ、プロセン王国へ向けてその日のうちに出発させた。
プロセン王国の衛兵達は、凄まじい勢いで入国してきたセルビナ王国王族専用馬車の登場に度肝を抜かれた。事前にセルビナ王国の王族が入国してくるという報告が無かった為、王族専用馬車を出迎えた衛兵達は大混乱に陥った。

馬車の中から出てきたのが従者服姿のマリアであった事も混乱に拍車を掛けた。国賓として扱って良いのか通常の入国対応をすれば良いのか、現場の人間では判断できなかったのである。
たまたま暇を持て余して城内を散歩していたアンナがそれに気が付き、間を取り成した事により丸く収まったが、それが無ければマリアは入国の為に半日は待たされたはずである。

「あーお前達、マリアに対してはユート以上に扱った方が良いと思うぞ」
「それはどういった事なのでしょうか？」

「マリアはユートのこれじゃぞ……普段は温厚なユートじゃがマリアを泣かすと本気で切れる。その怒りは凄まじくわらわでも止める自信が無いんじゃよ」
「えっ！？　それは本当ですか！？」

ちなみにアンナは衛兵達に向かって、マリアが侑人の婚約者であると吹き込んでその場を収めた。その為マリアは最重要人物として

通常の国賓以上の扱いを受け、最大限の敬意を払われて侑人の部屋まで案内されて来たのだ。

黒髪の勇者の婚約者が遠路はるばるセルビナ王国から訪れて来た。この噂は瞬く間にプロセン王都を駆け巡ったが、マリアはその事を知らない。

「何だか良く判らないけど、もの凄く丁重に扱われている気がする」
「この国には他国の人を大切にする気風があるのかもしれませんね」

セルビナ王国に引き続いて、プロセン王国でも公認の仲と認められてしまった二人は、そんな周囲の状況に気が付かず的外れな会話をしていた。

「あーそうそう。おじいちゃんからユート宛の手紙を預かって来たんだよ」
「わざわざありがとうございます」

マリアはヨーゼフから預かってきた手紙を侑人に渡す。

侑人は受け取った手紙をじっと見つめる。封筒の所々に跳ねたインクの跡が残っており、慌てて手紙をしたためるヨーゼフの姿が思い起こされる。

いつも侑人の事を気に掛けてくれているヨーゼフの心中を察すると、さすがに申し訳ない気持ちで一杯になる。侑人は少し自己嫌悪した。

「ヨーゼフさんにもご心配をお掛けしてしまいましたね」
「かなり心配していたから、今度元気な姿を見せてあげてね」

マリアは別に持ってきた果物籠の中から林檎を取り出して皮を剥き始める。慣れた手つきでスルスルと皮を向いていくマリアの姿を、

侑人は何となく眺めていた。
林檎の三分の一ほどまで皮を剥いたマリアは手を止め、侑人の顔を不思議そうに見つめる。小首を傾げて少しだけ苦笑いしていた。

「手紙読まないの？」
「おっと……読ませて頂きますね」

侑人は少し慌てて手紙の封を開ける。そんな侑人の姿をマリアは笑いながら見ている。
ヨーゼフの手紙には侑人を心配する数々の言葉と、ヨーゼフの近況が書かれていた。ヨーゼフは司祭同士の横の繋がりを密にする為に、積極的に行動を起こしている様だった。

「私も寝込んでいる場合ではありませんね……」

侑人は手紙から窓の外に視線を移しそんな事を呟く。

二週間ほど療養生活を送ったおかげで魔力もほぼ戻り、体調も万全とは言えないがかなり良くなっている。のんびりと過ごす生活も悪くは無かったが、そろそろ本格的に行動を開始しないと、一時的に平和になったせっかくのチャンスを無駄にするかもしれない。
そんな思いが侑人の中に沸きあがる。マリアと再会し精神的に癒された事と、セルビナの地で自分の使命と向き合うヨーゼフの姿に感化された事で、侑人の気力が戻ってきたのであった。

「ウサギさん完成ー！　はいっユート」

侑人はそんなマリアの声を聞いて我に返った。マリアの方を向いた侑人の目には、フォークに刺さっているウサギの形にむかれた林檎が目に映る

「マ、マリア？」
「あーん」

焦る侑人の姿を全く気にせず、フォークに刺した林檎を食べさせようとするマリア。

「えーと……」
「早くー。手が疲れるー」

真っ赤になって固まる侑人に対して、早く早くと急かすマリア。
マリアの目はいたずらっ子のようになっている。

「マリア……。私の事をからかっていますね？」
「何の事だか分からないなー」

マリアはにっこりと笑いながらとぼけている。そんなマリアの姿を見た侑人の中で何かが弾け、勢いよくウサギ型に切られた林檎にかぶりつく。

「あむ……おいしいです」
「あっ！　そっそう！　良かったよ」

本当に侑人が食べると思っていなかったマリアが今度は慌てる。
マリアは顔を真っ赤にしてあわあわとしている。そんな姿を見ていた侑人は逆に落ち着き、仕返しとばかりにマリアをからかい始める。

「マリアが食べろって言ったのに何を慌てているのですか？」
「うっ……」

「マリアがむいてくれた林檎はおいしいですねぇ」
「あう……」

「たまにはこうやってマリアに食べさせて貰うのも良いですね」
「……」

侑人の連続口撃を受けたマリアは、真っ赤な顔になり下を向いてしまった。小刻みに体は震え何やら小声でブツブツ呟いている。
そんなマリアの姿を見た侑人は、少しやりすぎたかなと考え始めたが、それに気が付くのが少し遅れ後悔する事となる。

「ユート……」
「はっはい！　ナンデショウ」

ゆっくりと顔を上げたマリアは笑顔で侑人を見つめている。しかしマリアの笑顔を見た侑人の背には冷たいものが流れる。
マリアはゆっくりとした動作で侑人に近付いていく。得体の知れないプレッシャーを感じて動けない侑人の視界を、マリアの怖い笑顔が埋めていく。

このままでは殺られる。
身の危険を感じた侑人は思わず反射的に目を閉じる。するとそんな侑人の姿を見たマリアが今度は固まった。

――――二人の間に奇妙な沈黙が流れる。

お互いの顔は二十センチほどの近距離で固定され、侑人とマリアの顔は真っ赤になっている。お互いに意図した訳ではないが、気が付いたらこんな体勢になっていた。

どちらかがもう少し積極的であったのなら、次の展開が待っていたかもしれない。しかし侑人とマリアは二人ともかなり奥手であり、お互いに動けないまま時間だけが経過していった。

「おや？　邪魔したかの？」

事態を動かしたのは見知った人物が発した声だった。

「えっ？」
「うわっ！」

アンナの声を合図にして二人は弾かれた様に距離を取る。アンナはそんな二人の姿をニヤニヤしながら見ている。

「姉御……趣味が悪いですぜ」

入り口のドアの側ではガイウスがやれやれといった仕草をしている。

「ガイウス」
「なんすか旦那？」

「何時から見ていたのですか？」
「多分五分前位からじゃないですかねぇ。私は止めたんすよ……」

そんなガイウスの言葉を聞いた侑人はガックリとうなだれる。侑人達がこのやり取りをしている間、マリアは終始真っ赤な顔で俯いていた。

第３１話：心の絆（後書き）

本当に大事な事は、そこから少し離れてみてやっと気が付きます。

第３２話：まだ見ぬ大地へ（前書き）

章を分けることはしませんが、ここから第二章的な位置付けです。

第３２話：まだ見ぬ大地へ

土の月の第一週の二日。侑人とマリア、アンナとガイウスの四人は馬車に乗り、とある場所を目的地に定めてのんびりと進んでいる。

「本当に良かったのかの？」

しかしアンナは複雑そうな顔をしている。

恐る恐るといった様子で馬車の隅の方で横になり休憩している侑人を見つめ、侑人の返答を静かに待っている。普段の快活な雰囲気とは程遠い。

「何がですか？」

侑人は少し顔を上げアンナを見つめながら少し首を傾げる。

そんな侑人の姿を見たアンナは少し驚く。人一倍物分りが良い侑人がそんな返答をするとは思ってもいなかったのだ。

「何がって……わらわに付き合ってクーラント魔国へ行く事に対してじゃ」

「私とアンナは五キロほどしか離れられませんし、アンナが行くなら私も行かないと駄目じゃないですか？」

「わらわが聞きたい事はそういう事ではないのだがの……」

自分の質問の意図と全く違う答えを返されたアンナは、そんな事をぼそっと呟く。

そんなアンナの呟きを聞いたマリアは、馬車の窓から外の景色を眺めたままの姿勢で、二人の会話に混ざってくる。

「まあまあ良いじゃない。旅行だと思えばさ」

「そうですよ。せっかくだからアンナも楽しまないと損ですよ」

「この似たもの夫婦が……」

「「何か言いました？（言った？）」」

「独り言じゃ。気にするな」

二人から同時に突っ込みを受けたアンナは、逃げるように御者席にいるガイウスの所に移動する。そんなアンナの後ろ姿を見つめている二人は小さな声で呟く。

「アンナの言いたい事は良く分かっていますけど……」

「アンナの気持ちも良く分かるからね……」

ほぼ同時に呟いた二人は、微笑みながらアンナの後ろ姿を見つめ続けている。二人の脳裏には四日前の出来事が思い返されていた。

マリアがプロセン王国に到着した翌日。侑人が療養生活を送っていた部屋に、何時に無く真剣な表情をしたアンナがガイウスを引き連れて入室してきた。

部屋の中に侑人とマリアしか居ない事を確認したアンナは、少し小さな、しかし決意がこもった様な声で侑人達に話し掛けた。

「ユートにお願いがある」
「どうしたのですか？」

「年が変わる前にクーラント魔国に一度帰っておきたいのじゃ」
「クーラント魔国にですか……」

侑人は少し考え込む。
そんな侑人の姿を見ていたガイウスが、もう見ていられないといった様子で横から口を出してくる。ガイウスにしては珍しい姿だ。

「年が変わると戦争が始まるかもしれませんし、戻るなら今がチャンスなんすよ」
「たしかグランツ帝国とクーラント魔国の間で結ばれた停戦協定の期限は、年内一杯でしたね」

アンナとガイウスは同じリズムで頷き、そんな二人の微笑ましい姿を見た侑人は思わず笑顔になる。何時の間にか二人は良いコンビになっていた。

「わかりました。カルロス王には私から書状をしたためておきましょう」
「良いのかユート！？」
「良かったですね姉御！」

アンナとガイウスは手を取り合って喜んでいる。アンナの顔は今まで侑人が見た事が無いほどの喜びに満ち溢れていた。
数ヶ月もの間、異国の地で過ごしているアンナの寂しい気持ちは侑人には良く分かる。異世界から召喚されてきた侑人にとって、生まれ故郷とは特別な思いが込められる場所だという事が痛いほど理

解できるのである。

黒髪の勇者である侑人が、ハルモ教法王庁教圏国家群と敵対しているクーラント魔国に赴く事の危険性は十分に理解している。

しかしそれを分かった上でも、アンナの為に何かしてあげたいと強く思う侑人であった。

アンナとガイウスが喜んでいる姿を笑顔で見つめている侑人は、右腕を突かれている感触に気が付き、そちらに顔を向けた。

侑人の右腕を突いていたのはマリアであり、マリアは侑人を上目使いで見つめている。侑人はこの後のマリアが何を言い出すのか察し、ここに居ないある人物の顔を思い出す。とりあえず心の中で先に謝っておく。

「私も付いていって良い？」

「……分かりました。ヨーゼフさん宛てにも書状をしたためます。ただし危険な旅になる可能性が高いので、私の側から離れないようにして下さいね」

止めても無駄だと何となく悟った侑人は、黒いオーラを放つヨーゼフの姿を想像しつつも、マリアの申し出に対して許可を出す。

旅の道中よりも、セルビナ王国に戻った後の方が危険に満ち溢れた毎日が送れそうだ。侑人はそんな事を考えて少しだけ憂鬱になった。

「やったー！　ありがとうユート！」

「ちょっ！　マリア落ち着いて！」

侑人の許可が貰えたマリアは喜びのあまり侑人の首にしがみ付く。

侑人は慌ててマリアを引き剥がそうとしたが既に色々と手遅れであ

る。

「じー」
「じとー」

侑人とマリアの姿を、アンナとガイウスはご丁寧に口で効果音まで付けてニヤニヤしながら見つめている。
最近この二人の前で失態ばかり演じている気がする。というか間違いなく演じている。穴があったら入りたい気分である。

「えーと……ごほん！」
「あっ！」

侑人はわざとらしく咳払いをしてマリアに周りの状況を伝え、我に返ったマリアは慌てて侑人から離れて体裁を取り繕う。
いまさら感が侑人達の周辺を漂うが、そんな雰囲気を払拭するかのように侑人は皆に向かって話し掛ける。

「とりあえず皆に相談があります」
「相談とは一体なんじゃ？」
「私に何か出来る事があるのかな？」
「頭悪いっすよ俺」

侑人の言葉に対して三人がすぐに反応をする。侑人は三人の顔を順番に、少し真剣な顔で見ながらその相談内容を伝える。

「クーラント魔国に行く事は決定事項として捉えて貰って構いません。しかし私の今の立場的に、他国へ赴くには対外的な理由が必要です。一緒に理由を考えてもらえませんか？」

三人は真剣な顔をしてあれこれ話し合い始める。その姿を見た侑人は『上手くごまかせた』と内心でホッとするのであった。

四人で話し合った結果表向きの理由は、ハルモ教法王庁教圏国家群と国交が無いクーラント魔国の偵察と、クーラント魔国にハルモ教の布教を行う為に、黒髪の勇者自らが赴くという理由付けにする事が決まった。

多少無理がある理由付けだが、一時的に戦争が収まっている今を逃すと次の機会は訪れないという事で押し通す事にした。

カルロス王とアルクィンそしてヨーゼフには、侑人が書状で真実を伝える事にし、三人に宛てた書状には、それとなくフォローをして欲しいという内容も書いておいた。

侑人は厳重に封蝋をした書状を近衛兵団の隊長に預ける際に、セルビナ王国の今後が左右される内容である為、早急に届けて欲しいと念押しした。

「近衛兵団の活躍を今後も期待しております。書状の件もお願いしますね」

「セルビナ王国に着いたら真っ先に国王にお届けいたします！」

クーラント魔国に向けて旅立つ決意をした侑人は、マリアをプロセン王国まで護衛してくれた近衛兵団一個小隊を、一足先にセルビナ王国へと帰国させる事に決めた。

カルロス王や重臣達を護衛する任務を負っている近衛兵団を、いつまでも他国に滞在させる訳にはいかないと侑人は判断したのである。

「此方の返却もお願いします」

「責任を持ってその任も承ります！」

近衛兵団の帰国に合わせて、カルロス王から借りた王族専用の馬車も返却した。王族専用の馬車をいつまでも借りているのは、侑人の立場上色々と都合が悪かった。

ただでさえ色々と目立っている侑人達一行が、セルビナ王国王族専用馬車に乗り続けると、周囲にあらぬ誤解を与える可能性がある。下手をすると次期セルビナ国王の座を狙っているなどという噂がセルビナ王国内で立ちかねない。

そんな噂が立つとわざわざ侑人やカルロス王がアルクィンの脚本に沿って演技をし、相談役という名誉職に付いた努力が全て水の泡になってしまう。

侑人は自分の存在が周囲に与える影響力の大きさを理解し、権力争いに巻き込まれるのを避ける為に、最善と思われる行動を取ったのである。

「それでは道中気をつけて下さい」

「了解致しました！」

近衛兵団の隊長は侑人に向かって直立不動の姿勢でそう答え、セルビナ王国へと向かって帰国していき、侑人は笑顔でそんな彼らを見送る。

黒髪の勇者に見送られながら王国に帰還する近衛兵団は、普段よりも幾許か誇らしげな足取りである。侑人から新たに与えられた任務も近衛兵団の士気を上げていた。

「さて、次の段取りをしないといけませんね」

近衛兵団を見送った侑人は、その足でハインリヒ王に面会を求め、数日後にはクーラント魔国に赴く事を伝える。

侑人からクーラント魔国に赴く事を聞いたハインリヒ王は大層心配をしたが、赴く理由を侑人から聞くと、感心した様子で何度も頷いていた。

「我が国はユート殿に救われました。ユート殿の新たな使命のご協力をさせて下さい」

ハインリヒ王は危険な任務に赴く侑人達の為に、一台の馬車と金貨百枚の路銀を用立ててくれた。ハインリヒ王を騙す形になる侑人はやんわりと断ろうとしたが、ハインリヒ王の決意は固く、半ば押し切られるように侑人は受け取ってしまった。

「凄く悪い気がするのですが……」
「貰える物は素直に貰っておけ」
「減るもんじゃないし良いんじゃない？」
「路銀は多ければ多いほど良いっすよ」

実は今回の終戦の褒賞として、侑人はカルロス王から金貨百枚を貰っている。マリアがカルロス王から預かって侑人に届けてくれたこの褒賞を、今回の旅費に当てようと侑人は考えていたのだ。

二人の国王から予想外の大金を受け取ってしまった侑人は、無駄使いをしないように心掛けようと硬く決意したのであった。

「うわー。大きいね」

マリアは四人の前方にある大きな建造物を見て、素直にそんな感想を述べる。マリアの目には高さが十メートルを超え、横幅が四百

メートルの規模を誇る防壁の姿が映っていた。

「わらわと侑人が築き上げた物じゃ。そこら辺にある物と一緒にしないほうが良いぞ」

「アンナ、二人だけではここまでの物は作れません。これはガイウス達も含めた全員の努力の結晶です」

胸を張って威張るような仕草をしながらマリアに語り掛けるアンナを、いつもの様に侑人がたしなめる。そんな二人のやり取りを見たガイウスは、思わず反射的に突っ込みを入れる。

「旦那も姉御も相変わらずの性格っすね……二人の性格を足して二で割れば、普通の人にはちょうど良い感じっすよ」

「それはどういう意味じゃ？」

「深い意味は無いっすよ」

「わらわにはそうは思えんぞ！」

御者を務めているガイウスが軽口を叩き、アンナがそれに突っかかっていく。侑人は慌てて二人を止め、マリアはそんな三人の姿を笑いながら見ている。

数週間前にグランツ帝国軍十八万人と王国連合軍二十万人がにらみ合っていた防壁のそばで、同じ場所とは思えないほど平和な光景が繰り広げられていた。

「「ご武運をお祈りしております！」」

防壁の門前で簡単な出国手続きをした侑人達は、プロセン王国の衛兵達に見送られながら北へ向かって進んでいく。

このまま二日ほど進めばプロセン王国領を抜けグランツ帝国領に

辿り着く。侑人はいまだ見ぬ新たな大地に思いを馳せるのであった。

第３２話：まだ見ぬ大地へ（後書き）

新たな国に向かっていざ出発です。

第３３話：大人の対応

「そろそろ観念してこれを着たら？」
「わらわは暑いのが苦手なのじゃよ……」

アンナはマリアが手に持っているフード付きのコートを忌々しそうに見つめながら呟く。そのコートは侑人がティルト村で着ていたのと同じタイプの物であり、少し厚手の生地で出来ていて保温性がかなり高い作りをしている。

マグナマテルの世界は暦の上では秋に差し掛かっているが、北国育ちのアンナにとってはまだまだ暑い日が続いていた。

「馬車で待つか私の中に入るという手もありますがどうしますか？」
「それは何か寂しい感じがするから嫌じゃ！」

アンナの煮え切らない態度を見た侑人が妥協案を示したが、アンナはその案が気に入らない様子である。子供の様に駄々を捏ねるアンナの姿を見た侑人は、お手上げとばかりに手のひらを上に向ける仕草をする。

「俺はどっちでも良いんすけどね。とりあえず先行って席取っておきますね」
「この薄情者がぁぁぁぁ！」

ガイウスはアンナの相手をせずに一足先に店に向かって歩いて行

く。

アンナはそんなガイウスの後ろ姿に向かって悲痛な叫びをするが、ガイウスは振り向きもしないで右手を軽く上げる動作をしながらそのまま店の中に入ってしまう。アンナの扱いはガイウスが一番上手いかもしれない。

「もう！　着れば良いのじゃろ着れば！」

「そうだね」

「そうですね」

アンナはここ最近妙に息がぴったりな二人の言葉を聞き流し、心底嫌そうな顔をしながらコートの袖に手を通していった。

プロセン王国を出発してから六日後の夕方、侑人達一行はプロセン王国領を抜けてグランツ帝国領に足を踏み入れ、帝国の南端にある小村に辿り着いていた。

グランツ帝国の南東側にそびえ立つ山脈を、回り込むように北東側に進んでいけばやがてクーラント魔国に辿り着くはずである。馬車の移動速度を考えれば三週間ほどでクーラント魔国に到着する計算にはなるが、その計算には順調に進めればという前提条件が付いている。

「今後も順調であれば良いのですが」

「そうだよねぇ」

マリアは侑人の顔を少し心配そうな顔で見つめている。そんなマリアの姿に気が付いた侑人はマリアに向かって優しく笑いかける。

侑人はマリアが何を心配しているのか良く判っている。ハルモ教法王庁教圏国家群に属する国家間を移動しているのとは訳が違う。グランツ帝国の領内では様々な事に気を払う必要があるのだ。

プロセン王国とグランツ帝国の間で表向きには停戦協定、実際には相互不可侵条約が締結されたとはいえ油断は出来ない。黒髪の勇者である侑人を表立って襲ってくる輩は居ないとは思うが、闇討ちならば可能性が無い訳ではない。

とは言っても顔を隠してこそこそと行動するのも余計な疑惑を与える為、グランツ帝国領に足を踏み入れた後も侑人は顔を隠さずに堂々と振舞っている。先の戦争でグランツ帝国軍の精鋭千人を一人で一瞬の内に行動不能に陥れたという噂はグランツ帝国中に鳴り響いていた為、今のところ侑人に対して絡んでくる命知らずの輩は現れては居ない。

「やはり暑いのぅ……」

「大変だとは思いますけど我慢して下さいね。アンナの為ですから」

侑人以上に年内の休戦協定しか結んでいないクーラント魔国出身のアンナはもっと危険である。クーラント魔国の姫君であるアンナの顔を、グランツ帝国の軍人が知っている可能性はかなり高く、アンナを人質として利用しようと考える輩が出る事は容易に想像が付く。

侑人はアンナの身を守る為、グランツ帝国を通過する間はフード付きのコートを着るようにアンナに指示を出したのであった。

「暑い……」

「ユートが部屋の予約をしてくれているから、それが終わったら部屋に行っていても良いわよ。料理なら私が運んであげるから」

厚手のフード付きコートを着たアンナは、宿屋に併設している酒場のテーブルに突っ伏しており、マリアはその姿を心配そうに見つめている。

マリアに心配を掛ける訳にはいかないと考えたアンナは、大丈夫だという気持ちを込めて机に伏せたまま右手を軽く上げ、その手を左右に力無く振るが実際には逆効果である。

「料理は冷めると不味いのじゃ……」

「姉御の言葉は真理っすね」

ガイウスは腕を組みながら深く頷きアンナの意見に納得し、元気が無いはずのアンナも右手の親指を立ててガイウスに向かってアピールしている。

マリアはそんな二人のやり取りを少し呆れた顔で見つめていたが、やがて二人から目を外し酒場の入り口の方に視線を移す。

侑人は宿屋の手続きに手間取っているのかいまだに姿を現さない。先に注文を済ませて侑人の事を待っていた方が効率的なのかな…などと考えているマリアの右肩に、誰かがいきなり手を置いた。

「ねーちゃん美人だねー」

いきなりの感触に驚いたマリアが右側を向くと、一人の酔っ払いの青年が気安くマリアの肩に手を置き、にやけた顔をして佇んでいた。

その青年は侑人の為に空けておいたマリアの右側の席に勝手に座り、マリアの右肩に手を置いたままどんどん距離を詰めて来る。青

年の吐く息は酒臭く、マリアは顔をしかめていた。

「こんなしけたテーブルに居ないで俺達と一緒に飲もうぜ」

マリアが青年の目配せした先を見ると、数人の若者がこっちを見ながら歓声を上げていた。かなりお酒が入っているらしく、周囲のテーブルに座る人達は迷惑そうな顔をしている。

「人待ちしているので結構です」

マリアは毅然とした態度でそう答える。

しかしマリアのそんな言葉を聞いたはずの青年は聞く耳を持たない。そもそもナンパをする目的でマリアに話し掛けたという経緯もあり、そう簡単に引き下がるつもりは無さそうである。

「そいつからさっき俺のとこに、今日は来れないって伝言があったぜ。なっ！」

「「そういう事！」」

いい加減な事を言いつつ勝手に盛り上がる若者達。彼らの態度を見たマリアは、どうしたら良いのか分からずおろおろしている。

「まあそういう事でこっちに来い……ってなんだよ！？」

酔っ払いの青年は自分の右肩を突く感触に気が付き、荒々しい声をあげて自分を突く相手を威嚇するように振り向く。

振り向いた青年の目には、にこやかに笑うガイウスの姿が映った。

「にーちゃん。楽しく飲むのは良いが他人に迷惑掛けるのは感心しないぞ」

ガイウスはにこやかな表情で青年を諭す。ガイウスはやんちゃな後輩を見守る先輩のような目をしながら、酔っ払いの青年を静かに見つめている。

そんなガイウスの態度が癇に障ったのか、青年はより一層荒々しい声でガイウスに絡み始める。

「関係が無い奴は引っ込んでろ！」

「彼女は俺らの仲間だから、関係があるんだけどねぇ……」

そんな青年の姿を見てもガイウスの態度は全く変わらない。いつもの様な涼しげな表情をして、青年の顔を見つめ続けている。

マリア達に絡んでいる青年の姿に気が付いた酒場の店員が、慌ててテーブルに駆け寄ろうとしたが、ガイウスは店員の行動を目で制す。下手に人数を増やして大事にする事も無いだろう……ガイウスはそんな事を考えていた。

「なー兄ちゃん。悪い事は言わないからここは大人しく自分のテーブルに戻った方が、お互いの身の為だと思うぞ」

「うっせーんだよ！」

激昂した青年はガイウスの言葉に耳を貸さず、いきなり立ち上がってガイウスに殴りかかってくる。

「「「キャー！」」」

店内に甲高い女性達の声がこだまする。周囲のテーブルに座る客達は顔をしかめ、店員は酔っ払いの青年を取り押さえようとさらに慌てて駆け寄る。

しかし店員の行動は間に合わない。アンナを除いた店内に居る全

員は、ガイウスが殴られて床に倒れこむ姿を想像したが、次の瞬間に訪れたその光景はその予想を裏切るものだった。

店内は沈黙に包まれている。

店内に居る全員の目には座ったままのガイウスが、酔っ払いの青年の首を左手一本で締め上げて押さえ込んでいる姿が映っている。

ガイウスはほとんど動いていない。青年の右拳が自分の左頬に当たる瞬間に、座ったままの姿勢で体を後ろに逸らして避け、勢い余った青年の体が覆いかぶさってくる勢いを利用して左手一本で押さえつけたのだ。

ガイウスのそんな動きを見たマリアは驚いて固まっている。ガイウスが侑人とほぼ互角に張り合うほど強い事は知っていたが、ここまで強いとは想像もしていなかった。

アンナは逆に落ち着き払っている。こんな酔っ払いにガイウスが負けるとは露ほども思っていない。むしろ手ぬるく済ますガイウスの甘さに対して一言物申してやりたい気分であったが、余りの暑さにどうでも良くなっていた。

ガイウスに圧倒的な技量の差を見せ付けられた青年は、ガイウスの左腕に押さえつけながら青い顔をしている。そんな青年の耳元で周囲に聞こえないようにガイウスは呟く。

「お前は運が良い。俺だからこの程度で済んだが、お前が今座っている席に座るはずの男が居たらお前の命は保障出来なかった。悪い事は言わないから今すぐ戻った方が身の為だ……分かったか？」

青年はそんなガイウスの言葉を受けて青い顔をしながら何度も頷く。青年と同じテーブルに座っている若者達全員も青い顔をしてい

る。

とんでもない化け物に絡んでしまった……そんな思いが若者達の脳裏を掠める。今後は大人しく行動をしようと若者達は心から反省していた。

しかしそんな彼等に追い討ちをかけるような展開が、運悪くこの直後に訪れる。

「手続きに手間取って遅れました。皆さん申し訳ありません」

沈黙が流れる酒場の入り口で一つの声が響き渡る。声の主は遅れて到着した侑人であった。

「く……黒髪の勇者様！」

侑人の姿を見た酒場の店員が思わず大きな声を上げる。その声を合図にするかのように酒場中にどよめきが走る。

「黒髪の勇者というと……帝国軍の精鋭千人を一瞬で葬ったという、あの伝説の武神か！？」

「一日で千里の長さの長城を築いたっていう、黒髪の勇者が彼なの？」

「あの皇帝と対等に渡り合ったという知恵者の？」

「一日で戦争を終わらせた名軍師と聞いたが……」

酒場に居る人々は口々に侑人に対する噂で語り合う。いきなり盛り上がる酒場の雰囲気を感じた侑人は、多少戸惑いながらマリア達

の側まで歩いてくる。

「なんか変に目立ってすみません……ん？　ガイウスその方は誰ですか？」

侑人はガイウスの左腕に押さえつけられている青年に気が付いて声を掛ける。ガイウスはあまりにタイミングの良い侑人の登場に対して苦笑いをしている。

本当か嘘かは判らないが、マリアに危害を与える者に対して一切の慈悲を与えない侑人の気性をアンナから痛いほど聞かされていたガイウスは、この後どうやってこの状況を綺麗にまとめようかと考えていた。

ガイウスに押さえつけられている青年は真っ青を通り超えて土気色の顔をしている。綺麗なおねーちゃんが居たから気楽に絡んでみたら、それが黒髪の勇者の仲間だったなどという展開は、彼にとってはまさに悪夢でしかなかった。

酔っ払いの青年の仲間である若者達も土気色の顔をしている。帝国軍の精鋭千人を一瞬で葬り去った黒髪の勇者の仲間に、知らなかったとはいえ思いっきり絡んでしまったこの後の展開が良い方に転ぶ事など想像も出来ない。運が良くて半殺しで運が悪ければ全員が天に召される……そんな未来予想図が彼らの脳裏には描かれていた。

様々な思惑が渦巻いていたが侑人はそんな事に気が付かない素振りをしつつ、普段と変わらない様子のままガイウスに今の状況の確認をする。

「ガイウスのお知り合いですか？」

「昔の後輩と久しぶりに会ったみたいじゃぞ」

アンナは机に突っ伏したままの姿勢で、力無く侑人に手を振りながらそんな事を話す。周囲の空気を絶妙に読んだアンナのその言葉に即座にガイウスは乗る。

「そうなんですよ旦那。こいつ夢を追って王国軍を辞めるとか言っておきながら、こんなとこでフラフラしてやがったので絞めていたところです」

「そっ……そうなのよ。ガイウスが苛めてるから私が今止めていたところなの！」

マリアも空気を読んでこの会話に参加をする。

侑人はそんな三人の言葉を聞いて少し考え込むが直ぐに笑顔を見せる。そういう事にしておいた方が色々と都合が良いのだなと即座に察した。

「なるほど……そういう事ですか。とりあえずガイウスはその方を放してあげて下さい。顔色がかなり悪いですよ」

「おっと！」

侑人の言葉を聞いたガイウスは慌てて青年を解放する。ガイウスに締め上げられていた青年はフラフラした足取りのまま自分達の席へと戻っていく。

青年が解放されたのを見た若者達は、慌てて会計を済まして店を出て行く。侑人はそんな彼らの行動を暫く見つめていたが、彼らが店を出た後ガイウスに顔を寄せて周囲に聞こえないように囁く。

「マリア達を守ってくれてありがとうございます」

「なんだ……全部旦那にはお見通しだった訳っすね」

侑人はその問い掛けに対しては返事をせず、微笑みながらガイウ

スに向かって右手を差し出し、ガイウスは黙ったままその手を硬く握る。

マリアは二人の姿を不思議そうに見つめており、アンナは相変わらず机に突っ伏したままの姿で置物のようになっている。

普段通りの雰囲気が四人の間に戻ってくる。今日の世界も曲がりなりに平和であった。

第３３話：大人の対応（後書き）

大人の対応の格好の良さ……派手さは無いけど心から憧れます。

第３４話：旅の途中

帝国の南端にある小村で賑やかな一夜を過ごした侑人達は、翌日少し遅い時間に宿屋をチェックアウトすると、クーラント魔国を目指して出発した。

昨日までは馬車の御者をガイウスが務めていたが、今日は侑人が珍しく手綱を握っている。本来であれば手綱を握るはずのガイウスは、馬車の中でうんうんと唸っていた。

「馬鹿みたいに飲みすぎるからじゃ」

「昨日は格好良かったのに今日がこれじゃ台無しよね」

「め……面目ない……うっぷ」

昨日の騒動の後、ガイウスは酒場の店長から謝罪を受け、お騒がせしたお詫びに上等な酒を一本差し入れして貰った。しかもそれだけでなく周囲に居る客達からも、いい物を見せてもらった奢りだと次々に声を掛けられ、かなりの量の酒を振舞われた。

最初は謙虚に応対していたガイウスではあったが、段々と酒が入り酔いが回ったのか、最後の方は酒場の酔っ払い相手に武術指南を始める始末であり、今度はガイウス達が店員からこっぴどく怒られていた。

「私達はもう戻りますよ」

「いってらっひゃい旦那……さーて、おめーら朝まで飲み明かすぞ！」

「「「おー！」」」

付き合いきれなくなった侑人達は早めに切り上げたのだが、ガイウス率いる酔っ払い軍団は朝まで大宴会を続ける。

侑人が翌朝起きて何気なく酒場の様子を窺うと、酒瓶を抱きしめて机に突っ伏したまま寝ているガイウスと、床で大いびきをかいている男達の姿が目に映った。

侑人は酒場の店長に平謝りをしてガイウスを客室まで連れて行ったが、泥酔しているガイウスはなかなか起きては来なかった。その結果出発が大幅に遅れる事となり、ガイウスはマリアとアンナの大ひんしゅくを買っているのである。

「気……気持ち悪い……うっぷ」
「きゃー！　こんなとこで吐いちゃ駄目だよ！」
「ユート！　馬車を止めてこやつをたたき出すのじゃ！」

この後何が起こったのかは、ガイウスの名誉の為にも伏せる事にする。

「今日はこの辺で野宿しましょうか」

街道から少し離れた大きな木の下に馬車を止め、馬の手綱をその木にくくりつける侑人。旅を始めてから一週間ほどしか経っていないが、謎の声から驚異的な理解力という能力を貰った侑人の一連の動作はスムーズである。

「今日はあまり進めなかったのう」
「申し訳ない……」

アンナはいつもの道程の半分ほどしか進めなかった事に対して、馬車から降りながら不満を言う。そんなアンナの言葉に対して心底申し訳無さそうな顔をしながら、ガイウスが謝っている。

「毎回だと困りますけど、お酒好きの男ならたまにはこういう事もあるでしょう」
「毎回こんな感じだったら私は禁酒を勧めるけどね」
「とりあえず薪を拾ってきます！」

侑人とマリアのあまりフォローになっていない言葉を聞きながら、ガイウスは名誉挽回をする為に薪を探しに森の方へ走って行く。
薪の補給はガイウスに任せる事にして、侑人達は各々に分担されている作業に取り掛かっていった。

旅の基本は水場の確保である。水は生命の維持に絶対不可欠な物であるが、液体という保管しにくい特性と、一リットル当たり約一キロの重量があるため大量の備蓄は難しい。
その為、旅をする者は常に水を補給する事を求められる。そういった経緯もあり水の補給を安易にする為に、街と街を繋ぐ街道は川に沿って作られる事が多い。

しかしどうしても例外がある。特に山間部を抜ける街道は地形の影響を受けやすい為、水場から離れた場所に街道を通さざるを得ない事が多い。
そういった場所を抜ける時は前もって多めに水を用意するか、素早く通り抜けるのが旅をする者の基本として教えられている。

侑人が今夜の野営地に選んだ場所の周囲には水場が存在しない。普通であれば水を節約した行動を取るのだが、侑人達の行動は普通の旅人達とは大きく異なっていた。

「ふむ……この辺が良さそうかな」

侑人は簡易的なカマドを作り上げてマリアに食事の用意を頼むと、そこから十メートル程離れた少しだけ開けた場所で立ち止まる。周囲に木は無く地面は土や岩がむき出しの状態になっている。

「後の事を考えると一人用か」

侑人はおもむろに地面に手を触れ魔力を開放する。侑人の魔力を受けた地面は、幅が一メートル・長さが二メートルほどの窪みを作る。

「想像よりも少し大きすぎた……細かいコントロールはなかなか難しい……」

そんな事を日本語で呟きながら、侑人は立ち上がり窪みに向かって右手をかざす。魔力が集まった右手からは石つぶての魔法が放たれ、平たい石が窪みの壁を覆っていく。

やがて侑人の目の前には水が入っていない池のような物が姿を現す。人一人が余裕で足を伸ばして入れる大きさである。

侑人は窪みから少しだけ離れた場所に同じ魔法で石畳を作成し、そのまま窪みに向かって通路を作り上げた後、窪みの中に自分自身が入って感触を確認する。

石で出来ている為多少はごつごつしているが、尖った部分も無く問題は無さそうである。

「普段はおおらかな癖に、これに関してはマリアもアンナも結構細かいからな」

侑人はこれを初めて作った時の苦情の嵐を思い出し身震いする。これだから女性は良く分からない……自分の朴念仁さを棚にあげ相手のせいにする。

そんな事を考えながらおもむろに立ち上がり、窪みから少し離れたところに立った侑人は、再度右手を窪みに向けて魔力を放出する。

夕暮れ時で少し暗くなってきた周囲の景色を赤い強烈な光が照らし出す。侑人の右手からは強烈な火炎が放たれている。一分ほど経過したところで魔法の行使を止めた侑人の目の前に、表面が真っ赤に焼けた石造りの露天風呂が姿を現す。

石の表面を少しだけ融解させ結合させた、お湯が漏れない構造をしたその露天風呂は、一晩しか使用しないとは思えないほどの立派な造りである。

「ここで水を入れて失敗したんだよな……」

いきなり水を入れて大きな亀裂を発生させた失敗を思い出し、侑人は表面を冷やす為に風の魔法を行使する。風下には熱風が吹き荒れる為、風下に何もない事をもちろん確認している。

侑人は三十分ほど風を当て続け、ある程度冷えた事を確認すると、今度は水の魔法で水を入れる。最初は一瞬で水が蒸発するほどの熱を持っていたが次第にそれも収まり、土・火・風・水の基本魔法を全て駆使した侑人特製の露天風呂が完成した。

「あっユート。今呼ぼうとしてたから丁度良かったよ」

侑人が露天風呂の周囲を二メートル程の土壁で覆う、最後の仕上げの作業をして戻ってくると、マリアが調理の仕上げをしながら少し顔を上げて話し掛けてくる。マリアの目の前には美味しそうな料理が出来上がっていた。

「今日も美味しそうですね」

「わらわも結構手伝ったのじゃぞ」

マリアの横に腰を下ろす侑人に向かってアンナが自信満々な様子で話す。魔国の姫君として育ってきたアンナは家事が全く出来なかったが、最近はマリアに教えて貰い簡単な事なら自分で出来るようになっていた。

街での生活なら家事が出来なくても特に問題は無かったが、旅の生活となると話は別である。元々負けず嫌いのアンナは侑人達のお荷物となる事を良しとしなかった。

外見が幼く多少不器用なアンナが、一生懸命にマリアから家事全般を教わる姿は、外から見ると非常にほほえましい光景であり、侑人やガイウスは二人の姿を見て和んでいたりもする。

四人の旅は大きな問題も無く順調であった。

「これうめえっす！」

「こりゃ！　わらわより先に食べるとは何たる不届き者！」

今日の夕食は干し肉と豆類を煮込んだスープとパンである。侑人とアンナの膨大な魔力によって水の心配から開放されている一行は、その恩恵を最大限に利用して保存が利く食材や調味料を多めに持ち

歩いている。
新鮮な肉や野菜を持ち歩く事は出来ない為、どうしても普段よりは簡素な品目にはなるが、料理上手なマリアは毎回工夫して、同じ様なものが食卓に並ばないように気を使って調理をしていた。

「うん……今日は少し濃い目の塩味ですね」
「パンにつけて食べるとちょうどいいと思うよ」
「パンに染み込ませるとマジうめえ！　マリアおかわり！」
「わらわもおかわり！」

マリアはおかわりを急かす二人をなだめながら用意をする。
そんな三人の姿を笑顔で見つめながら侑人は食事を楽しんでいる。
最高の調味料はこの環境なのかもしれない。そんな事を侑人は考えていた。

やがて楽しい食事の時間も終わり、各々は就寝前の準備に取りかかって行く。
マリアとアンナは着替えの準備を終えると、入浴順番を決める為にじゃんけんを始める。そんな二人の姿を見た侑人は、二人に対してある事を教えていない事に気が付く。

「今日は少し大きめに作ってしまったので二人で入れますよ」
「ユート本当か？　マリア、わらわと一緒に入ろう！」
「分かったからそんなに急かさないでよ」

ここ最近姉妹のように仲良くなっているマリアとアンナは、二人で仲良く連れ立って侑人が作成した露天風呂へと向かっていく。
時間が経過しているので多少お湯の温度が下がってしまっているとは思うが、魔法が得意なアンナが居ればすぐに適温に戻せるため特に問題は無い。

「俺も少しその辺をぶらついて来るので、二人が出たら旦那が先に入っちゃっていいっすよ」
「覗きでもするのですか？」
「世界最強の二人を敵に回してまで、覗く勇気が俺には無いっすねぇ……」

もし本当に覗きをして万が一ばれれば、マリアはともかくとしてアンナには確実に殺られる。言葉の比喩などではなく実際に自分の人生が終わる。それが出来るだけの実力を彼女は持っている。

「まあ例のこれっすよ」

ガイウスは侑人に向かって右手に持った剣を軽く振る仕草をする。侑人はそんなガイウスを優しい目で見つめている。

「昼まで寝込んでいたのですから、今日くらいはゆっくりしたらどうです？」
「昨晩は馬鹿騒ぎして何もしなかったから、今日は昨日の分までやらないと駄目なんすよ」

ガイウスはそう言いながら露天風呂と逆の方向へと歩いて行く。頼もしい男の背中が暗闇の中に消えていった。

「あと数日でグランツ帝国の首都に着くんだよな……」

ゆらゆらとたなびく焚き火の炎を見つめながら侑人は日本語で呟

く。侑人は今後どういった進路を取ろうか悩んでいる。
アンナの身の安全を考えるならば、首都を避けるルートを取るのが無難である。侑人達一行はただでさえ目立つので、人口が多いところには近寄らないのが鉄則ではある。

しかし侑人は内心ではグランツ帝国の首都に行きたいと考えている。昨晩泊まった村で一つの興味深い話を聞いた事が、この考えのきっかけとなっている。
侑人が昨晩村人から聞いたのは、クロウ・ミナトの墓がグランツ帝国の首都にあるという話であった。

「八百年前にこの世界に来た大先輩か……」

侑人にはクロウ・ミナトの墓に訪れたい一つの強い思いがある。

その思いとは、元の世界とのある程度の決別を自分の中でする事である。クロウ・ミナトの墓がこの世界にあるという事は、彼は元の世界に戻れなかったという証明になる。
一度召喚されてしまったら元の世界には戻れないと決まった訳ではないが、侑人自身にもそういった可能性が十分ある事を受け止めるきっかけが欲しかった。

元の世界の事を忘れた事など一度も無いが、元の世界を忘れない事と元の世界に戻る事は別次元の話になる。戻れないかもしれないという事を、しっかりと受け止める機会は今までに一度も無かった。
侑人にとってはクロウ・ミナトの墓を訪れる事が、侑人自身がさらに一歩前に進む為にも必要な儀式であるように思えるのだ。

「まあ、あれこれ考えても仕方ないか……」

そんな侑人の呟きは様々な思いを乗せ、満天の星空に吸い込まれるように消えていった。

第３４話：旅の途中（後書き）

工事や作業をする時に本領発揮する侑人です。

第３５話：様々な思い

「今日は涼しいのう」
「姉御……いくらフードを被ってるとはいえ、御者席の横に居るのは少し不味くないっすか？」

今日の天候は生憎の曇り空だが、そのおかげで気温も低く北国育ちのアンナにとっては過ごしやすい陽気となっている。

「わらわもそうは思うのじゃが……」

アンナはそんな事を言いながら馬車の中を見る仕草をする。
その仕草に釣られて後ろを見たガイウスの目に、座った姿勢で馬車の壁に寄り掛かって寝ている侑人と、侑人の脚を枕にしてすやすやと寝息を立てているマリアの姿が映る。

「男のロマン的には逆じゃないっすか？」
「お主のロマンなど知った事ではないが、二人を起こすのも忍びないからこうして出てきたのじゃ」

ガイウスのボケに対してアンナが真面目に返答する。そんなアンナの言葉を聞いたガイウスは真面目な顔になり、今まで気になっていた事をアンナに対して告げる。

「旦那は昨晩遅くまで何かを考えている様子でした。姉御に何か心

当たりはありますか？」
「わらわには心当たりは無いが、昨日からなにやら様子がおかしいとは感じていたぞ」

「なにがあったんすかねぇ」
「それが分かったら苦労はせん……マリアもそれを気にして昨日寝るのがかなり遅かったようじゃし、今はこのまま寝かしておくのが良いじゃろう」

グランツ帝国の首都に行くかどうか悩んでいた侑人は、悩む姿を皆に見せないように気を使っていた。しかし深い付き合いをしている三人には、侑人が悩んでいる事は全てお見通しである。
当初三人は悩んでいる侑人に対してその悩みを聞こうか考えていた。しかし無理に聞き出すより侑人が話したくなった時に聞くほうが侑人の為になるだろうと考え直し、聞くのを止めた。

侑人が悩みを話さないという事には何か理由があるはずだという事まで三人は察している。この四人は固い絆で結びついていた。

「それはそうと、姉御に一つ聞きたい事があるですが今良いです？」
「質問の内容にもよるが、見ての通り暇を持て余しているから別に聞くだけなら構わんぞ」

少し雰囲気が暗くなった事を察したガイウスが唐突に話を変える。暗い雰囲気を嫌ったアンナもガイウスの話に乗る。

「マリアが旦那の恋人だって噂をあちらこちらで聞くんですけど、実際のところはどうなんです？」
「それを確認してどうするんじゃ？　違ったらマリアにアタックでもする気かの？」

少し茶化したようなアンナの言葉に対してガイウスは首を振る。
マリアは美人で気立ても良く誰から見ても文句無しの女性だが、自分がそれに釣り合う男とも思えないし、何よりマリアの横に立つ自分が想像出来ない。マリアの横に立てる男はこの世界でただ一人である。

「勝ち目の無い戦いはしない主義なんで遠慮しときます。まあ俺から見てもお似合いの二人だと思うんですが、どうも旦那の態度は煮え切らない感じがして気になるんすよ」
「そうじゃのう……わらわの推測で良ければ何となく心当たりがあるぞ」

アンナは少しだけ考える素振りを見せる。
少しだけ境遇が似ているアンナには侑人の気持ちが少しだけ理解出来る。特異な環境に置かれた者だけが判り合える何かがあった。

「多分ユートは、まだ色々と割り切れていないと思うのじゃ。元の世界に恋人が居るのか居ないのかは聞いておらんのでその辺は分からないが、この世界の人間に対してどこまで踏み込んで良いのか、侑人自身にも分からないのじゃろう」
「ふむぅ……そんなもんですかねぇ」

ガイウスは納得が行くような行かないようなといった、中途半端な表情をして考え込んでいる。マグナマテルで生まれ育ったガイウスには異世界がどのような物なのか上手く理解できないのだ。

「あやつは根っからの真面目人間じゃ。一時の感情で相手を傷付けるような真似は絶対にしないじゃろう。相手がマリアならなおさら気を使うはずじゃ。わらわにはユートの気持ちが何となく分かる」

「旦那が元の世界に戻った時に、残された相手を悲しませたくないって事ですかね？」

「その考えで大体あっていると思う。ユートが元の世界に戻れるのかどうかはわらわには分からないが、戻れる可能性があるなら戻りたいと思ってしまうのが人じゃと思う……今回のわらわのようにな」

「旦那とマリアには幸せになって欲しいのですがねぇ……」

ガイウスはしみじみとした様子でそんな言葉を呟き、アンナもガイウスの呟きに対して深く頷く。馬車の中に居る二人は、アンナとガイウスがそんな事を話している事を知るよしも無く、すやすやと気持ち良さそうに寝ている。

「しっかし姉御の事を時々年上の姉さんみたいに感じる時がありますよ……もちろん褒めているんすよ」

「実際にわらわは母国に戻れば姉じゃからな。弟が一人居るんじゃよ。わらわに似て利発で可愛らしい自慢の弟じゃ」

そんな事を語るアンナの目はとても優しい。そんなアンナの姿を少しドキドキしながら見つめるガイウスであった。

その頃、グランツ帝国の首都方面に向かう北側の街道と、クーラント魔国方面へ向かう東側の街道、そしてプロセン王国方面へと向かう南側の街道が一点で交わる交通の要所に、イーヴォ将軍が率いるグランツ帝国軍の精鋭部隊二百名が陣取っている。

グランツ帝国とプロセン王国との戦争が事実上終結した事により、二国間の新たな交易ルートを開拓しようと商魂逞しい商人達が連日

この街道を行き来し、本日も数組のキャラバン隊の姿が街道上に見えるのだが、街道上に居る全てのキャラバン隊は遠く離れた所からグランツ帝国軍の様子を伺っている。

商人達の目からはグランツ帝国軍が検閲を行っているようには見えない。街道に検問を張り道行く商人や旅人の検閲を行う光景ならば過去に数度見てきたが、今回の様子はいつもと違って異様である。

何者も通さないかのように街道上に陣を張るグランツ帝国軍は、街道を完全に封鎖しているのだ。グランツ帝国軍がこのような行動を取る光景を見る事は戦時中でしかありえない。

グランツ帝国とプロセン王国との戦争が終結した事を好意的に捉えている商人達は、異様な雰囲気のグランツ帝国軍を心配そうな顔をしながら見つめていた。

「本当にこの街道を北上しているのか？」

「はっ！　諜報部隊の報告によれば、およそ半日ほどで此処に辿り着く様子です」

部下の報告を聞いたイーヴォ将軍は少し緊張した面持ちで街道の先を見つめる。将軍の脳裏には数週間前に受けた屈辱の記憶が鮮明に蘇る。

将軍の脳裏には静かに佇む一人の黒髪の男の姿が浮かんでいる。人生の大半を戦場で過ごしてきた将軍に、強烈な恐怖の記憶を植え付けたその男がこの街道の先に居る。

部下の前で気丈に振舞おうとしているイーヴォ将軍ではあったが、将軍の意識に反するかの様に、自分の体が勝手にブルブルと震える。

この震えは武者震いなどではなく、生物の本能が絶対に勝てない相手に相対することに、警告を発している震えだという事を将軍は

理解している。

「本当にこの人数で大丈夫なのでしょうか？」

「今回の任務には数は必要ない」

イーヴォ将軍は二百人程の配下の精鋭を引き連れて街道に陣取っている。前回の戦闘で千名の精鋭を一瞬で無効化された事を考えれば、二百名という人数はかなり心細く部下が心配するのももっともな事である。

本音を言えばイーヴォ将軍も今率いている十倍の人数を連れて来たかった。しかしそんな事をすればフリードリヒ皇帝から直々に賜った今回の任務が失敗する恐れがある。

「皇帝の言葉を信じろ。我々に拒否権は無い」

「「了解しました！」」

イーヴィ将軍の言葉を受けた部下達は姿勢を正して命令に従う。思いつめたイーヴォ将軍の顔を見た部下達の緊張感はどんどん高まっていった。

「姉御……この先に妙な一団が待ち構えています。申し訳ないですけど旦那を起こして貰えますか？」

「あれはグランツ帝国軍の精鋭部隊じゃな……わかった、ユートを起こしてくる」

イーヴォ将軍が率いているグランツ帝国軍の精鋭部隊二百名が、数百メートル先に待ち構えている事に気がついた二人に緊張が走る。

とりあえず侑人を起こして判断を仰ぐ事に決め、さっそく行動に移す。
アンナは御者席の横から素早く馬車の中に戻ると、大急ぎで侑人を起こす。

「ユート。悪いがすぐに起きてくれんか？」
「うーん……一体何があったのですか？」

「わらわが説明するより見た方が早い。とりあえずガイウスの横に移動してもらえるか？」
「分かりました」
「何かあったの？」

侑人はアンナの指示に従って、急いでガイウスの横に移動する。
侑人を起こすついでにマリアも起こしてしまったが今はそれどころでは無い。戦闘手段を持たないマリアを御者席に移動させても危険に晒すだけなので、アンナは真面目な顔をしてマリアに状況を説明する。

「この先にグランツ帝国軍が待ち構えておる」
「なんで？　戦争は終わったんじゃないの？」

マリアの疑問はもっともだと思う。しかしアンナは首を横に振る事しか出来ない。
アンナも状況を把握している訳ではない。様子がわからない以上正体を明かすわけには行かないアンナは身動きが取れず、グランツ帝国軍への対応は侑人とガイウスに任せるしか術は無い。

「とにかくわらわがマリアを全力で守るから心配しなくても良いぞ」
「頼りにしてるわよ」

マリアとアンナは馬車の中で手を取り合う。のどかな雰囲気だった四人の旅は大きな転換期を迎えた。

「もう少し進んだら、一回馬車を止めて下さい」
「旦那？　いったい何を考えているのです？」

侑人はガイウスの問い掛けに返事もせず、真剣な表情をしたまま馬車の中に戻っていく。

そんな侑人の後ろ姿を見送ったガイウスは、前方に陣を張るグランツ帝国軍に向き直り、目の前に陣取っている一軍を鋭い目で睨みつける。そしてそのままおもむろに馬車の速度を落としてグランツ帝国軍との遭遇までの時間を稼ぎ、侑人の再度の登場に備える。

ガイウスには侑人が何を考えているのか判らない。しかしたとえ侑人がガイウスに向かって、一人で戦って来いという理不尽な命令をしたとしても、その命令に大人しく従う覚悟を決めた。

侑人達を守る盾となり外敵を打ち払う矛となるという、誰にも強制されずに己自身で決めた行動理念、己の使命に殉ずる覚悟はとうの昔にできている。

「時期が早いか遅いかの差でしかない……」

全ての覚悟を決めたガイウスは、恐ろしいほどの覇気を全身から放っている。しかし内面はそんな姿と反比例するかのように至極冷静であった。

馬車の中に戻った侑人は手を取り合っているマリアとアンナの二人と目が合う。

マリアはとても不安そうな顔をしながら侑人を見つめ、アンナは

真剣な表情で侑人に向かって頷いている。侑人はそんな二人に向かって、二人の緊張感を解くように微笑み掛ける。

「状況を確認してきますから、二人は決して馬車の中から外に出ないように……それだけはお願いしますね」

侑人は馬車の床に転がっていたガイウスの剣を鞘ごと掴むと、馬車の外に出る為に二人に背を向ける。何故か二人に目には侑人の後ろ姿が普段より大きく見える。

普段の優しく生真面目な侑人である事には変わりが無いのに、今の侑人からはそれだけでなく、周囲の全てを包み込むような異様な包容力と、普段の侑人が纏っているはずの無い悲壮めいた覚悟を感じる。

侑人に向かって何かを話し掛けたいが、侑人の後ろ姿に圧倒されてしまって言葉が上手く出てこない。そんなもどかしさを二人は感じている。

侑人はそんな二人の気持ちに気が付かないまま、馬車の入り口の方に向かって歩いて行く。二人には少しずつ遠ざかっていく侑人の姿が、実際に離れている距離よりもはるか遠くに行ってしまったように思えた。

侑人は左手で馬車の入り口の枠を掴み、勢いを付けてガイウスの側に戻ろうとする。そんな侑人の右手の袖口を不意に小さな手が掴む。

少し力を込めればすぐに振り払えてしまえるほどの弱い力ではあったが、侑人はその小さな手に込められた強い意志の力を感じ、戻るのを一旦止めて静かに振り返る。

振り返った侑人の目には、自分の右手の袖口を掴む人物の姿が映

る。その人物は侑人を見つめている大きな目に、いっぱいの涙を溜めたマリアであった。

『どこか遠くに行っちゃわないよね？』

マリアは侑人の袖口を掴んだままの姿で、侑人を見つめているだけで何も語らないが、侑人にはマリアの目がそんな事を問いかけている様に感じている。

『私はどこにも行きません』

侑人は左手を馬車の入り口の枠から離し、そんな気持ちを込めてマリアの頭を優しく撫でる。侑人は一言も言葉も発してはいないが、その行動が全てを如実に表している。

頭を撫でられているマリアは静かに侑人の袖口から手を離すと、今度は侑人の襟元を両手で軽く握って、額を侑人の胸に押し付けて甘えるような仕草をする。

右手が自由になった侑人はそんなマリアをあやすかのように、剣を持ったままの右手でマリアの背中を軽く抱きしめる。

この間のやり取りでは二人は一言も言葉を交わしていない。しかし二人は万の言葉を交わしたよりも深く、お互いの気持ちを伝え合っていた。

「そろそろ行きますね……」

「うん……」

侑人のそんな言葉を合図にして二人は離れる。マリアの目からはすでに大粒の涙がポロポロと流れ落ちていたが、それでも気丈に侑

人に向かって微笑みかけている。
侑人はそんなマリアの姿をいつもよりも優しい瞳で見つめている。
二人の間に優しい空気が流れている。

アンナは侑人から離れたマリアにそっと近づき、マリアを優しく抱きしめる。そしてその姿のまま力強く宣言をする。

「わらわがマリアを全力で守る。どんな事があってもマリアには指一本触れさせはせぬ……じゃから何も心配するな」
「ありがとうアンナ」

アンナの力強い言葉を聞いた侑人は、左手でアンナの頭を優しく撫でながら礼を言う。侑人に頭を撫でられているアンナは、まんざらでもなさそうな顔をしている。
しばらく侑人に頭を撫でられていたアンナではあったが、その行為はアンナの言葉によって終止符が打たれる。

「ガイウスが待っておる。もう行ったほうが良い」
「分かりました。では行ってきます」

侑人は二人に背を向ける。
侑人の背中からは先ほど感じた悲壮めいた覚悟はもう感じない。今の侑人の背中は悲壮感の代わりに、前向きな強い決意を纏っているように二人の目には映るのであった。

「お待たせしました。この辺で止めて下さい」
「俺の剣を持ってきて一体どうするんです？」

ガイウスは今まで見せた事が無いほどの真剣な表情を見せる。
侑人に戦闘行為を命じられれば一人で突撃する覚悟は既に出来ている。勝算は薄いが侑人達が逃げる時間くらいは稼いでみせる。今のガイウスはこんな事を考えていたのだが、侑人の語った言葉は想像もしていない内容であった。

「ガイウス。もし戦闘が始まったら私をここに置いて馬車を急いで移動させて下さい。このままクーラント魔国へ向かっても良いですし、プロセン王国に引き返しても構いません。ガイウスが安全だと判断した方向に馬車を走らせて下さい」
「旦那はどうするのです？」

「そうなった場合は私が食い止めます」
「旦那を置いて逃げろというのですか？」

ガイウスは侑人の言葉に納得できないという雰囲気を全く隠そうとしない。主を置いて逃げる衛士に存在意義などは無いとガイウスの目は語っている。
侑人はそんなガイウスの雰囲気を察すると、少し強い口調でガイウスに話し掛ける。

「ガイウス……これは命令です」
「そんな命令は聞けません」

侑人のそんな雰囲気にもガイウスは屈しない。普段は飄々（ひょうひょう）としているガイウスではあるが、侑人に対する忠誠心は人一倍持っている。
たとえ侑人の判断が状況的に正しいとしても、己の衛士としての矜持（きょうじ）が絶対にそれを許さない。ガイウスという男はそういった点で

は非常に頑固である。

侑人はガイウスの気持ちを察すると急に表情を緩める。ガイウスの真っ直ぐな思いが強く感じられとても嬉しい。

「命令は取り消します」

ガイウスは少し表情を和らげ、そんなガイウスの表情を見た侑人も笑顔を見せる。その表情はいつもの侑人の笑顔であった。

「友人のお願いを聞いては貰えませんか？」

「旦那……それはずるいっすよ……」

ガイウスも少し笑っている。自分が尊敬し目標とする男から友と認められた喜びが、ガイウスの心をゆっくりと満たしていく。

「私の大事な人たちを守ってください……お願いします」

「その反則技が通じるのは今回だけっすよ……それだけは絶対に約束して下さい」

ガイウスはそんな言葉を侑人に掛けながら左手を強く握り、握ったそのこぶしを侑人に向ける。侑人もガイウスの行動に習い、ガイウスに向かって同じ仕草を返す。

様々な思いを乗せた二人の男のこぶしが軽くぶつかる。二人の間に余計な言葉はもう要らなかった。

「とにかく相手の意思をまず確認する事……まずはそこからだな」

馬車から降りた侑人は日本語でそんな事を呟き、グランツ帝国軍に向かってゆっくりと歩いて行く。プロセン王国防衛戦の時の様に、

敵を傷付ける事を過剰に恐れていた侑人の姿はもう無い。
今の侑人はマリアやアンナやガイウスとの固い絆を再確認し、三人の思いにしっかりと支えられている。恐れる事は何も無かった。

マグナマテルは侑人にとって異世界ではあるが、元の世界でも得られなかった真の仲間と呼べる存在に出会えた。侑人はその事に対して深く感謝をしている。
この時侑人の中で、マグナマテルに対する捉え方が、召喚されたばかりの頃と比べて大きく変化していた。しかし侑人自身はまだその事をはっきりと自覚していなかった。

第３５話：様々な思い（後書き）

色々な気持ちを込めたつもりです。上手く伝われば幸いです。

第３６話：戦いの形

「相変わらずでたらめな魔力量だ……」
「あれは既に人の範疇を超えている……」

三国へと向かう街道が一点で交わる交通の要所に陣取る、イーヴォ将軍率いるグランツ帝国軍の精鋭部隊二百名は、いまだかつて無い緊張感に包まれている。
イーヴォ将軍をはじめとしたグランツ帝国兵二百名全員の目は、プロセン王国の方角に伸びる南側の街道の一点に注がれ、その視線の先に居る者がこの緊張感を招いている事は間違いが無い。

彼らの目にはこちらにゆっくりと歩いてくる一人の男の姿が映っている。

その男は全身にほとんど装飾のされていない真っ黒な鎧を纏っており、一見すると地味な装いに見えるが、生来の物と思われる真っ黒な頭髪と相まって、この世の者とは思えないほどの異質な雰囲気を放っている。
周囲に発散する無尽蔵とも思える魔力と、左手で無造作に掴んでいる剣の鞘が彼等の緊張感に拍車を掛け、一人の男を見つめる全員の脳裏に屈辱と恐怖の記憶を鮮明に思い起こさせる。

「前回は千人で突撃して手も足も出なかったのに、この人数であの化け物と相対して俺らは大丈夫なのか？」

「俺に聞くな。イーヴォ将軍に聞いてくれ」

ほとんど魔力を持たない一般のグランツ帝国兵にとって、血反吐を吐くほどの鍛錬と数え切れないほどの戦場で身に付けた弓術は、戦場における自軍の生命線とも言える技能である。

亜人族が多いクーラント魔国軍との戦闘においても、戦闘の序盤に敵軍から数多く繰り出される遠距離魔法と対等以上に渡り合い、時には敵将を遠距離から一撃の下に葬り去る事が出来る弓術は、今までどんな難敵と相対しても非常に有効に作用してきた。

しかし目の前の男には一切通用しなかった。

先の戦争では、こちらを振り返る事も無く後ろを向いた無防備な姿のまま、無数の矢を一瞬で消し去り何事も無かったかのように生還して見せた。自分達では想像も出来ない恐ろしいほどの技量を目の前に居る男は持っている。

プロセン王国防衛戦のときに見せつけられた、矢嵐が過ぎ去った後の場所で無傷なままこちらを見つめながら静かに佇んでいる黒髪の勇者の姿は、今でも悪夢としてグランツ帝国兵の夢に度々登場している。

「今回の出陣の目的は何なのだ？　将軍はこの人数で黒髪の勇者をどうにか出来ると思っているのか？」

「イーヴォ将軍がフリードリヒ皇帝陛下から直々にご命令を賜った様だが、俺は内容までは聞かされていない」

悪夢はそれだけで終わらない。数々の戦場で生き抜いてきたイーヴォ将軍の的確な指示により、決死の覚悟で突撃したグランツ帝国軍の捨て身の戦法もこの男には全く通用しなかった。

決死の覚悟で突撃したこちらの雰囲気を全く意にも介さないかの

ように、目を瞑りながら静かに右手を向けてきたと思った瞬間、突撃したグランツ帝国兵全員が一瞬で無力化された。

黒髪の勇者に向かって突撃したグランツ帝国兵の記憶は皆一様に同じである。眩い光に包まれたと思った瞬間から先の記憶が全く無いのだ。

記憶を取り戻した時にはすでに王国連合軍に捕虜にされている有様であり、訳が判らないまま王国連合軍から開放されて自軍に戻った際に、周りで見ていた者達に様子を窺って初めて自分の状況が確認出来たのである。

周囲に聞かされた内容は人間業などではなく悪鬼羅刹の仕業としか思えず、命知らずであったはずの帝国軍精鋭の彼らに深いトラウマを与えている。

「将軍も黙ってないで作戦内容を伝えてくれれば良いものを……」

「珍しく周囲に気が回ってないようだな。あそこまで思い込んだ顔をしている顔を見るのは初めてだ」

グランツ帝国兵の間には先ほどから微妙な空気が流れている。イーヴォ将軍がフリードリヒ皇帝から受けた命令を、配下の兵士にしっかりと伝えていなかったのが原因である。

配下の兵士はイーヴォ将軍から『黒髪の勇者の案件で陛下からご下命を賜った。今から名前を挙げる者は俺について来い』としか伝えられていなかった。

イーヴォ将軍は何かを意図して部下に命令を伝えていない訳ではない。将軍自身が今回の命令を受けて過度に緊張してしまい、部下に作戦内容を伝達する事をすっかり忘れてしまっていただけである。

フリードリヒ皇帝がイーヴォ将軍に今回の命令を与えたのは、黒髪の勇者の名前を聞くと過度な緊張状態に陥るようになってしまっ

たイーヴォ将軍に対する、一種のショック療法的な意味合いを持っているのだが、将軍はその意図に気がついていない。

「将軍。部下を代表して話があるのですが宜しいでしょうか？」

「構わんが……手短に頼む」

痺れを切らした部下の一人がイーヴォ将軍に対して質問をする。イーヴォ将軍はゆっくりとこちらに近付いてくる黒髪の勇者から視線を外さず、そのままの姿勢を維持したまま部下の質問に対して短い言葉で答える。

そんな将軍の態度を受けた部下は、少し改まった態度で言葉を発するのだが、その言葉はイーヴォ将軍の思考を現実に一気に引き戻した。

「我々は今回の作戦内容を一切知らされていないのですが、皇帝閣下のご下命は我々にも話せないような極秘の内容なのでしょうか？」

「ん？　お前達に話していなかったっけ？」

予想外の部下の言葉を聞いたイーヴォ将軍は、いつもの将軍の冷静な姿からは想像出来ないほど驚き、思わず素に戻った声で返答をする。

そんなイーヴォ将軍の姿を見た部下の一人は少し苦笑している。これだけ慌てているイーヴォ将軍の姿など今までに見た事がない。女性に振られて落ち込んでいる姿ならばたまに目撃するが。

「私が言うのも何なのですが、深呼吸でもして一回落ち着いた方が良いですよ……」

「そっ、そうだな」

部下の言葉に素直に従って数回深呼吸をするイーヴォ将軍。その

姿を見ている部下達は少し微妙な表情をしているが、先ほどよりは幾分か緊張感が和らいでいる。

深呼吸をして若干落ち着いたイーヴォ所軍は、侑人から視線を外し部下に向き直る。既に威厳も何もあったものではないが、作戦内容を説明し忘れていたのは完全に此方の落ち度である。

「えー正直すまん……、部隊を指揮する俺が一番平常心を失っていたようだ。まさか陛下のご指示を伝えるのを忘れていたとはな……いまさらだが陛下のご下命をお前達に伝える……」

今まで気になって仕方なかったフリードリヒ皇帝から賜った命令の内容を、やっとイーヴォ将軍の口から直接聞く事が出来る部下達は、真剣な表情で将軍の言葉に耳を傾ける。

イーヴォ所軍の言葉を聞く部下達の顔は、真剣な表情から驚きに満ちた表情に変化し、最終的には皆一様に酷く戸惑った顔をするのであった。

「ん？　少し様子が変わったかな？」

目の前で相対するグランツ帝国軍の意図がいまいち掴みきれない為、いつ戦闘行為を仕掛けられても対応できるように、警戒しながらゆっくりと歩を進めていた侑人の目の前で状況が少し動く。

今まで一糸乱れぬ統率を感じさせ、騎上からこちらを警戒していたグランツ帝国軍の雰囲気が霧散している。ある者は下を向いてなにやら考え始め、またある者は横にいる者と少し真面目な顔をして雑談を始めている。

「とりあえず警戒だけはしておいた方が良いかな」

侑人はグランツ帝国軍の雰囲気に流されて警戒心を解いてしまわないように、自分自身を戒める。勝手な自己判断で安易な行動を起こし、それによって痛い目にあった経験は、新入社員時代に請け負った仕事の中で数限りなくあった。

新人時代にはさまざまな失敗を繰り返してきた侑人ではあったが、ここ数年で社会人として大きく成長した。侑人が大きく成長したのはある言葉がきっかけとなっていた。

『仕事をして給料を貰っている以上我々はプロであり、プロは経緯ではなく結果を出す事が全てである』

この言葉は侑人が尊敬する会社の先輩の言葉であり、侑人の行動理念として深く心に刻み込まれている。結果を出す為にはどういった行動を取れば良いのかとことん模索する侑人の性格は、この言葉がきっかけとなり形作られて行ったのである。

「どちらにも被害を出さずにこの事態を平和に解決するのが最良の結果だな」

侑人は自分の行動目標を再度確認し、自分自身に軽く気合を入れる。今回の事態を丸く収める為には、相手に対する警戒を解かないまま、こちらに対しての過度な敵対心を感じさせない事が重要であると気が付いた侑人は、少し大胆な行動に出る事にする。

「これでいいか」

侑人は小さな声で呟きながら、馬車から持ち出したガイウスの剣を静かに地面に置き、両手を上に上げた姿勢を取る。周囲に発散し

ていた膨大な魔力も、自分の身を守る土壁を瞬時に発生させられる分を残して小さく抑える。

そしてにこやかに微笑みながらグランツ帝国軍と相対する。がちがちに緊張したグランツ帝国軍の精鋭二百名と向かい合う、リラックスした一人の黒髪の優男というよく判らない図式が出来上がる。どう考えても逆だと思われる光景を見ている周囲の商人達から、ため息が漏れている。

「見ての通り私には害意はありません。グランツ帝国にも正規の手続きをして入国しました。出来れば代表者の方と話し合いをしたいのですがいかがでしょうか？」

グランツ帝国兵達の視線が一斉にイーヴォ将軍に注がれる。兵士達は期待と不安が入り混じった目で将軍を見つめている。

通常こういった場合は指揮系統を守る為、敵方に軍団を指揮する者を把握させないのがセオリーであるが、もはやグランツ帝国兵達にそこまでの余裕は無い。

普段のイーヴォ将軍はグランツ帝国一頼りになると言い切ってしまっても過言ではない。フリードリヒ皇帝の信任も厚く部下からも大いに慕われている、帝国を代表する将軍の一人である。

冷静な状況判断と勇気ある行動で周囲の者を引っ張るイーヴォ将軍の姿は、グランツ帝国軍には希望を、敵対する国には畏怖を与えている。

しかし今回の任務における将軍の姿は普段と全く違っている。黒髪の勇者を過剰に意識する余り、普段の冷静さが全く無かった。

そんな将軍に相対する黒髪の勇者は非常に落ち着いている。これから始まる話し合いに対する一抹の不安を隠せない兵士達であった。

「あなたは……先の戦いでの怪我はもう大丈夫の様ですね」

グランツ帝国軍の兵士達の視線でイーヴォ将軍が責任者だと悟った侑人は、丁寧な口調で将軍に向かって話し掛ける。プロセン王国防衛戦で戦った相手だという事にももちろん気が付いている。

侑人に先手を取られ、自身のトラウマとなっている出来事に触れられたイーヴォ将軍は、今まで以上にますます焦る。もはや侑人が他国の重要人物だという事をすっかり忘れていた。

「あれしきの事でこの俺がどうにかなる事などない。そんな事より今日は貴殿に話があったのでここまで出向いてきたのだ」

「お話……ですか。しかし話し合いというには少し物々しい感じがしませんか？」

侑人の返答はあくまで丁寧である。しかしこの場の会話は友人同士の話し合いや仲間内での談笑などではなく一種の交渉事。会話の主導権を握る事はもちろん忘れない。

「そっそれは……こちらにも色々と事情があってだな……」

「せっかくですからその事情とやらを教えて頂けませんか？　私にもご協力できる事があるかもしれませんので」

「それはだな……」

「それは何でしょうか？」

侑人は完全に会話の主導権を握る。それを察した帝国軍兵士達は今後の展開を想像して頭を抱えるのであった。

第３６話：戦いの形（後書き）

これが本来の侑人の戦い方なのです。戦闘シーンを期待していた方には謝ります。ごめんなさい。

第37話：勇者の定義

「ユート大丈夫かな？」
「あの馬鹿たれがいきなり剣を地面に置いた時は少し焦ったが、どうやら大丈夫そうな雰囲気かの？」
「旦那が話している相手はイーヴォ将軍っすね。騎士はプライドが高いから不意打ちはしないと思いますが、一回旦那にこてんぱんにやられているので、妙な事を考えていなければ良いですけど……まあ旦那なら何があっても大丈夫でしょ」

グランツ帝国軍と話す侑人から少し離れた場所に馬車を止め、マリアとアンナとガイウスは侑人の様子を伺っている。

ガイウスは侑人との約束を守り、何かあった場合に即座に対応出来るように、御者席に座ったままの姿勢で侑人とグランツ帝国軍の情勢を見守っている。
手綱を握る手には力が入り若干緊張しているが、マリアとアンナに話し掛ける姿はいつも通りの雰囲気を保っているのは、ガイウスの男の意地と言ったところか。

マリアとアンナは馬車から顔を覗かせている。この二人も侑人との約束を律儀に守り馬車から出ようとはしない。
マリアは終始心配そうな顔をして侑人を見つめ続け、アンナはそんなマリアをなだめる様に肩を抱きしめて話し掛けている。

この旅を通じてマリアとアンナの距離は急速に近づいている。今までも仲は良かったが今の二人の姿は本当に仲の良い姉妹といった雰囲気である。

時にはマリアが姉でアンナが妹のようであり、また違う時にはアンナが姉でマリアが妹のように見える。お互いに足りない部分を上手く補い、理想的な関係を築き上げつつあった。

「セルビナ王国で一二を争うほどの剣の腕を持ち、魔力も魔道士部隊一個小隊を軽く凌ぐほど持っているのに、旦那はいつでも真正面から平和主義を貫く……真の勇者とはああいった人の事を言うのでしょうねぇ」

ガイウスは侑人たちから視線を外さないまま、そんな事をしみじみと呟く。ガイウスの言葉を聞いたアンナも頷きながら誰に語り掛ける訳でもなく呟く。

「ユートと出会う前のわらわは、与えられた魔力という才能を、どう使えば効率よく敵を討ち滅ぼせるか常に考え、そして実践してきた。わらわの両手は血で染まっておる……」

アンナの独白を二人は静かに聞いている。クーラント魔国の姫としてグランツ帝国軍と血みどろの争いを演じてきたアンナの言葉は、二人の心に静かに、そして深く響く。

クーラント魔国の姫君であるアンナが学んできた歴史は、クーラント魔国はいきなり国土の半分を奪われた被害者であり、グランツ帝国は奪った加害者というシンプルな構図で成り立っている。ハルモ教法王庁教圏国家群もそのきっかけを作った敵対勢力として描かれている。

アンナ以外のクーラント魔国民もそんな構図を何の疑いも無く信

じ、クーラント魔国からほとんど出る事が無いクーラント魔国民にとっては、それが唯一にして絶対の歴史であった。

「しかしユートは自分一人で考え、自分なりの勇者の解釈を見つけた。わらわには衝撃だった」

アンナは侑人と出会って大きく変わった。

ハルモ教の黒髪の勇者としてマグナマテルに召喚されながら、決して周囲の考えに流されない侑人の姿を見てきたアンナは、自分で考える事の尊さを学んだのである。

今までのアンナは、クーラント魔国とグランツ帝国の歴史は争いだけでしか解決できないと考えていたが、最近はその考えが変化している。平和的に解決出来る道筋もどこかにあるはずだと真剣に考え始めていた。

「ユートのすごい所はそれだけではない。自分自身で見つけた新たな解釈を信じ行動に移しておる」

侑人はマグナマテルに住む全種族が、平和な生活を得て繁栄する世界を作り上げる事が自分に与えられた使命と捉え、それに向かって行動を開始している。

そして平和的な解決という手段のみを選択して成果を挙げている。手段を選ばす成果を挙げる事を考えてきたアンナにとってはこの事も衝撃だった。

「手段を限定して成果を挙げる事が出来るユートは、本当に真の勇者かもしれんの」

アンナの言葉を聞いたガイウスは、先ほどと変わらない姿勢のまま静かに頷いているが、マリアは何故か少し難しそうな顔をしてい

た。

ティルト村のリビングで侑人自身が語った、私は勇者では無いと言った言葉がマリアの頭の中に響き渡る。あの時のマリアは侑人の言葉を肯定し、今でもその思いは変わっていない。

「ユートは真の勇者なんかじゃないよ。ユートはユート……他の人よりマグナマテル全体の事を真剣に考えられる大人の男の人。ただそれだけ」

マリアの言葉を聞いたガイウスは思わず振り返る。アンナも少し驚いたような顔をしてマリアを見つめている。

「私も最初はユートの事を勇者だという目で見ていた。でもそれは間違いだと気が付いたの」

侑人は自分の立場をわきまえた振る舞いをする事はあるが、それは周りの人に余計な気を使わせない為の行為である。

自分が勇者である事を周囲に認めさせる為に勇者として振舞った事など一度も無い。侑人の側で常に侑人を見続けてきたマリアにはその事が良く判っていた。

「私はユートの事をユートとしていつでも受け止めてあげたい」

先ほどまで馬車の中で侑人の事を案ずる事しか出来なかった、か弱い少女の姿はもう無い。今ここに居るのは侑人の事を真に理解し、侑人を全部受け止められるだけの広い器量を持った大人の女性であった。

侑人が自分の考えを曲げず、真正面から平和主義を貫き続けていけるのも、自分を真に理解してくれているマリアという存在が後押ししてくれているからである。

マリアの本質に触れたアンナとガイウスは、侑人がマリアの事を一番気に掛けている理由が理解出来た気がした。

「世界の為に何かを出来る人が勇者と呼ばれる人であって、ユート個人を指す言葉じゃないと思うの。だからユートは真の勇者じゃなくて、その前に一人の人間のユートなんだよ……何か上手く伝えられなくてごめんね」

最後にそんな言葉を付け足してマリアは悪戯っぽく微笑む。

その姿を見たガイウスはひどく感心した表情でマリアを見つめ、アンナは頷きながらマリアの肩を何度も叩いて嬉しそうに笑っている。

「旦那がマリアに対して、他の誰よりも心を開いている理由がよく判った気がするっす。マリアは旦那の事を一個人としてちゃんと見ているんですね」

「ユートはユート……確かにその通りじゃな！　わらわも黒髪の勇者がユート以外の人間なら、ここまで影響は受けなかったはずじゃ！　さすがユートの未来の妻は言う事が違うの！」

「誰がユートの奥さんなのよ！」

「未来と付けたはずなのじゃが……実はもう結婚してしまったのかの？」

マリアは真っ赤な顔をして否定している。アンナは照れるマリアをさらにからかい、ガイウスも話しに混ざってくる。

「馬車に入る前は深刻そうな顔をしていた旦那が、馬車から出てきた時に人が変わったように落ち着いていたのは、やはりマリアの愛の力が成せる技って事ですかねぇ」

「そうそう！　そうなのじゃ！　馬車の中でユートとマリアは、わらわの目の前で静かにみ「アンナは黙っててー！」」

ガイウスに対して馬車の中での出来事をばらそうとするアンナの言葉を、マリアが慌てて遮る。しかしそんなマリアの態度がアンナの悪戯心をくすぐる。

「何を照れておるんじゃ？　わらわは真実のみを話そうと思っているのじゃが何か不都合でもあるのか？　わらわの前であれだけ堂々としていたのじゃから、ガイウスに話しても問題は無いと思うがの」
「俺だけ仲間外れか……さみしいなぁ……」
「そういった意味じゃなくて！　ああもう！　察してよ！」

マリアはすでに耳まで真っ赤になって照れている。
アンナはそんなマリアを慰めるように抱きしめ、優しく頭を撫でながらとても良い笑顔でマリアに止めを刺す。まさに確信犯である。

「マリア……からかって悪かったの。ユートと抱き合ってた事はガイウスには内緒にしてあげるから安心せい」
「なるほど……抱き合っていたんすか。キス位はしました？」
「ユートはヘタレじゃからさすがに無かったわい」
「旦那もマリアも奥手っすからねぇ」
「ふーたーりーとーもー！　いい加減怒るわよ！」

今までの深刻そうな雰囲気はどこにも無く、いつも通りの平和な三人の姿がそこにはあった。

「ハックション！　あ……すみません。失礼しました」

イーヴォ将軍と会話を続けていた侑人は、突如感じたクシャミの衝動を抑えられず、思いっきりクシャミをしてしまう。

「誰かが噂でもしているのでは？」

「この世界でも噂をされるとクシャミが出ると言われているのですか？」

「あ、ああ。本当か嘘かは判らんがそう言った話はあるぞ」

「おおーなるほど。まあ本当か嘘かはさすがに判りませんよね」

イーヴォ将軍は無意識に話し掛けてしまった内容に対して、興味深く質問をしてくる侑人の姿に少し動揺をしている。しかし侑人はそんな将軍の姿を全く気にしていない。

「その他にこの世界にはどんな迷信があるんですか？」

「そうだなぁ……俺が知ってるのは……」

先ほどまでの少し緊迫した雰囲気とは打って変わって、マグナマテルに伝わる迷信の話で盛り上がる侑人とイーヴォ将軍。

侑人は興味津々の姿であり、イーヴォ将軍もまんざらでは無いような雰囲気である。そしてグランツ帝国兵達は、そんな二人の姿を呆気に取られた顔でただただ見つめている。

「家の戸口に馬蹄をつけると家内安全であるという話もあるな」

「ほうほう……」

「ウサギの後ろ足が魔よけのお守りになるという話を年寄り連中か

ら聞いた事がある。というより持たされそうになって丁重にお断りしたんだ」

「そのお気持ちは良く判ります。さすがに持ち歩くのには勇気が必要かもしれませんね」

イーヴォ将軍はすでに騎馬から降りて地面にあぐらをかきくつろいでいる。

侑人もイーヴォ将軍の前にあぐらをかいて座り込み、身振り手振りを交えて親しげに話し掛けていて、先ほどの交渉の様な雰囲気はすでに微塵も無い。

国の要人同士の話し合いというより、親しい同僚が休憩時間に雑談をしているとしか見えないこの状況を、グランツ帝国軍の兵士達はどう受け止めて良いのか判らず、唖然とした顔で見つめている。

そんな空気の中、とりあえず現状をどうにかしないと色々とまずいと判断した一人の男が、侑人とイーヴォ将軍の方へ向かって歩いて行く。

「盛り上がっているところ申し訳ないのですが、談笑するなら軍を移動させた方が良いと思うのですがいかが致しましょう？」

イーヴォ将軍の副官は周りを見渡すような素振りをしながら少し困った顔をして二人に話し掛ける。その動きに釣られた二人が周囲を見ると、街道を通り抜けたい商人のキャラバン隊が少し迷惑そうな顔をしてこちらの様子を伺っているのが目に映る。

グランツ帝国兵達はすでに半日ほどここで陣を張っている。その為街道は封鎖された形になっており誰一人として通過出来て居ない。

「このままでは迷惑が掛かりますね……こっちに移動しましょうか」

「そうだな」

侑人はイーヴォ将軍を引き連れて街道から少し離れた所に移動する。グランツ帝国兵も妙な展開になったと思いながらそれに習って移動を開始する。

十分後には街道の封鎖は解かれ、半日ほど足止めされた数組のキャラバン隊が足早に街道を通過していく。侑人はキャラバン隊に向かって頭を下げ彼らを見送っていた。

「旦那は何をしているんですかい？」

「何をと言われましても、迷惑を掛けたのでせめてお見送り位はしようかなと思いまして」

侑人達が移動するのを見たガイウスは馬車を侑人の側まで移動させ、侑人に対してそんな質問をすると、侑人からは相変わらずな返答が返ってくる。

「旦那らしいと言えば旦那らしいとは思いますが、結局なんでグランツ帝国軍が待ち構えていたのか聞いたのです？」

「そういえばそうでしたね……なんで私達を待ち構えていたのです？」

「皇帝陛下から黒髪の勇者殿を帝都まで連れてくるように命令を受けたのだが、面倒な条件が付けられてしまってな。それを何とかしようとしてここで待ち構えていたのだ」

急に質問を振られたイーヴォ将軍は、思わず本当の事を侑人達に話してしまう。長々と雑談をした事により、イーヴォ将軍は侑人に対して心を許してしまっていたのだが、皇帝の命を受け任務を遂行する者の行動としては大失態である。

グランツ帝国兵達は皆一様に苦笑いをしている。こういう状況になってしまったらもはや策を弄してもどうしようもなく、黒髪の勇

者である侑人に全てを話して助力を得るしか道は無い。そんな空気があたりを漂っている。

「もし宜しければ何があったのかお聞かせ願えますか？」

「わかった。全て正直に話すから、もし良ければ助力を願いたい」

イーヴォ将軍は侑人に向かって静かな口調で何があったのかを語り始めた。

「皇帝陛下から黒髪の勇者殿を帝都までお連れするように、直々に命令を受けたという所までは話してあったな」

「ええ、そこまでは聞いています。何やら厄介な条件を付けられたというところで話は止まっていますね」

イーヴォ将軍は少し疲れたような顔を侑人に見せ軽く溜息を付いている。

侑人はそんなイーヴォ将軍の姿を見て、将軍という役職も華やかに見えて、実は中間管理職のような悩みを抱えているのだななどと考えていた。

「厄介な条件というのはな、黒髪の勇者殿を我が国が帝都にお迎えする形ではなく、黒髪の勇者殿から帝都に赴きたいと請われる形式を取る様にと言われたのだ」

「要するに私が帝都に行きたいと言い出す状況を、どうにかして作り出せと言われたのですね？」

「そういう事だ。黒髪の勇者殿は我が国の国民にとっても特別な存在であるから、本来なら国賓として招いても良いのだが今は状況が悪い。先の戦争で黒髪の勇者殿お一人の力で、我が国は撤退に追い込まれたという噂は国中で囁かれておる。この状況で国賓として招

き入れると、こちらから頭を下げて招き入れたなどという噂が立ちかねんのだ」

「国内の統治に悪い影響が出るのを未然に防ぐ為の措置という訳ですか……」

そこまで話を聞いた侑人はある事に気が付く。

今までの流れがすべて台無しになりそうな考えではあるが、これを聞かないと話が先には進まない。イーヴォ将軍が怒らなければ良いのだが。

「それならば私を帝都に招かなければ良いだけの話では？」

「それを言われてしまうとそうなのだが、皇帝陛下は黒髪の勇者殿とゆっくり語り合いたいと仰っているのだ。ハルモ教法王庁教圏国家群では皇帝陛下の事を血も涙も無い冷酷な男と評しているようだが、我々グランツ帝国民にとっては真に民を思う名君なのだ」

イーヴォ将軍はフリードリヒ皇帝を心酔している。大多数のグランツ帝国民も将軍と同じ評価であり、皇帝の国内を統治する能力は高いようだ。

「大きな声では言えないが、皇帝陛下のお考えは黒髪の勇者殿の考えに共通する部分があるらしく、一回腹を割って話し合ってみたいと仰っておるのだ」

「なるほど。イーヴォ将軍もなかなか面倒な命令を受けましたね」

「そうなのだ……判ってもらえて非常にありがたい」

腹を割って話し合いたいというフリードリヒ皇帝の申し出は、侑人にとって願っても無いチャンスである。一応セルビナ王国に籍を置く侑人が、ハルモ教法王庁教圏国家群と敵対する国家の長と話し合いをする機会などそう多くは無い。

今回の話し合いをきっかけにして良い方向に事態が進めば最高の展開ではあるが、そうはならなくても敵対する国家の考えを聞く事はプラスになるはず。侑人はそんな事を考えていた。

「イーヴォ将軍。私に一つ考えがあるのですが聞いてもらえますか？」

「おお？　何か名案でも考え付いたのか？」

侑人はイーヴォ将軍の問いかけに対して、名案かどうかは判りませんがと言いながら、自分の考えを語る。その考えはここ最近侑人が悩んでいた事とも大いに関係があった。

「グランツ帝国の帝都には、クロウ・ミナトの墓がありますよね？」

「国の重要施設としてグランツ帝国軍が厳重に管理しているが、クロウ・ミナトの墓がどうかしたか？」

「グランツ帝国の基礎を築いたクロウ・ミナトの墓ですから、しっかりと管理しているとは思っていました。その上で質問なのですが、クロウ・ミナトの墓は誰でも簡単に訪れる事が出来るものなのでしょうか？」

「一般人はおろか、グランツ帝国軍に所属する者でも、めったに立ち入る事は許されていない。フリードリヒ皇帝が即位する前は評議員に選ばれた者が、宣誓をするために訪れていたと聞いているが、近年は厳重に封鎖されて誰も中に入っていないな」

イーヴォ将軍の言葉を聞いた侑人は、にっこりと笑い掛ける。

国の礎を築き上げたクロウ・ミナトの墓がおざなりに管理されていたのならどうしようもなかったが、しっかりと管理されているなら話は早い。

「先代の勇者であるクロウ・ミナトの墓を、私は見てみたいのです」
「他国の人間が立ち入る事を禁じられているからそう簡単に……なるほど、そういう事か！」

クロウ・ミナトの墓を訪れる許可を得るために、侑人自らが帝都に赴くという体裁を取れば、皇帝の権威を傷つける事は無い。
黒髪の勇者である侑人が、先代の勇者であるクロウ・ミナトの墓を訪れる事を望んでいるという理由付けは、万人が納得できるものであり疑いを抱くものは誰も居ないはずである。

「さすがはユート殿だ！　頭のつくりが違う！」
「おだてても何も出ませんよ？」

侑人とイーヴォ将軍はお互いの立場を忘れたかのように親しげに話し続けていた。

「一つ聞きたい事があるのですが良いですか？」

親しげに話し込んでいる侑人とイーヴォ将軍に向かって、少し真剣な顔をしたガイウスが割り込んでくる。

「内容にもよるが出来るだけ答える様に善処しよう」
「イーヴォ将軍もこう仰ってますし、良いのではないですか？」

二人の許可を得たガイウスは、少し改まった顔をしながらイーヴォ将軍を見つめ、静かに質問を切り出す。

「旦那から帝都に行きたいと言わせようとしていたのは理解できました。では何故街道に兵を配置して迎え撃つような真似をしたんですか？」

ガイウスの言葉を聞いたイーヴォ将軍は少しばつの悪い顔をしている。

悪戯が見つかってしまった子供のような仕草をするイーヴォ将軍の姿を、ガイウスは真剣な表情で見つめ続けている。

「今考えれば非常に浅はかだったが、兵を配置して警戒する姿勢を見せれば、黒髪の勇者殿から攻撃を仕掛けて来るかなと思ってな…こちらが攻撃を一回受けた上で協定を盾に取って、謝罪の為に帝都に行ってもらう流れが作れればなどと考えたのだが、黒髪の勇者殿の人柄を知っていればこんな事はしなかった。失礼な事をして申し訳なかった」

ガイウスに対して軽く頭を下げ謝罪するイーヴォ将軍。そんな将軍の姿を見たガイウスはかなり慌てる。

「頭を下げないで下さい将軍。互いに策を弄するのはよくある話で、悪い事でも何でもありません。ただ少し気になったから聞いただけで他意は無いですから」

「そう言って貰えるとありがたいな。まあ弄した策が大失敗だったから威張れる事では無いんだがな」

そんな事を言いつつ豪快に笑うイーヴォ将軍。グランツ帝国兵も将軍と一緒になって笑っている。彼らが強い信頼関係で結ばれているのが一目で判る光景である。

ガイウスはそんなグランツ帝国軍の姿を見ながらある事を考えている。

ガイウスは今まで生きてきた中で、たかが他国の一衛士に頭を下げる将軍など見た事も聞いた事も……一人だけ心当たりがあった。
ガイウスはその人物の顔を何となく見つめる。

「ん？　私の顔に何か付いています？」
「いや……なんでもないっす」

ガイウスの頭の中で、どこまでも真っ直ぐな自分の主の侑人と、剛健実直で馬鹿正直なイーヴォ将軍の姿が重なって見える。

「イーヴォ将軍がこんな性格だったとは……心配して損した気分っすよ」

ガイウスの小さな呟きは街道を吹く風に流されて、誰にも聞かれずに消えていった

第３７話：勇者の定義（後書き）

おっさんキャラが大好きです。

第３８話：侑人の失敗

侑人達一行はグランツ帝国軍の精鋭部隊に護衛されながら、グランツ帝国の帝都へ向かって進んでいる。御者の役目はグランツ帝国兵士が引き受けてくれた為、ガイウスも馬車の中でゆっくりとくつろいでいる。

突然の状況の変化にマリアは少し不安そうな顔をしているが、侑人やガイウスは平然とした表情で、のんびりと馬車の旅を楽しんでいる様に見え、マリアはそんな二人を少し呆れたような顔で見つめている。

「ユートと一緒に居ると驚いてばかりいる気がするよ」
「驚かされる前提の心構えを常にしておくと案外平気っすよ」
「私の事を何だと思っているのですか……」
『一般人の想像を遥かに超えたお人好しってところかの？』

アンナのどこが一般人ですかと突っ込みを入れようか悩んだが、余計な波風を立てても仕方ないだろうと侑人は判断し、アンナの言葉を聞き流す。

ちなみにアンナは念の為に侑人の中に入っている。今のところグランツ帝国軍に不穏な動きは無いが、アンナがクーラント魔国の姫君だと気が付いた後の行動までは予測出来ない。

アンナは侑人とイーヴォ将軍がやり取りをしている時に、馬車から顔を出して様子を伺ってはいたが、基本的には馬車の外には出て

はいない。
　プロセン王国防衛戦の際にもアンナは侑人の中に入っていたので、黒髪の勇者に付き従う赤髪の亜人族の従者の存在は、普通であればイーヴォ将軍達には気が付かれていないはずである。

　一人減った事に気が付かれていなければそのまま放置し、もし質問されても白を切れば何とかなるだろうと侑人達は判断し、何食わぬ顔をして平静を装っているが、内心はかなりどきどきしていた。

「ユート殿、お時間を少しだけ頂いても宜しいか？」
「あっはい！　何でしょうか？」

　馬車の外から侑人を呼ぶ声が聞こえる。侑人は突然の呼びかけに少し慌てながらも、表面上は平静を装って馬車の窓から顔を出す。
　馬車の窓から顔を出した侑人の目には、騎馬の上で豪快な笑顔を見せる、とても上機嫌なイーヴォ将軍の姿が映る。

「これから帝都に入るのだが、ユート殿に一つだけ忠告をしておかねばと思ってな」
「忠告……ですか？」

　イーヴォ将軍は侑人にそんな言葉を掛けると、慣れた手つきで騎馬を馬車に近づけて小声で囁く。

「ユート殿が連れている従者ですが、帝都に入ったらもう少し目立たないように行動をするように、しっかりと言っておいて下さい。今のところ皇帝閣下と私、そして諜報部隊に所属する一部の者の間で情報を止めていますが、万が一従者の正体がばれると面倒な事になりますので」
「従者の正体ですか……」

イーヴォ将軍の言葉を聞いた侑人はそう答えるのが精一杯であった。イーヴォ将軍の言葉の中に『クーラント魔国』や『アンジェリーナ』の単語は入っていないが、話の流れから誰の事を指しているのか一目瞭然である。

この状態でどうやって切り返せばよいのか悩みながら、冷や汗をかいている侑人の脳内で、アンナが諦めたような言葉が響き渡る。

『すでにばれておったな』

『国家の諜報力を甘く見すぎた私の失態ですね』

現在のグランツ帝国はプロセン王国と停戦し、クーラント魔国と休戦状態ではあるが、つい先日までクーラント魔国とプロセン王国の二国と戦争状態であった。二国と同時に戦争を行っていたグランツ帝国にとって、諜報力は武器でもあり生命線でもある。

他国にも数多くの諜報部隊を派兵しているが、国内の情報の管理はさらに徹底している。少しでもおかしな動きがあれば、フリードリヒ皇帝の耳にすぐに伝わる体制が整えられていた。

黒髪の勇者がグランツ帝国に入国したとの情報は即座にフリードリヒ皇帝の耳に届き、皇帝の命令により侑人達の調査は徹底的に行われている。諜報部隊の隊員は帝国内のあちらこちらで一般人を装い、二十四時間体勢で侑人達を監視していたのだ。

アンナが一度も侑人の体から外に出なければ、どう考えてもばれようが無いのだが、入国した初日の宿屋や旅の道中ではフードは被っていたとはいえ、アンナは比較的自由に行動をしていた。何の技量も無い一般人相手には通用するかもしれないが、情報を扱うプロである諜報部隊の隊員から見れば、下手な変装など余計に目立つだけである。

今思えば無防備すぎる行動であったと侑人は反省をしたが、こうなってしまったらすでに後の祭りであった。

『こやつの話を信じれば、わらわの正体をばらして大事にしようという意思は無いと言う事になる。こうなっては仕方がないし、なるようにしかならんじゃろ』

『確かにそうですね。とにかくアンナは暫く私の中に居て下さい』

『了解じゃ』

アンナとの脳内会議を終わらせた侑人はイーヴォ将軍に向かって少し頭を下げる。

イーヴォ将軍の真の目的は判らないが、忠告を受けているかどうかで今後の心積りが全く変わる。少なくとも色々と準備を整える事は出来そうだ。

「お心使い感謝します。完全に目立たない方法でその従者を連れて行きますので、将軍もご安心下さい。とりあえず今後表向きには、私達は私を含めて三人組みという事にしておいて下さい」

「了解した。とりあえず客間は一人用を二部屋と二人用を一部屋用意させるので、上手く立ち回って頂けると助かる。もちろん食事もな」

「色々と心を配ってくれて助かります」

「なんのなんの。ユート殿には自分も助けて頂いている。これしきの事は同然と思ってくれて良い」

イーヴォ将軍はそう言うと侑人に向かって、にかっと笑う。その笑い顔は豪快ではあるがどこか優しい雰囲気を感じさせ、イーヴォ将軍の人柄の良さを如実に表しているようである。

そんなイーヴォ将軍の姿を見た侑人は将軍に対して非常に好感を

持つ。そんな侑人の態度に少しだけ危機感を持ったアンナは、侑人に向かってかなり真剣な口調で忠告をする。

『ユート、全てを信用するのはまだ早いぞ。クーラント魔国との戦闘においてわらわを人質に取るのは非常に有効な手段のはずじゃ。フリードリヒがまだその手札を持っていることを忘れるな』

『私もそれは理解していますよ。グランツ帝国の帝都に招いたところで我々を指名手配するような策を取られると、さすがの私達も逃げる事は出来ないでしょうね』

『なんじゃ……案外冷静なんじゃな』

『当たり前ですよ。私一人だけならまだしも、今の私は三人の命を預かる立場です。自分の成したい事の為に皆の命を危険に晒すわけには行きません。とりあえずこのイーヴォ将軍との会話を利用して、少しグランツ帝国に対して釘を刺すことにします』

侑人は脳内会話でアンナにそう伝えると少し姿勢を改めてイーヴォ将軍の目を見据える。

そしてイーヴォ将軍に向かって静かに話し掛けるのだが、侑人の声は穏やかな響きの中に少しの警告を含んでいた。

「私達が今回旅をしている事は、セルビナ王国のカルロス王や宰相アルクィンをはじめとした、ハルモ教法王庁教圏国家群の重鎮達に報告済みです。私の立場上そうしないと国外に出る事が許されませんので、前もって色々と相談をさせて貰っています」

「ユート殿の立場を考えれば当たり前の事ではあるな」

イーヴォ将軍は軽く頷きながらそんな返事をする。

通常の兵士でも行動制限を受ける事は当たり前であり、ハルモ教法王庁教圏国家群の象徴である黒髪の勇者の行動が、色々な制約を

受けているという話は信じるに値する内容である。

「その中で一つだけ条件を付けられています。その条件とは他国の重要施設に招かれて入る場合、入る前に書状をしたためて状況を報告しろという内容です。帝都に到着した際に早馬の手配をして頂いても宜しいでしょうか？」

侑人はイーヴォ将軍の目を見続けて、どんな小さな表情の変化も見逃さないように注意深く観察する。

人間の感情の変化は目に出やすい。本格的な訓練を受けた人間以外は、どんなに気をつけても都合が悪い内容を聞かされると目が泳ぐものである。

ちなみに侑人がイーヴォ将軍に語った内容は全て嘘である。今回の旅をするに当たってカルロス王達に旅の趣旨を書き綴った書状を送ったが、返事を貰うような段取りは取っていない。

カルロス王からは自由に行動をして良いというお墨付きを出陣当初から貰っていた為、今回の出立に関して特に問題など無かった。

侑人はグランツ帝国にとって都合が余り良くない内容をわざと聞かせ、その反応から真意を探ろうと考えたのである。

「うーん……」

イーヴォ将軍は下を向いて少し考えている。そんな将軍の姿を見た侑人は少し警戒感を持つ。帝都に招かれる事は予想以上に危険な事なのかもしれない。そんな考えが頭に浮かぶ。

やがてイーヴォ将軍は侑人の方に向き直りある提案をするのだが、その内容は侑人の予想を大きく裏切るものだった。

「帝都に戻ってから書状を書くと、セルビナ王国に書状が到着するのがその分遅れるので、もしユート殿が良ければ今ここで書いた方が効率的だと思う。ユート殿が書き終えたらそのままプロセン王国の防壁まで部下に届けさせる」

「そこまでして貰っていいのです？」

「構わん。対外的にはユート殿が皇帝陛下にお願いをする為に赴く形になっているが、本当はこちらが国賓として招いているも同然の事。その位の事はさせて頂きたい」

「あ……ありがとうございます」

侑人の謝礼の言葉を聞いたイーヴォ将軍は即座に馬車を止め、部下に便箋と封筒そして封蝋を用意させ侑人に手渡す。

自分で言い出してしまった事とはいえ特に書く事が無い侑人は、暫く頭を悩ませてカルロス王に向けた書状をしたためるのであった。

「グランツ帝国の帝都って聞いていたから、凄く派手な大都市かなと勝手に思っていたけど、結構控えめな町並みなのね」

「確かにそうっすね。プロセン王都のほうがどっちかと言えば派手かもしれませんね」

グランツ帝国軍に護衛されながら帝都に到着した侑人達一行は、そのまま皇帝が待つ城に向かってゆっくりと進んでいく。

ガイウスとマリアは馬車の窓から顔を出し、帝都の町並みを興味深く観察している。グランツ帝国の帝都の町並みは整然と区画割りされてはいるが、二人が想像するよりもずっと簡素である。

「これが八百年以上戦争を続けてきたグランツ帝国の現状だ」

二人に向かって話し掛けるイーヴォ将軍の表情は少しの曇りも無く、むしろ晴れやかな表情をしている。

「皇帝陛下は自身の権威を高める事には全く興味がない。そんな物に予算を回すなら民の生活の為に予算を回す……そんなお人なのだよ」

思わず二人は侑人の方に向き直る。

イーヴォ将軍の語るフリードリヒ皇帝の人物像は、そのまま侑人に当てはめても違和感が無い。侑人がグランツ帝国の皇帝だと言われても思わず信じてしまいそうになる位だ。

「どこかの国王と、どこかの相談役みたいなお人柄なんすね。セルビナ王国の王城も華美な装飾は一切無いですからね」

「噂で聞いていた人柄と違って結構良い人なのね。なんか少し安心したかも」

「何で私を見るのですか……」

『いまさら何を言っておるのじゃユートは……』

そんな普段通りの会話を皆としながらも、久々に会うフリードリヒ皇帝からどんな話を聞かされるのか、一抹の不安を隠せない侑人であった。

第３８話：侑人の失敗（後書き）

策士策に溺れる。そんな事もたまにはあります。

第３９話：勇者と皇帝

土の月の第二週の三日。侑人とマリアとガイウスの三人はフリードリヒ皇帝と面会をする為、イーヴォ将軍に先導されてグランツ帝国の城にある謁見室へと向かい歩いている。

侑人達の足取りは周囲から見てもかなり重い。この後に確実に訪れるフリードリヒ皇帝との面会が、侑人達の足取りを鈍くしている。

「はぁ……一体どうなる事やら」

侑人は周囲に聞こえないような小さな声でそんな事を呟く。イーヴォ将軍の頼みを安請け合いした事に対して今更ながら後悔し始めている。

侑人はフリードリヒ皇帝と会話をした事がありお互いに面識があるのだが、皇帝の思惑をいまだに掴みきれていない為、若干緊張した顔をしながら歩を進めている。

昨晩寝る前に皇帝の質問に対してどのような返答をすればよいのか、様々な状況を想定してみたのだが、皇帝が何を問いかけてくるのか全く予想がつかない為、事前の回答を用意出来ず、試験勉強を全くしていない学生のような心境になっている。

事前に状況を予測できないという事は、相手の言葉を聞いた瞬間の、その場の思考の瞬発力が大きく物を言う。たとえ同じ意味合いの言葉であっても言い方を間違えば相手に与える印象は大きく変わ

る。

同じ意味合いの言葉でも、肯定の意味が大きく捉えられる場合もあれば、逆に否定的に捉えられる事もある。少しのニュアンスの違いが時によって大きく状況を変化させる事を、侑人は過去の経験から嫌というほど知っている。

『相手は百戦錬磨のフリードリヒじゃからな……ここまで来るとわらわは頑張れとしか言えぬ』

『その言葉だけでも非常にありがたいですよ』

王族であるアンナは、今回の侑人とフリードリヒ皇帝面会がマグナマテル全体の政情に与える影響の大きさを何となく把握している。

クーラント魔国の姫君として公的な会議に何度も参加していたアンナは、発言する者の立場とその時の状況が、同じ意味合いの一つの言葉を重くしたり軽くしたり、時には逆の意味を持たせたりする事を知っている。

侑人の立場は公的には特に権限の無いセルビナ王国相談役ではあるが、グランツ帝国にとってはハルモ教法王庁教圏国家群の象徴と言っても過言で無い存在である。

仮にハルモ教法王庁教圏国家群から派遣された使者が侑人と同じ発言をしても、グランツ帝国に与える影響の大きさは全く比較にならない。

それだけで無くグランツ帝国の礎を築き上げたクロウ・ミナトも、侑人と同じハルモ教法王庁教圏国家群に伝わる黒髪の勇者である。黒髪の勇者という存在は、この国ではハルモ教法王庁教圏国家群以上の意味合いを持っている。

これだけの状況が揃ってしまうと、侑人がただの一個人としてフリードリヒ皇帝を表敬訪問しました……などという言い訳は成り立

たない。

自分の返答次第で状況が大きく変化する事も考えられる今回の事態は、さすがの侑人でも少し荷が重かった。

「わたしってこの場に必要なのかな？」

「それを言われると俺も必要なのかって話になるんですか……」

フリードリヒ皇帝と面識が全く無いマリアとガイウスの表情はもっと硬い。侑人に付き従うようになってから、ハルモ教法王庁教圏国家群に属する国王や重鎮達と会う機会が増え、そういった事柄に対しては多少の免疫が出来てはいたが、つい先日まで敵対していた国の長と会う事など今までに一度も経験した事が無い。

どう考えてもこの場に居合わせること自体が場違いではないかと思える。侑人には申し訳ない気がするが、この場に同行しない方が何の問題も起きないような気がしてならない。

基本的には侑人に任せておけば問題無いはずなのだが、そうは言っても普段通りに適当にその場に居合わせて時間を潰している訳には行かない。

カルロス王やアルクィンの前ならそれも許されるのだが、今回の相手はグランツ帝国のフリードリヒ皇帝である。

「とにかく丁寧に挨拶する事しか思いつかないよ」

「マリアなら大丈夫っすよ。問題は俺っす……」

二人の緊張感はどんどん高まっていく。考えれば考えるほど最悪の状況を招いてしまう自分達の行動が、かなり具体的に想像出来る。

もし万が一フリードリヒ皇帝の機嫌を損ねるような失態を演じてしまえば、一気に国際問題へと発展してしまう恐れがある。

国政や外交といったものと全く無縁に育ってきた一般人の二人にとって、今から始まるフリードリヒ皇帝との話し合いは未知の世界であり想像すら付かない。

最初の挨拶だけ丁寧にして、その後はずっと黙って成り行きを見守ろうと二人は内心決意していた。

「ユート殿達は実際には国賓扱いですからそんなに硬くならなくても……まあ、つい先日まで戦争をやっていた敵対国の本拠地に赴く緊張感は判らんでもないがな」

イーヴォ将軍は硬くなっている侑人達の姿を見て豪快に笑う。裏表の無さそうなイーヴォ将軍の姿を見ている三人に少しだけ心の余裕が生まれる。

帝都に到着してからの侑人達の心の拠り所はこの男のみと言っても過言では無い。事実イーヴォ将軍は侑人達の為に色々と心を配ってくれている。

将軍は約束を守り、侑人達を表向きは三人として扱ってくれていた。しかもどうやって周囲の人達の疑問を押さえて辻褄を上手く合わせているのかは謎だが、実際には四人居る侑人達に不都合が出ないように、全ての物を四人分手配していた。

侑人達の世話をするグランツ帝国の従者達に、疑問や戸惑いの姿は感じられない。内心は色々と思うところはあるのかもしれないが、侑人達にそれを感じさせるような事は一切無い。

侑人はイーヴォ将軍の指示が末端までしっかりと伝わっている事を肌で感じ、グランツ帝国に所属する人材の優秀さと規律の取れたその姿に深く感心していた。

『わらわも信じたいのは山々だが、イーヴォ将軍のこの姿もフリードリヒの指示という事も考えられる……ユートなら大丈夫だとは思うが油断だけはしないようにの』
『アンナの忠告はしっかりと心に留めます』

アンナはグランツ帝国の帝都に着いてから、一見すると過剰とも思えるほど周囲を警戒している。今までの自由奔放な姿はなりを潜め、全ての行動に対して細心の注意を払っている。
たとえグランツ帝国の人間が周囲に居なくても、ほとんど侑人の中から出てこない。アンナが姿を現すのは、部屋に届けられた食事を取る時とマリアと一緒の部屋で寝る時だけであった。

侑人がマリアから聞いた話なのだが、アンナは普段よりも朝早く起き、自分の寝床の周囲をくまなくチェックしているらしい。
自身の紅い髪の毛が寝ている間に抜け落ちていないか調べ、落ちていた場合は全て拾い集め、その場で火の魔法を使い焼却処分しているとの事である。

『わらわなりに色々考えて行動したつもりではあるが、もしこの後に迷惑を掛けたのなら……色々とすまんなユート』
『アンナは気を使いすぎです。私が何とかしますから安心して下さい』

『うむ……頼んだぞユート』
『私を信じて任せて下さい』

フリードリヒ皇帝やイーヴォ将軍には正体が既にばれてはいるが、現状ではその他のグランツ帝国に所属する軍人にその情報は回ってはいない。
皇帝達の意図が何を意味するのかいまだ不明確ではあるが、アン

ナは余計な問題を起こさない為にも細心の注意を払って行動をしている。

アンナの地道な努力に報いる為にも、この難局を上手く処理しようと決意する侑人であった。

「ユート殿、くれぐれも打ち合わせ通りに頼みますぞ」
「了解致しましたイーヴォ将軍」

イーヴォ将軍からそんな言葉を掛けられた侑人の脳裏に、一月ちょっと前のセルビナ王国のカルロス王との面会の茶番劇が不意に浮かぶ。

あの時はアルクィンの演技指導が色々と大変だったな……などと考え、思わずクスクスと思い出し笑いをしている。

「旦那のその余裕は一体どこから沸いてくるのですか？」
「凄く頼りがいがあるけど、そろそろ真面目な顔をした方がいいよ」
『緊張感が足りんぞユート』

傍目から見ていてかなりリラックスしている侑人の雰囲気を感じた三人は、半分頼もしく思いつつも、半分呆れながら同時に突っ込みを入れる。

そんな三人の言葉に対して侑人は『申し訳ありませんと』と答え、慌てて真面目な顔を取り繕うが、いまさら感がマリア達全員の間に漂う。

そんないつも通りの会話を繰り広げていた侑人達であったが、それを見ていたイーヴォ将軍は別の受け取り方をしている。

『どんな状況に置かれても最終的に状況を全て受け止め、自然体で

物事に取り組めるこの姿……八百年に一度しか現れないという黒髪の勇者に相応しい胆力の持ち主だな』

イーヴォ将軍はもし自分自身がこの状況に置かれた場合、自然体で笑える自信が無かった。この後に訪れる状況をあれこれ想像し、ガチガチに緊張しているであろう自分の姿を思い浮かべている。

少なくともこの横に控えている黒髪の男のような振る舞いをする自信は無い。侑人の行動は特に意図した訳では無かったが、イーヴォ将軍に尊敬の念を与えていた。

「黒髪の勇者殿ご一行、ご入場でございます」

フリードリヒ皇帝の待つ謁見室を守る衛兵の言葉を合図にして、侑人達の目の前にある重厚な門が左右にゆっくりと開いていく。

その門を静かに見つめる侑人の背中を、マリアとガイウスは期待に満ちた目で見つめている。様々な難局を乗り越えてきた侑人に対する期待は大きかった。

「セルビナ王国相談役のユート・コサカと申します。この度は皇帝陛下との面会がかない、恐悦至極に存じております」

フリードリヒ皇帝との対面は侑人のそんな言葉を皮切りにして始まる。フリードリヒ皇帝は少し目を細めながら侑人の様子をつぶさに観察している。

「遠路はるばる我が国までよくぞ参られた。帝国を代表して黒髪の勇者殿を歓迎しよう。最初に一つ確認しておきたいのだが、今回は

どういったお立場での訪問に当たるのかな？」
「どういった立場と言われますと？」

「ハルモ教法王庁教圏国家群を代表する黒髪の勇者としてのお立場なのか、はたまたセルビナ王国相談役としてのお立場なのか、そういったものとは無関係の個人としてのお立場なのか……まず始めにはっきりさせておいた方が良いかと」
「なるほど……」

侑人はフリードリヒ皇帝が問い掛けている質問の意味を察する。侑人の立場によって侑人の発言の重さは大幅に変わり、侑人に対するフリードリヒ皇帝の対応も色々と変えざるを得ない。

もし侑人がハルモ教法王庁教圏国家群を代表する黒髪の勇者の立場として、グランツ帝国を訪問しているのであるならば、最初の挨拶の文言は非常にまずい。

ハルモ教法王はフリードリヒ皇帝をいまだに皇帝として認めていないのだが、侑人がその方針を勝手に転換し、公式の場でグランツ帝国に告げた事になる。

セルビナ王国相談役としての立場として訪問していても、最初の挨拶のまずさは変わらない。カルロス王の名代としての発言とみなされ、セルビナ王国が公式に皇帝の立場を認めたとみなされる。

そうなるとカルロス王がハルモ教法王から破門される可能性が出てくる。そうなるとセルビナ王国の治安が一気に悪化し、国民生活に多大なる影響を与えかねない。

侑人が個人としての立場で訪問しているのであれば、先ほどの挨拶も個人の考えという事になり、周囲に与える影響は少ない。せいぜいハルモ教法王とそれに近い者達の心証が悪くなるだけである。

さすがの法王も厳密にはハルモ教の信者で無い黒髪の勇者を破門する事は出来ない為、侑人個人としてはこの立場である事を表明するのが一番楽である。

しかしそうなると今度はフリードリヒ皇帝の面子に泥を塗る事になる。グランツ帝国は侑人たちを国賓として丁重に扱い、今回の会談も元々あった公式行事を先延ばしにし、最優先で場を整えている。一個人の訪問に対して過剰に対応した形になり、先の防衛戦で牙を抜かれた腰抜けの対応と言われてしまう可能性も有る。国内に与える影響は小さくは無いはずである。

「私はセルビナ王国相談役の立場としてグランツ帝国を訪問しました。しかし先ほどの挨拶はその立場を抜きにして、個人的に敬意を表する為にしたものです……そういった形ではいけませんか？」

「それが一番良かろう」

侑人の言葉を受けたフリードリヒ皇帝は少し感心したような表情でそう答える。最初の質問は黒髪の勇者である侑人を試す為に、わざと真意が判りにくいように聞いたのだが、目の前のこの男はそれを見抜いた。

フリードリヒ皇帝は、もし万が一にも侑人がまずい返答をしたのなら、それとなく穏便に訂正しようと考えていた。しかし侑人は自分の立場を守りながらグランツ帝国の面子を潰さない発言をほんの一瞬のうちに返した。

グランツ帝国に所属する文官の中に、これほどの返答を出来る者は殆ど居ない。卓越した外交能力を見せる侑人の姿を目の当たりにしたフリードリヒ皇帝は、侑人に対して非常に好感を持ったのである。

「合わせてお願いがあるのですが、この後に呼び方を変えるのもおかしな話ですので、ハルモ教法王庁教圏国家群の方針は別として、私個人が皇帝陛下と呼ぶ事をお許し願えますか？」
「勇者殿のお心のままに呼んで頂いて構わぬ」
侑人とフリードリヒ皇帝はお互いの立場を尊重し、どちらにも都合が悪くならないような体裁を整えていくのであった。

グランツ帝国の帝都にある城の謁見室には、フリードリヒ皇帝を始めとして、イーヴォ将軍やグランツ帝国宰相、各大臣を務める帝国の重鎮達が一同に集まっている。
そしてその周囲には過剰ともいえる数の衛士達が控えており、比較的大きな広さを持つ謁見室ではあったが多少狭く感じるほどである。部屋の中は色々な人間の思惑が複雑に絡まりあい、一種異様な熱気に包まれていた。

『フリードリヒの様子は良く判らんが、イーヴォ将軍を除いた周囲の者は全員こっちを警戒しておるの……こやつらは本当にわらわ達を国賓として扱う気があるのか？』
『少し前に直接手合わせした人間が目の前に居るのですから、過度に警戒してしまうのも仕方ない事でしょう』

アンナの少し呆れたような呟きに対して侑人はそんな風に答えるが、侑人のその推察は半分正解であり半分は不正解である。

謁見室に控えている衛士の数は二百人を上回っており、それどころか謁見室の外には総勢で千人を超える衛士が非常の事態に備え、

何時でも突入できる準備を整え静かに中の様子を伺っている。
仮に今の時点で敵対している国の人間がこの部屋に招かれたとしても、ここまでは警戒されることは無い。全ては黒髪の勇者である侑人の実力を過度に恐れての行動である。

先代の黒髪の勇者であるクロウ・ミナトの墓を訪れる許可を得る為に、グランツ帝国まで赴いたという侑人の行動は確かに筋が通っている。
しかし筋が通り過ぎているのも逆に怪しい……そんな事を皆は考えていた。侑人達からすれば『なら一体どうすれば良いのでしょう？』という文句が出そうな思考ではあるが、そういう考えに至っても仕方ない部分はある。

プロセン王国防衛戦において、グランツ帝国軍最強と名高いイーヴォ将軍率いる精鋭部隊千名が、黒髪の勇者の一撃で戦闘不能に陥った事を、ここに居る全ての者は知っている。
プロセン王国との相互不可侵条約の締結を発案したのは、目の前に居るこの男であり、提案した自らがそれを破るとは思えない。しかし万が一この男がその気になれば、ここに居る全員を一撃で葬り去る事が出来る。そんな事を考えるだけで身震いがする。

グランツ帝国の面々は数的には優位に立っているが、精神的には侑人に常に追い詰められていた。

そんな周囲の雰囲気を他所に、侑人とフリードリヒ皇帝の面会は滞りなく進んでいく。お互いに焦った様子を一切見せず終始淡々としている。
侑人に精神的に追い詰められ落ち着きを無くした周囲の者達と比べると、この二人の雰囲気は逆に落ち着きすぎて異様に見える。

『ユートの精神構造は一体どうなっているのかしら?』
『俺と同じ位の年のはずなのに……旦那が育ってきた世界というのは一体どんな世界だったんだろう?』

侑人の後ろに静かに控えているマリアとガイウスは、半分呆れつつもその頼もしい後ろ姿を誇らしげに見つめている。
普段は少し頼りないところもあるが、こういった舞台に立たされてもすぐに順応し、大きな存在感を放つ侑人を二人は素直に尊敬している。

様々な者の思考が交錯する中、二人の話は今回の面会の主目的に移っていく。

「この度は皇帝陛下にお願いがあり、この場に参上致しました」
「話は聞き及んでおる。クロウ・ミナトの墓を訪れたいという申し出であったな」

「はい、その通りです」
「クロウ・ミナトの墓は我が国の最重要施設であり、他国の者がそこを訪れた事は今までに殆ど無い。通常であればその申し出はお断りさせて頂くのだが……」

フリードリヒ皇帝はそこで一回言葉を止め、侑人の目を静かに見つめる。侑人もフリードリヒ皇帝の視線を正面から受け止め、二人の間に少しの緊張が走る。
二人が見つめ合っていたのはほんの数秒ほどであったが、周囲に控える者達にとっては数分とも数時間とも思えるほど濃密な時間が過ぎていく。

「私の願いをかなえてくれるのであれば、クロウ・ミナトの墓への

訪問を許可しようと思う」
「皇帝陛下の願いですか？」

「そうだ……この後、貴殿の時間を少しだけ頂きたい。もう少し落ち着いた場所に移動して、二人だけで話がしたいのだがどうであろう？」
「私は別に構いません」

フリードリヒ皇帝の申し出に対して侑人は笑顔でそう答え、その表情を見た皇帝も満足げに頷いている。

「お待ち下さい皇帝陛下」
「どうした？」

二人の間で話がまとまったかの様に思えたが、謁見室に控えていたある者の声がそれを許さない。声の主はグランツ帝国の宰相であった。

「皇帝陛下のご意思に背く発言をする事をまずお許し下さい」
「前置きは良い。用件を申してみるが良い」

皇帝は少しだけ怪訝な顔をしたが、宰相の真面目な顔を見て表情を改める。皇帝の言葉を受けた宰相は、静かな声ではあったがはっきりと自分の考えを述べる。

「皇帝陛下が黒髪の勇者殿とお二人の会談の場を設ける事に対して、私は反対の立場を取らせて頂きます」
「理由を申せ」

「黒髪の勇者殿を信用していない訳ではありませんが、物事には絶

対という事はございません。万が一にも皇帝陛下の御身に何かがあってからでは遅うございます」

「はあ……その事か」

フリードリヒ皇帝はあからさまに面倒くさそうな顔をしている。しかし宰相は皇帝のその様な姿を見てもめげずに、真剣な顔をしながら皇帝を説得しようと孤軍奮闘している。

侑人はどこの国の宰相も大変なんだなと、他人事のように考えながらその様子を見守っている。実際には自国も同じ様な状況なので他人事ではないのだが。

「皇帝陛下の御身はご自身だけの物ではございません。何とぞご再考のほどを」

「ならば聞くが、イーヴォ将軍率いる千人の精鋭を一瞬で無力化する黒髪の勇者殿の実力を持ってすれば、どれだけ護衛を付けても無駄な事とは思わぬか？」

「そ……それは確かにそうでございますが」

「付けて無駄ならば省いても問題無かろう。とはいえ、宰相の言葉も無下には出来ぬな……そうだ、イーヴォそなたも同席しろ。その代わり黒髪の勇者殿の従者殿達も同席してもらう。ありえない事とは思うが、もし黒髪の勇者殿が不届きな行動を取った場合は、従者殿を盾に使わせて頂く。宰相、これで良いか？」

フリードリヒ皇帝は宰相に向かって許可を求めるが、実際には有無を言わさない迫力が込められており、否定する事など不可能な雰囲気である。

宰相はフリードリヒ皇帝の迫力に押され、渋々ながら了承するのであった。

第３９話：勇者と皇帝（後書き）

ある程度の年齢と立場を得ないと見えない事もあります。

第４０話：経験と教育

「先ほどは色々と済まなかったな黒髪の勇者殿」
「皇帝陛下がお気にする必要はありません。ちなみに私の事を呼ぶ時はユートで結構です」

「ならば私もフリードリヒと呼んでもらおうかな」
「ご冗談が過ぎますよ皇帝陛下……」

侑人達一行とフリードリヒ皇帝とイーヴォ将軍は、先ほどまで居た謁見室から応接室に移動している。先ほどまでの雰囲気とは一転して、部屋の中には穏やかな空気が流れている。
普段応接室に控えているはずの従者達の姿は見えない。従者達は皇帝の命を受け六人分の飲み物を用意した後に全員が退室している。

応接室の扉の前を衛士が警護しているが、部屋の中には侑人達の五人しか居ない。目の前に並んでいる飲み物の数と、この場に居る人数が合わない事に気が付いたマリアが、恐る恐る目の前に座るイーヴォ将軍に尋ねる。

「一つ多い気がするのですが、これで良いのでしょうか？」
「その事か……構わんよ」

マリアの質問に答えたのはイーヴォ将軍ではなくフリードリヒ皇帝であった。皇帝はマリアの顔を意味深な表情で見つめている。

「貴女にとって大事な仲間がもう一人居るはず。残りの一個はその彼女の為に用意させた物。この場ならば姿を現しても問題あるまい」
「あ……はい」

予想に反していきなりフリードリヒ皇帝に話し掛けられたマリアは、しどろもどろになりながらも何とか返事をする。
そんなマリアの姿を見た皇帝は『そんなに緊張しなくても良い』等と無茶な要求をしている。案外お茶目な一面を持っているのだが、自分が相手にどのような印象を与えているのかを理解出来ていないのが玉に瑕である。

『この状況はわらわに姿を現せと言っておるのかの？』
『その認識で良いと思います』

侑人の返事を受けたアンナはおもむろに侑人の中から実体化し、フリードリヒ皇帝とイーヴォ将軍の前に姿を現す。
特徴的な紅い長髪の少女の姿を見たフリードリヒ皇帝は満足そうな顔をしている。

「これで主役は全員揃ったな」

皇帝の静かな声が応接室の中に響き渡る。
非公式ではあるが、ハルモ教法王庁教圏国家群に所属する国家の相談役の侑人と、グランツ帝国の皇帝であるフリードリヒ、クーラント魔国の王女であるアンジェリーナという、三勢力の首脳級が集まった会談が、今ここで開催される。

「お初にお目にかかりますクーラント魔国の姫君。戦場での悪鬼羅刹の如き活躍により紅蓮の魔姫と名高い姫君とは、いつかお会いしたいと常々思っていたので、今回の件はそんな意味でも良いきっかけとなった。しかし紅蓮の魔姫がこんなに可愛らしいお姿だったとは、噂とは当てにならぬものよ……」

「わらわもグランツ帝国の皇帝殿にはいつかお会いしたいと思っておった。一兵卒から皇帝にまでのし上がったその手腕を、是非この目で確かめたいと考えていたのじゃ。しかしわらわのような小娘相手に世辞が言えるとは……冷酷非情という噂も当てにはならんの」

フリードリヒ皇帝とアンナはにこやかな表情をしながら挨拶を交わす。物腰も非常に穏やかであり、一国の代表として相応しい佇まいではある。

しかしお互いの言葉の節々には棘が感じられ、友好的な挨拶とはとても言い切れない。むしろ表面上の友好さとの乖離が大きく、余計な緊張感を周囲に与えている。

「しかし不思議だ……どういった方法で今まで姿を隠していたのか聞いても宜しいかな？　ここまで気配を感じさせず完璧に姿を消す方法など、私には思いつかないのでな」

「わらわにとっては児戯にも等しい事なれど、さすがに無条件で教えるわけにはいかないの。そうじゃな、この城の地図と交換するなら教えても良いぞ」

「はっはっは！　これは手厳しい。さすがは魔国を代表する姫君だ」

「うふふふ……。皇帝殿とは今後も良い付き合いをしたいものよの」

フリードリヒ皇帝とアンナはお互いに笑いあう。しかしどこからどう見ても白々しい雰囲気であり、社交辞令という言葉がこれほど

似合う現場もめったに無い。

「はぁ……この後もこんな雰囲気のままなんて事はないですよね？」
「それは私も勘弁して欲しいかな……なんか今のこの二人は結構怖いかも」
「なぜ姉御はあんなに活き活きとしているんすかねぇ」
「皇帝陛下に一歩も引かない女の姿など初めて見たぞ……あんな怖い女と結婚できる男が世の中にどれだけ居るやら。ユート殿は凄まじい猛者を従者として引き連れていますな」

二人の放つどす黒いオーラを肌で感じている侑人達は、げんなりとした表情をしながら小声で会話をしている。すでに二人の会話は別の内容に切り替わっているが、周囲に振りまく雰囲気は全く変わっていない。

男女が織り成す二人の世界といえば桃色が相場ではあるが、この二人が織り成す世界には、どこまで行っても漆黒の闇だけが広がっていた。

「やはりアンナの席の位置が不味かったですかね」
「今頃になって気が付いてももう遅いわよ」
「席次って結構大事なんすね。俺には良く判らない世界ですけど」
「うーむ……皇帝陛下は小さな事など気にも留めないお方なので、今回の事態の原因は、席次の問題というより相性の問題であろうな」

当初アンナを除いた五人は、机を左右に挟んでフリードリヒ皇帝側と侑人側に分かれて座っていた。フリードリヒ皇帝側は上座から見てフリードリヒ皇帝、イーヴォ将軍の順で座り、侑人側は侑人、マリア、ガイウスの順で座る形である。

従者と衛士という身分の差で考えると、マリアとガイウスの席次は本来であれば逆になるのだが、マリアはただの従者ではない。黒

髪の勇者専属の従者という特別な身分のマリアは、黒髪の勇者に一番近い存在であり周囲からも一目置かれているので、この席次で問題は無い。

遅れて姿を現したアンナの席次も衛士であるガイウスより高く、普段はマリアとガイウスの間に座っている。黒髪の勇者専属の従者同士であるマリアとアンナの間に身分差は無いが、なんとなく自然とこの形で落ち着いていた。

とはいえ本来であれば、クーラント魔国の姫君であるアンナの席次は、侑人と同等かそれ以上になるのだが、アンナはその身分を隠して行動しているので特に問題は出ていない。

しかし今回の場合においては普段と全く違う。フリードリヒ皇帝もイーヴォ将軍もアンナの身分を知っており、アンナの事をクーラント魔国の姫君として扱っている。

そうなるとアンナの身分は勇者専属の従者兼クーラント魔国の姫君という事になり、普段の席次では不味い事になる。

その事に気が付いた侑人は自分の席をアンナに譲り、マリアとガイウスもそれに習って下座へと移動しようとしたのだが、侑人たちのその行動をアンナは止めた。

「いまさら動くのも面倒じゃろ。わらわはここで良い」

アンナはそう言うと、自分で椅子を動かして侑人とフリードリヒ皇帝の間に勝手に座る。応接室での話し合いが、一転してアンナを議長に据えた会議室での話し合いの様相になる。

上座の上にさらに無理矢理上座を作り上げ、フリードリヒ皇帝よりも上座に座ったアンナの行動を侑人は慌てて止めさせようとしたのだが、その行動を今度はフリードリヒ皇帝に止められる。

「別に構わんし、その方が効率的だ。このままで良い」
「は、はい……皇帝陛下が良いと仰るなら私も構いません」
こんな経緯でフリードリヒ皇帝とアンナは非常に近い席に座っているのだが、色々な意味で失敗だったと侑人は反省していた。

「少し宜しいですか皇帝陛下」
侑人は意を決して事態の収拾を図る。
今の二人と係わり合いになるのは心から遠慮したかったが、このままではいつまで経っても話が先に進まない。
アンナと毒舌トークを繰り広げていたフリードリヒ皇帝は、侑人の言葉を受けると静かに侑人の方に向き直る。侑人を見る表情は普段のままであるが逆にそれが恐ろしい。

「皇帝陛下のお時間を少し貰っても大丈夫ですか？」
すでに色々と心が折れそうになっている侑人ではあったが、返事をしないフリードリヒ皇帝に向かって、内心血の涙を流しながら果敢にも再度問い掛ける。
しかし皇帝は返事をしない。静かに侑人の事を見つめたまま何かを思案しているような雰囲気である。あまりに表情が変わらない為、侑人にはフリードリヒ皇帝が何を考えているのか一切読めない。

「えーと……フリードリヒ皇帝陛下？」
「……は……て良い」

「はい？」
「皇帝陛下は付けなくて良い」

どこかの国のどこかの宰相のようなフリードリヒ皇帝の要求を聞いた侑人は、全身の力が抜け思わず倒れそうになる。
しかし今回ばかりは簡単に折れるわけにはいかない。今回の相手は同じ国の配下同士という訳ではなく、他国の最高権力者に当たる重要人物である。

「さすがにそれは厳しいと思うのですが」
「皇帝陛下は付けなくて良い」

侑人の返事を聞いてもフリードリヒ皇帝の言葉は全く変わらない。そんな皇帝の姿を見た侑人は、少し覚悟を決めたような表情をしながら話し掛ける。

「フリードリヒ殿……で宜しいでしょうか……」
「それで構わぬ」

侑人はフリードリヒ皇帝の迫力を受けて二秒で屈した。

「さて、色々とすっきりしたところで本題に入るとするかな」

フリードリヒ皇帝は爽やかな顔をしている。アンナも『確かにそろそろ頃合じゃな』などと、その言葉に賛同している。いつの間にか二人の間に和やかな空気が流れていた。
それに対して侑人は土気色の顔をしている。何がどうなって今の和やかな雰囲気が訪れたのか侑人には全く理解できない。色々と気を使いすぎて精も根も尽き果てそうになっている。

アンナとガイウスも侑人と似たような状態に陥っている。このような他国の要人との会談の場に参加した事がほとんど無く、国家間の交渉事に携わった経験など皆無に等しい二人が、この雰囲気の中でなんとか気を保っているのは奇跡に近い。

そんな三人とは対照的にイーヴォ将軍は平然としており、長年フリードリヒ皇帝に付き添ってきた経験がモノを言っている。これくらいの事で驚いていてはグランツ帝国の将軍は務まらない。

アンナとの毒舌トークはフリードリヒ皇帝の一種の遊びであると将軍は気が付いていた。フリードリヒ皇帝には有能そうな人物を見つけると、その人物がどれほどの実力を持っているのか試そうとする悪い癖がある。

友好的な雰囲気になるか緊迫した雰囲気になるかは、フリードリヒ皇帝と相手の相性次第なのだが、本気で皇帝が気分を害しているのかどうか位は、すぐに察知できる自信が将軍にはあった。

アンナも何となくフリードリヒ皇帝の思惑に気が付いていた。言葉の節々に挑発するような内容を混ぜ、こちらの様子を伺っている雰囲気を察知していた。

本当に触れてはいけない部分には一切触れず、表面上は友好的な雰囲気を保ち続ける皇帝の姿を見たアンナは、逆に皇帝を試してやろうと考えその思惑に乗ったのである。

二十年以上に渡り一国の長として君臨し続けているフリードリヒ皇帝と、その皇帝に長年つき従って来たイーヴォ将軍、クーラント魔国の姫君として生まれ英才教育を受けてきたアンナは、交渉事の中における一種のバランス感覚に長けている。

それに対して一般人である侑人達は英才教育を受けてはおらず、かといって交渉事の経験も圧倒的に足りない。それを理解していた

侑人は、自分に優位な状況を作り上げてから交渉に臨む形を常に取り、今までの状況を何とか収めてきた。

しかし今回は全く準備が出来ていない。各々の経験や教育の差がこの場では如実に表れている。不意打ちには案外弱い侑人である。

「今回お時間を取って貰った理由は、ユート殿の真意を聞く為なのだ」

「私の真意ですか？」

フリードリヒ皇帝の姿は、一見するといつもの雰囲気のように見えるが、その瞳は今まで以上に真剣な色を帯びている。

そんなフリードリヒ皇帝の姿を見た侑人に再び緊張が走るのであった。

第４０話：経験と教育（後書き）

イーヴォ・シャルト四十二歳。独身で嫁さん募集中です。

第４１話：平和主義対現実主義

「ユート殿のお話を聞く前にまず私のことを話しておこう。ここに居る全員は知っていると思うが、私は二十年ほど前に当時の政府に対してクーデターを起こし、この国の国名をグランツ共和国からグランツ帝国に改め、自ら皇帝の座に着いた」

フリードリヒ皇帝の話はそんな言葉から始まった。応接室に居る侑人達五人はそんなフリードリヒ皇帝の姿を静かに見守っている。

「私の行動を全て正当化するつもりは無い。しかし当時のグランツ共和国が滅亡の危機に瀕していたのは事実だ。度重なるクーラント魔国との戦争により国力は大幅に低下し、国を正しい方向に導くはずの評議会も、己の私利私欲を満たそうとする俗物ばかりであふれ返っていた」

「民の為に尽力していた人物は居たはずですよ」

以前アルクィンから、グランツ共和国の議長の秘書を勤めていたアルクィンの父親の事を聞いていた侑人は、フリードリヒ皇帝の話に割り込む形でそう反論する。

侑人の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝は軽く頷く。皇帝の顔は、様々な思いが入り混じった複雑な表情をしていた。

「ユート殿の言うように民の為に尽くしている人物も数人は居た。しかし彼らは民の為に尽くしてはいたが、国を変えようと行動を起

こす事は無かった。ただ愚直に己の職務を全うすれば、民の生活は豊かになると信じ込んでいる者達ばかりであった」

「己の職務に忠実である事は決して悪い事ではないと思います」

「確かに悪い事ではなく、為政者としては理想的な人物像ではある。しかしあの当時の情勢ではそれだけでは足りなかったのだ。国が傾き明日にでも滅亡してもおかしくない状況では、荒療治は必要だった……少なくとも私はそう判断し行動を起こした」

「他の道は無かったのでしょうか？」

「今になって考えてみればもう少し平和的な手法が取れたのかもしれない。しかし今の時点で歴史を仮定の話で語っても意味など無い。あの当時の私の行動があるからこそ、今日のグランツ帝国の姿がある……それが全てではないかね？」

「フリードリヒ殿が仰っている事は正論ではあると思います。しかし私には納得が行きません。あれこれ模索した上での選択ならば少しは納得できるのですが、私にはフリードリヒ殿が、目的の為に最短の道を選んで突き進んだような印象を受けます」

フリードリヒ皇帝は少し細い目をして侑人を見つめる。侑人も真剣な表情をしてフリードリヒ皇帝を見つめ返している。

普段は温和で争いを好まない侑人が、積極的にフリードリヒ皇帝に異を唱えている姿を見たマリア達は、かなり驚いた表情で侑人を見つめている。イーヴォ将軍は議論を交わす二人の姿を静かに見守っていた。

全員が黙りこんだ応接室の中に少しの間沈黙が流れたが、その沈黙を破ったのはフリードリヒ皇帝であった。

「ユート殿の指摘は正しい。私は常に効率的に行動を起こしてきた。

百人を救う為に十人を犠牲にしなければならないのなら、私は迷い無くその十人を切り捨てる。有能な人材一人と無能な人材の五人のどちらかしか生かす事が出来ないのなら、迷い無く無能な者達を放逐する。私はこうやって今まで生きてきたのだ」

「第三の道があるかもしれないとお考えにはならないのですね」

「考え込んで余計な時間が過ぎ去り、結局時間切れでどちらも救えないといった事態を引き起こすのは為政者として失格であり、物事を起こす時間を数多く得る為にも、決断は早ければ早いほど良いというのが私の確固たる信念だ」

「私にはそこまで割り切れません。最後の瞬間まで足掻いて見せます」

侑人とフリードリヒ皇帝の意見は真っ向からぶつかる。片や真正面から平和主義を意地で貫き、もう片方は徹底的に現実主義を押し通して今まで行動してきた。

二人が目指す目標は民の生活の安定という同じ物ではあるのだが、そこに至るプロセスが全く正反対の二人である為、議論をすればぶつかるのが当然である。

「ユート殿が自分の考えを貫き行動することに関しては、我が国に実害が無ければ私は何の口を挟むつもりも無い。しかしその考えを人に押し付けるのは、いささか傲慢な態度と言わざるを得ない」

「私のどこが傲慢なのですか！？」

フリードリヒ皇帝のそんな指摘を受けた侑人は若干声を荒げる。普段冷静な侑人の姿を見慣れているマリア達は、そんな姿を見て絶句している。

「ユート殿は自分自身が周囲の者達よりも、優れた力を持っている

事を念頭に置いて話してはいない。力無きものがユート殿と同じ行動を取れると思う事自体が、私は傲慢だと言ったのだ」

「自分自身が人より優れた力を持っている事は理解しています。しかし私だけの力でこの状況を変化させられるなどと考えた事はありません。この世界に住む全員と協力し合わなければ、平和な世界など訪れる訳が無いのです」

「確かにユート殿のお力持ってしても、一人だけでは平和な世界など築く事は出来ぬだろう。皆の協力が必要だという言葉もよく理解できる。でもなユート殿、その行動を主導する人間が凡人だと仮定すると、もっと目標が遠のくのは純然たる事実だ」

「それはそうかもしれませんが……」

「ユート殿は自分自身が持つ力の特異さ、有用さをもう少し自覚された方が良い……私はユート殿が羨ましいのだ」

「フリードリヒ殿……」

フリードリヒ皇帝は侑人の力を認めている。グランツ帝国軍の精鋭千名をただ殲滅するだけでなく、身の安全を保障した上で無力化したその特異な技量に戦慄すら覚えている。

それと合わせて自身に天から与えられた才能が、軍を率いる才能のみだった事を嘆いている。自分自身にあれだけの才能が与えられていたら……そんな事を考えずにはいられなかった。

プロセン王国防衛戦での侑人の活躍を目の当たりにしたフリードリヒ皇帝は、自国に戻った後も暫くある事について考え込んでいた。その事について考えても無駄な事だという事は理解していたのだが、それでも考えずにはいられなかったのだ。

そのある事というのは自分が過去に起こしたクーデターの事である。もしもあの時の自分に侑人のような力があれば、もっと違った

方法が取れたはず。そんな事をフリードリヒ皇帝は考えていた。

フリードリヒ皇帝は自分に与えられた才能が、軍を率いる事のみという事を十分に理解している。それを理解しているからこそクーデターという手法を取ったのである。

クーデター以外の手法で政権を変える事が出来たのなら、流血の事態はなるべく選択したくなかった。これはフリードリヒ皇帝の紛れも無い本心であり、決して人には話さず墓場まで持って行こうと決意した事でもある。

先ほど侑人からその事について問われた時は、過去の自分の行動を肯定し後悔などしていないという態度を貫いたが、それはフリードリヒ皇帝なりの一つのけじめであり、意地でもある。

フリードリヒ皇帝自身が過去の行動に対して、少しでも後悔していると配下の者達に知られると、自分を信じて行動を共にしてくれている者達に示しが付かない。

それどころか自分の指示で命を奪われた者達に対しても失礼な事であり、その罪に真正面から向き合い全て背負うのが、自分に課せられた罪に対する唯一の贖罪方法であるとフリードリヒ皇帝は考えている。

諸国では冷徹で傲慢な皇帝と評される事が多いフリードリヒ皇帝ではあるが、実際には不器用で根は優しい男であった。

「ユート殿、貴殿は人の上に立つ覚悟があるか？」

「私は人の上に立つ気は一切ありません。これは逃げなどでは無く

私に与えられた使命とも関係がある事だと考えています。しかし自分の行動には責任を取ります。それ位の覚悟なら済ませて来ました」

フリードリヒ皇帝の問い掛けに対して侑人は真っ直ぐに目を見つめながらそう答える。フリードリヒ皇帝を見つめる侑人の目は、一切の曇りも無く深い輝きを放っている。

「決意は硬そうだな……しかしその上であえて聞こう。私の代わりにこの国の皇帝になってはみないか？」

「皇帝陛下！　ご冗談はお止め下さい！」

今まで黙って成り行きを見守っていたイーヴォ将軍であったが、皇帝のとんでもない提案を聞いて慌てて立ち上がり、それを止めようとする。

しかしフリードリヒ皇帝はイーヴォ将軍を片手で制す。皇帝の意図を何となく悟ったイーヴォ将軍は大人しく椅子に座りこの場は引き下がる。

「幸いに私には子供は居ないので後継者問題は起きないだろう。そんな事よりもユート殿がこの国の皇帝になってくれれば、この国が受ける恩恵は計り知れない。ハルモ教法王庁教圏国家群との争いは完全に終結の方向に向かうはずであり、クーラント魔国との戦争も、クーラント魔国の王女であり黒髪の勇者の従者であるアンジェリーナ殿と協力すれば、終結する可能性が出てくる。マグナマテルの平和に一気に近づくとは思わんかね？」

「お断りいたします」

侑人は一切考える素振りを見せずそう即答する。その表情は晴れやかであり少しの曇りも無い。

「なぜ断るのか聞いても宜しいかな？」
「フリードリヒ殿の仰るような方向にマグナマテルの世界は進むかもしれませんが、きっとそれはかりそめの物。この世界は黒髪の勇者という呪縛から、そろそろ解き放たれなくてはいけません。黒髪の勇者の力で平和が訪れた……未来の歴史家にそう評されたら、此度の私の行動は失敗だったという事になります。黒髪の勇者の存在がきっかけとなり世界に平和が訪れたと、未来の歴史家に評させてみせます」

グランツ帝国の皇帝の座を譲るというフリードリヒ皇帝の言葉は、侑人を試す為の言葉である。多少本気の部分もあったのだが、周囲の反対などを考慮に入れれば、そう簡単に一国の長の座を譲る事など出来ない事は理解している。
しかしこの侑人の言葉を聞き、今回フリードリヒ皇帝が聞きたかった事は全て聞けた。目の前にいる黒髪の勇者は、先代の黒髪の勇者のクロウ・ミナトとは全く違う手法で、本気でこの世界に平和を訪れさせようとしている。フリードリヒ皇帝にとってその事が判っただけで十分な収穫であった。

「我が国は年が明けても、一年間は他国に対して敵対行動を取らない事を約束しよう」

フリードリヒ皇帝は侑人の目を見つめたままの姿勢で、はっきりとそんな言葉を言い放つ。
フリードリヒ皇帝の言葉を聞いた侑人は少し驚いた表情をした後、皇帝に向かって何かを問い掛けようとしたが、フリードリヒ皇帝はそんな侑人の行動を右手で制す。

「ただしいくつかの条件を付けさせて頂く。一つ目の条件は我が国に火の粉が降りかからない限りというものだ。もし他国から何かしらの干渉を受ければ我が国は全力を持ってそれを排除する……その方針は年が明けても変わらぬと思って頂きたい」

侑人は頷きながらフリードリヒ皇帝の話を静かに聞いている。フリードリヒ皇帝が提示した一つ目の条件は当たり前の事であり、それに対して何か質問をしようという気は起きない。

そんな侑人の姿を見たフリードリヒ皇帝は少し改まったような態度を取り、二つ目の条件の提示を静かに行う。その条件は一見すると当たり前の事のように思えるが、少し抽象的な内容であった。

「二つ目の条件はクーラント魔国との間に、我が国に不利益となる密約を設けないと、ここで約束してくれればというものだ。我が国とプロセン王国との間では相互不可侵条約の締結が行われているがこれは裏の話の事であり、表向きには停戦協定が締結されているに過ぎない。ハルモ教法王庁教圏国家群の事情を汲んであの時は同意したが、それはお互いの信用の上に成り立っている」

「仮にグランツ帝国の不利益にならない密約だった場合はどうなるのでしょうか？」

侑人の問い掛けを聞いたフリードリヒ皇帝は、少しニヤリと笑いながら返事をする。

「私の預かり知らぬところでこそこそと動かれる事に対して良い気はしない……などと言いたい所だが、他国の行動にむやみに口出しをして内政干渉と思われるのは得策ではない。ユート殿がここで約束してくれれば私はそれを信じる事にし、その上での行動ならば私があれこれ言う資格は無いと考えている」

フリードリヒ皇帝の発言は、国家間の交渉の席での発言と考えるとかなり甘そうに思える。しかしこの発言は今まで収拾してきた侑人の情報を元にした緻密な計算の上での発言であり、侑人に対しては非常に効果的な牽制となっているのは事実である。

侑人は本音でぶつかって来る人物と相対すると自身も本音で事に当たり、その上で一度約束をしたのならば、状況がどれだけ変化しても決して約束を破らない事を自身の行動理念としている。

下手に細かく条件を出して侑人にそれを守らせるより、グランツ帝国に対して不利益にならないように行動すると約束させる方が、より一層効果的なのをフリードリヒ皇帝は今まで得た数々の情報から見抜いていた。

「その二つを守れば、フリードリヒ殿にもご協力頂けると考えて宜しいのですか？」

「思いつきでこんな事を言い出しはしない。今の発言はグランツ帝国皇帝、フリードリヒ・ラスペとしての言葉と思ってもらって良い」

侑人の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝は、少し満足そうな表情をしながら頷く。目の前の男は情報通りの男であり、我が策は成った……内心でそんな事を考えている。

フリードリヒ皇帝は侑人が続けて『お約束します』と言い出すのを待っていたのだが、侑人が発した言葉はそんな皇帝の思惑とは全く違ったものであった。

「フリードリヒ殿……いや、グランツ帝国皇帝、フリードリヒ・ラスペ皇帝陛下にお伺いしたい事がございますが、宜しいでしょうか？」

「突然改まってどうした？」

「先のプロセン王国との戦争は、グランツ帝国をハルモ教正教会に認めさせる為に行ったと聞き及んでおりますが、それは事実ですか？」

「それが全てではないが紛う方無き事実だ。それがどうかしたか？」

フリードリヒ皇帝は、侑人が終結した戦争について今更質問してくる意図が何なのか理解出来ず、少し戸惑ったような様子を見せている。

「もし仮に、私がクーラント魔国との間で永続的な停戦協定を結んだとしたら、フリードリヒ皇帝陛下はどう致しますか？」

フリードリヒ皇帝は侑人の質問の意図を即座に理解する。

もし仮に黒髪の勇者の侑人が、クーラント魔国と相互不可侵条約以上の条約を締結するという事を本当に実現するのであれば、八百余年続いたハルモ教法王庁教圏国家群とクーラント魔国との争いが終結する事になる。

そうなると今までハルモ教法王庁教圏国家群とグランツ帝国をほぼ同一視してきたクーラント魔国は、グランツ帝国ともなし崩し的に和平を結ぶ可能性が少なからず出てくる。

今の情勢から考えると非常に可能性はかなり低いのだが、そのような事態が起きるのであればグランツ帝国は敵対する国家と国境を接しない事となる。

そして戦争が起きないのであれば今の状態が維持され、ハルモ教正教会が無理やり事を起こさない限り、今後は現時点の状況が変わる事は一切無くなる。

もし仮にだが、今後グランツ帝国がクーラント魔国を滅ぼすか、

完全に支配化に置いた場合、グランツ帝国が国境を接するのはハルモ教法王庁教圏国家群だけとなる。

そうなった場合にはプロセン王国と表向きに休戦協定しか結んでいない事を利用し、ハルモ教正教会に強大な軍事力を見せ付けて圧力を掛け、最終的には国として認めさせるというシナリオが存在する。

二国間だけのバランスならばそういった外交も視野に入るのだが、三国間での平和的な条約の締結が、秘密裏の状態とはいえ成され、微妙な軍事バランスを図られると三竦み状態となり力で押す外交手段を取り辛くなる。

片方の勢力に対して強硬手段を取れば、もう片方の勢力からも反発を受ける為、現状維持を第一目的とした外交を、今後は展開せざるを得ない事が予想出来る。二国と個別に争うのと協調行動を取る二国と争うのでは全く話が変わり、今まで以上に苦戦するのは目に見えていた。

グランツ帝国をフリードリヒ皇帝が支配する独立した国家であると、ハルモ教正教会に自力で認めさせる機会が失われる事になった場合、グランツ帝国はどういった対応を取るのか暗に侑人は聞いている。

国家の政策の方針を大きく転換せざるを得ない事態が起こった場合、状況に応じて流動的に対処するのか元の方針を推し進めるのかは、一国の長が最終的に判断する事柄となる。全てはフリードリヒ皇帝の思惑によって決まってくるのだ。

侑人に対して今後の行動方針を問いただしているはずが、いつの間にやら決断を迫られている。フリードリヒ皇帝はこの状況を一瞬で作り出した侑人に対して感心しつつも、予想以上の才覚に対して少し恐れを感じている。

協調して行動するのには非常に頼もしい存在ではあるが、敵に廻すとこれほど厄介な者は居ない。下手な策を弄するのは得策ではないと痛いほど感じていた。

「なかなか厳しい質問をされますな」

「ご無礼を承知で聞いています。しかし大切な事ですので、是非ともご返答を頂ければと思います」

曖昧な返答をして誤魔化す事は許されない雰囲気がこの部屋の中には満ちている。

フリードリヒ皇帝の返答を侑人だけでなく、クーラント魔国の姫君であるアンナと、ハルモ教法王庁教圏国家群に属するセルビナ王国出身のマリアとガイウスも興味深く待っている。

「ハルモ教正教会に対してグランツ帝国を正式な国家として認めさせたい……その気持ちは今の時点でも確かに持っている」

フリードリヒ皇帝は本心を語る。侑人達はそんな皇帝の姿を静かに見守っている。

「しかしそんな思いなどちっぽけな物であると気が付いた。いや、気が付かされたと言った方が正確かもしれん。自分自身の使命を真正面から受け止めるユート殿の姿を見て気が付かされたのだよ」

「私は大した事をしているとは思っていません」

「謙遜しなくて良い。この世界に住む全ての民の安寧の事だけを考えて行動する事は、凡人では決して出来ぬ事だと思って良い。私も当初は民の事だけを考えて行動してきたつもりであったが、長く皇帝という立場に居た影響なのか、いつの間にか皇帝という立場のみで物事を考えるようになったという事に気が付いたのだよ」

「皇帝陛下の治世に対して異を唱えるものなどほとんど居ませんので、今までの行動が全て間違っているなどと思えません」

フリードリヒ皇帝の多少自嘲的な言葉に対してイーヴォ将軍はそんな事を口にするが、イーヴォ将軍の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝は首を横に振る。

「広義的に考えれば、グランツ帝国の発展という方向性においては今も昔も変わってはおらぬが、私自身の視野の広さの問題なのだよ」

「自国の繁栄のみを考えるのか、マグナマテルという世界全体を見渡すのかの違いじゃの。しかし一国の長ならば自国の繁栄を追及する姿勢に間違いはあるまい」

今度はアンナがフリードリヒ皇帝をフォローするような発言をするが、アンナの言葉に対してもフリードリヒ皇帝は首を横に振る。

「私も二十余年前は、そこに居るユート殿と同じような理念を持って行動を起こしたはずなのだ。他人が聞けば理想主義的過ぎると言われるかも知れぬが、私はその理念を自分が実現出来るように現実的な手法を持って追い求めていたはずであった。人族と亜人族の共存を図りお互いに手を取り合う事が出来る世界の構築……しかし今思えばそれを国家レベルでしか考えられなかったのが、今の事態を引き起こした元凶なのかもしれんな」

「国家で物事を考えられる事自体が、俺にとってはすごいと思います」

「私は自分の家族の事を考えるだけで精一杯です」

ガイウスとマリアもフリードリヒ皇帝の言葉を聞いてフォローするが、それでもフリードリヒ皇帝は首を横に振る。愚直に理想を追い求める男の姿がそこにはあった。

「何事も結果が全てなのだよ。私は目の前に居るユート殿のような平和的な結果を私は出していない。私の行動はグランツ帝国民を救う事は出来たが、マグナマテルの世界においては新たな争いを生むだけであった……そう感じているのだよ」

「グランツ帝国民を救ってくださった皇帝陛下の事を私は尊敬しております！」

イーヴォ将軍はフリードリヒ皇帝の余りに弱気な姿を見て、かなり強い口調でそう言い切る。フリードリヒ皇帝はそんなイーヴォ将軍の言葉を嬉しそうに聞きながら、明るい口調で皆に向かって問い掛ける。

「他人から見れば壮大で愚直な夢を追い求める男が目の前に現れて、それを素直に応援したくなった……私のこの気持ちは皆にも判って貰えると思うのだがどうであろうか？」

フリードリヒ皇帝の言葉を聞いた全員は力強く頷くのであった。

「消極的な方向で申し訳ないとは思うが、これが我が国に出来る最大限の協力だ」

「これほどまで力強い後押しはありません。本当にありがとうございます！」

フリードリヒ皇帝から帝都に誘われた時にはどうなる事かと思ったが、フリードリヒ皇帝の本心を聞く事ができ、今まで予想も出来なかった大きな成果をあげる事が出来た。

まだほんの小さな光ではあるが、自分自身の行動に対する光明が見えた事を、侑人は純粋に喜んでいるのであった。

第４１話：平和主義対現実主義（後書き）

フリードリヒの言葉は作者の主人公に対する問いかけでもあります。

第４２話：不吉な影【前編】

土の月の第二週の四日。日を追うにつれ段々と気温が下がり、朝晩に感じる冷え込みや日中に時折吹き抜ける涼しい風が、マグナマテルに秋の訪れを感じさせる。

天候に恵まれさえすれば日中は穏やかで温かい小春日和となる、一年の内でも最も過ごしやすい季節ではあるが、今日の帝都の空は分厚い灰色の雲に覆われていて少し肌寒い。

昨日のフリードリヒ皇帝との面会をなんとか無事に終えた侑人達は、夜に執り行われた歓迎の宴の際にも特に大きな問題を起こす事無く、全てを穏便に済まし今日を迎えている。

とはいえ歓迎の宴に出席したのは、侑人と侑人の護衛の任に付いているガイウスのみであり、クーラント魔国の姫君という立場を隠す為に表向きには居ない事になっているアンナはもちろん参加を辞退し、マリアはそんなアンナに付き合う形で体調が優れないという事にして参加を見送っていた。

「黒髪の勇者様の従者殿はどこに居る？」

「先ほど会場中を探してみたが……どうやらここには居ないようだな」

「そんな！　それだけを楽しみにしていた俺の立場はどうなる……」

マリアやアンナといった綺麗どころが歓迎の宴に参加をしていれば、酔いが回って気が大きくなった無謀な者達が、二人に対してダ

ンスに誘う等といったちょっとしたハプニングが起こったかもしれない。

しかしマリアとアンナは会場に姿を一切見せなかった為、そういった問題は起こり様が無く、実は一部の若者の間で噂になっていた、黒髪の勇者が従えている美貌の従者の姿を見ることが出来ない者達の落胆の声が、会場のあちらこちらで囁かれていた。

「さすがにあの場には近づき難い……」
「あの立ち振る舞い……やはり只者ではないな」
「少し話してみたかったのだが、今日は諦めるしかないか」

そして侑人の行動も、この会場に居るマリア目当ての者達とは、別の意図を持った者達の落胆の声を誘っている。侑人は歓迎の宴が開かれている間の殆どの時間を、フリードリヒ皇帝とその側に控えているイーヴォ将軍と共に過ごしていたのだ。

侑人の側に控えているガイウスも当然その席に同席していた為、皇帝の威光を恐れその席に近づくことをためらっているグランツ帝国の面々は、侑人達との親睦を深める事がなかなか出来なかったのである。

ハルモ教法王庁教圏国家群だけではなく、フリードリヒ皇帝からも一目置かれている存在の侑人と、この機会を利用して親睦を深めておこうと考えていたグランツ帝国の重臣達は、遠巻きに侑人の姿を見つめているだけであった。

迂闊に行動を起こしてフリードリヒ皇帝に睨まれてしまうと全てが無駄になる。そんな思いが重臣達の頭を過ぎり、積極的に行動を起こす者は誰一人として居なかった。

「うちの野暮ったい将軍達とは大違いね」
「少しはこっちを向いてくれないかしら」

政治的な意図とは違った方向で侑人に近づこうとする者達も居た。マグナマテルの世界において、周辺諸国の国王よりも希少性が高い黒髪の勇者である侑人が、いまだに独身だという事を聞きつけた高官の令嬢達は、この機会に接近してあわよくば正妻の座に……いっその事、側室でも構わない等と考えて、侑人に対して熱い視線を送っていたのである。

当初彼女達は、侑人の立場に惹かれて歓迎の宴に参加をしたのだが、時間が進むにつれてその様子も段々と変化していく。宴の始めの頃は侑人だけに視線が注がれていたのだが、段々とガイウスに対しても熱い視線が送られるようになっていったのだ。

グランツ帝国の最高権力者であるフリードリヒ皇帝と相対しているにもかかわらず、常に自然体で悠然と構え、時には微笑さえ浮かべてみせる侑人の姿は、神話に登場する英雄さながらの姿であり、侑人の側に常に控え周囲の警戒を決して怠らないガイウスの姿は、黒髪の勇者に固く忠誠を誓った、百戦錬磨の勇猛な騎士そのものの姿に見えた。

二人ともまだ二十台後半であり容姿も比較的整っている。お伽噺話の世界から飛び出してきたような二人の立ち振る舞いを見た彼女達の心は、完全に奪われたのである。

「うーん。二人とも甲乙付け難いわね……」
「今こっち向いたわ！」
「きっと私の事を見たのよ！　どうしましょう！」

この日を境にして、グランツ帝国の令嬢達の有志一同により、二人のファンクラブが結成される事になるのだが、侑人達にはこの事を知る術が無かった。

「実際に目の当たりにすると色々と感慨深いな……」

侑人はクロウ・ミナトの墓の前で一人静かに佇んでいる。

クロウ・ミナトの墓は、周囲を十メートルほどの高い擁壁に囲まれた広場の中心に建てられた祠の中で、淡々と静かに悠久の時を刻んでいた。

祠の中はもちろんの事、祠の周囲の広場も塵一つ無い状態に保たれ、墓石は綺麗に磨き上げられている。一目見ただけでグランツ帝国軍が厳重にかつ丁寧に管理している事が伺え、長い年月を経た今でもクロウ・ミナトがグランツ帝国に愛されている事が感じられる。

今の侑人の周りには誰も居ない。イーヴォ将軍に案内されてここに来た際には、マリアをはじめとしたいつもの面々が顔を揃えていたのだが、真剣な表情でクロウ・ミナトの墓を見つめ続ける侑人に気を使って、全員が一足先にこの場から退出している。

マリア達にはクロウ・ミナトの墓を目の前にした侑人が、心中で何を感じているのかはっきりとは判らない。望郷の念にかられているとは思うのだが、侑人の表情を伺うとそれだけでは無さそうである。しかしその事を無神経に侑人に向かって問いただそうとする者は一人も居なかった。

「貴方は自分の境遇をどう感じていたのでしょうか」

侑人はクロウ・ミナトの墓前に向かって話し掛ける。当然の如く返事などある訳も無く、どこからか吹き込んでくる涼しい風が、自分の頬を優しく撫でていくのを感じるのみである。

祠の中は怖いほどの静寂に包まれているが、今の侑人にとってはそれがとても心地良く、なぜそう感じるのか自分自身にも判らなかったが、不思議な安堵感に包まれているようだった。

「きっと貴方は常に前向きに生きていたのでしょうね」

侑人はクロウ・ミナトに会った事などもちろん無い。侑人にとってクロウ・ミナト……源義経は、元の世界では過去に存在した歴史上の偉人の一人というだけの存在であり、自分自身にとっては係わりの無い人物である。

しかしこういった形でマグナマテルという世界の中で係わりが生まれると、自分の中で妙な親近感が沸いてくる。侑人は親しかった知人の墓前を訪ねているような錯覚を覚えている。

「私も貴方のように、この世界で前向きに生きて行けるのでしょうか」

クロウ・ミナトの墓前に向かって話し掛ける侑人の顔は非常に穏やかであり、紡ぎだす言葉の中にもどこか温かみを感じさせている。

侑人にとっては、クロウ・ミナトの墓に向かって話し掛ける行為そのものが重要であり、返答の有無などは問題では無い。今の状況に侑人は満足していた。

「異世界から召喚された黒髪の勇者か……ん？」

侑人は自分自身が呟いた『異世界』という言葉に違和感を覚える。

「元の世界から見れば確かにここは異世界だけど……そうか！」

侑人は不意に自分自身の立ち位置を変えれば、自分自身のこの世

界……マグナマテルに対する捉え方は大きく変わる事に気が付く。
どうして今まで気付かなかったのか……いや、この場所に立ち寄ったからこそ気が付けたと考える方がしっくりと来る。そしてこれはマグナマテルに召喚されてから今日まで、自分が少しずつ周囲の人達に影響され、この世界に溶け込んできた事の証ではないだろうか。

元の世界に対する望郷の念を強く持ち、その事だけを常に考えていれば、マグナマテルはいつまで経っても侑人の中では異世界のままになる。常に孤独を感じたまま生活を続けるのであればそれでも構わないのだが、それは余りにも建設的では無い。
しかしこの世界に深く関わり、この世界の人達と深く交流を持てば、異世界出身の侑人ではあるが、立派なこの世界の住人の一人として生きていけるはずである。

実際にマリアやアンナ、ガイウスやヨーゼフ、そしてアルクィンやカルロス王は侑人を一個人として認め、常に一人の人間として扱ってくれている。
日本というこの世界から見れば異世界の出身の侑人ではあるが、出身地がその後の人生の全てを決めるわけではない。自分が何を成すべきか考え行動する事が、今後の人生を決めるのである。

「状況が変わる訳では無いけど、結局は自分の捉え方の問題だな」

望郷の念を持つ事は悪い事ではない。しかしそれに囚われ続ける事は決して言い結果を生まない。この時の侑人はそんな事に気が付いたのである。
日本人で海外に渡りその国で骨を埋めた人物は数多く居る。祖国に戻らなかったのと戻る方法が判らないという大きな差はあるが、祖国に戻らなかったという結果だけを見ればそう大きくは変わらな

い。

今後どのような結末が侑人を待っているのかは判らない。クロウ・ミナトのようにマグナマテルの世界に骨を埋めるかもしれないし、ふとした拍子に元の世界に戻れるかもしれない。

判らない事に対してあれこれと深く考えることは悪い面ばかりではないが、今はそんな事をしている状況ではない。この世界を変える為には立ち止まっては居られないのだ。

「必要としてくれる人が居て、やるべき事がある……今はそれだけで十分だ」

侑人はそんな事を呟くとクロウ・ミナトの墓に向かって深く一礼をし、踵を返して祠の出口に向かって歩いて行く。侑人の足取りはどこか力強い。

いつの間にか空を覆っていた暑い雲はどこかに消え去り、窓からは柔らかい太陽の日差しが降り注いでいる。侑人は一歩一歩確実に明るい外の世界に向かって、ゆっくりと歩いていくのであった。

「マリアとガイウスが言う通り、首都の割には簡素な作りだけど、活気に満ち溢れている感じかな」

クロウ・ミナトの墓を訪れた侑人は、その足で帝都の街を散策している。侑人がセルビナ王国以外で外を移動する際には、必ずガイウスが側に控えているのだが、今は珍しく一人である。

侑人は首都のメインストリートらしき所をゆっくりと歩いている。道を挟んだ両側には様々な露店が並び、売り子達の活気のある言葉

があちらこちらから聞こえる。その状況を楽しそうに見つめている侑人は終始ご機嫌な様子である。

侑人が一人で居る事に意味は無い。ただ何となく無性に一人で歩きたくなっただけであり、外で待っていてくれたガイウス達に無理やり頼み込んで今の状況を作り出したのだ。

一人で歩いて城に戻りたいという侑人の言葉を聞いたガイウスは、当初猛烈に反対した。侑人の身辺警護の任に当たっているガイウスからしてみれば当然の事である。

ハルモ教法王庁教圏国家群に所属する国家を訪れているのであれば、侑人の申し出に対しても考える余地はあるが、ここはつい先日までは敵対していたグランツ帝国であり、到底承服できない。

「旦那の強さは判っていますが何事にも絶対って事は無いんです。もし何かあった場合取り返しが付かないんですよ？」

「確かにそうなのですが、そこを何とかなりませんか？」

侑人の無茶な頼みを聞いたガイウスは、心底困ったような顔をしてそう諭すが、今日の侑人は珍しい事に自己主張が強くなかなか諦めない。

たまには一人になりたいという気持ちはガイウスにもよく判るのだが、この状況での侑人の申し出は余りにもタイミングが悪い。ガイウスはどうやって断るべきか悩んでいる。

そんな侑人とガイウスの姿を見つめていたマリアとイーヴォ将軍は、二人に向かって口々に話し掛ける。二人の言葉は侑人の願いに対して概ね肯定的な意見であった。

「まあまあ。帝都には帝国軍の部隊が複数巡回しておるし、方々に

諜報部隊も配置しておる。何かある前に我々が何とかするから、今日くらいはユート殿の願いを聞いてやってはくれんか？」
「しっ、しかし……」

「うーん……私はどっちかと言うとユートには一人で歩いて貰いたくは無いけど、何となく今日くらいは良いかなって思うよ……心配だけどね」
「マリアが止めなくて誰が旦那を止められるんですか！」

頼みの綱であるはずのマリアに、侑人の意見に対して賛成されてしまったガイウスは、恐る恐る側に止めてある馬車の方を覗き込む。
馬車の中ではフードを目深に被ったアンナが静かに座っている。
アンナはクロウ・ミナトの墓前までは侑人の中に居たのだが、侑人を墓前で一人にする為に馬車の中に座標を合わせて実体化し、周囲に目立たないように馬車の中で待機していた。

「普段はぼけっとしておるが、有事の際の有能さを一番知っているのはそちであろう」
「姉御までそんな事を……姉御だって目立つのはまずいでしょうに」

「こうやって大人しくしていれば目立つ事もあるまい」
「確かにそうですけど」

「マリアもそなたも薄々感づいているとは思うが、ユートにも何か思うところがあるのじゃろう。普段わがままを言わないあやつが珍しくお願いしてきているのだから、たまには好きにさせるのも良いじゃろ」
「うーん……」

皆の意見を聞いたガイウスは最終的には渋々だが了承し、少し諦

めたような顔をしながら侑人に向かって話し掛ける。

「まあ、そこまで皆が言うなら仕方ないです。ですが絶対に揉め事に首を突っ込んじゃ駄目っすよ」

「お約束します。無理を言ってすみません」

「じゃあ先に戻ってますので、旦那も早めに帰ってきて下さいね。それとこれを……旦那の剣なんですから、たまにはしっかりと身に着けて下さい」

「帯剣するのは性に合わないんですよ。でも今回はその言葉に従いますね」

イーヴォ将軍を含めた四人は一足先に城に向かって帰っていく。マリアとガイウスは馬車の窓から顔を出し心配そうに侑人を見つめていた。

そんな二人に向かって侑人は笑顔で手を振りながら見送り、馬車が見えなくなるとゆっくりと城に向かって歩き始め現在に至っている。

「国が変われば特産物も変わるし、色々見物しながらゆっくりと帰りますかね」

侑人は周囲を見渡しながらそんな事を呟き、城へと向かって進んでいく。全身黒尽くめの姿はかなり目立ち、周囲に居る人達からの好奇な視線に晒されているが、そんな事など全く気にならない。

仲間と共に行動するのも楽しい事ではあるが、侑人は久々に訪れた一人の時間を心から楽しんでいる。しかしその事が一つの油断を生んでいた。

物陰からこちらの様子を伺う怪しい一団の気配に、侑人は全く気

が付いていなかった。

第４２話：不吉な影【前編】（後書き）

ポジティブシンキング。大切な事ではありますが、実践するのは難しい事でもあります。

第４３話：不吉な影【中編】

「ん？」

メイン通りから少し裏に入った方角から何かの声が聞こえる。街の喧騒に紛れてしまい少々聞こえ辛いが、複数の男達の荒っぽい声のようだ。

侑人の脳裏にガイウスの『揉め事に首を突っ込んじゃ駄目っすよ』という声が浮かんだのだが、どうしても気になってしまいついついそちらの方に足を向けてしまう。

広い大通りから建物が密集している裏路地に入ると、街の雰囲気はがらりと変わる。先ほどまでの明るく快活な様子は無く、そこはかとなく陰鬱とした様相を呈している。

大通りから聞こえる街の人々の声もどこか遠く、別の世界から届けられる音声のように感じる。侑人はそんな事を思いながらも問題の声が聞こえる方角へと歩を進めていく。

「ねーねーいいじゃん。俺らと一緒に遊ぼうぜ」

「……」

「無視されちゃってるのかな俺ら」

「お高くとまってるんじゃねえよ！」

目の前にあるT字路の右側から男達の声が聞こえる。どうやら下手なナンパをしているような雰囲気ではあるが、若干恐喝まがいに

も感じられ余り気分が良いものではない。

「どこの世界のもこういう手合いは居るって事か……」

侑人はこめかみを押さえながらそんな事を呟く。争いごとに首を突っ込む趣味は無いのだが、この事態を無視して通り過ぎるのは余りにも寝覚めが悪そうである。

好奇心猫をも殺す……そんな諺を思い出すが、全ては後の祭りでありどうしようもない。侑人は色々と覚悟を決める。

「えーと。困っているようですから、その辺にしたらどうですか？」

侑人はそんな言葉を掛けながらゆっくりと路地から姿を現す。侑人の目には五人の男が一人の女性を取り囲んでいる光景が映る。

侑人にとってその光景はとても気分が良いものには見えず、思わず顔をしかめそうになるが、その気持ちを押さえ込みながら穏やかな表情を何とか保つ。

「無理やり誘ってもきっと楽しくないですよ」

「なんだてめ……げっ」

突然侑人に話し掛けられた男達は、こちらを威嚇するように振り返り、威勢の良い声を出そうとしたのだが、全身黒ずくめの黒髪の男の姿を見たとたん動きが止まる。

「あれって噂の……」

「この世界に黒髪と言えばあれしか居ねーだろ」

「この状況って不味いんじゃないか？」

男達はこそこそと自分達が置かれている状況を確認しあっている。

黒髪の勇者がグランツ帝国の帝都を訪れていると言う噂は、帝国民の間を駆け巡っておりもはや知らぬものは居ない。
どういった経緯なのかは判らないが、黒髪の勇者が目の前に居て自分達の行動に対して一言物申している。そんな状況に気が付いた男達は真っ青な顔をしながら後ろに下がり、侑人から段々距離を取っていく。

「い……いや、丁度もう諦めようと思っていた所でして」
「しつこいのはまずいっすよね」
「お……俺達そろそろ用事があるので」
「「失礼しまっす！」」

男達は口々に言葉を発すると一目散に逃げて行く。そんな男達の姿を見た侑人は呆れつつも、厄介な事に巻き込まれずに済んで少し安堵している。

「お怪我はありませんでしたか？」

侑人は男達に取り囲まれていた女性に向かって優しく問い掛けるが、女性は呆然としたままの姿で固まっており返事をしない。
その女性はメイド服を着ていて、両手で大きめのバスケットを抱えている。主人の使いで外に出たら今回の事態に巻き込まれてしまったといったところか。

五人の男に無理やり誘われてどうしたら良いのかと途方にくれていたら、巷で噂になっている黒髪の勇者が突然現れて颯爽と助けてくれた。
そんな現実にはめったにありえない、物語の中の出来事みたいな事が続けざまに起こり、女性は動揺し思考が完全に停止していた。

「ちょっと済みません」
「きゃあ！」

侑人は女性の額に手を当てる。少し体温は高かったが熱があるといった訳では無さそうだ。ぱっと見ではあるが外傷も無く健康そのものの様子であり、侑人は少し安心する。

そんな侑人の突然の行動を受けてその女性は我に返る。気が付けば黒髪の勇者が心配そうな顔をしながら自分の額に触れていた。ますます良く判らない状況になっていたのだが、なんとか思考を繋ぎとめて侑人に向かって勢いよくお辞儀をする。

「あ、あの！　助けて頂いてありがとうございました！」
「いえいえ。通り掛かっただけですのでお気になさらずに」

女性はなんどもお辞儀をしながら礼を言う。そんな姿を見た侑人は少し困った顔をしている。

「私が通り掛かったのは偶々ですからお気になさらずに。今度は注意して下さいね」
「はい！」

侑人の言葉を受けた女性は深く一礼をした後、大通りの方に向かって小走りで走って行く。そんな姿をにこやかな顔で見送る侑人であった。

「大事にならなくて良かった……っと！」

女性を見送り一息ついた侑人は、大通りに戻ろうと歩を進めるが、足元にあった煉瓦に躓いて思わず大きく体制を崩してしまう。
転びそうになる体を支える為に壁に手を着き、何とか無理やり体制を整えたのだが、その瞬間に予想もしなかった展開が侑人を襲う。

カッ。

「今度は何だ！」

今まで侑人の頭があった位置の壁に、鋭い針のようなものが突き刺さる。足元にあった煉瓦に躓いたのは偶然であったが、その事が侑人の命を救った。
侑人は反射的に針が飛んできた方向を向く。侑人の目には黒いフード付きコートを目深に被った複数の者達が、こちらに向かって襲い掛かってくる姿が映る。

「なっ！」

突然の事態に精神集中は間に合わず、プロセン王国防衛戦のときに使った雷の魔法どころか、得意であるはずの土の魔法を使った防壁の作成も間に合わない。
今の自分の身を守れるものが、帯剣している一本の剣のみである事を瞬時に察した侑人は、反射的に右手を剣にかける。

――――剣で切れば、人は死ぬ。

その瞬間、不吉な言葉が侑人の脳裏をよぎった。

ガィン。

咄嗟に右手で抜き放った剣で、左肩を目掛けて振り下ろされている暗殺者の剣を間一髪のところで防ぎ、相手の攻撃の勢いを利用して少し後ろに距離を取る。

それとほぼ同時に今まで居た地面を、別の者が操る槍から繰り出だされた鋭い突きが抉るのだが、暗殺者達の攻撃はそれだけでは終わらない。

ガキン。

今度は頭上から別の者が攻撃を仕掛けてくる。軽やかに宙を舞う小柄な体躯から、鋭く繰り出される細剣による殺気が篭った突きを、剣で払い上げるように何とか弾き返したのだが、そのせいで今度は胴ががら空きになる。

暗殺者達がその隙を見逃すはずも無く、二本の短剣を駆使する四人目の者が立て続けに懐に飛び込んでくる。漆黒の軽鎧の繋ぎ目を正確に襲うその攻撃は、彼らが訓練された者達だという事を如実に表している。

「こんにゃろ！」

「ぐぁ！」

やけくそ気味に咄嗟に放った右足の前蹴りが、短剣を駆使する者の鳩尾を捕らえ、その者の動きはやや鈍るのだが、戦闘力を奪うまでには至らない。

複数人を同時に相手をし続けるのはかなり不味い事だと判断し、目の前の暗殺者を無力化しようと一歩踏み出したところで、いきなり強烈な悪寒が襲ってくる。

「やばっ！」

少しだけ視線を遠くに移すと別の者が吹き矢らしきものを構え、こちらを狙っているのが見える。何も考えず目の前の者に対して攻撃を仕掛けていれば、間違いなく防ぎようが無かった。

こちらに気付かれ一瞬だけ躊躇しているように見えたが、その者はそのまま攻撃に移り、筒の先端から放たれた鋭利な針が音も無く襲い掛かってくる。

カキン。

筒の向きから眉間を狙っていると判断し剣を横向き構えて防御の体制を取る。急所に当たらなければ何とか行動が出来るはず……そんな咄嗟の判断での行動ではあったが運良く攻撃を防げた。

運も実力のうちという言葉があるが、今の状況では心底心強い言葉である。数秒間だけでも精神集中の時間を与えてくれれば情況を一気にひっくり返す自信があるのだが、今対峙している暗殺者達はそんな余裕を与えてくれない。個人の技量も相当な物だが、何よりも一糸乱れぬ連携が個々の力を数十倍に引き上げている。

「私を殺しても何の意味も無いですよっと！」

息をつく暇も無く、最初に攻撃してきた暗殺者が首を狙って横薙ぎに剣を払い、二番目に攻撃してきた者が胴を狙って突きを放ってくる。鋭い攻撃が纏う風切り音が唸りをあげて眼前に迫る。

自身が装備している一本の剣だけでは防ぎようの無い連携攻撃を、何とかバク転でかわし大きく距離を取る。ちなみにバク転をするのは生まれて初めての経験ではあったが、命が掛かれば人間大抵の事は出来るようである。

「少しは手加減をって……うぉ！」

左手を地面に着き片膝を立てるような体勢で着地した瞬間、今度は短剣が唸りを上げて襲ってくる。先ほど鳩尾を蹴り上げた者が、体勢が不安定になる瞬間を狙って投げつけて来たのだ。

慣れないことをしたせいで体勢は大きく崩れており、大きく移動して避ける事は出来ない。半ば反射的に剣を振り上げて短剣を弾き返したのだが、弾き返した短剣と全く同じ軌道を描いた二本目の短剣が間近に迫ってきているのに気が付く。

「嘘！」

無理な体勢から限界まで体を左に傾けて二本目の短剣を紙一重でかわす。関節の稼動域を超えた左肩と左肘が悲鳴を上げるが、背に腹は変えられない。

頭髪を掠めた短剣は黒髪を数本だけ宙に舞わせたが、この攻撃も何とかやり過ごす。しかし安心出来たのはほんの一瞬だけであり、先ほど空から襲い掛かってきた細剣の暗殺者が、前回と全く同じ様に頭上から攻撃してくるのが目に映る。

「くう！」

大きく左に傾いた姿勢から無理矢理跳躍する。両膝に大きな負担が掛かり、鈍痛が体中を駆け巡るが躊躇している暇など全く無い。

何とか跳躍には成功したのだが、大きく崩れた体勢のせいで後ろに跳ぶことは出来ず、左後ろに向かって体は流れていく。

「痛！」

全く受身が取れない姿勢のまま、左側の煉瓦壁に勢い良く激突する。左肩からぶつかったお陰で多少は衝突の勢いを殺す事が出来たのだが、それでも痛いことには変わりが無い。

とはいえ頭から激突していれば致命的な隙を相手に見せる事になったはずであり、そう言った意味では被害を最低限に抑えることが出来た。

「え！？」

勢い良く移動した視界が元に戻るのとほぼ同時に、今度は眼前に火球が迫っているのに気が付く。今まで気が付かなかったのだが、暗殺者の中に魔道士が混ざっていたようだ。

暗殺者達の一連の連続攻撃も予想をはるかに超えたものであったが、相手が魔法を使える可能性を失念していた今の状況で、この攻撃を受けるのは非常に不味い。

「いい加減にしろ！」

大声をあげるのと同時に体が勝手に動く……死にたくない一心で咄嗟に蹴り上げた右足の踵が火球とぶつかり、強引に火球の軌道をずらす。靴底を焦がす匂いが周辺に漂うが、奇跡的に体には傷一つ負っていない。

軌道をずらされた火球は頭上を掠めて壁と激突し、大きな爆発音を周囲に響かせる。さすがの暗殺者達もこれまでの一連の動きを見て呆気に取られ、呆然と佇みながら思わず言葉を発する。

「ば……馬鹿な」

「なんて出鱈目さだ」

「気に入って貰えたのは嬉しいのですけど、そろそろ帰っても良いですか？」

余りの予想外の事態に動きを止める暗殺者達。思わず今まで遂行してきた数々の任務を思い返したが、ここまで立て続けに攻撃をか

わされた事など記憶に無い。
今回の任務の相手が常人では無い事を前情報から十分に学んでいた為、初撃から常に全力で攻撃を仕掛ける事を心掛けて行動を起こしたのだが、異常なのにも程がある。

タイミングを見計らって完全に相手の虚を突き、それと合わせて各々が得意とする攻撃方法で連続攻撃を仕掛ける。全ての攻撃が一撃で命を奪う殺傷力を秘め、一撃でも当たればこちらの勝ちであったはず。
しかし目の前の男はその全てを捌ききった。事前に入念な打ち合わせをして、万全の体勢を整えた全ての攻撃を、無傷でかわされる事など想像すらしていなかった。

暗殺者達は相手の技量を再度測る為に、少し様子を見る事に決めたのだが、その事が彼等の明暗を分ける事になる。そのまま考える余裕を与えずに攻撃を続けていれば、かわし続ける侑人にも何時かは限界が来て、何かしらの攻撃が当たったはずである。
少しの猶予を与えて貰った侑人は魔力を開放し、精神集中を完了させている。侑人にいつもの飄々とした調子が戻って来ていた。

「さて、どうしようかな」

侑人は暗殺者に聞こえない小さな声でそんな事を呟きながら、今後の自分の行動方針を考える為に相手の動きを見定めながら思考を走らせる。

一番手っ取り早いのは雷の魔法を使って全員を一瞬で無効化する

事なのだが、建物が密集している裏路地という立地でそれを実行するのはいささか不味い。

今までの一連の戦いで結構大きな物音を立てている為、不審に思った住人が裏路地に面した窓を開けて確認する可能性が考えられ、最悪の場合一般市民を巻き込んでしまう恐れがある。

その場合、戦闘訓練を積んでいない一般市民が一番大きなダメージを受ける可能性が高く、万が一老人や子供を巻き込んでしまうと命を奪ってしまうかもしれない。

逆にそれを考慮して弱い魔力で魔法を放つと、今度は敵対している暗殺者達に与える効果が薄くなる為、放つ魔法の加減が非常に難しく使い勝手が悪い。

次に手っ取り早い手段は魔力を全開放し、数々の攻撃魔法を駆使して徐々に相手を無力化する事ではあるが、この方法はかなり躊躇(ためら)われる。

魔法での戦闘行為に慣れていない侑人では加減が判らない為、一歩間違えれば相手の命を奪う可能性がある。命のやり取りをしているこの場で甘い事を考えるなと言われてしまうかもしれないが、これは自分の行動理念であり曲げるつもりは一切無い。

魔法での攻撃を諦めこのまま魔法で防御しつつ剣で戦い、徐々に相手を無力化するという方法も考えられるが、この行動にはかなりの危険が付き纏う。

一歩間違えれば剣で相手を切り殺してしまう可能性が高いという理由もあるのだが、それ以上に今までの一連の連続攻撃を考えると余りにこちらの分が悪すぎる。背負うリスクが高すぎて実行する気が起きない。

とりあえず大通りに向かって逃げ、巡回しているグランツ帝国軍

の増援を期待するという選択肢も存在するが、これはどう考えても悪手でありそんな行動を起こす気は無い。
大通りには多数の一般市民が行き来している為、そんな場所で戦闘行為を行った場合どれだけの人が巻き込まれるのか想像も付かない。

「イーヴォ将軍の言葉を信じるしかないか……」

侑人の脳裏には『方々に諜報部隊も配置しておる』というイーヴォ将軍の言葉が浮かんでいる。アンナの正体を短い期間で掴んだ、グランツ帝国の諜報部隊の実力を持ってすれば、今回の事態を把握するのは時間の問題のはずである。
消極的な方法ではあるがこのまま人気が無い方角に逃げつつ、グランツ帝国軍の諜報部隊が今回の事態を掴むのを待ち、援軍が現れるのを期待するのが一番被害の少ない方法だと侑人は判断する。

「このまま引き下がってくれればありがたいけど……そうは行かないだろうな」

侑人はそんな事を呟くと、人気の無い裏路地の奥の方に向かって風のように駆け抜けていく。暗殺者達は侑人のそんな行動に一瞬だけ虚を付かれたが、慌てて侑人を追いかけはじめる。
騎士であるのならば敵前逃亡は死に等しい行動ではあるが、性根が一般人の侑人にとってそんな事は関係が無い。ことごとく予想を裏切る侑人の行動を目の当たりにして、暗殺者達はかなり動揺していた。

第４３話：不吉な影【中編】（後書き）

ほのぼのストーリーと平和主義の看板を意地でも降ろしません！

第４４話：不吉な影【後編】

薄暗い裏路地の両側にそびえ立つ無機質な赤茶色い煉瓦作りの壁が、次々と交互に迫りながら後ろへと流れていく。時折聞こえる金属と煉瓦のぶつかる甲高い音が、自身の緊張感を否が応でも高めている。

背後から感じる追跡者の気配は六つ。少しずつそれは強くなっており、侑人に向かって放たれている殺気が、はっきりと感じられる距離まで迫って来ていた。

侑人は遠隔攻撃の的になるのを避ける為にあえて複雑な逃走経路を取り、直線の部分は狭い道幅を何とか利用してジグザグに走り抜けている。その為どうしても全速力で走る事が出来ず本来のスピードが出せない。

とはいえ普通の人間では、身体能力が強化されている侑人に付いていく事など出来るはずも無い。その事実が侑人を追跡している暗殺者達が、高度な訓練を受けた者達だという事を証明していた。

「人混みで狙われなかったのだけが救いだなって……あぶな！」

侑人は後ろから迫る魔力を感じて咄嗟に進路を変える。その刹那、今まで頭があった位置を火球が通り過ぎ、轟音を響かせながら煉瓦作りの壁に激しくぶつかる。

すでに相対してから数十分の時間が過ぎており、暗殺者達の攻撃はどんどん激しさを増し、手段を選ばず大胆になっていく。

いまだに逃げ続ける侑人に対して痺れを切らしているのも理由の一つではあるが、それ以上にグランツ帝国軍の諜報部隊に感づかれる事に対して、暗殺者達は焦っている。

グランツ帝国領内における黒髪の勇者の死……自らに与えられた任務を達成する絶好の機会を逃がすわけには行かない。そんな思いが暗殺者達を駆り立てていた。

「墓地か……人気は無さそうだがここは避けたいな……ってうお！」

土地勘の全く無いグランツ帝都の裏路地を無我夢中で駆け抜けているうちに、侑人はいつの間にか街外れにある教会の裏の墓地に辿り着く。

暗殺者達の攻撃は時を追って激しさを増し、もはや形振りを構っていない域に達している。侑人は周囲に人が居ないか辺りを見回そうとしたが、注意深く観察するのはもはや不可能な状態にまで追い込まれている。

「後で直します！　ごめんなさい！」

侑人は左手を地面に当て魔力を放出し、一瞬で土壁を出現させ暗殺者達の攻撃をやり過ごす。土壁の反対側では無数の金属片と魔法が炸裂する音が響く。

墓石を巻き込まないように気を使った為、通路の中心の土のみを無理矢理集めた土壁の形はかなり歪であったが、それなりに効果はあったようだ。

「予想通り過ぎて涙が出そうです！」

侑人が言葉を発するのとほぼ同時に、土壁の左右から剣と槍を携えた者達がこちらに向かって飛び掛り、土壁の上部からは細剣を装備した身軽な者が襲い掛かってくる。

大きくバックステップを取ればやり過ごす事が出来る連携攻撃ではあるが、防戦一方で相対していれば何時かは致命的な一撃を受けかねない。

「受身は上手く取って下さいね！」

侑人はそんな言葉を叫びながら、細剣を構えて襲い掛かってくる暗殺者に向かって大きく跳躍する。殆ど防戦一方だった侑人が突然反撃に応じた為、彼らの目に一瞬の動揺が走る。

「痺れろ！」
「ぎゃあ！」

侑人は右手で構えている剣に向かって雷の魔法を放ち金属の刃を帯電させ、そのまま細剣の暗殺者と空中で一瞬の鍔迫り合いを演じる。

侑人自身の右腕にも若干の痺れを感じるが、あらかじめ覚悟を決めていたので影響は少なかった。しかし空中から襲い掛かってきた暗殺者にとっては、予想外の感覚が体中を襲い掛かる。

ドン。

「ぐあっ」

体勢を大きく崩し地面に向かって背中から落ちる暗殺者。頭から

は落ちていないので命に別状は無いだろうが、暫く動く事は出来ないはずである。
　侑人はそんな姿を横目に見ながら、自らが作り上げた土壁を踏み台にしてもう一度大きく跳躍し魔力を左手に集中させる。予想が当たっていれば暗殺者達がこの隙を見逃すはずは無い。

「簡単に的にはなりませんよ！」

　侑人はそんな事を叫びながら、こちらに向かって遠隔攻撃と魔法を放とうとしていた者達の足元目掛けて複数の火球を放つ。侑人の魔法攻撃を受けた暗殺者達は咄嗟に攻撃態勢を解き、四方に散りながらそれを回避する。
　侑人の魔法攻撃は体を直接狙った訳ではないが十分な牽制となり、着地までの時間を十分に稼ぐ。侑人は静かに着地すると彼らの方を見ながらおもむろに口を開く。

「お互いの為にもここまでにしませんか？」

　侑人の涼しげな声が静かに響き渡る。しかし侑人自身も今回の事態がこのまま終焉するとは思っていない。状況が大きく変わる事が無い限りいつまでも続く事は理解している。

「はぁ……話し合いの余地は無さそうですね」

　軽く溜息をつきながらそんな事を呟く侑人。
　グランツ帝国軍の諜報部隊がこの件を察知し、イーヴォ将軍の元に情報が早く届く事を祈りつつも、新たな戦闘に向けて気合を入れなおす。

「ん……？」

精神を集中させ周囲を探ると後ろから妙な気配を感じる。侑人が相対している暗殺者達が放つ殺気とは全く違い、すぐにでも消えてしまいそうな儚く脆い気配。

少し気になった侑人がその方向に視線を向けると、一人の少女が墓地の片隅にある墓石の前で座り込み、じっとその墓石を見つめている姿が目に映る。見た目は十歳程であり、肩のラインで切りそろえられた銀髪が儚げな印象を与えていた。

侑人は少しの間、少女の姿に目を奪われてしまう。

「へっ？　あっ！」

暗殺者達は不用意に視線を外した侑人の行動を見逃さず、侑人に向かって炎の魔法を放ち遠隔武器でいっせいに攻撃してくる。

侑人はこれらの攻撃を避けてやり過ごそうと一瞬考えたが、このまま避けると少女が巻き込まれる事を瞬時に察知し、土壁を作成する事で攻撃を迎え撃つ。

「危ないから逃げてください！」

土壁に炸裂する爆発音を聞きながら侑人は少女に向かって大声で注意を促すが、少女は侑人の声に全く反応せず、墓石を見つめたままの姿で動こうとしない。

このままだと非常にまずい事態が訪れるのが目に見えている為、侑人は攻撃の軸線をずらそうと真横に移動しようとしたが、左右を暗殺者達に挟まれその動きを封じられる。

「手段は選ばないって事ですか……君！　早く逃げて！」

自分の命を奪う目的の為に、無関係の少女を利用しようとする暗殺者達に怒りを覚えながらも、侑人は少女の安全を確保する為に少女に向かって注意を促し続ける。
しかし少女はそんな侑人の気持ちを察する事も無く、そのままその場に座りこみ続け状況はどんどん悪い方へと転がっている。

「君！　死にたいのか！」
「……死にたい」

苛立ちを押さえきれなくなってきた侑人は、少し強い口調で少女に向かって問いただす。
すると少女はようやく重い口を開いたのだが、その口から発せられた言葉は侑人の予想していた物とは大きく違っていた。

「な……なんで……って危ない！」

侑人の目に少女に向かって襲い掛かる暗殺者達の姿が映る。
侑人と少女のやり取りを見ていた暗殺者達は、少女が侑人にとって人質と成り得る事を察知し、より有利な状況を作り出す為に行動を起こしたのだ。

「ふざけるな！」

その行動を見た侑人は大声を上げ少女に向かって全力で走り出す。
自身の能力を全開放した侑人の動きは常人の限界をはるかに越えたスピードを生む。
なんとか暗殺者達より一瞬だけ早く少女の元へと辿り着き、左腕で華奢な少女の体を抱えてそのまま距離を取り、暗殺者達に向かって怒声を浴びせる。

「百歩譲って私に危害を加える事に対しては目を瞑りますが、無関係な人間を巻き込むのは絶対に許しません！」

言葉使いは丁寧だが侑人が発する怒気は凄まじく、暗殺者達は圧倒されて一瞬動きを止める。しかしそんな侑人の言葉に反応する者が居た……例の少女である。

「……死んでもいい」

侑人に衝撃が走る。先ほど聞こえた言葉は空耳では無かった。

少女は侑人に抱えられた姿勢のまま、虚ろな銀色の瞳で空を見つめながらそんな事を呟いている。少女の言葉には大きな絶望が感じられ、言い様の無い思いが侑人の心の中を満たしていく。

――――何かが弾ける。

「私が……私が悲しみます！　君が死んだら私が悲しみます！」

侑人は思わず大声を上げる。

この少女の身の上に何があったのか侑人には判らないが、絶望に塗れた言葉を語る幼い少女を放置する事など出来ない。

この少女に対して何が出来るのか判らないが、少なくとも話し相手にはなれるはず。侑人は自分自身の命が危険に晒されている事を一瞬忘れ、今は少女の事で頭が一杯になっていた。

「あ……」

少女の瞳に少しだけ生気が戻る。ゆっくりとした動作で恐る恐る侑人の顔を見上げた少女の銀色の瞳に、穏やかな侑人の黒い瞳が映る。

そんな少女の姿を見た侑人は優しい顔で微笑みかける。悲しい出来事を全て消し去るような暖かい雰囲気が少女を包み込んでいく。

「死ぬにはまだ早いですよ。君も私も」

「……うん」

少女は侑人に対して初めて小さく頷き返事を返す。

その姿を見た侑人は満足そうに頷くと、少女を地面にそっと降ろして自分の後ろに庇い、相対している暗殺者達に向かって厳しい視線を投げかける。

「とは言え、この状況を何とかしないといけませんね」

自分自身の身だけを守ればよかった今までとは違い、少女の安全を確保しなければならない。状況はより厳しくなり失敗は絶対に許されない。

しかし侑人の目には今まで以上の活力がみなぎっている。侑人は誰かの身を守る為に自身の力を行使する状況に追い込まれ、普段以上の力が発揮されていた。

「甘い考えは……捨てないと駄目かもしれませんね」

侑人はそんな言葉を呟きながら自身の魔力を全解放する。

侑人が人と相対する際に魔力を全開放する機会は殆ど無く、セルビナ王国を出国してからは、イーヴォ将軍が率いるグランツ帝国軍と相対した際に一瞬だけ開放した位だ。

プロセン王国防衛戦の際も、グランツ帝国軍と相対する時はある程度魔力を抑え、極力相手を傷つけないように気を使って戦ってきた。その為、侑人の本来の魔力量を知る者は案外少ないのだが、今は少女を守る為にも危険を冒すしか方法が無かった。

追い込まれてしまった侑人の苦肉の策であったが、これが事態を好転させる。

侑人の目の前に居る暗殺者達は、侑人が本来持つ魔力量がここまで凄まじい事を初めて知りひどく動揺している。今まで優位に事を進めていた安心感が一気に絶望感に変わる。

魔道士部隊に匹敵する魔力を秘めているという話を聞いてはいたが、目の前で対峙する男から感じる魔力量はそんなレベルを遥かに超え、少人数で闇に葬り去るのは始めから不可能な任務だったのではないか……そんな事を考え始めた暗殺者達にとって、さらに追い討ちを掛ける事態がこの後発生する。

『ユートすまん！　待たせた！』

『気が付いたようですね！　助かります！』

慌てた声を侑人の脳内に響かせながら、アンナが侑人の元へと馳せ参じる。侑人が魔力を全開放している事を瞬時に察知したアンナも、戦闘態勢を取る為に魔力を全開放する。

暗殺者達から見れば侑人一人でもありえない魔力量だったのに、さらにその量が倍に増えたように感じられ混乱に拍車を掛ける。

マグナマテル全体で考えても、侑人とアンナに匹敵する魔力量を持つ者は数えるほどしか居ない。そんな稀有な魔力の持ち主が二人同時に全力を出している状況は、敵対する者にとっては悪夢でしかない。

大地を震わすような魔力を発散する侑人の姿は、人というより魔王に近い存在感を周囲に放ち、暗殺者達の戦意を完全に奪い去る事に成功する。

「引くぞ……」

リーダー格である剣を装備した男が呟くのと同時に、一斉にその場から撤退する暗殺者達。統制されたその動きは最後まで乱れず、彼らが訓練されている事を如実に感じさせる。

暗殺者達が姿を消した墓地には、いつもの静けさが戻っていた。

「マリアが突然嫌な予感がすると言い出しての……まあ、半信半疑でユートを迎えに戻ろうとしたら諜報部隊から戦闘中という報告が来て、わらわだけ慌てて戻ってきたのじゃ」

「良いタイミングです。本当に助かりました」

暗殺者達が撤退し周囲の安全が確保されたのを確認したアンナは、侑人の中からおもむろに実体化する。実体化したアンナは心底安堵した表情を隠そうともせず、侑人の無事を心から喜んでいる様だった。

アンナに向かって侑人は笑顔で頷き、自分自身が無傷であり心配が要らない事を伝える。そんな侑人の姿を頷きながら見ていたアンナは、侑人の後ろに隠れている少女の姿を見つけ質問をする。

「それはそうと、こやつは誰じゃ？」

「こやつ？　ああ、彼女は……お名前は何でしたっけ？」

「……エリザベス」

エリザベスは侑人の背中にしがみ付きながら小さな声で返答をする。

アンナは玩具を見つけた悪戯っ子のような顔をしながらエリザベ

スを構い始める。とはいえエリザベスを見つめる瞳は優しい光を放っていた。

「ほほう、良い名じゃな。ちなみに近しい者には何と呼ばれておるのじゃ？　エリザか？　ベスか？　それともリジーかの？」

「……」

エリザベスは感情を何処かに置き忘れてきたかのような無反応ぶりであり、アンナの問い掛けに対して答えようとしない。侑人の背中に張り付いたまま顔をうずめてアンナの顔を見ようともしないのである。

そんなエリザベスの姿を見たアンナは、少しだけ頬を膨らめて拗ねたような顔をしたが、直ぐに穏やかな表情に戻りエリザベスの頭を優しく撫でている。

「そんなに照れる事もないじゃろう」

「……」

やはりエリザベスは答えない。さっきよりも強い力で侑人にしがみ付いたまま、アンナに対して返事をする素振りさえ見せない。

侑人は少し困った顔をしながら二人の様子を見守っていたが、このまま見守っていても埒が明かないと判断し行動に移す。

「まあまあアンナ。エリザベスも突然の事で色々と戸惑っているのですよ。少し落ち着くのを待ってからお話したらどうでしょうか？」

「ユートがそう言うならそうするかの」

アンナの表情は渋々といった感じではあるが、侑人の提案を受け入れてくれたようであり、後は無口な少女を落ち着かせればこの場はひとまず収まりそうである。

「エリザベスも色々疲れたでしょう。巻き込んでしまって申し訳なかったです」
「……リズ」

「リズ？　ああ、貴方の愛称はリズというのですね。そう呼べば良いですか？」
「……うん」

リズは相変わらずの無表情で侑人を見つめている。いや、何となく嬉しそうな表情をしている様な気もするがどうだろうか。
侑人はとりあえず反応してくれたそんなリズの顔を優しそうな顔で見つめ返す。二人の間にはほのぼのとした空気が流れている。

「むう……なんか面白く無いぞ」

二人の世界から取り残された形になったアンナは、頬を膨らめながらそんな言葉を呟くのであった。

第４４話：不吉な影【後編】（後書き）

ロリで無口のクール時々デレ。エリザベス・グレースを今後とも宜しくお願いします。

第４５話：勇者と少女

謎の暗殺者達の襲撃を受けた侑人はイーヴォ将軍達と合流した後、厳戒態勢を取るグランツ帝国軍に護衛されて城に辿り着き、休む間もなくそのままフリードリヒ皇帝の待つ謁見室に通された。

謁見室に入室したのは侑人と侑人の中に入っているアンナの二人だけであり、マリアは城まで付いて来てしまったリズの相手をする為に客室に向かい、ガイウスは彼女達を警護する為に二人に付いて行った。

黒髪の勇者襲撃の一報はフリードリヒ皇帝の耳に即座に届けられており、侑人が城に辿り着いた頃には、フリードリヒ皇帝の勅命により武装した兵団が帝都の警戒の為に次々と出陣し、城内は物々しい雰囲気に包まれていた。

「今回の事態に対し、グランツ帝国を代表してお詫び申し上げる」

「今回の一件は私に大きな過失がありますので頭を下げないで下さい。私こそご迷惑を掛けて申し訳ありませんでした」

こちらに向かって頭を下げるフリードリヒ皇帝の姿を見た侑人は、かなり慌てた様子でフリードリヒ皇帝に向かって深々と頭を下げる。

今回の一件は侑人が一人で城に戻りたいなどと言い出さなければ起こり様が無かった事態であり、グランツ帝国の非は全く無い。

「とにかくご無事で良かった。ユート殿の実力を身に染みて判って

いるつもりではあるが、何事にも絶対という事は無いからな」
「私の独断のせいでグランツ帝国に多大なる迷惑を掛け、申し訳ない気持ちで一杯です」

「ユート殿に責任があるとは考えてはおらぬ。そろそろ頭を上げて貰えないだろうか」
「は……はい」

フリードリヒ皇帝の言葉を受けた侑人は恐る恐る頭を上げる。侑人の目には心底安堵した顔のフリードリヒ皇帝の顔が映った。

「我々の方は心配しなくて良い。帝国の安定を脅かす者を排除するのも我々に課せられた義務であるしな。それよりもユート殿もあの後大変だったと聞いているが、その辺はもう解決したのかな？」
「一応解決……したとは思います」

フリードリヒ皇帝の言葉を聞いた侑人は、マリア達と合流した時の事を思い出す。

暗殺者達を退けてから数刻後、マリア達を乗せた馬車とイーヴォ将軍が率いるグランツ帝国軍の一個小隊が墓地へと慌しく駆けつけてきた。緊迫した雰囲気を感じた侑人は唖然とした顔でその状況を見つめていた。
真っ先に侑人の下へと駆けつけたマリアは、いきなり侑人に抱きついてボロボロと泣き出し、続いて駆けつけてきたガイウスは無事な姿を見て一瞬だけ安心した顔を見せた後、侑人に向かっていきなり土下座して謝罪する。

「ユートが……ユートが……ヒック」
「主の危機に駆けつけられなかった無能な衛士に罰をお与え下さい。

お望みであれば死を持って償います」
「二人とも!?　ちょっ……ちょっと落ち着いて下さい!」

二人に少しだけ遅れてイーヴォ将軍も血相を変えて駆けつけてくる。その姿を視界に捉えた侑人はイーヴォ将軍に助けを求めようとしたが、その望みは叶えられない。

「ユート殿!　此度の失態は全て私の責任!　私が死を持って償いますのでどうか穏便な処断をお願い致します!」
「へっ!?」

イーヴォ将軍は侑人の目の前でいきなり土下座しそんな言葉を必死に掛けて来る。イーヴォ将軍の部下達も将軍の後ろで全員土下座し、侑人に向かって頭を下げ続けている。

「ちょっと!　ア……アンナ!」
「丁度良い機会じゃ。自分の立場がどういった物か学ぶと良いぞ」

余りの状況に困り果てた侑人はアンナに向かって助けを求めるが、アンナはそんな状況を見てニヤニヤしているだけで助けてくれない。自分の命を軽く見る癖がある侑人に、自分の立場を認識させる良い機会だとアンナは判断したのだ。

アンナの思惑通り、侑人は黒髪の勇者という立場がどういった物なのか改めて身を持って知り、今後は軽率な行動を控えようと固く誓いつつも、この状況をどうやって収めようかと途方に暮れていた。

ツンツン。

侑人が思考の海に深く潜りかけた時、不意に背中を突かれる感触に気が付く。マリアにしがみ付かれて身動きが取れない為、首を後

ろの方に回しその感覚を与えている人物の顔を見る。
侑人の背中を突いていたのはリズであり、リズは銀色のビロードのような瞳で侑人の顔をまじまじと見つめていた。

「……怖い人？」
「わははは！　ある意味この世で一番怖いかもしれんの」

「……判った」
「私は怖くはありません！」

リズの純真無垢な質問がツボに入ったアンナは大笑いでその言葉を肯定し、アンナの言葉を信じそうになっているリズの姿を見た侑人は必死になって否定する。
そんなやり取りをマリアやガイウスやイーヴォ将軍は、少し唖然とした表情をしながら見つめていたが、やがてアンナに釣られるかのように笑顔になる。

「とにかく罰を受けなければならない人物が居るとすれば、それは私ですのでこの話は終わりにしましょう。まだ罰がどうとか言うのであれば、私に対する罰をまず決めて下さい」
「旦那がそう言うのなら……」
「それでは私の気が……いや、ユート殿のご裁量に従います」

場が和んだ事を察した侑人はそんな言葉を全員に向かって掛け、無理矢理この場を収める。ガイウスやイーヴォ将軍は少しだけ不満そうな顔であったが、最終的には侑人の言葉に従う。
かなりごり押しではあるがそんな経緯を経て、侑人達一行の雰囲気はとりあえず普段通りに戻ったのであった。

「とりあえず我が国が現状把握している情報を、ユート殿にお伝えしておこうと思う」
「非常に助かります」

フリードリヒ皇帝はそう言うと玉座から立ち上がる。宰相を始めとするグランツ帝国の重臣一同は、少し怪訝そうな顔をしながら皇帝の姿を見守っている。

「とは言えここで話をするのは落ち着かん。先日話をした応接室へ場所を移したいが構わないか？」
「判りました」

侑人の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝は軽く頷くと、従者達に命じて応接室の準備を急がせる。宰相を始めとする重臣たちは何か言いたそうな顔をしていたが、黒髪の勇者襲撃事件を帝都内で引き起こしてしまった手前、侑人が同意している以上口を挟む訳にも行かず大人しく成り行きを見守っている。

数刻後、応接室の準備が整ったのを確認したフリードリヒ皇帝は、応接室への立ち入りの厳禁を配下の者達に命じ、侑人を伴って移動する。

「さて、状況を説明する前に一つお願いがある」
「私に出来る事なら」

「アンジェリーナ殿をここに呼んで頂けないだろうか。彼女の見識はこういった時に非常に役立つと思うのだが」
「ここに移動したのはそういった意味合いがあったのですね……判りました直ぐに呼んでみます」

『との事ですがお願いできますか？』
『構わんぞ』

アンナはいつもの様におもむろに侑人の中から実体化する。アンナの姿を見たフリードリヒ皇帝は満足そうに頷くと、二人に向かって椅子に座るように促す仕草をする。
フリードリヒ皇帝は、侑人とアンナが机を挟んだ反対側の正面へと移動し、二人が座るまでの一連の流れを静かに見つめていた。

「本来であれば現場を取り仕切っているイーヴォにも事の詳細を語らせた方がより詳しい情報をお伝えできるのだが、あいにくイーヴォは帝都の警戒任務に向かっておりこの場に立ち会うことが出来ない。その点は了承して貰いたい」
「構いません」
「警戒任務も重要な事だと言うことは理解しておるから大丈夫じゃ」

二人の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝は少しだけ頷く。
フリードリヒ皇帝の表情に少しだけ疲れが見えるのは気のせいだろうか。むしろ気のせいだと思い込みたいと侑人は内心考えていた。

「現状把握している情報は少ない。ユート殿を襲ったと見られる暗殺者らしき一行が、帝都の南へと向かって逃走したらしいという事しか判っておらん」
「南というと、プロセン王国方面ですね」
「逃走の為の偽装工作ということも考えられるゆえ、あやつらの本拠が実際に何処にあるのかは判らんという事かの？」

「アンジェリーナ殿の言う通り、黒幕がどの勢力に属しているのか今の時点では判らぬが、暗殺者共の真の目的は何となくではあるが

目星は付く。しかしそれを語る前にお二人の見解を先に聞いておきたい」

「私たちの見解ですか……」

「そうじゃのぅ……」

侑人とアンナは少しの間考え込む。暗殺者達が侑人の命を狙っていたのは一目瞭然ではあるが、その裏に潜む真の目的とは一体何なのか。

侑人は今までのマグナマテルの情勢を思い返し、ある一つの考えに辿り着く。

「グランツ帝国とハルモ教法王庁教圏国家群の間で、再び戦争を起こさせる為ってところでしょうか。グランツ帝国の帝都で私が命を落としたとすれば、真っ先に帝国の陰謀が疑われると思いますので」

「そうじゃの……事を成した後、帝国内の停戦反対派が起こしたクーデターだという噂をハルモ教法王庁教圏国家群で流布すればその効果は計り知れず、ハルモ教の象徴たる黒髪の勇者の命を奪ったグランツ帝国に対して、ハルモ教法王庁教圏国家群が全面的に戦争を仕掛ける可能性は限りなく高くなるはずじゃ」

「我々の見解も全く同じだ。単に暗殺だけが目的ならば警戒が緩い所で事を成そうとするはずであり、わざわざ警戒が厳しい帝都の中でユート殿の命を狙ったという事は、そういった裏の事情があるとしか考えられない」

フリードリヒ皇帝は目の前に置いてあるカップを持ち、中に入っている紅茶を少しだけ口に含み喉を潤す。やはり疲れているのか動作が少し緩慢な様な気もする。

侑人もそれに習い紅茶を少し飲んだのだが、アンナは難しそうな顔をしたまま考え込み、目の前の紅茶に手を付けようともしない。

「どうしたのですかアンナ？」
「少し嫌な考えに行き着いての……」
「アンジェリーナ殿のお考えを聞いても宜しいかな？」

「その為にここに居るので構わん。あくまで可能性の一つでしかないが、犯人共の黒幕がクーラント魔国であるかも知れぬと考えておったのじゃ。グランツ帝国とハルモ教法王庁教圏国家群の間で戦争が起こった際にどの勢力が利を得るのか……クーラント魔国は間違いなく得をする勢力じゃ」
「確かにアンナの考えは判りますが、余り考えたくは無いですね……」
「我々はその可能性は低いと考えているがな」

侑人とアンナは動きを止め思わずフリードリヒ皇帝の顔を見つめる。二人の顔には可能性が低いというフリードリヒ皇帝の言葉を疑問視している様がありありと見える。
フリードリヒ皇帝はそんな二人の疑問に答えるかのように、今までの状況と合わせて自身の考えを語り始める。

「国防に関わる問題なので詳しくは語れないがプロセン王国との戦争が終結した直後、我が国は国家の警備体制を少し変えたのだ。少しだけ説明するとプロセン王国側の警戒を少し緩め、逆にクーラント魔国側の警戒をその分強めていた。帝都内でユート殿への襲撃を許してしまった手前、説得力は薄いかもしれないが、クーラント魔国側から我が国に知られずに入国する事はほぼ不可能であったはず。そういった点とユート殿達の入国の時期とを関連付けると、クーラント魔国が黒幕だという線は薄いという考えに行き着くのだよ」
「私が旅に出る事を決めたのはプロセン王国防衛戦から一週間以上経過した後ですし、目的地を知っているものはごく僅かですから、クーラント魔国側が情報を得るタイミングは警戒が強まった後にな

るという事ですね」
「しかし、可能性としては残るはずじゃ」

「確かに。しかしそういった可能性が有るか無いかという観点から考えると、ハルモ教正教会も怪しい事になる。失礼を承知で私の考えを述べるが、ユート殿とハルモ教正教会との考えは若干の隔たりがあるように思える。先の戦争において停戦協定を速やかに結び、グランツ帝国に被害を出さなかったユート殿の行動は、法王の考えとは重なっていないはず。ハルモ教正教会は私を反逆者とみなし、天の裁きを与えるまでは聖戦を辞めないという姿勢をいまだ崩していない。その目的を達成するにはユート殿の存在がいささか邪魔になる……こんな風にも考えられる」
「確かに仰る通りです。可能性だけで考えればその考えは否定できないですし、むしろある程度は疑って掛かるべき懸案事項です。ハルモ教法王庁教圏国家群とハルモ教正教会の関係は非常に微妙なバランスの上に成り立っています。強硬派が居てもおかしくない状況です」
「第三勢力が黒幕という事も考えられるの。戦争状態が得になるという観点で考えれば武器を扱う商人達の組織も怪しくなる。またお互いが疲弊する状況で利を得るという観点で考えれば、現在は没落し虎視眈々と復権を狙っている勢力が黒幕という事も考えられる。まさに可能性で考えればキリが無い状況じゃ」

アンナはやれやれといった様子で椅子に深く腰掛け、紅茶が入ったカップに手を伸ばし中身を一気に飲み干す。フリードリヒ皇帝はその姿を少しだけ見つめていたが、不意に侑人の方に視線を移しこう結論付ける。

「とにかく黒幕がどの勢力なのか判断するには情報が足りなさ過ぎる。ただ再び帝都内でユート殿の命を狙ってくるという状況は考え

られなくもない。注意して行動した方が良いと思う」
「その件とも関わる事なのですが、明日にでも出立しようと考えています。私が帝都に滞在している限り、相手方につけ込まれる可能性が残りますので。グランツ帝国にご迷惑を掛けないためにも、また自分自身の安全の為にもここを離れた方が良いと思うのです」
「確かにそうじゃな。敵対勢力が何処かは判らんが目的だけは何となく判るしの。みすみす相手に機会を与える事もあるまい」

「私個人とすればもう少しユート殿やアンジェリーナ殿と語り合いたかったが、この状況では致し方あるまい」
「私もフリードリヒ殿と語り合えて良かったです。またいつか機会があればこういった場を設けられると良いですね」
「わらわも得るものが大きかった。グランツ帝国を少しだけ見直したぞ」

フリードリヒ皇帝はまず侑人と握手し、続いてアンナとも握手をする。三人の顔には笑みが浮かんでいる。
そのままこの会議は終焉を向かえそうな雰囲気ではあったが、不意にフリードリヒ皇帝は何かに気が付いたような顔をする。

「一つだけ伝え忘れていた。ユート殿が連れてきたあの娘の事だが、少しだけ事情を掴んだのでそれも話しておこう」
「リズの事ですか？」

「名前はエリザベス・グレース。年齢は十一歳で両親はすでに他界している。父親の職業は兵士であり十年前にクーラント魔国との戦闘で死亡し、母親は五日前に不治の病で病没している。親戚もおらず身寄りが無い為、孤児院側から受け入れを伝える者が一度会いに行っているのだが強く拒否され、本日言葉は悪いが強制的に収容しようとしていたのだが姿が見えず探していた娘との事だ」

「天涯孤独の身だったのですか……」

侑人の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝は軽く頷く。侑人はリズと出会った時の事を思い出し、少し悲しそうな顔をしている。

感情の起伏が乏しいのは悲しい過去が影響しているのかもしれない。リズに対して自分に出来る事は無いだろうか。そんな思いが侑人の心を満たしていく。

「リズは……エリザベスは私と出会った時にはすでに死ぬ気でした。現に私の戦闘に巻き込まれそうになった時もその場から一歩も動かず、巻き込まれる事を願っているようでした。あの時私は無我夢中で説得し今は思いとどまっているようですが、今後どういった精神状態になるのか予想がつきません。非常にご迷惑を掛けるお願いなのですが、リズの希望を聞いてそれを叶えて頂けませんか？」

「本人の希望通りにさせれば良いのかな？」

「ええ。本人が納得して孤児院に入るのでしたら問題はありませんが、里親を見つけて欲しいとか、一人で生活したいとかそう言った希望を持っているのなら、それを補助して欲しいのです。その為に私が出来る事があるのなら何でもしますので」

「ユート殿のご協力を仰げるという事で宜しいかな？」

「私に出来る事ならば何なりと」

フリードリヒ皇帝の問い掛けに対して、侑人は真剣な表情をしながらキッパリと返事をする。そんな侑人の言葉を聞いたフリードリヒ皇帝は笑顔を見せ、心底安堵したような態度を取る。

「ユート殿の決意を聞けて良かった。部下の報告を聞いた私の予想では、多分ユート殿のご協力を仰がないと解決出来ない気がしていたのだが、これならば安心できる」

「わらわも何となく落ちが読めたぞ……ユート頑張れ」
「へっ？」

侑人はキョトンとした顔でフリードリヒ皇帝とアンナの顔を交互に見つめるが、二人は笑顔を向けるだけで詳しい説明をしようとしない。

侑人は首を捻りながら応接室を後にし、マリアやリズやガイウスの待つ客室へと向かって歩いて行くのであった。

「遅くなりまし……た？」

侑人が客室の扉を開けると凄まじい光景が広がっていた。女の子用の服が床中にところ狭しと並べられ、その中央には頭に大きな赤いリボンをつけたリズがちょこんと椅子に座っている。

そしてリズの周囲をなにやらブツブツと呟くマリアが歩き回り、部屋の隅ではガイウスがぐったりとした様子で座り込んでいる。

「一体何があったのですか？」
「あっ！　ユートいい所に！」
「旦那……助けて……」
「……」

侑人は興奮するマリアを宥めつつ、全員から事情を聞き状況を把握する。とは言えリズは殆ど話さないので主にマリアとガイウスから事情を聞いたのだが。

「リズに似合う服を考えていたら止まらなくなったと……そんな感

じですかね？」
「そうなのよ！　何を着ても似合うので迷っちゃって！」
「あっちこっちを走り回って服を用意し続ける作業はきつかったっすよ……」
「……」
『わらわはこっちに居なくて正解だった……心からそう思っておる』

状況を把握した侑人は暫く苦笑いをしていたが、全員に伝えるべき大事な事があるのを思い出し、真面目な顔をしながら先ほど決まった内容を伝える。

「明日の朝、グランツ帝国から出立する事に決めました。フリードリヒ皇帝にも了承を得てあります。急な話で大変かもしれませんが準備をお願いしますね」
「そうなんだ……何となくそんな気はしてたんだ」
「旦那の決断には従うっすよ」
「……」

侑人はマリア達の返答を笑顔で聞きながら、ゆっくりとリズへと向かって歩いて行く。
そして椅子に座っているリズの前で膝を付き、小さなリズと視線を合わせる。リズの銀色の瞳を見つめている侑人の黒い瞳は、どこまでも優しい光を放っている。

「聞いての通り私達は明日の朝グランツ帝国から旅立ちます。そして失礼かとは思いましたが、リズが今どういった状況なのかを聞きました。その上でフリードリヒ皇帝からリズが好きなようにして良いという約束を取り付けてきました」
「……？」

リズは少しだけ首を傾げる。そんな姿を見た侑人は笑顔でリズの頭を撫でている。

「リズがこの後どうしたいのかリズが自分で決めて良いのです。リズが孤児院に向かうと決めたのならそれも良いですし、誰か里親…ご両親の代わりになる様な立派な大人を探して欲しいのなら探します。リズがどうしたいのかを私に教えて貰っても良いですか？」

「……！」

リズは少しだけ考えるような素振りをしていたが、いきなり侑人の袖口を掴む。そしてリズの口から一言だけ言葉が発せられるのだが、その言葉が持つ衝撃は計り知れなかった。

「お父さん」

「へっ？　お父さん？　私がですか！？」

「ユートに子供が……子供が……」

「結婚をすっ飛ばしていきなり子供ですが……さすが旦那は一味違う」

『どうしてこうなる事が予想出来ないのかわらわには理解できん…まあ言い出したのはユートだし、責任を持って頑張ると良いと思うぞ』

――――拝啓。

親父、母さん。小坂侑人二十七歳独身。結婚相手を見つける前に子供が出来てしまいました。少し物静かですが可愛い女の子です。

婚期がますます伸びた気がするけど、父娘で頑張って生活してみせます。そのうち其方に遊びに行けると良いのですが、まだまだ先の話になりそうです……。

余りの事態に混乱した侑人は、脳内で遠い世界に居る両親に向かって手紙を書き始める。侑人達一行の旅は新たな仲間を加え、ますます賑やかになっていくのであった。

第４５話：勇者と少女（後書き）

マリア頑張れ！　この展開を巻き起こした私が応援してみたりします。

第４６話：新たな関係【前編】

土の月の第二週の五日。上空を見上げれば何処までも青い空間が広がり、明るく輝く太陽が優しい光で大地を育む、絶好の小春日和に恵まれたグランツ帝都近郊の街道を、どこか物々しい雰囲気を漂わせた二百名前後から成る集団が、一台の馬車を中心にして東の方角を目指して進んでいた。

その集団は揃いの金色の甲冑を着込んだ屈強な漢達で形成され、一糸乱れぬ統率振りを周囲に見せつけながら黙々と行進を続けている。集団が守護する馬車の御者席の横には、集団の中でも一際目立つ騎馬に乗った屈強な偉丈夫（いじょうふ）が付き従い、御者席に座る男となにやら親しげに会話をしていた。

「まさか今日出立するとは思ってもいませんでしたぞ」

「ご迷惑をお掛けして申し訳ないです、イーヴォ将軍」

御者席には侑人が座り、右腕だけで巧みな綱捌きを披露している。本来であればその役目はガイウスの物ではあるが、疲れを隠せないガイウスを気遣った侑人が自らその役目を買って出たのだ。

役目を譲ったガイウスは馬車の中で横になり、自身の体に束の間の休息を与える為、夢の世界へと一足先に旅立っている。ガイウス本人は渋々といった様子であったが、侑人の強い態度に押し切られていた。

「ガイウス殿を我が国に招きたいのだが、許可を頂けないだろうか

？」

「仮にガイウスの重さと同じだけの金塊と交換だとしてもお断りします」

侑人は笑顔を浮かべたままキッパリと拒否する。

そんな事を言い出したイーヴォ将軍の顔も笑顔のままである為、冗談で言い出した事だとは思うが、目が少し真剣なのは気のせいだろうか。

「ガイウスは結構頑固なところがありますから、扱いに苦労すると思いますよ」

「それでこそ騎士。私はガイウス殿の心意気と技量に心底感服した」

イーヴォ将軍は少し興奮しながら右手を胸の前で強く握る素振りを見せ、侑人に向かって力説する。

甲冑の隙間からは鍛え上げられた上腕部の筋肉が隆起しているのが見え、若干だが暑苦しい雰囲気を周囲に振り撒いている。

侑人はそんなイーヴォ将軍の姿を苦笑いしながら見つめている。

とはいえガイウスの事をそこまで気に入って貰えたのは素直に嬉しい。侑人は親しい友人が評価された事を素直に喜んでいた。

ちなみにイーヴォ将軍がガイウスの事をここまで高く評価している理由は、昨晩のガイウスの行動がイーヴォ将軍の琴線に触れたからである。

黒髪の勇者暗殺未遂事件グランツ帝国編《仮称》を未然に防げなかったガイウスは、己の責任を感じて一晩中寝ずの番を侑人の部屋の前で行っていたのだ。

グランツ帝国側も侑人の部屋の前に衛兵を配置し、一晩中警護を行っていたのだが、任務に対する忠実さの差は両者間で如実に表れていた。

余談ではあるが、侑人はガイウスが寝ずの番を行っている事を聞かされておらず、朝になり部屋の外に出た時点で気が付き、大いに狼狽した。

そんな侑人の姿を見たガイウスは少しだけ笑顔を見せた後、侑人に向かって敬礼し、『異常はありませんでした』と一言だけ告げ、出立の準備を行う為に自分の部屋に戻って行った。

颯爽と去っていくガイウスの後ろ姿は侑人の瞼に強く焼き付き、ガイウスに対する信頼度はいまだかつて無いほどに高まっている。

「昨晩の警護の任に付いていた者達も、皆一様にガイウス殿の事を褒めちぎっていましたぞ」

「ガイウスは優秀ですから当たり前です」

イーヴォ将軍から詳細を聞かされたのだが、ガイウスは扉の前で微動だにしなかったらしい。眠気が勝り緊張感が薄れてくる明け方になってもその姿は変わらず、数度の交代を挟みながら警護の任に付いていたグランツ帝国兵達の全てが、唖然として見つめる程の緊張感を纏っていた。

そしてほんの少しでも不審な気配を感じるとその方向に鋭い眼光を向け、何時でも戦闘行為が行えるほどの緊迫感を周囲に放っていたとの事。少し気になって夜中に気配を消しながら警護状態を確認しに行ったイーヴォ将軍も、ガイウスの鋭い眼光に射すくめられ動けなくなるほどだった。

「まあ我が国の不甲斐なさが招いた結果だと思うと心苦しいのだがな」

「いえいえ。こっちが勝手にやった事なので気にしないで下さい」

今日のイーヴォ将軍のテンションは上がったり下がったりと忙し

い。帝都を出発してから数時間が経過しているが、ずっとこんな調子である。
　不甲斐なくも自分が管理する帝都内で、黒髪の勇者暗殺未遂事件グランツ帝国編《仮称》を巻き起こしてしまった事も影響しているのだが、実はそれ以外にもイーヴォ将軍の動揺を誘う事態が起きていた。むしろそちらの影響の方が大きいのかも知れない。

「それにしても……」
「ん？　どうしました？」

　侑人は中途半端なところで言葉を切ったイーヴォ将軍の顔を見つめている。
　しかしイーヴォ将軍は侑人と視線を合わせる事は無く、侑人の胸の辺りを少しの間見つめ、その後に侑人の左側の辺りを凝視し、最後には自分の右手を見つめながら深い溜息を吐く。その表情には深い絶望感が垣間見え、何かに耐えているようだった。

「大丈夫ですか？」
「多分……とはいえ暫く立ち直れないと思うが」

　イーヴォ将軍は弱々しい呟きを返すのが精一杯の様子である。
　しかし気丈にも自分の両頬を少しだけ強めに叩いて自分を奮い立たせ、思いっきり作り笑いにしか見えない笑顔を見せながら何とか侑人と視線を合わせる。
　とは言っても目は全く笑っておらず、相手に恐怖感しか与えない。相対する侑人に感じさせる印象は一言で言えば……嫉妬であった。

「ずいぶんと所帯染みて来ましたなぁ。うらや……いや、何と言ったら良いか」
「あははは……」

侑人はイーヴォ将軍から視線を外し自分の姿を見る。
侑人の胸の辺りでは艶やかな輝きを放つ銀髪が、規則正しいリズムで少しだけ上下に動いているのが見える。侑人の膝の上で横向きにちょこんと座ったリズが、侑人の両襟にしがみ付いて寝息を立てているのだ。
穏やかな顔で寝息を立てているリズの顔はとても幸せそうであり、侑人は若干困惑しつつもされるがままになっている。

これだけでは無い。今度は自分の左側に視線を移す。
侑人の左肩の辺りにはしっかりと手入れされた綺麗な金髪が、これまた規則正しいリズムで上下に動いているのが見える。御者席の左側に座ったマリアが侑人の左腕に手を回し、抱きしめるような姿勢を取ったまま寝息を立てているのだ。
幸せそうな顔をしたまま寝息を立てているマリアを起こすわけにも行かず、侑人はこれまたされるがままになっていた。

「神は……ここまで不公平だったか」
「いや……何と言ったら良いか」
『頑張れユート。わらわでもどうにも出来ん』

侑人は脳内に響き渡るアンナの投げやりな応援を聞きながら、この世の全てを呪うかのような顔をして、ブツブツと何かを呟いているイーヴォ将軍を慰めている。
深みに沈んでいくイーヴォ将軍の顔を少しだけ困った顔で見つめながら、侑人は昨晩の事を思い返していた。

「リズは私が面倒を見るね」
「わらわもそれが良いと思う」
「俺はなんとも言えませんね」
「私の部屋は一人部屋ですからそれが良いでしょう」
「……」

女性陣が陣取っている華やかな二人部屋の中でそんな会話が繰り広げられる。

リズの爆弾発言により急遽仲間が増えた侑人達一行は、今晩の寝床をどうするのかという議題で熱い激論を……繰り広げるまでも無かった。

十一歳とはいえ女の子であるリズを、侑人の部屋に寝かすわけには行かないという認識で、侑人達一行の意見は統一されていたのだ。

「じゃあマリア、リズの事は任せました」
「うん。任せといて」
「……」

侑人は女性陣に見送られながら自室に戻っていく。

明日の朝にはグランツ帝国を出立しなくてはならず、長い旅路を乗り切るためには今日は体をゆっくりと休める事が最善であると侑人は考え、何時もよりも早い時間にベッドへと潜り込む。

当初侑人は、自分の命を明確に狙う暗殺者達と対峙した事により、精神が高ぶって寝られないかもしれないと危惧していたが、その心配は杞憂であり夢の世界へと早々に旅立っていった。

「う……うーん……」

侑人は悪夢にうなされている。夢の中でも暗殺者達に襲われていた。

現実をトレースするかのような暗殺者達の連続攻撃を、夢の中でも何とか凌いでいこうとしていたのだが、何故か両足に重りを付けられた様であり上手く体が動かない。

余裕でかわしていたはずの攻撃がギリギリでしかかわせず、ギリギリで凌いでいた攻撃は無理矢理に剣で弾いてかわす事しか出来ない。やがて現実でもギリギリで凌いだ攻撃が侑人の体を捉えようとした瞬間、侑人は何とか悪夢から逃れる事に成功する。

「うおって……あれ？」

ベッドに座り込んだ侑人は寝ぼけ眼で周囲を見渡す。

上手く焦点が合わない目で捉えた景色は、ここ数日でおなじみとなった部屋の間取りであり、窓の外からは柔らかな光を放つ双月が顔を覗かせている。

何となく自分の体に視線を移すが、いつもと変わらない両手がまず視線に入り、引き続いて全く動かない両足にしがみ付く、穏やかな顔をしながら寝息を立てているリズの姿が映った。

「夢か……ってえ！？」

何でリズがこの部屋に？

パニックになりかけた侑人の思考をそんな考えが覆っていきそうになるが、よくよく考えればありえる展開だと思い直し少しだけ落ち着く。

リズを取り巻く環境は誰よりも劇的に変化している。侑人の事を父と慕うリズがこの部屋に忍び込むのは致し方ない事なのかもしれない。思わず父性に目覚める侑人である。

「心の傷が少しでも癒えると良いのですが」

そんな事を呟きながら優しくリズの頭を撫でる侑人。
小さい体でどれだけの悲しみを背負ってきたのか想像も付かないが、これからは幸せに健やかに成長して欲しいとの願いを込めて、どこまでも優しく撫で続けている。

「ん……」
「どんな夢を見ているんでしょうね」

侑人は頭を撫でられて少しだけもぞもぞ動いているリズの姿を暫く見つめている。
掛け布団をリズに掛けてあげたいが、掛け布団ごとしがみ付かれて身動きが取れないため、どうしようかと暫く思案に暮れていたのだが、やがて睡魔が穏やかに侑人を襲い始め、侑人自身もウトウトとうたた寝を始めてしまう。

コンコン。

穏やかな空気を少しだけ遮る控えめな音が聞こえる。

コンコン。

「ユート。入るよ」

優しい雰囲気を纏っている謎の侵入者が侑人の部屋に忍び込んでくる。正確には入室する事を宣言している声で、誰なのか判断が付いたので謎では無いが。

「やっぱりここか……」
「ん……？　マリアですか」

侑人の部屋に進入してきたのはマリアである。
マリアは侑人にしがみ付いて寝ているリズの姿を見て苦笑している。予想通りとはいえ少しだけ寂しい気持ちがマリアの心の中に湧き上がっていた。

「目が覚めたらリズが居なかったから、多分ユートのところかなと思って」
「ええ。リズが居たので驚きましたよ」

マリアは足音を立て無いように気を使いながらリズの側に近づき、侑人の両足にしがみ付いているリズの寝顔を覗き込む。
起きている時に見せる無表情さとは違う、年相応の無邪気なリズの寝顔を見たマリアは思わず笑顔になる。こんな顔が出来るのなら大丈夫かなという思いが、先ほど感じた寂しい思いを上書きしていく。

「このままだと風邪を引いちゃうかも……待ってて」
「ありがとうマリア。しがみ付かれて動けないんですよ」

足音を立てずにいったん部屋を出て行くマリアを見送った侑人は、これで安心とばかりの様子でベッドに横になる。マリアが持ってきてくれる掛け布団をリズに掛けてあげれば風邪を引く事は無いだろう。

「ふぅ……おや？」
「んん……」

両足から上に這い上がってくる感触がする。
侑人の両足にしがみ付いていたはずのリズは、器用に体を使い侑人から全く離れる事無く上半身に向かって這い上がってくる。

やがて胸の辺りで動きを止め、再び穏やかな寝息を立て始める。
完全にしがみ付かれた侑人は起き上がる事すら出来なくなっている。

「お待たせユー……」

タイミング良く戻ってきたマリアはそんな侑人達の姿を見て絶句する。侑人にとってはタイミングが悪かったのかもしれないが。

「仲が宜しい事で……」
「冗談を言っている暇があるなら助けて下さい」

ジト目で此方を見つめているマリアに向かって侑人は助けを求める。

とはいえリズはしっかりと侑人にしがみ付いており離れそうな気配は全く無い。その様子を暫く見ていたマリアはある決断をする。

「こうなったら……えい」
「へっ!?」

マリアはリズを挟むようにベッドの中に潜り込み、持ってきた掛け布団を自分とリズに掛ける。そして悪戯っ子のような表情を侑人に見せそのまま目を瞑る。

「じゃあお休みユート」
「えっ？　はっ？」

マリアはそのまま寝息を立て始める。
侑人は訳の判らない状態に巻き込まれ暫く呆然としていたのだが、よく判らないうちに何時の間にか眠りに落ちていった。

第４６話：新たな関係【前編】（後書き）

暫く緊迫した雰囲気だったので、ダダ甘な展開にしてみました。

第４７話：新たな関係【後編】

「ん……」

窓から差し込む朝の光が、侑人の顔を優しく照らしている。

窓の外は既に明るくなっており、何時の間にか朝になっていた。

瞼の裏側で光を感じた侑人は、若干の眠気を感じながらもゆっくりと目を開ける。

小鳥達の囀りが半分だけ覚醒した頭の中に響き渡るが、その感覚は心地良い。無意識的に深く呼吸をし、澄み切った朝の空気を肺の中に取り入れていく。気のせいかもしれないが、今日の空気は甘い香りがするようだ。

「うーん……ん？」

何時ものように軽く伸びをして意識を覚醒させようと思ったのだが、左腕が痺れて上手く動かない。感覚が不明瞭になった左腕は、暖かくて柔らかい何かを微かに感じていた。

侑人はとりあえず右腕一本だけで軽く伸びをし、少しだけ首を回して脳への血流を確保していく。寝ている間に凝り固まった関節がボキボキと音を立てる。

血の巡りが良くなるにつれ、霞がかっていた思考は徐々に明瞭になり、それと同時に左腕の違和感は増大していく。さすがに気になった侑人は視線を左腕に移した。

「何だろう……って！？」
「すー……すー……」
「んー……」

侑人の目に、左腕を枕にしたマリアと、マリアにしがみ付きながら穏やかな寝息を立てているリズの姿が映る。
リズはマリアの方を向き、マリアの襟元をしっかりと握っており、マリアはリズの肩を優しく抱きしめていた。一見すると仲の良い親子……もとい姉妹のように見える。

「ああ……昨晩リズがこっちに来たんだっけ」

侑人は昨晩のマリアとのやり取りを思い出していく。
マリアがリズの姿が見えなくなった事を心配し、侑人の部屋に忍び込んでいたリズを発見した。ここまでの流れは良い。思い返してみても特に問題は無い。
しかしマリアが幸せそうに眠るリズを起こす事を諦め、そのままベッドに潜り込んだシーンまでたどり着いた侑人の思考は停止する。

「マリアは何を考えているのだか……」

侑人は少しだけ非難する様な顔を装って、マリアの寝顔を見つめている。
年頃の娘が男のベッドに潜り込むのはいささか無用心ではないのか……などと優等生的な思考に耽る侑人ではあるが、顔は真っ赤になっていた。
今の侑人の気持ちは本能と理性の間でほんの少しだけ揺れ動いている。奥手という侑人の気質が心の機微を招き難いのは事実だが、それ以前の状況に負うところも大きい。はっきりとしない態度を取り続ける侑人には、とある理由があった。

「今はまだこのままで……」

侑人は天井を見つめながら呟く。

その小さな呟きは誰にも聞かれる事無く、朝の穏やかな空気の中に紛れて消えていく。少し情けなく思うが、自分の中で結論が出ていない以上行動する訳には行かない。

「そんな事よりもリズの事だな」

侑人は自分の葛藤を振り払い、リズの事を考え始める。

そして昨晩までのリズの行動を思い返し一つの考えに至るが、どう考えても良い結論とは思えず侑人は難しい顔をしていた。

「杞憂だと良いのだが……」

侑人は少し呆けた顔をしながら二人の寝顔を暫く見つめ続ける。

二人はとても幸せそうな顔をしており、無闇に起こすのはためらわれる。

結局マリアとリズが部屋に居ない事に気が付いたアンナが、こっそりと侑人を起こしに来るまでこの状況は続くのであった。

『名実共に夫婦じゃの』

『何が名で何が実なのかさっぱり判らないのですが……』

着替えを終え出立の準備を整える侑人の脳内に、アンナのからかう様な声が響く。

三人が一つのベッドに寝ているのを目撃したアンナは、先ほどからこの調子で侑人に話し掛けているのだが、侑人の反応はいま一つである。

侑人はリズとマリアに視線を向ける。その目には何時もの優しい雰囲気だけで無く、何か愁いを帯びたような光をたたえている様だった。

『娘の成長を願う親の目って感じだの』

『茶化すのは止めて下さいと言いたい所ですが、割と近いかもしれませんね』

目が覚めた後のリズは着替えの時を除いて、ほぼ侑人の側にくっついて行動している。

食事の時も侑人の横に座り、その後も親鳥の後を付いて歩く雛のように片時も離れようとしない。出立の準備をしている今も侑人の方を向いて座り、侑人の作業をじっと静かに見つめていた。

マリアはそんなリズの世話をする為に甲斐甲斐しく動いている。着替えの手伝いから食事の世話までを一通りこなし、今はリズの髪を櫛で鋤いていた。リズが侑人の側を離れようとしない為、必然的にマリアも侑人の側に常に控えているような形になっている。

『目立ちまくってたの』

『この際その部分は考えないようにしています』

侑人は視線を手元に向け直しながらそう答える。

黒髪の勇者という侑人の立場上、元々帝都内でもかなり目立った存在ではあるが、今日は今まで以上に多くの視線を感じていた。

主に若い男性の視線が痛いほど突き刺さり、殺意と嫉妬が入り混じったような雰囲気がどこそこから感じられ、食事前に侑人の部屋を訪れたイーヴォ将軍にいたっては、朝の挨拶もそこそこに逃げる

ように退出して行く始末だった。

『親子三人仲睦まじい……と言いたい所じゃが、それもちと毛色が違うの』

『マリアも感じる物があるようですね』

周囲からは仲睦まじい家族の様に見られていた侑人達ではあるが、実情は少し違う。アンナもその雰囲気は何となく判っている。

マリアに至っては優しい笑顔をリズに向けつつも、目は真剣そのものである。この状況を何とかして改善したいという使命感に燃えているようだった。

『リズの出現によって、マリアが侑人に対して本気になったかもしれんぞ』

『判っていて言っているでしょう……』

侑人は軽く溜息を付く。とはいえ軽い調子のアンナがどこか心強い。

下手をすれば黒髪の勇者の使命以上の難解さを誇る、今回の事態をどう解決していけば良いのか、今の侑人にはまだ判っていない。

再度視線をリズの方に向けると当然のように視線がぶつかる。感情を何処かに置き忘れてきてしまったかのような無表情さを誇る顔の中で、唯一少しだけ感情の動きを感じさせるどこまでも澄み切った銀色の瞳が目に映る。

『今のリズが感じている気持ちは安心感だけではないの』

『ええ……どちらかというと不安感でしょうね』

侑人はリズに微笑みかける。

リズは少しだけ首を傾げるような仕草をするが表情は殆ど変わら

ない。しかし瞳にはほんの僅かだけ喜びの感情が表れているようにも見える。

そんなリズの仕草を見ている侑人の心の中に『リズは生まれつき感情が乏しい訳では無い、感情を表に出せなくなってしまっただけだ』という思いが生まれ、覆い尽くしていく。

侑人の中に入っているアンナが侑人の感情の変化に気が付く。

今の侑人の心は怒りで満ちている。悲劇を生んだこの世界に対する怒り。そしてそれに対して有効な手段を即座に打てない自分自身に対する怒り。

常に冷静に先を見越して行動を起こしてきた侑人から感じる激しい負の感情。アンナはこれが良い兆候とはとても思えなかった。

『焦るなユート。時間が解決してくれる訳ではないが、時間が掛かるのは事実じゃ』

『しっ……しかし』

『まずは不安感を消す事から始めるしかないと思うぞ』

『たしかにそうですね』

アンナの言葉を受けた侑人は少し冷静になる。

幼いリズが負った心の傷の深さを正確に図り知る事は出来ない。傷を負わせた過去の出来事を無かった事にするのももちろん出来ない。

今の自分に出来る事はいったい何なのか。今度は前向きな感情が侑人の心の中を占有していく。普段の雰囲気に戻りつつある侑人の姿を見たアンナは少し安堵する。

『マリアは既にそれに気がついて行動を起こしておるぞ』

『女性は強いですね……』

『母性は何者にも勝るからの』
『考えているだけでは駄目って事か……』

侑人は再びマリアとリズの姿に視線を向ける。
リズの髪を鋤き終えたマリアは、リズに向かって二つのリボンを見せている。リズを見つめる金色の瞳は慈しみをたたえており、どこまでも優しい。
暫く二つのリボンを無表情に眺めていたリズは、ゆっくりと紺色のリボンを指差す。笑顔で頷いたマリアはそのリボンでリズの髪の毛をまとめていく。リズの顔は何となくではあるが機嫌が良さそうに見えた。

『そのうちマリアに懐きそうじゃの』
『私も負けてはいられませんね』

侑人は荷物をまとめ終え二人の方に歩いて行く。
紺色のリボンで可愛く着飾ったリズの頭を笑顔で優しくなで、せっかくまとめた髪の毛を乱してマリアに怒られ平謝りする。ガイウスはそんな二人のやり取りを涼しい顔で見つめ、アンナは侑人の中で侑人を小馬鹿にしてからかっている。
そんな周囲の騒がしいやり取りをリズは静かに見つめている。侑人達の新しい関係は穏やかな空気の中ゆっくりと育まれていった。

「まあ、色々ありましたが大丈夫だと思います」
「ユート殿達の絆は深い。その事さえ忘れなければ大丈夫なはずだ」

雲一つ無く晴れ渡る秋空の下では、似た者同士の二人がいまだに会話を続けている。何時の間にかイーヴォ将軍は立ち直り、何時もの豪快な笑顔を見せていた。

「むしろユート殿が我が国に仕えるのはどうだろうか？」
「あははは。お誘いは嬉しいのですがそれは厳しいでしょうね」

「結構本気で言っているのだがな……」
「イーヴォ将軍と共に政務に励むのは楽しそうではありますが、私にはやる事がありますから。お言葉だけありがたく受け取っておきますね」

気さくな態度で黒髪の勇者をグランツ帝国軍に迎えようとするイーヴォ将軍と、その誘いを笑顔でかわしている侑人の姿を、部下達は唖然とした表情で見つめている。

国際問題に発展しかねない案件を、堂々と世間話のように話す二人の神経が理解できなかった。この二人だから成し得る事ではあるが普通では絶対にありえない。

「まあ、全てが終わったらまたグランツ帝国を訪ねて来て欲しい。今度はユート殿とゆっくりと酒が飲みたいのでな」
「そういうお誘いなら喜んで」
「うーん……」

いつ訪れるのか判らない平和な未来。そんな世界が訪れた後の約束を交わしている二人の横で、マリアがゆっくりと目を覚ます。侑人とイーヴォ将軍はマリアに視線を向ける。

マリアは緩慢な動作で周囲を見渡していたが、侑人と目が合ったところで動きを止める。今の自分の姿を把握し、端正な顔がだんだんと真っ赤に染まっていく。

マリアが侑人の左腕を抱えて寝ていたのは無意識の行動である。
リズの世話をする為に侑人の横に座っていたのだが、穏やかな気候と規則正しい馬車の揺れに眠気を誘われて、何時の間にか寝てしまった。
まあ、無意識でそういった行動を取る時点で、侑人に対してどういった感情を抱いているのかは一目瞭然ではある。嫌っている事はまず無いだろう。

「独身の私には目の毒でしたぞマリア殿」
「ふぇ！？　すすすみません！　何時の間にか寝ちゃってたみたいで」
『ユートに対する態度もやはり変わってきたのかもしれんの……』
「落ち着いて下さい。リズが起きます」

侑人の言葉を受けた全員の視線がリズに集まる。
リズはいまだに夢の中に旅立ったままであり、幸せそうな寝顔で静かに寝息を立てていた。リズを見つめている全員の顔が段々と笑顔になる。

「平和ですね」
「幸せそうだね」
『寝る子は育つというしの』
「今ほど結婚したいと強く思った事は無いかもしれん……」

リズを包み込む周囲の雰囲気はどこまでも穏やかで優しい。侑人達一行は束の間の平穏をしみじみとかみ締めていた。

第４７話：新たな関係【後編】（後書き）

心の機微と合わせて、母性と父性を感じて頂けると幸いです。

第４８話：静かなる始動

土の月の第三週の七日。マグナマテル全域に広がる諸国で生活している者達だけでなく、野山で生息しているありとあらゆる種族にも恵みをもたらせていた秋は足早に、まるで幸運の女神のような短い後ろ髪が辛うじて見える程度にまで遠ざかり、来るべき新しい年を迎える雌伏の期間である、厳しい冬の訪れが間近に迫っているそんな狭間の季節。

何となく季節に追い立てられるような気持ちに駆られ、人々が慌しく行き交う喧騒から隔離された雰囲気を保つセルビナ王国王城の執務室では、いつもの二人がいつものやり取りを繰り返している。

「少し前までは過ごし易かったのに、最近寒くなってきたな。これでは……」

「政務などやってられんなって台詞は聞き飽きていますよ」

「俺が毎回同じ事を繰り返すとでも思っているのか？　こう見えても俺は国王だぞ」

「思っています」

取り付く島も無いアルクィンの姿を見たカルロス王は肩をすくめている。

とはいえ否定できるだけの根拠など一つも無いので、何も言い返せないのが痛いところなのだが。カルロス王の日頃の行いが悪すぎると言ったところか。

アルクィンはそんなカルロス王の心中など察する素振りも見せないどころか、先ほどから憂鬱そうな顔を隠そうともしない。声のトーンはほとんど変わらないが、普段の冷静沈着な姿からは程遠い感じである。

「アルクィン……。あー、何でも無い。そのまま政務に励め」
「カルロス王の方こそ励んで下さい」

カルロス王の軽口を聞いたアルクィンは、徐に顔を上げて王の目を見つめながらいつも通りの反応を返す。しかし瞳に浮かんでいる光は普段とはあからさまに違って見える――。

――何か重大な事が起こったな。

カルロス王は即座にアルクィンから発せられている無言のサインを察し、いつもの流れを作り出すべく嘘臭い縁起を始める。今まで誰にもばれていないのが不思議ではあるが、その辺も王の人徳が成せる技なのかもしれない。

「あー！　喉が渇いたぞアルクィン！　早急にどうにかしろ」
「私に言わないで下さいよ……。えーと、そこの貴方。愚王の為に暖かいお茶でも用意してあげて下さい。思いっきり苦くて良いので」

「お前なぁ……」
「私のは普通で良いですよ。苦いのは苦手なので」

二人の姿を見守っていた執務室に控えている従者は苦笑いをしながら、お茶を用意するようにというアルクィンの指示に従って静かに部屋から退出して行く。

こんなやり取りを間近で見せられたのは何度目になるのか。従者

はそんな思いを抱いているのだが、国王と宰相のやり取りが従者の失笑を買うという今の事態は国家としてどうなのだろう。アルクィンはそんな従者の雰囲気に気が付いているが、結果的に色々と役に立っているのでこのままでも良いのかもしれないと考え、放置していたりもする。

様々な者達の思いを内包しつつも、カルロス王の計算通りに執務室はカルロス王とアルクィンの二人きりの状態になり、その状態を受けた二人の雰囲気は一変する。

「それで何があった？」

「色々な情報が入りました。カルロス王は悪い情報と少し悪い情報、そして普通の情報の三つの内、どれから先に聞きたいですか？」

「良い情報は無いのか」

「ええ、残念ながらありません。普通の情報は捉え方によっては我々の利になるかもしれませんが」

カルロス王は思わず天を仰ぐ。アルクィンが悪い情報と断言している以上、前者二つの情報は間違いなくセルビナ王国に利する話では無い。常人が聞けば悪い情報に聞こえる内容でも、アルクィンはセルビナ王国に利が有るように色々と策を練り、今まで何とかしてきていた。

そんなアルクィンが今回の情報を悪いものだと断定している。最悪の場合はハルモ教法王庁教圏国家群全体の不利益になる話かもしれない。カルロス王はアルクィンの判断力をそこまで買っている。

「とりあえず最悪の情報から順番に頼む」

「わかりました。まず最初の情報ですが、ユートがグランツ帝都内で暗殺者に襲撃されました。幸いにも無傷ですが楽観視出来る状態

ではありません」

「それは本当か？」

「ええ。侑人から送られてきた書状にそう書いてありました。カルロス王宛にももちろん届いておりますが、その中にはどうやらグランツ帝国の皇帝からの密書も同封されているようです。とはいえ多分同じ内容だと思います」

侑人から送られてきた書状を受け取ったカルロス王は、手早く封蝋を剥がし中身を確認する。アルクィンが言う通り中には二通の書状が入っていた。

その二つに目を通したカルロス王は、侑人が書いた書状だけを封筒の中に戻し、フリードリヒ皇帝から送られた書状を胸元にしまい込む。後で人目に付かないようにこっそりと焼却処分するつもりだ。

「二つともほぼ同じ内容だな。犯人の目星は付いていないようだ」

「ユートが把握しているのは、グランツ帝国の皇帝が裏で手を引いている訳では無いって事くらいですね」

「アルクィンはどう思う？」

「ユートの言う通り、グランツ帝国の陰謀では無いと思います。むしろそう誤認させるように仕組まれた第三勢力の陰謀ではないかと」

姿が見えない謎の敵対勢力。これはかなり厄介な存在である。情報が全く無い為、常に警戒するという選択肢以外が思いつかない。相手の意図が判らない以上不用意に動くのは状況の悪化を招く可能性が高い。下手をすると侑人達に更なる危険が降りかかる可能性もある。

カルロス王は侑人達に旅の許可を与えた事に対して後悔し始める。せめて自分の力が及ぶ範囲に居てくれればそれなりに対処できるは

ずという思いが、カルロス王の胸中を埋め尽くしていく。

「状況を憂慮したり後悔したりするのは自由ですが、今はそれどころではありませんよ」

「確かにそうだな」

現状では侑人に付き従うセルビナ王国軍の軍隊は居ないが、侑人自身の戦闘能力も高く、側に控えるアンナやガイウスも一騎当千の強者達である。戦争に向かっているのならばさすがに心もとないが、周囲に気を払って旅を続ける事ならば出来るはず。

侑人ならば不用意な戦闘を避ける行動を取り続けるはずであり、その上で降りかかる火の粉は本人達で払えるような状況を整える策をめぐらせるはず。今はそう信じて待つ事しか出来ない。

「暗殺者に狙われた対象が侑人で良かったと言うべきなのかもしれんな」

「ええ。侑人以外が襲われていたのなら、双方無傷という状況で暗殺者を撃退するなどという、神がかった事は起こりようがありませんしね」

万が一、今回の事件で怪我人や死者が出ていれば、グランツ帝国も今回の侑人襲撃事件を表ざたにせざるを得なかったはず。そうなった場合、再びプロセン王国とグランツ帝国の間で緊張感が高まり、下手をすると停戦協定の尊守すら危うくなる。

侑人やフリードリヒ皇帝もその事が判っていた。その為、今回の事件を表ざたにならないように内々で処理し、侑人が書状を送る形でカルロス王達に伝えてきたのである。

「今回の襲撃犯の黒幕が誰か判るか？　お前の予想で構わん」

「グランツ帝国皇帝の手の者ではないという事は判ります。可能性

で考えればクーラント魔国の手の者でも無さそうですね」

「何故クーラント魔国の可能性が低いと思うのだ？」

「プロセン王国とグランツ帝国の間で休戦協定が結ばれたからです」

政治感覚に優れるフリードリヒ皇帝ならば、プロセン王国との休戦協定が結ばれた直後に国内の防衛体制を変化させ、クーラント魔国側に部隊を多く配置したはずである。侑人がグランツ帝国方面に向かって旅立つと決めたのはその後の話になり、警戒態勢が強化される前に、侑人の命を狙うクーラント魔国の暗殺者がグランツ帝国内に潜むのはありえない。

暗殺者達の手際の良さから考えると、侑人を暗殺するのが第一の目的であった事は間違い無いはずであり、厳戒態勢のクーラント魔国側の国境から暗殺者達が易々と侵入してきたとも思えない。これらの状況から推察するとクーラント魔国が黒幕である可能性はかなり低いのではないかとアルクィンは語る。

「確かにそうだな」

アルクィンの考えを聞いたカルロス王は頷いている。

黒幕の立場で暗殺者達の進入ルートの確保と、暗殺者達に指示を送る為のルートの保全を考えればおのずと回答は出てくる。

しかしそうなると黒幕は誰になるのか。カルロス王の脳内には様々な黒幕候補者達の姿が浮かぶが、どれもこれも嫌な感情しか生み出さない。最悪の場合ハルモ教法王庁教圏国家群の中に敵対する人物が潜んでいる事になる。

「せめて誰が黒幕か判らんものか……」

「とりあえずその話は後回しにして、残りの報告をさせて貰っても宜しいですか？」

「ああ、すまん。続けてくれ」
「諜報部隊から報告があったのですが、我が国の西側で国境を接する隣国のトスカーナ王国王都の治安が下がっています。原因不明の放火が頻発し、殺人事件や強盗傷害事件も多発しているようです」
アルクィンの言葉を聞いたカルロス王は怪訝そうな顔をして首を傾げる。
グランツ帝国との戦争が終結し治安が上がるというのならば話は判る。事実セルビナ王都の治安は向上している。最近起こった事件といえば酔っ払い同士の喧嘩くらいだ。まあセルビナ王国の治安は元々低い訳ではないが。
治安を下げる要因が無いのに治安が下がるのには何か理由があるはず。その事に気が付いたカルロス王はますます嫌そうな顔をする。確かにどこからどう考えても良い情報ではない。
「不穏分子がトスカーナ王国に潜入している可能性が高そうだな」
「私もそう考えています。取り急ぎセルビナ王都内に治安部隊を派遣し、警戒を強めるように指示は出してあります」
「手際が良くて助かる」
「ありがたきお言葉。しかし対外的な対応は私の一存では行えませんので、カルロス王のご指示を仰ぎたく思います」
カルロス王の脳裏にトスカーナ王国国王、ウォルフガング・ルイ・プロイセンの顔が思い出される。何時も笑顔を絶やさない温和な国王であり、臣下の忠誠もそれなりに高い。
一応ウォルフガング王はカルロス王の義兄に当たる。カルロス王の実姉がトスカーナ王国の王妃として嫁いでいたのだ。とはいえ王妃は五年前に病没してしまい、現在では違う女性が王妃の座に納ま

っている。しかしセルビナ王国とトスカーナ王国の交流は今現在も盛んである。

「ウォルフガングなら自分でどうにかしそうだが、姪のナスターシャが心配だな……。とりあえず俺が親書を送っておくから、その返答次第でまた対応は考えよう。それと念の為にトスカーナとの国境付近に一軍を配備しよう。我が国の治安まで脅かされては敵わん」

「判りました。仰せのままに手配致します」

アルクィンの報告はこれで二つ。悪い方から報告しているはずなので、最後の報告は今までのものよりマシなはず。カルロス王は少しだけ表情を緩めてアルクィンに対して最後の報告を促す。

「で、普通の情報とやらはどういったものだ？」

「法王猊下の体調が芳しく無いようです。情報は伏せられておりますが余命は半年程だという話です」

「おいおい……。その内容を普通だと言い切るお前が少し怖いぞ」

「前の二つと比べて半年も余裕があるじゃないですか」

ハルモ教法王が崩御すれば、新たな法王が司祭の中から選任される。対外的には全司祭の投票によって新法王が選ばれるという事になっているが、実際には現法王の息が掛かった司祭がそのまま権力を受け継ぎ、なし崩し的に新法王になる事の方が多い。

ハルモ教改革の為にはその悪しき慣例を打破し、改革に前向きな法王を擁立する事が絶対条件となる。半年の猶予はあるがこのまま手をこまねいていては何事も変化しない。

「ヨーゼフ司祭に現状を確認する必要があるな」

「そうですね。一概に司祭といっても人によって色々な思惑がある

でしょうし、誰が味方で誰が敵となりうるか、把握しておいた方が良いと思います」

カルロス王は次から次へと目まぐるしく変化していく状況に対して苦笑しながらも、ある意味予想通りの展開だなと納得していたりもする。

黒髪の勇者がマグナマテルの世界に光臨したのもこの変遷の先駆けであり、過去の歴史書も示す通り、時代の変化とは突然に訪れるものなのだ。

「案外この三つの情報は、意外な所で繋がってるかも知れんな」

「ありえない事です……と、言い切れない部分は確かにあります。とにかくもう少しだけ探ってみます」

カルロス王はアルクィンに向かって頼んだと言いつつ、深く椅子に腰掛ける。国内の平穏と安定の為だけにもう少しだけ力を振るいたかったが、それももう叶わない。

動くべき時に動かないと時流に乗り遅れる。自分が成すべき事は理解しているつもりだ。王としての立場にある自分にしか出来ない事も数多くある。

カルロス王はアルクィンに向かって不敵に笑いかける。

アルクィンもそんな王の姿を頼もしそうな目で見ていた。今日この瞬間からますます忙しくなりそうだが、そんな状況は願ったり叶ったりだ。行動を起こすべきは今――。

「明日の午後セルビナ教会を訪れる。名目は……そうだな、アルクィンが考えてくれ」

「全く……。そうですね、経典の解釈の説法を受けたいという形で話を通しておきます。カルロス王は質問出来そうな箇所を明日まで

に探しておいて下さいね」

「それも任せたい所なのだが」

「私にはやる事が山積しているんです。その位はどうにかして下さい」

アルクィンは涼しい顔をしたままカルロス王に向かって深く一礼し、執務室を後にしようとしたが、カルロス王の言葉によってその行動は遮られる。

「なあ、アルクィン」

「なんですか？」

「とりあえず茶は飲んでいけ。二人でゆっくりと茶を飲める機会も今後は減りそうだ」

「は……はぁ。確かにそうですね。お言葉に甘えます」

アルクィンが椅子に腰掛けるのとほぼ同時に、従者がお茶を持ち入室して来る。

カルロス王とアルクィンは今後の事に思案を巡らせながら、表向きは普段通りを装ってお茶を楽しんでいる。願わくばこの平穏が直ぐに戻りますように。アルクィンは内心そんな事を考えていた。

――翌日。

カルロス王はアルクィンと少数の護衛を引き連れてセルビナ教会を訪れている。

ヨーゼフが説くハルモ教の説法は予想外に面白く、カルロス王だけでなくアルクィンや護衛の衛士達もその話に引き込まれていた。

「さすがはヨーゼフ司祭だ。為になったぞ」

「もったいないお言葉でございます」

カルロス王は満足そうに何度も頷き、ヨーゼフはそんな王の姿を見て恐縮している。このままつつがなく説法は終わりを迎えそうになっている。

そんな状況を察したアルクィンは、カルロス王を軽くつつく。大丈夫だとは思うが目的を忘れたまま帰られては全てが台無しになる。カルロス王の場合は判っていてやりかねない気質があるのが怖いところだ。

「あーヨーゼフ司祭。経典で一つ判らない部分があるのだがご教授願えるか？」

「カルロス王の頼みなら何なりと」

ヨーゼフはカルロス王の席に近づいていく。

カルロス王は手に持った経典の一部分を指差しながら、ヨーゼフに向かって小声で囁く。一見すると生徒が教師に判らない箇所を尋ねているように見える。

「ヨーゼフ司祭に伺いたい事がある。返答は仕草で教えてくれれば良い」

ヨーゼフは経典を見ながらフムフムといったような仕草で頷く。

そんなヨーゼフの姿を見たカルロス王は満足そうな笑みを浮かべ、そのまま囁き続ける。

「法王猊下の体調が芳しく無い事は知っているか？」
「うーむ」
ヨーゼフは顎の下に手を当て、悩んだような声を出しながら首を軽く左右に振る。
「何となく状況は判った」
セルビナ王国の王都の司祭であるヨーゼフに対して、法王の件が伏せられているという事は、何者かが情報を隠蔽している可能性が高い。司祭としての名声が高く、考え方が革新的なヨーゼフを警戒する勢力といえば、ハルモ教改革を嫌う現法王一派の存在が浮かび上がってくる。
では何故隠蔽したいのかという所に踏み込んで考えてみれば答えは自ずと見えてくる。今回の法王の交代を秘密裏に進め、権力の受け渡しをスムーズに行う為だ。規定路線さえ作り上げてしまえば、選挙など形だけの存在になる。
「今まで様々な司祭と話をしてきたと思うが、ヨーゼフと考え方が近い司祭は何割程度居そうだ？」
ヨーゼフは顎の下に添えたままの指を四本に増やす。全体の四割は変革を望んでいるって所か。では残りの六割はどういった態度なのか。
「保守的な思想を絶対に変えない司祭は全体で何割居そうだ？　ヨーゼフの主観で構わん」
ヨーゼフは一旦顎から手を離す。そして再び顎の下に手を添えるが指の数は四本のままであった。現状では二つの勢力は拮抗してい

るが、セルビナ王国内でこの状況だと、ハルモ教正教会の勢力が強いエディッサ王国では分が悪いと考えた方が良さそうだ。
そうなると残り二国、プロセン王国とトスカーナ王国をどうやって巻き込むかが今後の課題になる。それと合わせてセルビナ王国内の勢力均衡を打破する必要がありそうだ。

「セルビナ王国内の司祭で、保守的な思想の持ち主のリストが欲しいのだが、何日あれば作成が可能か教えて欲しい」

指は二本……二日か。

「判ったありがとう。離れて良いぞ。後は適当に話を合わせてくれ」

ヨーゼフは深く頷くとカルロス王から離れていく。カルロス王はそんなヨーゼフの後ろ姿に向かって親しげに話し掛ける。

「この部分のヨーゼフ司祭の考えをまとめるのに何日ほど掛かりそうかな？」
「そうですなぁ……二日ほど頂ければ何とかしてみますがどうなさりますか？」

「判った。二日後にアルクィンを使いによこすので渡して欲しい」
「仰せのままに」

ヨーゼフの返答を聞いたカルロス王は満足そうに頷きそのまま席を立つ。
意味深な視線を一瞬だけアルクィンに送ったのだが、アルクィンとヨーゼフ以外はその視線が意味する内容に気が付いていなかった。

セルビナ王国に残ったカルロス王とヨーゼフはハルモ教改革の為に静かに動き出し、アルクィンはそれと合わせて迫り来る不穏な影の正体を探るべく行動を起こしている。

侑人とはまた少し違った形だが、三人もマグナマテルの平穏を心から願っている。侑人達一行が帰国した後、全員が同じ目的に向かって行動を共にし力を合わせていく事になるのだが、それはもう少し先の話になる。

第４８話：静かなる始動（後書き）

平均年齢が割りと高いセルビナ王国おっさんトリオ（一人老人）も動き出します。

第４９話：とある一日【前編】

「ん……。んっ？」

土の月の第四週の三日。マグナマテルの中でも北側に位置するグランツ帝国とクーラント魔国の国境線周辺は、日に日に朝晩の冷え込みが厳しくなり、時折雪が舞い散る冬らしい様相を呈し始めている。

アンナ曰く例年よりも温暖な気候であるらしいが、南国育ちのマリアやガイウス、異世界の日本出身の侑人にとってはそうと思えず、これから迎える本格的な北国の冬の事を考えるだけで多少憂鬱な気分に陥っていた。

「んー」

太陽が昇るまでにはまだもう少し掛かろうかという早朝。女性陣三人が寝床として使用している馬車の中で、リズが一人静かに目を開ける。

リズの朝は早い……その分夜寝る時間も早いのだが。リズは朝日が昇る前に目を覚ますのが日課となっている。彼女は朝の静かな雰囲気が昔から好きだった。

「すー……。すー……」

「くー……。くー……」

リズの両側ではマリアとアンナが静かに寝息を立てている。二人ともリズの体を軽く抱きしめる様な姿勢で寝ている為、冷え込みが厳しい初冬の朝でもリズの体はぬくぬくと暖かい。

マリアとアンナに抱きつかれて身動きが取れないリズは、首だけを動かして二人の寝顔を交互に見つめる。リズの目にはかすかではあるが嬉しそうな光が灯っていた。

――もう一人じゃない。

リズはそんな事を考えながら馬車の天井を見つめる。喜怒哀楽のはっきりしたアンナであれば満面の笑みを浮かべていそうなシチュエーションではあるが、リズの表情の変化は残念ながら今だ乏しい。とはいえどこと無く嬉しそうな雰囲気を感じる。

人形の様に整った可愛らしい顔が、こぼれる様な満面の笑みで満たされるのには、まだまだ時間が掛かりそうだった。

「すー……。すー……」

「……」

当初はリズに付き合って一緒に起きていたマリアだったが、最近は一緒に起きる事も無くなっている。侑人やガイウス、そしてアンナという、対人戦闘能力に長けた面子が常にリズの傍に控えているこの状況で、特に事件など起こる事は無い。離れた場所まで一人で行ってしまえば話は変わるのだが、リズはそんな事をしようとしない。

このような比較的安全な状況下で過剰にリズの事を心配し、彼女の行動に逐一干渉するのはリズの成長の為にならないとマリアは判断した。

今はまだ馬車周辺の狭い範囲内での話であるが、リズは自分でや

りたい事を見つけて自由に行動し始めている。小さな一歩ではあるが感情の起伏に乏しく引っ込み思案なリズにとっては、そういった小さな積み重ねが何よりも大切な事である。

いずれは自立心の芽生えや自己の確立に繋がっていくはず。マリアはそんな事を考えていた。朝は少しでも長く寝ていたいともちょっと考えていたが。

「動けない」

このままマリアとアンナに抱きしめられたまま、ぬくぬくと寝床で横になっているのも魅力的ではあるが、せっかく目が覚めたのだから何時ものように外に出たい。リズはそんな事を考え始める。

そして自由を勝ち取る為……などと言うとかなり大げさではあるが、二人の拘束を解く為にリズは行動を起こす。ただ単に二人の手を退けるだけだが。

「んしょ……。んしょ……」
「うーん……」

「……重い」
「くー……。くー……」

二人を起こさないようにゆっくりとアンナの手をまず退かし、次にマリアの手も静かに退かしていく。慎重に作業を進めるリズの顔は真剣そのものである。

やっと自由になったと思った瞬間に、再度アンナに抱きつかれるアクシデントはあったが、リズは五分ほど掛けてなんとか二人の手から逃れる事が出来た。リズは思わず小さくガッツポーズ……までは行かないが、両手を軽く握るジェスチャーをする。

「起きてる？」
「すー……。すー……」
「くー……。くー……」

リズはマリアとアンナの顔を交互に見つめる。二人とも穏やかな寝息を立てており、起きてはいない様だ。
リズは小さく頷くと静かに馬車の奥で寝巻きから着替え、最後にコートを羽織ながら澄み切った冷たい空気で満ち溢れる外へと向かって歩を進めていった。

「おっ、リズか。おはようさん。ふぁー……。もうそんな時間か」
「おはよう」

リズ達が寝ていた馬車の側では、ガイウスが焚き火をしながら寝ずの番をしていた。リズの姿を見つけたガイウスは笑顔で朝の挨拶をしつつも、思わず気の抜けたような欠伸をする。
首を右左に廻し脳への血流を確保するような仕草をしていたガイウスは、ふと何かに気が付いたような顔をし、続けて少しばつの悪そうな表情になり視線をリズに向ける。

「いきなり欠伸は失礼だよな。すまんリズ」
「いい」

リズは淡々とした表情のまま焚き火の前に座り込み手をかざす。
ガイウスは軽く頷き、おもむろに焚き火へと小枝を投入する。小さくなっていた炎が少しだけ勢いを取り戻し、赤い光がリズの白い肌を紅に染めて行く。

「よく寝れたか？」
「うん」
「疲れてないか？」
「平気」

ガイウスは焚き火の調節をしながら、たまにリズに向かって話し掛け、リズはその質問に対して端的に答えていく。少ない会話の合間には、パチンと弾ける薪の音だけが早朝の空に小さく響き、静かな時間が辺りを穏やかに流れていく。

傍目から見れば交わす言葉も少なく、コミュニケーションが十分に図れていないようにも思えるが、ガイウスやリズにとってはここ数日で定番となった早朝の光景であり、二人ともこの時間が結構気に入っていたりもする。

ちなみにイーヴォ将軍率いるグランツ帝国軍の精鋭部隊二百名は、すでにグランツ帝都に帰還している。イーヴォ将軍本人の希望としては、侑人達をこのままクーラント魔国まで護衛していきたいと考えていた。

しかし時期があまりに悪すぎる。グランツ帝国を守護する将軍の立場上、下手にクーラント魔国を刺激する訳にもいかない。イーヴォ将軍の政治バランスは長けており、その位の判断は本国の指示が無くとも普通に出来る。

両国が接する国境線から五十キロメートル圏内は、風の月に締結された休戦協定により非武装地域に指定され、軍隊の立ち入りが制限されている。協定の期限が目前に迫り両国間で緊張が高まっているこの時期に、進んで波風を起こすのは得策では無い。

そう決断したイーヴォ将軍は非武装地域ぎりぎりまで侑人達を護

衛する事も諦め、ある程度安全が確認された地域に着くと同時にグランツ帝都へと引き返して行った。

「あと少しでクーラント魔国だな」
「うん」

侑人達一行は既に非武装地帯に入り込んでいる。このままのペースで進めば明日の昼辺りには国境線を越え、クーラント魔国領に侵入する事となる。

アンナがいるとはいえ安心は出来ない。ハルモ教法王庁教圏国家群とクーラント魔国は、八百余年の長きに渡り争いを繰り返してきた。ここ二十年は間にグランツ帝国を介している為、直接戦闘を行っている訳では無いが、友好とは程遠い関係が今だ続いている。

「俺が何とかしなくちゃな……」
「何？」

「ん？　ああ、なんでもない。単なる独り言」
「そう」

リズは少しだけ小首を傾げてガイウスの顔を見つめている。
ガイウスはそんなリズに笑顔を向けながら、焚き火の中にまた一つ小枝を投げ入れる。パチパチと音を立てる炎がまた少しだけ大きくなった。

「あっ……」
「夜明けだな……」

地平線から太陽が少しだけ姿を現す。
空の色は濃い藍色から紫、そして赤へと急激に変化していき、そ

れと時を同じくして頭上で輝いていた星達は徐々に姿をくらましていく。
雲一つ無い澄み切った空。木々の枝にはどこからともなく鳥達が集い、思い思いに歓喜の歌を歌い始めている。新しい一日は爽やかに始まる。

「……」
「……」

ガイウスとリズは朝日に向かって跪き、少しの間祈りを捧げる。
数奇な出会いという運命を与えてくれた事に対する感謝。今日という日を無事に迎えられたように、明日も同じように無事に迎えてみせるという決意。
二度と孤独にはなりたく無いという悲壮な願い。亡き父母の冥福を祈る純粋な思い。二人の胸中に様々な感情が浮かび消えていく。

やがて二人は同時に目を開けお互いに顔を見合わせる。ガイウスは笑顔でリズの顔を見つめ、リズはいつもの様に小首を傾げた仕草を見せていた。

「今日も頑張りますか」
「うん」

ガイウスの問い掛けに対してリズは小さく頷くと、焚き火を挟んで馬車の反対側にあるテントに向かってゆっくりと歩を進めていく。
リズにとってはライフワークになりつつある定番の儀式がこの後待っている。
そんなリズの姿をガイウスは微笑みながら見つめていたのだが、ふと何かに気が付いたような顔をしてリズに話し掛ける。

「あーリズ。昨晩は見張りの交代するのが少し遅かったから、もう少しだけ旦那を寝かしてあげて欲しい」
「判った」
リズはガイウスの再度の問い掛けに対してそう答えたのだが、そのままゴソゴソとテントの中に進入してしまう。ガイウスはそんなリズの姿を苦笑しながら静かに見つめていた。
「まあ、旦那の寝起きは悪いし大丈夫だろ……」
ガイウスはそう呟くと、仰向けに寝転んで徐々に青くなっていく空に視線を向け、吸い込まれそうなほど澄み切った朝の空を見上げながら、今後起こりうる事に対してどう対処して行くのか考えを巡らせて行く。
最悪の状況は避けねばならない。俺の役目は矛であり盾である――自分の保身を考える事などできはしない。改めてそう決意したガイウスの顔は真剣な表情をしていた。
「ぐぅ……」
「寝てる」
リズは夢の世界の住人となっている侑人の傍らにちょこんと座り、侑人の顔を静かにじっと見つめている。何をする訳でもないが何故だか少し楽しい。涼しげな瞳の奥でそんな事を考えている。
普段であれば侑人の体を揺すって起こす時間ではあるのだが、先ほどガイウスに侑人をもう少し寝かせてあげて欲しいと頼まれてもいる。リズは律儀にそれを守っているのである。

リズは侑人の黒髪にそっと触れる。腰のある少し固めの髪質が少し心地よい。

続いて自分の髪の毛に触れる。リズの髪の毛は母親譲りの猫っ毛であり、軽い絹の様な感触が指先に伝わってくる。自分で言うのもなんなのだがこの感触も心地よかった。

「引き分け」

「ん……」

一瞬侑人が返事をしたのかと思い、リズは侑人の顔を覗きこむ。しかし侑人はいまだに幸せそうな顔をして眠っていた。リズの心に少し残念な気持ちが湧き上がる。

とはいえガイウスと約束したのだ。ここで侑人を起こす訳にはいかない。リズは小さく頷きながらそう決意する。妙なところで生真面目な性格をしていた。

「あっ……」

「うーん……」

リズがそんな事を考えていた矢先、侑人はリズの方向へと寝返りを打った。その拍子に侑人の横に座り込んでいたリズは、座ったままの姿勢で侑人に抱えられてしまう。

動こうと思えば動けるのだが、それでは侑人を起こしてしまう事になる。侑人を起こしたい気持ちはもちろんあるが、ガイウスとの約束も守りたい。二つの思いに挟まれたリズは少し難しい顔をしている。

「困った……」

「ぐぅ……」

先ほどのガイウスの問い掛けに対して判ったと返事をした手前、やはり約束を破る訳にはいかない。そしてその約束を守る為にはここで動く事は避けなければならない。少しでも動けば侑人は必ず起きる。

リズはそう決意し微動だにしないように精神を集中しはじめる。表情は真剣そのものである。周囲からはどう見てもほのぼのとした雰囲気にしか思えないが、今のリズは戦いの最前線に赴く戦士のような心境になっている。敵は自分自身といったところか。

「頑張る」

「うーん……。ん？」

「あっ……」

「あれ……。あ、リズ。おはよう」

そんなリズの心境を知らず侑人はおもむろに目を覚ます。嬉しいようながっかりしたような複雑な感情がリズの心に沸き上がるが、今はそれどころではない。

寝ぼけ眼の侑人はいまいち今の状況を把握していない。リズは嬉しいような恥ずかしいような体勢のまま、とりあえず朝の挨拶を侑人に返す事にする。

「おはよう」

「んー。良い朝だねって……。あれ？」

徐々に侑人の目に光が戻ってくる。普段はもう少し寝起きが悪いのだが、さすがに今日のこの体勢は違和感を覚えるようだ。誰かに抱きついた姿勢で寝ている事に違和感を覚えない者がいるとは思えないが。

不意に侑人の目が大きく開かれ、勢い良く布団から飛び起きる。慌てた表情をしたままリズの顔を一回見つめた後、侑人はリズに向かっていきなり頭を深く下げながら謝り始めた。

「申し訳ありません！　思いっきり寝ぼけていたみたいで！」

「気にしない」

「いや……。しかし……」

「嫌じゃなかった」

リズは普段通りの雰囲気に戻っている。それに対して侑人は少しの間おろおろとしていたが、やがていつもの落ち着きを取り戻し、改めてもう一度静かにリズに向かって謝罪を始める。

「とはいえ申し訳なかったです。リズもびっくりしたでしょう」

「少し」

「ですよね……。いやはやなんと言っていいか……」

「でも」

リズの視線が真っ直ぐに侑人を射抜く。リズが珍しく自分から自分の考えを侑人に伝えようとしている。リズの大きな銀色の瞳には少し驚いた侑人の顔が二つ映っている。

そして少しだけ時間を置いた後、リズは静かに侑人に向かって言葉を言い放つ。その言葉は侑人の心に深く静かに響いていった。

「親子なら普通。気にしない」

「確かに……。確かにそうですね……」

侑人は満面の笑みを浮かべながらリズの頭を優しく撫で始める。

リズもどことなく嬉しそうな表情を浮かべながら、大人しく侑人に頭を撫でられ続けるのであった。

第４９話：とある一日【前編】（後書き）

リズの小さな冒険と言ったところでしょうか。

第５０話：とある一日【後編】

「ここは？」
「ん？　ああ、ここはですねぇ……」

昼食を終えた侑人達一行は食後の休憩をそこそこの時間で切り上げ、目前に迫るクーラント魔国の国境線へと向かって馬車を走らせている。
午前の間は侑人が御者を勤めていたのだが、今はその役目をガイウスに譲っている。今のところ特に大きな問題も無く、一行は順調に旅の道程を進めていた。

午前の間、御者席に座る侑人の横でゆっくりと流れる景色を眺めていたリズは、午後になっても定位置になりつつある侑人の隣に座りこみ、グランツ帝国で侑人から買い与えて貰ったマグナマテルの歴史書を真剣な顔で読んでいる。
侑人はリズの旅の暇つぶしになるような物を買うつもりだったのだが、リズが興味を示したのはこの歴史書だけであった。学者が使うような専門書という訳ではないのだが、分厚い歴史書はそれなりに記述が難解である。まだ子供のリズにとっては理解し難いとは思えたのだが、それなりにリズも楽しんでいるようだ。

「うーむ……」
「アンナは何を唸っているの？」

侑人の横に座り、難しい単語や理解しがたい部分をあれこれと質問するリズの姿は、ここ最近の定番の姿であり、マリアやアンナにとっても見慣れたものになってはいたのだが、今日は何かが少し違っている。

その事にうっすらと気が付いたアンナは、暫く唸りながら二人の姿を見つめていたのだが、やがて確認する意味を込めてマリアに向かって小声で話し掛ける。

「今日のあやつらの姿を見て、マリアは何か感じないか？　わらわの気のせいかの？」

「そうだねぇ……。仲が良さそうで良いんじゃないかな？」

マリアは満面の笑みを浮かべて二人を見つめながらそう返事をする。その姿はまるで娘の成長を喜んでいる母親のようである。

マリアの返答を聞いたアンナはやれやれといった表情を浮かべながら首を横に振り、少し面倒くさそうな素振りを見せつつ再度マリアに向かって問い掛けた。

「そうでは無くて……。昨日までの二人の姿と比べると何かが変わったような気がするのじゃ。何が変わったのかまではっきり判らんのだが」

「うーん。多分二人の……、特にリズに対するユートの距離感？が、近くなったんじゃないかなぁ」

マリアの指摘は正しい。侑人自身が特に意識している訳ではないが、今朝のリズの一言が侑人の内面と行動を少しだけ変化させていた。

侑人は未婚であり子供を育てた経験はもちろん無い。その事を自覚している侑人は、リズの成長に対して責任を負う事をかなり意識し、今朝まではリズに対して必要以上に気を使って接していたのだ。

今の侑人の状態は、リズの模範になれるように気を張って接していたのを辞め、普段の自然の姿に戻っている。とはいえ元々生真面目な性格をしている侑人のぱっと見の変化はかなり少ない。

侑人と長い時間を共に過ごし、日常の細やかな変化を感じる事が出来る女性だからこそ気が付いた――マリアやアンナだからこそ気が付けた変化とも言える。

「そう言われればそうじゃな。何かあったのかの？」

「そこまでは判らないよ」

マリアは相も変わらずニコニコした表情のままで二人を見つめている。二人の仲睦まじい姿を見ることが本当に嬉しいと言わんばかりの様子である。

そんなマリアの姿をアンナは少し呆れた顔で見つめている。少し前までは侑人の事で顔を赤らめたり、少し機嫌が悪くなったりしていたはずなのに。過去のマリアと今のマリアは同一人物にはとても思えない。

「マリアは気にはならんのか？」

「何が？」

「ユートとマリアが一緒に行動をする事が減っていると思うのだが、それで良いのか？」

「そうかな？　私も結構一緒にいると思うけどなぁ……」

そういう事じゃなくて。と、言い掛けた言葉をアンナは飲み込む。

確かにマリアの言う通り、最近のマリアは侑人と一緒に行動をする事が多い。むしろ旅を始めた頃よりもその頻度は上がっているように思える。ただしリズも常に一緒に居るのだが。

アンナは侑人と二人きりの時間を作らなくて良いのかと、マリアに向かって問い掛けたかったのだが言うのを辞めた。言うだけ無駄な予感が嫌というほどするのである。

どうせ、リズが一緒なのもすごく楽しいよ。とか、二人が三人になってもいいと思うけど。などといった返事が返って来るだろう。それどころか、リズが一緒だと落ち着くの。とかも言いそうである。

年頃の娘としてどうかとも思うが、本人が満足しているのならそれも良かろうとアンナは考えている。傍目から見ていても三人で居るのは自然な姿のように見えるし、男女の関係に関してはそのうち時が解決するだろうと結論付け、この話題を切り上げようとしたのだが、そんなアンナの思惑に反してマリアがおもむろに口を開く。

「アンナの言いたい事も判るよ。でも今はリズにとって大事な時期だと思うから」

「マリア……」

マリアは笑顔を浮かべたままはっきりとそう言い切る。表情は非常に穏やかなのだが、確固たる決意を合わせて感じさせ、堂々とした雰囲気を纏っている。

リズとの出会いで一番成長したのはマリアかもしれない。母は強しと巷（ちまた）ではよく言われているが、マリアの変化もそれと似たようなものか。などと、アンナは内心で考えていた。

時は少し移って夕食後。

風呂に入るまでの僅かな時間を利用して、マリアはアンナから魔法の手解きを受けていた。夕食の席でマリアが、自分の身を守れる

手段を身に付けたいと言い出したのだ。
護身術を習うという手段も勿論あるのだが、一日や二日の鍛錬でそれが身に付くとも思えない。結果として、少量とはいえ魔力を持っているマリアが身を守る手段は魔法という事になり、魔法が得意なアンナがマリアの指導に当たっていた。

「うーん。やっぱり上手く行かないなぁ……」
「マリアの魔力量はそんなに多くは無いが、それにしても威力が低すぎじゃとは思うぞ」

同じ失敗を繰り返しているマリアは自嘲するように呟き、アンナはそんなマリアの姿に苦笑しながらも、丁寧に魔法の使い方を繰り返し教えている。
そして侑人とガイウスは焚き火の前に座り込んで二人の様子を静かに見守り、リズは侑人の膝の上に座って二人の様子を興味津々といった目で見つめていた。

「本来ならば火の魔法は殺傷能力が高すぎるゆえ、過剰防衛になり易いのじゃが……」
「ここまで遠くに飛ばないとは思わなかったよ……。あははは……」

マリアは魔法で薪に火を付ける位の火力を持った火球を、難なく作り出すことは出来るのだが、出来上がった火球の飛距離が大問題であった。右手から飛び出したコブシ大ほどの大きさの火球は、一メートルほど飛ぶと急速に火力が弱まり、二メートルに届くか届かないかのところで消えてしまうのだ。
元々家事にしか魔法を使っていなかったので今まで問題は無かったのだが、身を守る手段として使用する事を考えれば致命的な欠点となる。武術の心得の無いマリアが敵に一メートルの距離まで近づかれたら、既にある意味おしまいである。

「やっぱり才能が無いのかなぁ……」
「才能というより、イメージ出来ていない事が問題だと思うんじゃ」
アンナはそう言うと静かに右手を開き、手のひらを空にかざす。
そして少しだけ意識を集中させる素振りをマリアに見せた瞬間、アンナの手のひらの上には、コブシ大の小さな火球が出来上がる。
二人のやり取りを静かに見つめていた侑人達の目には、先ほどまでマリアが何回も作り出していた火球となんら変わることの無い大きさと温度を持っているように見える。

「ここまではマリアと同じ手順じゃ」
「うん。そうだね」

マリアはアンナの手のひらを真剣に見つめながら返事をする。アンナはそんなマリアの姿を見て満足そうに頷くと、おもむろに目を瞑り意識を集中し始める。
するとアンナの手のひらの上にあった火球が目に見えて変化していく。大きさは殆ど変わらないのだが、周囲に発散する熱量が格段に跳ね上がり、色も白っぽく変化している。

「炎を凝縮するようなイメージが大事なのじゃ。とはいえ余り魔力をこめ過ぎると威力が跳ね上がって相手の命を脅かしかねんが」
「凄いね……。私の魔力じゃここまでにはならないとは思うけど」

少し残念そうな顔でそんな事を問い掛けるマリアの姿を見たアンナは、悪戯を思いついたかのような顔でにやりと笑う。
そして少し勿体ぶったような口調で魔法の説明の続きを始めるのだが、その説明内容はマリアにかなりの衝撃を与える事となる。

「いや。マリアの魔力を想定して加減しておるぞ。マリアの魔力を全開放すると、この位の火球は出来るはずじゃ」
「うそ！」

「威力も見てみるか？」
「へっ？」

あっけに取られたマリアがどう返答をしようか悩んでいる間に、アンナはおもむろに誰も居ない草原に向かって火球を放つ。
すると火球は彗星のような軌跡を見せ、アンナ達が居る場所から百メートルほど離れた場所にある岩に激突し、ど派手な炸裂音を周囲に響かせつつ、岩の周囲の地面を大きく抉った。

「えーと……」
「姉御……。この威力じゃ身を守るどころか、相手が粉々になってる気がするんですが……」
「まあそうじゃの」

この位は当然の結果じゃと言いたげなアンナの返答を聞いたマリアとガイウスは絶句する。
魔法が戦闘で有効なのは知ってはいたが、少ない魔力量でここまでの威力が発揮できるとは夢にも思っていなかった。戦闘で有効な攻撃魔法を行使できるのは、ほんの一握りしかいない魔力の才能に溢れた者だけだと今まで考えていたのだ。

「マリアの魔力量でも使い方によっては、十分に戦闘の中で使えるって事がこれで理解できたとは思うがの」
「そこまで魔力を凝縮するのは難しいとは思いますけど」

得意げに説明するアンナに向かって、苦笑いをした侑人が話し掛

ける。魔力をコントロールしたりイメージしたりする大変さは、ティルト村で散々苦労した侑人自身が良く知っている。
　それに魔力を持っている全員が高威力の魔法を習得したら、この世界はもっと殺伐としたものになる。やる気を出しているマリアの手前、口に出す事はしなかったが、侑人はマリアが魔法を戦闘行為に使う事に対して大賛成という訳ではなかった。

「それはそうとアンナ。緊張感が高まっている非武装地域で目立つ事をするのは控えて下さい。さすがに今のは目立ちすぎです」
「確かにそうじゃな。ちょっと調子に乗りすぎたかもしれん」
「あれがちょっとは……さすが姉御」
「あそこまでの威力はちょっといらないかな」
「……」

　侑人から小言を貰ったアンナが苦笑いをしながら頭をかき、その姿を見たガイウス達が思い思いに突っ込みを入れている。いつもと変わらない騒がしいやり取りはとても心地良い。
　とはいえ危険を避け、全員の無事を確保する為にも抑えるべき所は抑えないと。侑人は楽しい雰囲気に流されつつもそんな事を考えていたのだが、予想外のリズの行動によってその思考は中止される。

「うーん」
「どうしたんですか？」

　侑人の膝の上に座って成り行きを見つめていたリズは、少しだけ考え込んだような素振りを見せている。何かを考えているようなのだが、さすがに内容までは察する事は出来ない。
　やがてリズはおもむろに焚き火に向かって手をかざす。侑人の声によってリズの様子に気が付いたマリア達も、成り行きを静かに見守っている。

「燃えろ」

リズの手のひらから、ほんの僅かだが魔力が発動するのを感じる。
白い霞がかったその魔力の小さな塊は、焚き火にぶつかった瞬間に正体を現す。よく見ると薪の端が少しだけ凍っている。間違いなく魔法は発動していた。

「えーと……。なんと言ったら良いか……」
「リズって魔力を持ってたのね……」
「わらわもリズの魔力には気が付いておらんかった……。とはいえマリアよりも少ない魔力量のようじゃが……。とはいえ気が付けなかったのは少しショックじゃ」
「燃えろで凍るのはどういう事っすかね？」

呆気に取られた侑人達は思い思いの感想を口にする。
多少混乱する皆の雰囲気を他所に、リズだけが何やら不思議そうな顔をしながら焚き火を見つめ続けている。まだ何かを考えているようだ。

「まあ何はともあれ、高等魔法でもない限り、魔法詠唱はイメージを高める為だけに必要じゃから、燃えろと言いながら凍らせる事も出来るのじゃ」
「そんなもんすかねぇ……。めちゃめちゃ難しそうな気がするっすけど」

アンナが無理矢理この場をまとめる。
どう考えても効率が悪そうな魔法詠唱を、さすがのアンナも試そうとした事すらなく、今のリズの行動に度肝を抜かれていたりもするのだが、そこは顔に出さすに何とか乗り切った。

「魔法の新たな可能性が見つかるやも知れぬ。リズにはそんな才能があるのかもしれんの」
「そう」

「リズも興味があるならわらわが魔法を教えるぞ？」
「アンナ」

リズは笑顔で問い掛けてくるアンナの目を真っ直ぐに見つめながら話し掛ける。
最近リズのこういった積極的な行動が増えてきている。出会った当初からは想像も出来ないほどの変化であり非常に良い兆候だ。後は今朝のように自分の意見を言えるようになれば良いのだが。

「魔法の先生？」
「そうじゃのー、先生と言われればそうかもしれんし、違うと言われれば違うかもしれんの」

「？」
「実は本格的に魔法を教えた事は一回しか無いんじゃよ。アレクが唯一の生徒じゃな」
「アレクってどなたですか？」

聞き慣れない名前を聞いた侑人は、思わずアンナに向かって条件反射的に質問をする。
そんな侑人の言葉を聞いたアンナは嬉しそうな表情を浮かべている。どうやらアレクという人物はアンナとはかなり親しい間柄のようだ。

「わらわの弟じゃよ。わらわに似て利発で可愛らしいぞ」

「ほう。弟さんのお名前ですか。そういえば母国に弟が居るって前に言ってましたね」

「リズとは歳が近いから仲良くして貰えると嬉しいのぅ」

「判った」

リズはアンナの言葉に対してはっきりとそう答える。アンナはそんなリズの姿を嬉しそうな顔で見つめながら、優しく頭を撫でている。

傍目から見れば姉妹のように見える二人の仲睦まじい姿を、侑人達はほのぼのとした気持ちで見つめ続けていた。

――同刻、某所。

「グランツ帝都内での黒髪の勇者襲撃は失敗に終わったか」

「申し訳ありません」

過剰とも思えるほど厳重な警護を敷いたとある屋敷の、窓の分厚いカーテンが閉められた薄暗い一室では、精悍な顔つきをした男が直立不動の姿勢で、黒髪の勇者暗殺計画の途中経過を報告している。

報告する男の周囲を広く半円形で取り囲むように机が並べられたその部屋は、とある勢力の重要人物達が合議を行う部屋であり、重要な案件の報告は必ずこの部屋で行われていた。

「人を殺せぬ優男と聞いてはいたが、なかなか腕は立つようですねぇ」

「軽率な発言は控えて頂きたい！」

「まあまあ、焦る気持ちは判るが少し落ち着かれたらどうかな」
「失敗したのはまあ良いとして、もちろんこの後の手はずも考えているのでしょう？」
「……」
「私は儲かれば後は何でも良いのです。しかし損だけはごめんですよ」

報告を聞いた部屋の中に居る人物達は、各々が各々の思惑を口にする。一見すると何のまとまりも無い集団のように見えるが、利害の一致のみで集まったこの集団ではこれが普通の光景である。
彼らが共有する目的はたった一つ――現状の維持。各人の行動理念は違うのだが、マグナマテルの現状が維持される事によって、各々が利を得る事には変わりが無い。

「その後の足取りは掴めたか？」
「グランツ帝国から脱出した後、国境線を見張っておりましたが、出国した形跡は今のところありません。危険を押して再入国する事も考えましたが、現場での独断は避けました」

「グランツ帝都内で黒髪の勇者を殺害し、グランツ帝国に罪をなすり付けようとする線はもう捨てた方が良いな」
「あまり認めたくは無いが、あのフリードリヒが同じ失敗を繰り返すとは思えん」

侑人達の知らない場所で様々な者達の陰謀が渦巻いている。侑人が想像する以上に、事態は刻一刻と深刻な方向へと変化していた。

第５０話：とある一日【後編】（後書き）

次話から新しい展開となります。お待たせしてしまってすみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2853l/

ワーカーホリック

2010年10月16日01時27分発行